埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第149集

深谷市

矢島南遺跡

一般国道17号深谷バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告

— Ⅶ —

1994

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

上　第３号住居跡
下　第24号住居跡

序

埼玉県の北部、都心から70km圏内に位置する深谷市は、江戸時代には中山道の宿場町として栄え、今にその面影を残しております。

また、街の北方、低地帯には豊かな田園風景が広がっており、現在でも県下最大の農業地帯であります。

一方では、東京への通勤圏として宅地化が進み、それに伴って国道17号の混雑も激しくなりました。建設省はその問題を解消するため、バイパス事業として岡部町岡から深谷市の東部を抜け、熊谷市玉井に達する14.8kmの区間を計画しました。

この地域には貴重な文化財が包蔵されていることから、建設省大宮国道工事事務所と埼玉県教育委員会との間で慎重な協議が重ねられ、路線決定にあたってどうしても避けきれない遺跡については、建設省の委託を受けて当事業団が発掘調査を実施して、記録保存の処置を講ずることになりました。この矢島南遺跡もその一つであります。

矢島南遺跡では、古墳時代や奈良・平安時代の住居跡を始めとする多くの遺構や遺物が検出され、多大な成果を収めることができました。

本報告書はこれらの成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護や学術研究の基礎資料としてまた教育・普及の資料として広く御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行に至るまで多大な御指導と御協力を賜りました埼玉県生涯学習部文化財保護課をはじめ、建設省大宮国道工事事務所・同熊谷出張所、深谷市教育委員会、岡部町教育委員会並びに地元関係各位に対し厚く御礼申しあげます。

平成6年9月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長　荒　井　　桂

例　　言

1　本書は、一般国道17号深谷バイパス建設にかかる、深谷市大字矢島に所在する、矢島南遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整を経て、建設省大宮国道工事事務所の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

3　以下のものが一般国道17号深谷バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告書として、刊行されている。

『新田裏・明戸東・原遺跡』	一般国道17号深谷バイパス関係埋蔵文化財調査報告-Ⅰ- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第85集	1989
『樋詰・砂田前』	一般国道17号深谷バイパス関係埋蔵文化財調査報告-Ⅱ- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第102集	1991
『新屋敷東・本郷前東』	一般国道17号深谷バイパス関係埋蔵文化財調査報告-Ⅲ- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第111集	1992
『原ヶ谷戸・滝下』	一般国道17号深谷バイパス関係埋蔵文化財調査報告-Ⅳ- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第127集	1993
『上敷免遺跡』	一般国道17号深谷バイパス関係埋蔵文化財調査報告-Ⅴ- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第128集	1993

4　発掘調査は、昭和61年4月1日から昭和62年3月まで実施し、報告書作成作業は、平成5年4月1日から平成6年3月31日まで実施した。

5　発掘調査は、剱持和夫、宮　昌之、磯崎　一、金子直行、高崎光司、西口正純が行い、報告書作成事業は、西口が行った。

6　分析・鑑定については下記へ委託した。

樹種同定　　第四紀古植物研究会

土器胎土分析　第四紀地質研究所

7　発掘調査時の写真撮影は、磯崎　一、剱持和夫、金子直行、宮　昌之、高崎光司、西口正純が行ない、遺物撮影は、西口が行った。

8　出土資料、記録資料は、平成6年度以降埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。

9　本書の執筆は、西口が担当した。

10　本書の編集は、資料部資料整理第2課の西口があたった、

11　本書の作成にあたり下記の方々から御教示、御協力を賜った。

鈴木徳雄　柳　正博

凡　　例

1　本書における挿図の指示は次のとおりである。

・X、Yによる座標表示は国家標準直角座標第IX系に基づく座標値を示し、方位はすべて座標北を表す。

・挿図の縮尺は以下のとおりとし、それ以外については個別に示した。

遺構　住居跡・掘立柱建物跡・井戸跡・土壙・溝跡　(1/60)

遺物　土器・石器・砥石(1/4)、縄文土器(1/3)、土錘・紡錘車・金環(1/2)、木製品(1/6・1/10)

・挿図中の遺構名称には以下の略号を使用した

竪穴住居跡(SB)、掘立柱建物跡(SJ)、井戸跡(SE)、土壙(SK)、溝跡(SD)

・遺構図中の●（土器）・■（石器）は遺物の出土地点を表し、その間を結ぶ実線は接合関係を示す。番号は遺物実測図と一致する。

また、は炉跡、は炭化物、は噴砂、は木片、はA軽石、はB軽石の範囲を表す。

・木製品実測図中の網かけは、焼け焦げの範囲を示す。また、断面図の年輪は木取りの方向を模式化したものである。

・土器実測図において、器形の変換点は破線で、調整技法の変換点を実線で表した。断面白抜きは土師器、黒塗りは須恵器とした。矢印は工具の移動方向を示す。底部の調整でヘラケズリ（回転、手持）は／＼でその範囲を示した。

2　遺物観察表の表記は以下のとおりである。

・法量の単位はcmで、（　）を付したものは推定値である。

・胎土は肉眼で観察できる物質について色調で以下に分類し、透明・半透明のものにはダッシュ（′）を付けた。

A　白色、B　黒色、C　赤色、D　片岩粒子、E　白色針状粒子

・焼成は、焼きの斑と質感で3段階に分けた。

A　黒斑が無く焼成が均一で堅緻である。

B　やや黒斑があるが普通である。

C　黒斑が多く軟質である。

・残存は図化した部位の残存率である。

・その他では図示できない特徴や註記番号等を記した。

目　　次

序
例　　言
凡　　例

I　調査の概要 …… 1
　1　発掘調査に至るまでの経過 …… 1
　2　発掘調査・整理・報告書刊行事業の組織 …… 2
　3　発掘調査・報告書作成の経過 …… 2

II　遺跡の立地と環境 …… 3
　1　遺跡の立地 …… 3
　2　歴史的環境と周辺の遺跡 …… 3

III　調査の方法と遺跡の概観 …… 6
　1　調査の方法 …… 6
　2　遺跡の概観 …… 7

IV　検出した遺構と遺物 ……13
　1　住 居 跡 ……13
　2　掘立柱建物跡 ……65
　3　井 戸 跡 ……69
　4　土　　壙 ……77
　5　溝　　跡 ……79
　6　包 含 層 ……90
　7　グリッド・表採遺物 ……95
　8　1区―IV区 ……102

V　調査のまとめ ……104

VI　附　　編 ……108
　1　埼玉県矢島南遺跡出土木材の樹種 ……108
　2　矢島南遺跡出土土器胎土分析……112

挿 図 目 次

第 1 図　埼玉県の地形 …… 3
第 2 図　矢島南遺跡と周辺の遺跡 ……4・5
第 3 図　グリッド設定方法 …… 6
第 4 図　トレンチ調査範囲と地形 …… 6
第 5 図　基本土層図 …… 7
第 6 図　調査範囲と周辺の地形 ……8・9
第 7 図　1 区全測図 ……10
第 8 図　3 区全測図 ……11
第 9 図　第 1 号住居跡 ……13
第 10 図　第 1 号住居跡遺物分布 ……14
第 11 図　第 1 号住居跡(堀り方) ……15
第 12 図　第 1 号住居跡出土遺物(1) ……16
第 13 図　第 1 号住居跡出土遺物(2) ……17
第 14 図　第 2 号住居跡 ……18
第 15 図　第 2 号住居跡出土遺物 ……19
第 16 図　第 3 号住居跡 ……20
第 17 図　第 3 号住居跡遺物分布 ……21
第 18 図　第 3 号住居跡出土遺物(1) ……22
第 19 図　第 3 号住居跡出土遺物(2) ……23
第 20 図　第 4 号住居跡出土遺物 ……23
第 21 図　第 4 号住居跡 ……24
第 22 図　第 5 号住居跡出土遺物 ……25
第 23 図　第 5 号住居跡・カマド ……26
第 24 図　第 6 号住居跡 ……27
第 25 図　第 6 号住居跡出土遺物 ……27
第 26 図　第 7 号住居跡出土遺物 ……28
第 27 図　第 7 号住居跡 ……29
第 28 図　第 8 号住居跡 ……30
第 29 図　第 8 号住居跡出土遺物 ……31
第 30 図　第 9 号住居跡 ……32
第 31 図　第 9 号住居跡出土遺物 ……32
第 32 図　第10号住居跡・カマド ……33
第 33 図　第10号住居跡出土遺物 ……34
第 34 図　第11・12号住居跡 ……35
第 35 図　第11・12号住居跡カマド ……36
第 36 図　第11号住居跡出土遺物 ……37
第 37 図　第12号住居跡出土遺物 ……38
第 38 図　第13号住居跡 ……39
第 39 図　第13号住居跡カマド ……40
第 40 図　第13号住居跡出土遺物 ……40
第 41 図　第14号住居跡 ……41
第 42 図　第14号住居跡出土遺物 ……42
第 43 図　第15号住居跡・カマド ……43
第 44 図　第15号住居跡出土遺物 ……44
第 45 図　第17号住居跡出土遺物 ……45
第 46 図　第16号住居跡 ……46
第 47 図　第16号住居跡出土遺物(1) ……47
第 48 図　第16号住居跡出土遺物(2) ……48
第 49 図　第17号住居跡 ……49
第 50 図　第18号住居跡出土遺物 ……50
第 51 図　第18・26号住居跡 ……51
第 52 図　第19号住居跡 ……52
第 53 図　第19号住居跡出土遺物 ……53
第 54 図　第20号住居跡出土遺物 ……54
第 55 図　第20号住居跡 ……54
第 56 図　第21号住居跡 ……55
第 57 図　第22号住居跡出土遺物 ……55
第 58 図　第22号住居跡 ……56
第 59 図　第23号住居跡出土遺物 ……56
第 60 図　第23号住居跡 ……57
第 61 図　第24号住居跡 ……58
第 62 図　第24号住居跡出土遺物(1) ……60
第 63 図　第24号住居跡出土遺物(2) ……61
第 64 図　第25号住居跡 ……62
第 65 図　第25号住居跡出土遺物 ……63
第 66 図　第26号住居跡出土遺物 ……64

第67図　第1号掘立柱建物跡 ……65
第68図　第1号掘立柱建物跡出土遺物 ……66
第69図　第2号掘立柱建物跡 ……66
第70図　第3号掘立柱建物跡 ……67
第71図　第4号掘立柱建物跡 ……68
第72図　第1号井戸跡 ……70
第73図　第1号井戸跡出土遺物(1) ……71
第74図　第1号井戸跡出土遺物(2) ……72
第75図　第2号井戸跡 ……73
第76図　第2号井戸跡出土遺物(1) ……74
第77図　第2号井戸跡出土遺物(2) ……75
第78図　第2号井戸跡出土遺物(3) ……76
第79図　第2号土壙出土遺物 ……77
第80図　第4号土壙出土遺物 ……77
第81図　第1～10号土壙 ……78
第82図　第1号溝跡出土遺物 ……79
第83図　第3号溝跡出土遺物 ……80
第84図　第4号溝跡出土遺物 ……80
第85図　第6号溝跡出土遺物 ……80
第86図　第2号溝跡出土遺物(1) ……81
第87図　第2号溝跡出土遺物(2) ……82
第88図　第7号溝跡出土遺物 ……82
第89図　第8号溝跡出土遺物 ……83
第90図　第11号溝跡出土遺物 ……83
第91図　第12号溝跡出土遺物 ……83
第92図　1区-I・II区溝跡 ……84
第93図　第1・2号溝跡土層断面 ……85
第94図　1区-III・IV区溝跡 ……86
第95図　第3～10号溝跡土層断面 ……87
第96図　第11号溝跡 ……88
第97図　第12～15号溝跡 ……89
第98図　第12～15号溝跡土層断面 ……90
第99図　1区-II区包含層出土遺物(1) ……91
第100図　1区-II区包含層出土遺物(2) ……92
第101図　1区-III区包含層出土遺物(1) ……92
第102図　1区-III区包含層出土遺物(2) ……93
第103図　2区包含層縄文時代遺物出土分布 ……96
第104図　2区包含層奈良・平安時代
遺物出土分布 ……97
第105図　2区包含層出土遺物 ……98
第106図　グリッド出土遺物 ……99
第107図　表採遺物(1) ……100
第108図　表採遺物(2) ……101
第109図　1区-IV区B軽石除去後の地形 ……103
第110図　甕型土器の分類 ……105
第111図　法量比較図 ……106

図　版　目　次

図版1　第1号住居跡・第1号住居跡出土遺物
図版2　第1号住居跡掘り方・第1号住居跡遺物出土状態(Aカマド)
図版3　第1号住居跡遺物出土状態(Bカマド)・第2号住居跡
図版4　第3号住居跡・第3号住居跡土層断面・遺物出土状態
図版5　第3号住居跡遺物出土状態・第3号住居跡カヤ材出土状態
図版6　第4号住居跡・第4号住居跡遺物出土状態
図版7　第5号住居跡・第6号住居跡
図版8　第6号住居跡カマド・第7号住居跡
図版9　第8号住居跡・第8号住居跡土層断面(A-A′)
図版10　第8号住居跡土層断面(B-B′)・第9号住居跡
図版11　第9号住居跡遺物出土状態
図版12　第10号住居跡・第11・12号住居跡

図版13　第11号住居跡・第12号住居跡
図版14　第13号住居跡・第10号住居跡カマド
図版15　第14号住居跡・第15号住居跡
図版16　第16号住居跡・第17・20号住居跡
図版17　第18号住居跡・第19号住居跡
図版18　第21号住居跡・第22号住居跡
図版19　第22号住居跡カマド内遺物出土状態・第23・24号住居跡
図版20　第25号住居跡・第18・26号住居跡
図版21　第1号掘立柱建物跡・第2号掘立柱建物跡・第3号掘立柱建物跡
図版22　第2号井戸・第2号井戸土層断面・第2号井戸井桁・第2号井戸側第2号井戸曲物・第8号土壙・第9号土壙
図版23　第10号土壙・第1号溝土層断面(B-B′)・(C-C′)・(D-D′)・第2号溝(II区付近)・(III区付近)
図版24　第1～6・8・9・12～14号溝跡・3調査区トレンチ
図版25　第1号住居跡出土遺物
図版26　第1・2号住居跡出土遺物
図版27　第3号住居跡出土遺物
図版28　第4～7号住居跡出土遺物
図版29　第8号住居跡出土遺物
図版30　第9・10号住居跡出土遺物
図版31　第11・13・15号住居跡出土遺物
図版32　第16号住居跡出土遺物
図版33　第17～19・22・23号住居跡出土遺物
図版34　第24号住居跡出土遺物
図版35　第24号住居跡出土遺物
図版36　第24～26号住居跡出土遺物・第1号井戸跡出土遺物
図版37　第1号井戸跡出土遺物
図版38　第2号井戸跡出土遺物
図版39　第2号井戸跡出土遺物・第4号土壙出土遺物・第2号溝跡出土遺物
図版40　第2・7・8号溝跡出土遺物・グリッド出土遺物柱穴群(II区)・第1号井戸・第1号井戸土層断面・第1号井戸曲物
図版41　包含層出土遺物
図版42　2調査区出土遺物・表採遺物・石器・羽口・砥石・土錘・紡錘車・古銭

Ⅰ　調査の概要

1　発掘調査に至るまでの経過

一般国道17号は、東京から新潟に至る幹線道路で、増大する交通量に対処するため、建設省では、昭和37年以来、各種バイパスを建設している。深谷バイパスもその一環として計画された。

埼玉県教育委員会では、この事業と埋蔵文化財保護との調整を図るため、昭和45年に国庫補助を得て分布調査を実施してきた。

昭和46年、深谷バイパスの計画にあたり、建設省関東地方建設局大宮国道工事事務所調査課長から文化財保護室長（当時）あて、昭和46年11月25日付け大国調第146号をもって、「一般国道16号線の東大宮バイパス、西大宮バイパスおよび一般国道17号線の熊谷バイパス、深谷バイパス、上武バイパスの建設予定地内における埋蔵文化財の所在について」の依頼があり、分布調査の結果と照合した結果、深谷バイパス路線上に数か所の遺跡が確認されているため、即日、教文第854号をもって埋蔵文化財が所在する旨回答した。

昭和48年７月30日付け大国調第151号をもって、調査費用等について協議があり調査機関、時期、経費の明細等については改めて協議するよう回答した。昭和55年財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が設立され、実施機関は事業団とし、昭和55年10月新ケ谷戸遺跡から発掘調査は開始された。これについては昭和57年３月に報告書が刊行された。

工事区間の延長に伴って、昭和57年12月16日付け大国調第167号をもって、大宮国道工事事務所長から県教育長あて、「一般国道17号深谷バイパス改良工事に伴う埋蔵文化財の所在について」の照会があり、昭和58年11月８日付け教文第755号をもって、上敷免遺跡ほか４遺跡が所在する旨回答した。また、昭和59年３月14日付け大国調第27号で発掘調査について協議があり、昭和59年３月16日付け教文第1163号で、発掘調査は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に依頼して実施することが適当と思われる旨の回答した。これからの遺跡の調査は、昭和55年４月から実施された。

さらに、工事区間が岡部町方面に延長することになり、その区間の埋蔵文化財の所在について、昭和60年10月９日付け大国調第147号で照会があった。昭和60年10月21日付け教文第699号をもって四十坂下遺跡のほか２遺跡が所在する旨回答した。これについては、埋蔵文化財包蔵地の範囲を明確にするため予備調査を実施し、実施については文化財保護課と協議して欲しい旨付け加えた。

この回答をもとに、大宮国道工事事務所長から県教育長あて、昭和62年３月３日付け大国調第17号をもって「一般国道17号（深谷バイパス）改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査について」の協議があり、昭和62年３月23日付け教文第1127号で、その後新たに発見された明戸上敷免遺跡を加え、先に回答した四十坂下遺跡、矢島遺跡、戸森遺跡の４遺跡が発掘調査を実施する必要があり、実施期間を財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団にする旨の回答をした。これからの遺跡は昭和62年４月から発掘調査が開始された。

（文化財保護課）

2　発掘調査・整理・報告書刊行事業の組織

1　発掘調査（昭和62年度）

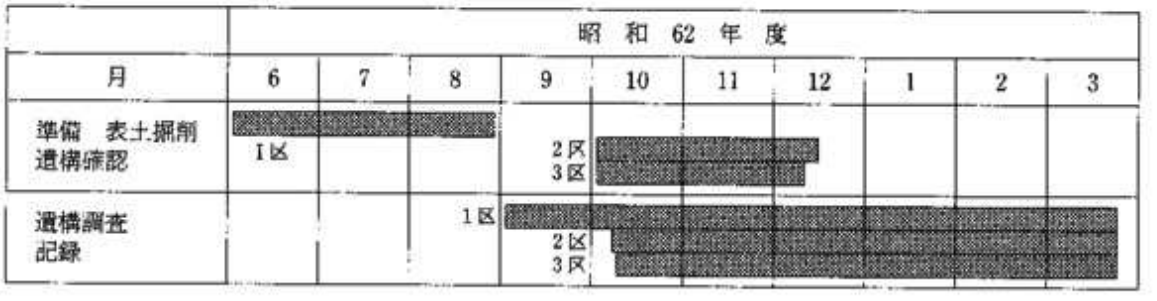
主体者	財団法人栃木県埋蔵文化財調査事業団
理事長	長井五郎
副理事長	百瀬陽二
常務理事兼調査研究部長	早川智明
庶務・経理	
理事兼管理部長	原田家次
主査	関野栄一
主事	江田和美
主事	岡野美智子
主事	福田浩
主事	本庄朗人
発掘調査	
調査研究部副部長	塩野博
調査研究第一課長	今泉泰之
調査員	鄭持和夫
調査員	磯崎一
調査員	宮呂之
調査員	金子直行
調査員	高崎光司
調査員	西口正純

2　整理・報告書刊行事業（平成５年度）

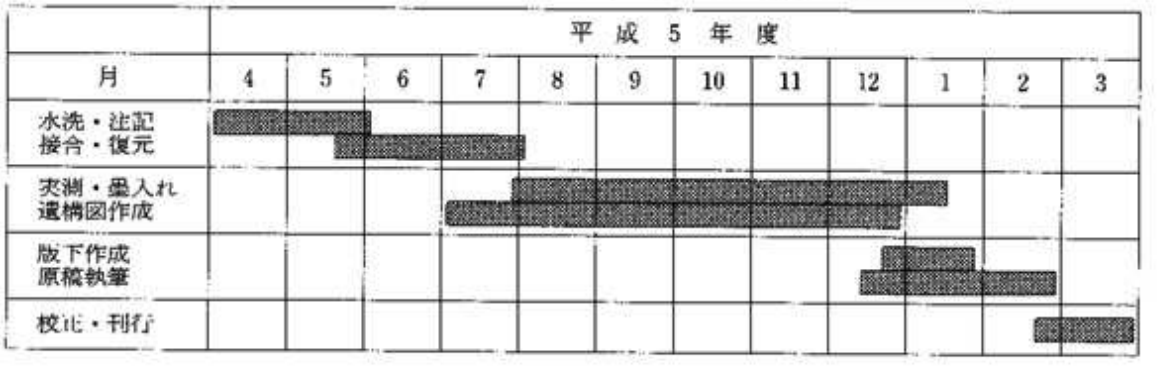
主体者	財団法人栃木県埋蔵文化財調査事業団
理事長	荒井桂
副理事長	横川好富
常務理事兼管理部長	柴崎光生
庶務・経理	
庶務課長	萩原和夫
主査	贄田清
主事	菊地久
経理課長	関野栄一
主任	江田和美
主事	長瀧美智子
主事	福田昭美
主事	腰塚雄二
整理・報告書作成	
資料部長	小川良祐
資料部副部長兼資料整理第一課長	谷井彪
専門調査員兼資料整理第二課長	小久保徹
主任調査員	西口正純

3　発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査事業は、対象面積35,260m²について、昭和62年４月１日から昭和63年３月31日まで行った。



報告書作成事業は、平成５年４月１日から平成６年３月31日まで行った。



II　遺跡の立地と環境

1　遺 跡 の 立 地

矢島南遺跡が所在する深谷市の地形は、荒川が形成した扇状地が開析された、標高50～80mの櫛挽台地と、利根川南岸に広がる標高30m前後の妻沼低地からなる。遺跡は、この妻沼低地の中でも岡部町寄りの標高36m前後の自然堤防上に立地し、南に櫛挽台地の崖面を望む。また、3km北側に小山川が東西に流れ利根川に合流する。ＪＲ高崎線岡部駅から直線で北東約2kmに位置する。

第１図　埼玉県の地形

周辺は現況では水田が広がり、見た目の高低差が少ない。これは明治20（1887）年に設立された日本煉瓦製造株式会社による、レンガの原料とする粘土の広範囲な採取によるところが大きい。しかし、「島」が付く地名がこの一帯に多く残ることから、かつては、現在よりも起伏のある地形であったことがわかる。

2　歴史的環境と周辺の遺跡

櫛挽台地と妻沼低地の遺跡について概観すれば、旧石器時代から縄文時代前期の遺跡は台地部に立地が集中し低地部では明確でないが、本郷前東遺跡（川口　1989）において前期末葉の土器数点が出土することが注目される。中期の遺跡は櫛挽面では各谷筋に集中し寄居面では荒川の段丘面に散在するとの指摘がある（埼玉県教育委員会　1977）。後期・晩期は、原ヶ谷戸遺跡（15）・明戸東遺跡・原遺跡（９・11）など櫛挽台地先端部と低地部へ遺跡が進出する。

弥生時代の遺跡は、櫛挽台地の北端に位置する四十坂遺跡が前期（波及期）の遺跡として有名であるが（46）、本事業関連で調査した上敷免遺跡（５）において、遠賀川系土器が出土したことは、弥生文化の本県における波及を考えるうえで重要な発見であった。中期になると上敷免遺跡をはじめ樋詰遺跡（12）、再葬墓群が検出された横間栗遺跡（25）・飯塚遺跡（39）など妻沼低地内に遺跡が増える。後期前半の様相は、不明であるが、終末にかけては明戸東遺跡（９）においては、吉ヶ谷式土器を主体とする住居跡が検出された。同時に二軒屋式土器が出土することから「活発な地域間の交通関係」が指摘されている（磯崎　1989）。

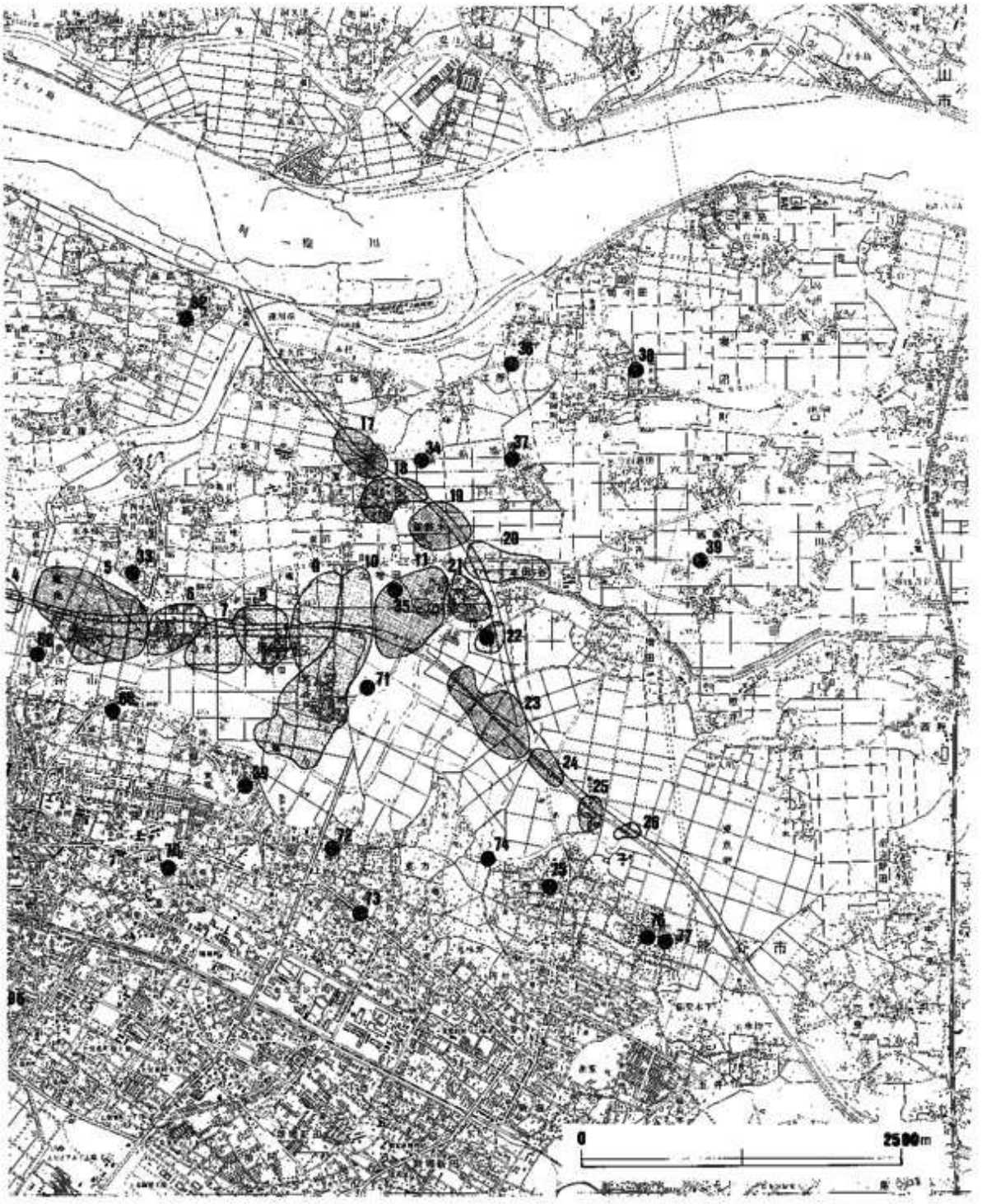
古墳時代前期は、櫛挽台地では水窪遺跡（44）などＳ字状口縁甕が多量に出土する集落や前方後方型周溝墓を検出する石蒔Ｂ遺跡のように小山川・志戸川流域で集落と墳墓が増加する。一方妻沼低地では、東川端遺跡などで方形周溝墓が検出されているが、古墳は見ることができない、後期には、自然堤防上に集落が活発に展開される。この背景について、後期古墳の展開が小規模で巨大古墳が存在しないことと関係するとの指摘がある（田中　1992）。

奈良・平安時代の遺跡は、砂田前（13）・上敷免遺跡などが調査されており、榛沢郡の郡衙正倉と

推定されている中宿遺跡（73）が、当遺跡の西方約700mにある。中世には武士団が活躍する舞台となるが、修復のため調査された岡部六弥太忠澄墓（56）からは蔵骨器多数が出土している。

1 矢島南遺跡　2 [illegible]遺跡　3 戸森松原遺跡　4 森下遺跡　5 上敷免遺跡　6 羽戸遺跡　7 新屋敷東遺跡
14 滝下遺跡　15 原ケ谷戸遺跡　16 岡遺跡　17 ウツギ内遺跡　18 砂田遺跡　19 柳山遺跡　20 城北遺跡
28 黄瀬氏館跡　29 [illegible]氏館跡　30 [illegible]屋敷　31 内ケ島氏館跡　32 新開岩次郎館跡　33 上敷免北遺跡　34 [illegible]氏館跡
42 六反田遺跡　43 新井遺跡　44 水岸遺跡　45 浅間山古墳　46 [illegible]遺跡　47 岡部城跡　48 [illegible]古墳
55 岡部岡No.3遺跡　56 岡部六弥太忠澄墓跡　57 [illegible]遺跡　58 岡部岡No.2遺跡　59 愛宕神社古墳　60 上原遺跡
68 [illegible]太郎館跡　69 木の本古墳群　70 庁島城跡　71 [illegible]館遺跡　72 東方城跡　73 中宿遺跡　74 [illegible]神社祭祀遺跡
82 石原山瓦窯跡　83 稲荷塚古墳　84 茶臼塚1号墳　85 茶臼塚2号墳　86 西谷遺跡　87 [illegible]遺跡　88 永久保遺跡
95 新井館跡　96 本郷[illegible]遺跡　97 百間[illegible]遺跡　98 [illegible]之上遺跡　99 [illegible]遺跡　100 [illegible]原遺跡　101 [illegible]遺跡

第2図　矢島南



8 新田裏遺跡　9 茅戸東遺跡　10 宮ケ谷戸・鹿ノ内遺跡　11 原遺跡　12 稲荷遺跡　13 砂田前遺跡
21 屏立遺跡　22 台遺跡　23 清水上遺跡　24 根岸遺跡　25 横間栗遺跡　26 関下遺跡　27 牧西堀の内遺跡
35 上尾田古墳群　36 芝原氏館跡　37 鳥内遺跡　38 高城城跡　39 飯塚原遺跡　40 東五十子城跡　41 稲荷塚遺跡
49 御手長山古墳・立福遺跡　50 横野遺跡　51 中市遺跡　52 勾出遺跡　53 塚東遺跡　54 白山遺跡
61 新郷院館跡　62 鉄砲城跡　63 塚出馬場跡　64 深谷町遺跡　65 大沼洋正館跡　66 沼田遺跡　67 茨谷城跡
75 西原府館跡　76 別府氏館跡　77 別府城跡　78 西窪ケ谷遺跡　79 西山古墳群　80 千光寺古墳群　81 山崎古墳群
89 上野館跡　90 タンダラ山の砦跡　91 鶴山梨原遺跡　92 今泉館跡　93 針ケ谷館跡　94 岡部町No.62古墳
102 人見館跡　103 鶴山塩釜遺跡群　104 桜ケ丘石組遺構　105 秋元氏館跡　106 小台遺跡

遺跡と周辺の遺跡

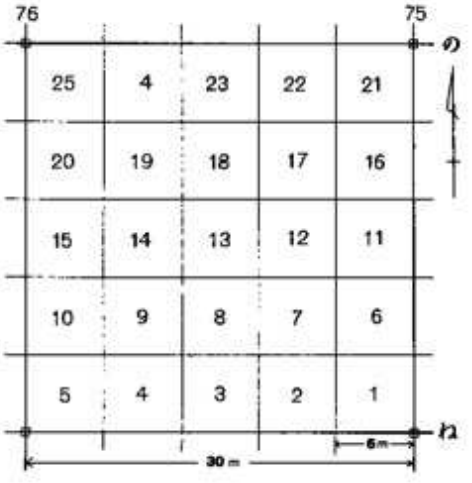
Ⅲ　調査の方法と遺跡の概観

1　調 査 の 方 法

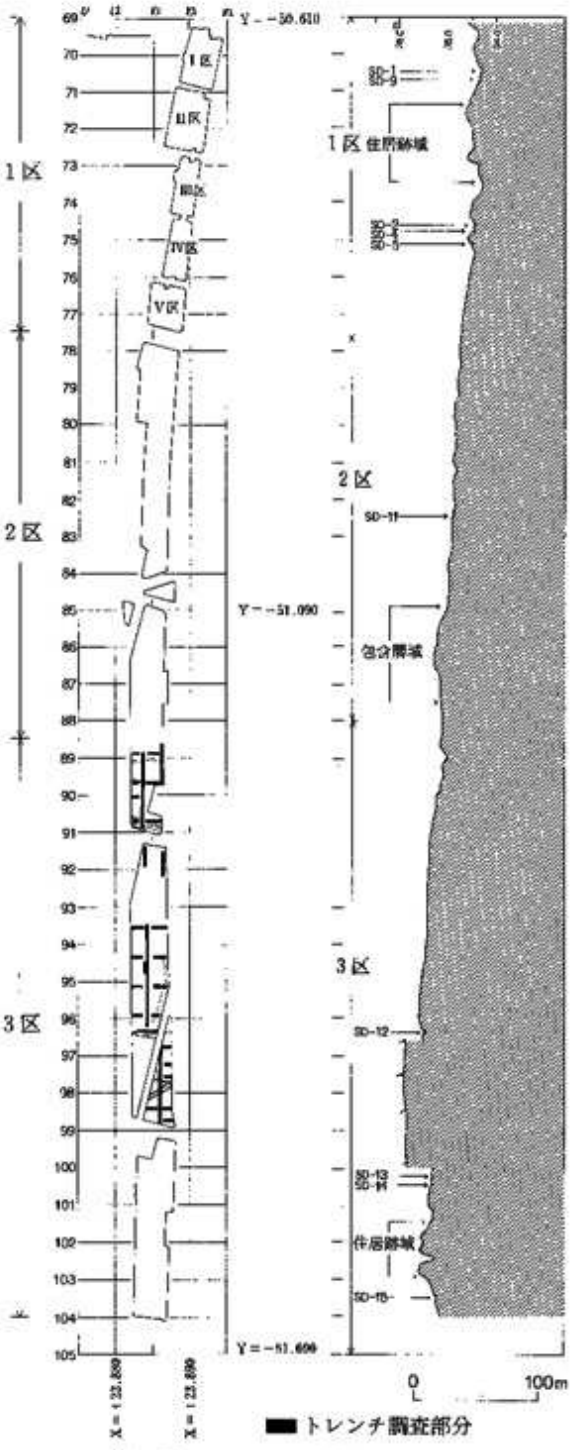
調査の範囲は、一般国道17号深谷バイパス本線部分と補償道路部分を対象とした。また予定地を横断する現道および用水路部分については、遺構の存在が確認された場合にのみ調査を行った。

調査は、平面直角座標第Ⅸ系に基づき、30m×30mのグリッドを基本に設定し、さらにその中を6m×6mの小グリッドにより25に分割した。基本グリッドには、南から北へあ・い・う・・・の50音順、東から西へ1・2・3・の順で名称を付けた。また小グリッドについては南東隅を起点に1から25の番号を付した。グリッドの呼称は南西隅の杭で基本グリッドを表しその中の小グリッドは1～25の番号を用いた。よって、ね―76―13のように表す(第3図)。あ―1グリッドは、X＝＋23,130.0m、Y＝－48,570.0mにあたる。

遺構の記録は、グリッド杭を基本に1m方眼を地表に設定する簡易遣り方により、1/20と1/10の縮尺を基本に実測を行った。



第3図　グリッド設定方法



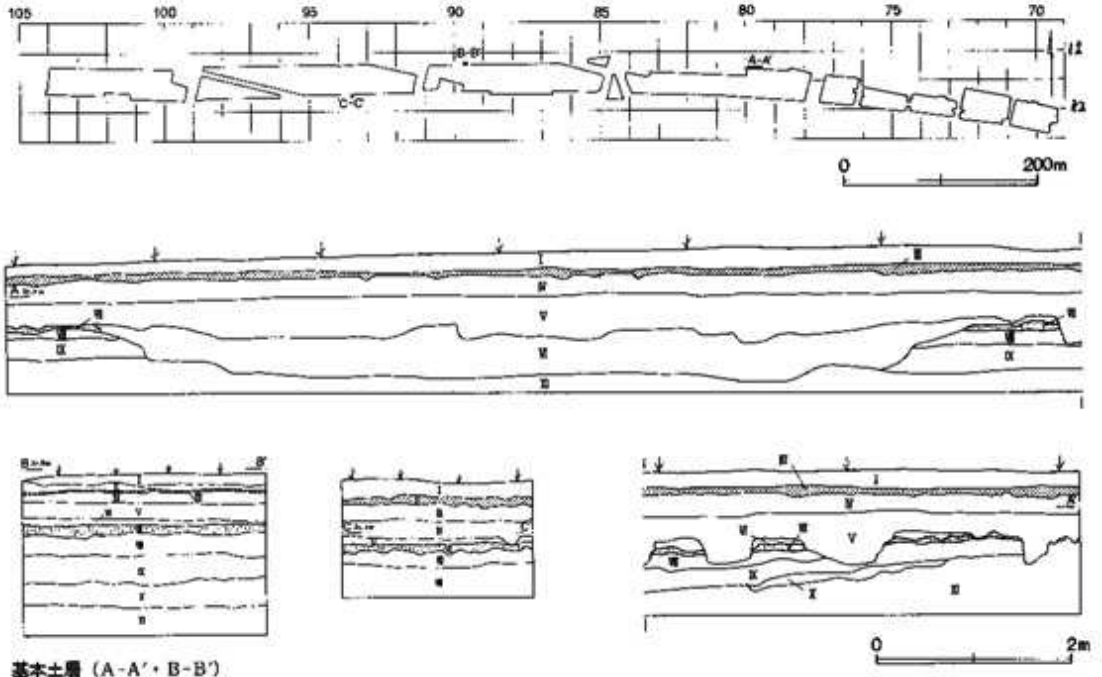
第4図　トレンチ調査範囲と地形

2　遺跡の概観

遺跡は、利根川の南約2kmに位置し矢島と大塚島の現集落にかかる形で認識されている。しかし実際には両集落を包括する範囲まで広がるものと思われる。一方路線はこれらの集落の間を抜け、遺跡の中央を東西に横断する形で設定された。そのため、調査の距離が約1kmにも及ぶため、便宜上現道を境に矢島南1から3区に分割した。さらに1区についてはIからV区に分けて調査を進めた（第4図）。

縄文時代については、1区－II・III区と2区の包含層から後期の土器10数点と打製石斧4点が出土しただけで遺構の検出はできなかっが2区では、遺物が集中して出土することから周囲に住居跡・集落の存在が予想される。続く弥生時代の遺物・遺構は検出できなかった。

古墳時代は、前期と後期の集落がいずれも矢島南1区で検出できた。前期の住居跡は6軒で第2号住居跡から第9号住居跡にかけて環状に配置されており、集落の中心は調査区の北側にあることがわかる。第2号住居跡と第3号住居跡の覆土には接合関係がある。出土遺物の量は各住居跡ごと



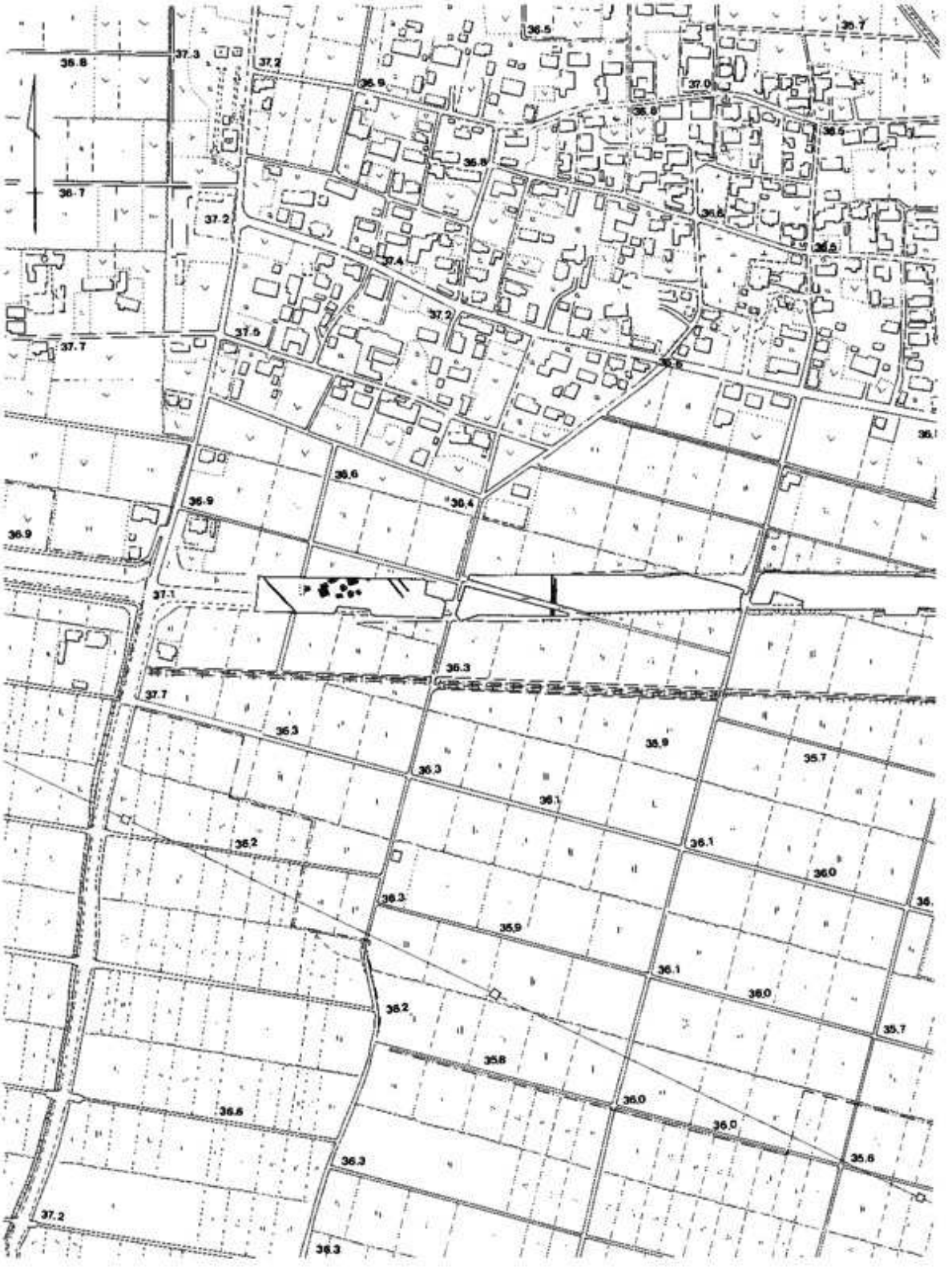
基本土層（A-A'・B-B'）

I　暗青灰色土　現代水田層
II　暗赤褐色土　鉄分多量　現代水田床層　浅間A軽石多量　粘性なく　やわらかい
III　黒灰色砂　浅間A軽石層
IV　暗灰褐色土　暗茶褐色粒子を全体的　炭化粒子をわずか　粘性があり堅緻　水田層？
V　灰褐色土　基本的に4と同じ　黄褐色土粒子（3～5mm）を多量　水田層
VI　黒褐色土　黄褐色粘土ブロック（5mm～1cm）多量　炭化物が層状に堆積　粘性強　堅緻
VII　黒灰色砂　浅間B軽石層
VIII　淡黄褐色土　鉄分多量　7との境に　炭化物が層状に堆積　粘性強　堅緻
IX　褐灰色土　鉄分多量　基本的に8と同じ　粘性強　堅緻　粘土層
X　黒灰色土　鉄分まばら　粘性強　やわらかい粘土層
XI　暗緑灰色土　粘性の強い粘土層　鉄分が含まれない　軟い

基本土層（C-C'）

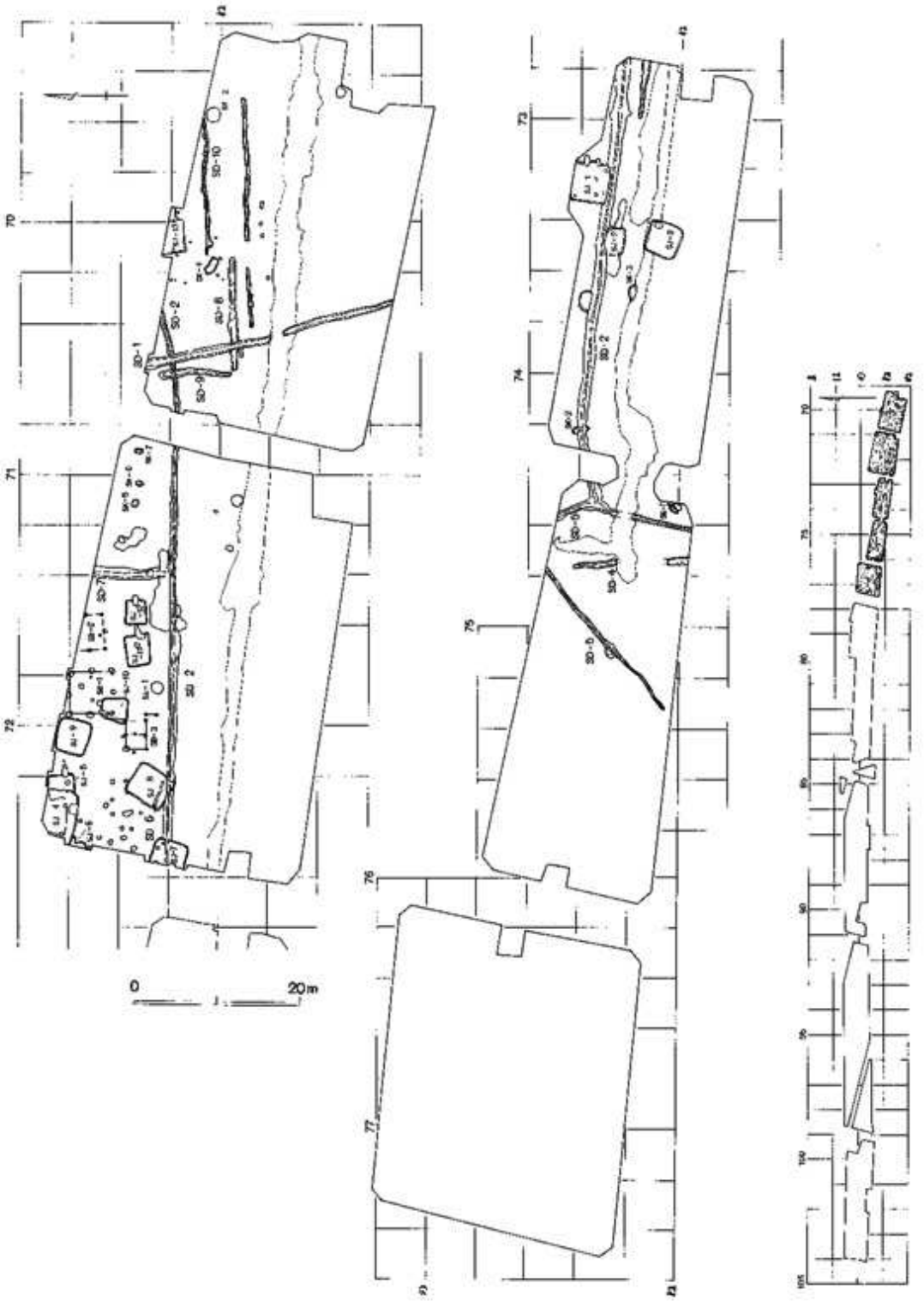
I　耕作土
II　浅間A軽石層
III　明青灰色土　粘性やや強　細砂粒子若干
IV　暗黄褐色土　粘性強　きめの細かな粘土に近い
V　暗青灰色土　粘性特に強　細砂粒子少来
VI　浅間B軽石層
VII　青灰色土　粘性強
VIII　暗青灰色土　粘土層

第5図　基本土層図

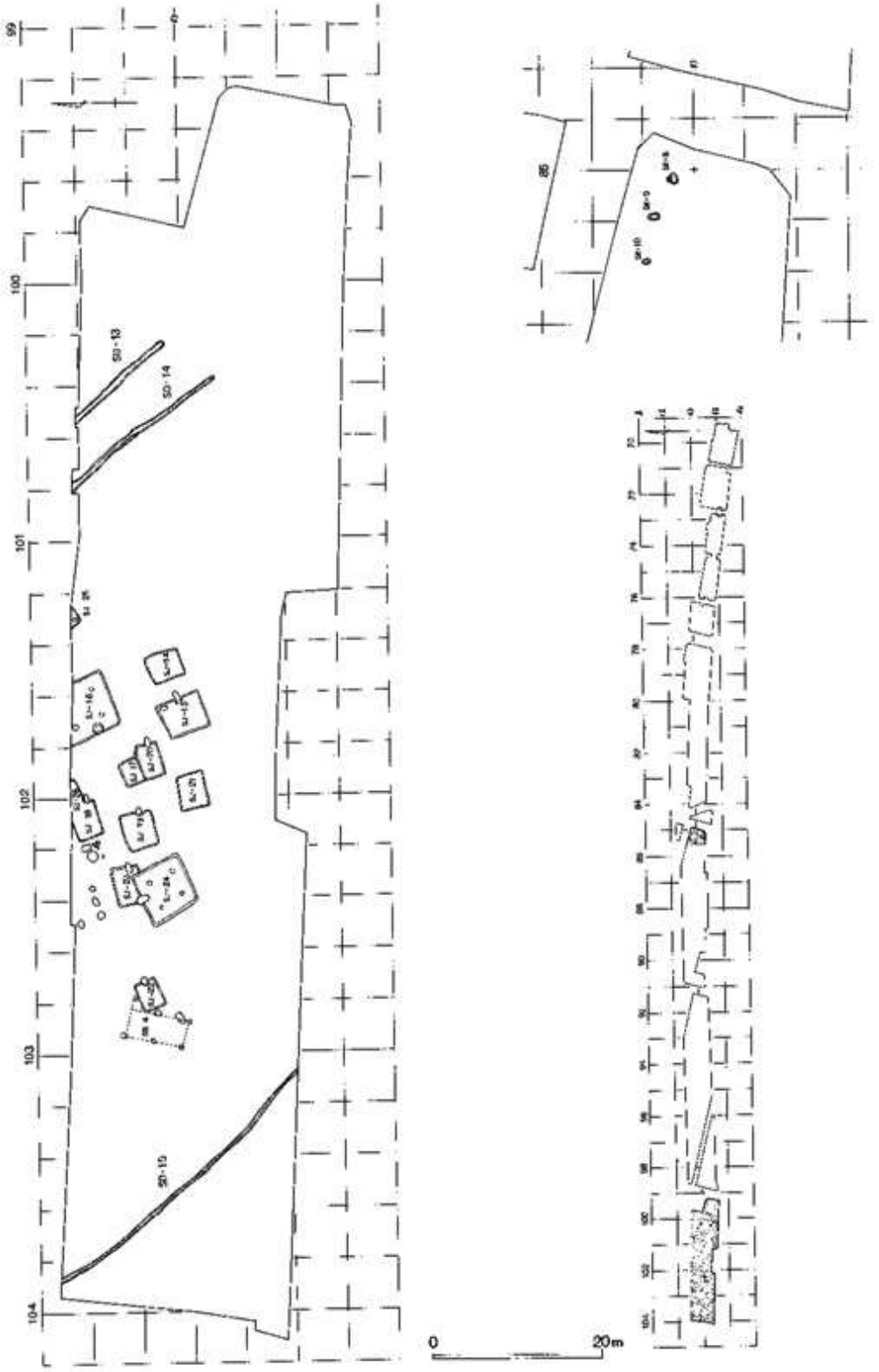


第6図　調査範囲

と周辺の地形



第7図　1区全測図

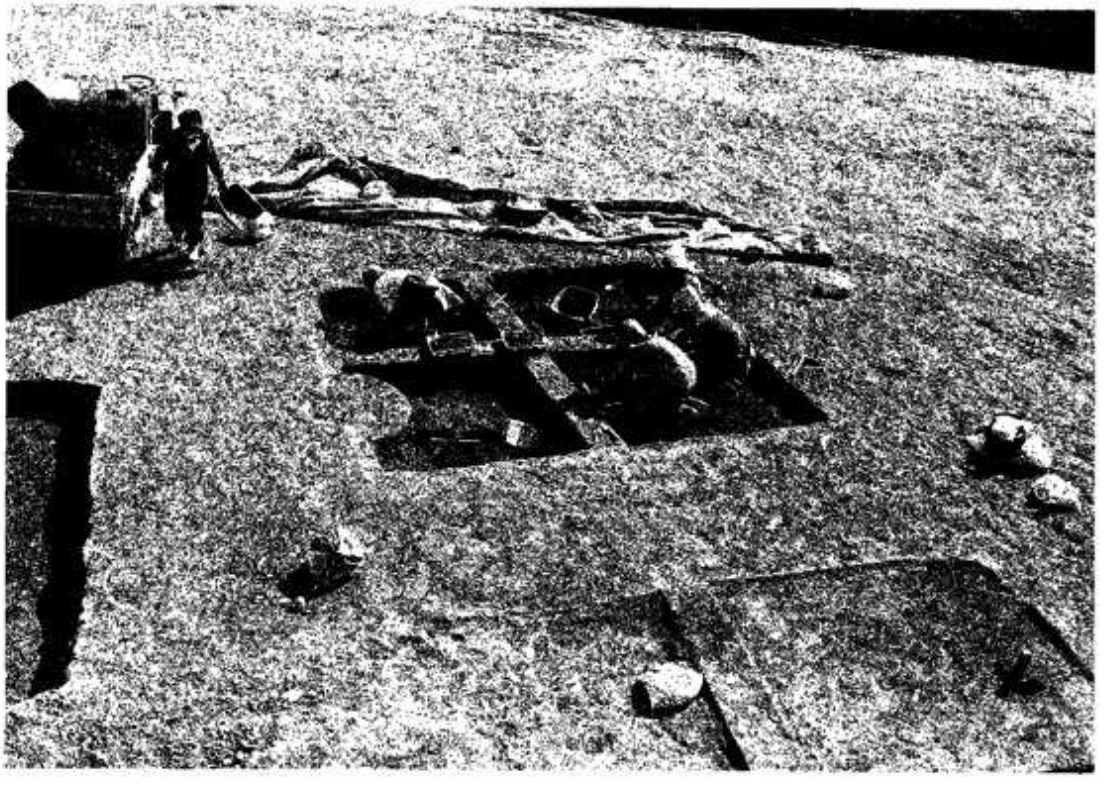


第8図　3区全測図

に差があるが、第８・９号住居跡からＳ字状口縁甕が出土する。この内第９号住居跡出土甕には肩部に横刷毛が認められる。

古墳時代後期の遺構は第５号住居跡と第２号溝があたると思われるが、出土資料が少なく限定できないがIII区包含層からも該期の土器が出土することから、やはり調査区北側に集落が形成されていたものと思われる。

奈良・平安時代の遺構は矢島南１・３区で検出した、第１・６・10・11・12・13・14・15・16・17・18・19・20・22・23・24・25・26号住居跡の18軒と第１・２号井戸跡が該当し、その他にも該期の土器を出土する溝跡、土壙があるが時期の断定はできない。また矢島南２区の包含層からも多数の土器が出土することから周辺に住居跡の存在が予想されるが、調査区内には遺構は検出できなかった。第１号住居跡からは底部外周ヘラケズリを主体とする須恵器坏がまとまって出土する。また第24号住居跡では、底部全面ヘラケズリを主体とする須恵器坏とともに蓋（碗）・高盤などが出土する。矢島南１区と２区の時期を比べると矢島南２区の方が相対的に古いことがわかる。さらに第15号住居跡の覆土から金環が出土した。２基検出した井戸跡は、井桁や井戸枠、最下部から曲げ物がいずれも良好な状態で出土した。矢島南１区のＶ区については、浅間Ｂ軽石が堆積する面を確認しその除去をおこない遺構の確認に努めたが検出には至らなかった。一方、Ⅳ区では同じく浅間Ｂ軽石を除去したところ畔状の高まりと畝状の浅い窪みを検出したが、性格を決定するには至らなかった。この他には、掘立柱建物跡を３棟検出した。第１号掘立柱建物跡のピット中から底部糸切りの９世紀代の須恵器坏を出土した。他の掘立柱建物跡からは出土遺物がないが、主軸がほとんど同じであることから、同時期と考えられる。

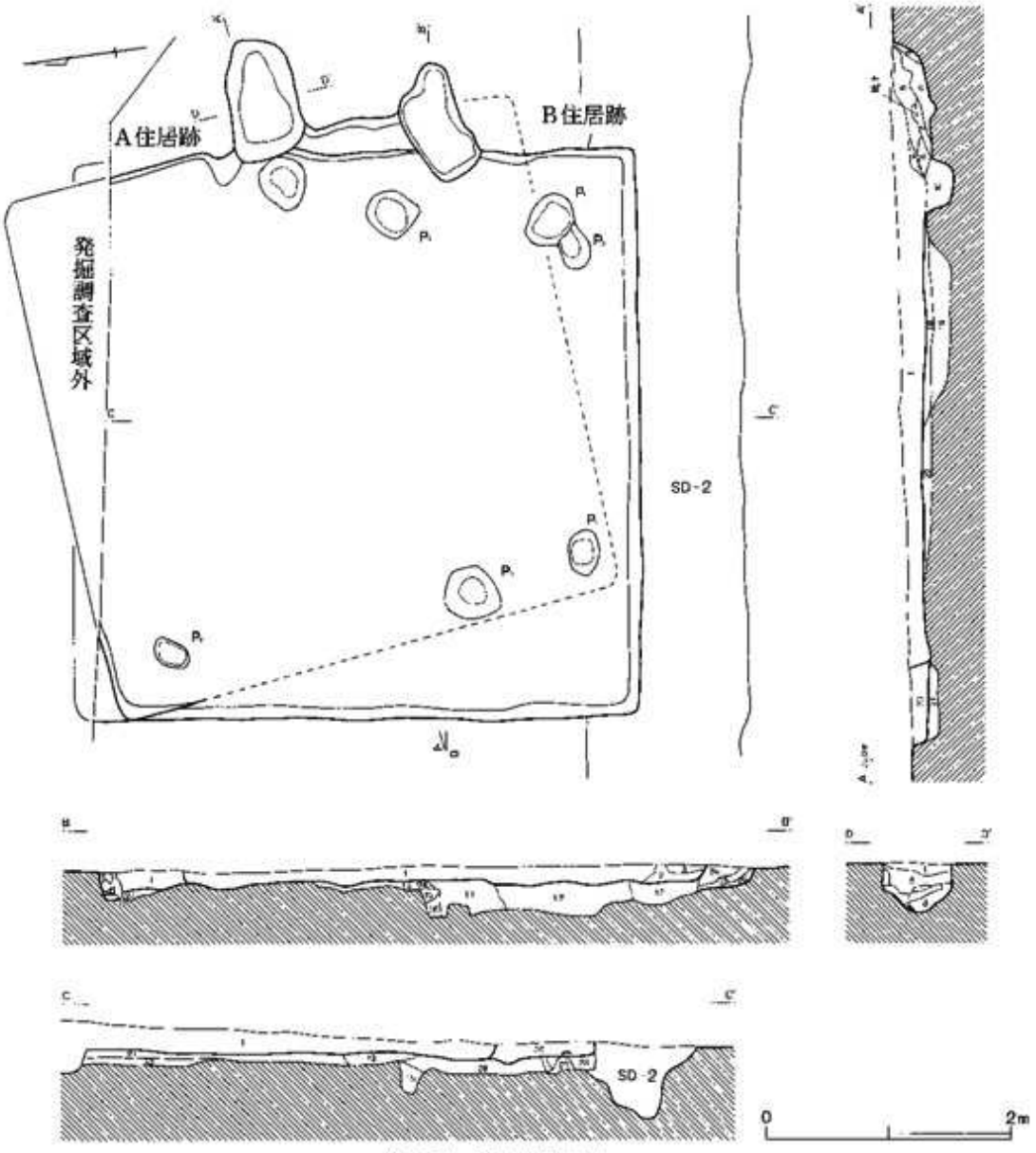


Ⅳ　検出した遺構と遺物

1　住居跡

第１号住居跡（第９図）

ね―73―６・７・11・12グリッドに位置する。北壁は、調査区域外にあたる。南壁は、第２号溝を切って作られる。東壁中央に新旧２基のカマドがあることから、２軒の重複あるいは建替えと見られＡ住居跡が新しい。形態は、いずれも方形である。規模は、Ａ住居跡が長径4.3m、短径3.8m、深さ10cmで、Ｂ住居跡が東西4.65m、深さ20cmである。主軸方向はＡ住居跡がＮ―82°―Ｅで、Ｂ住



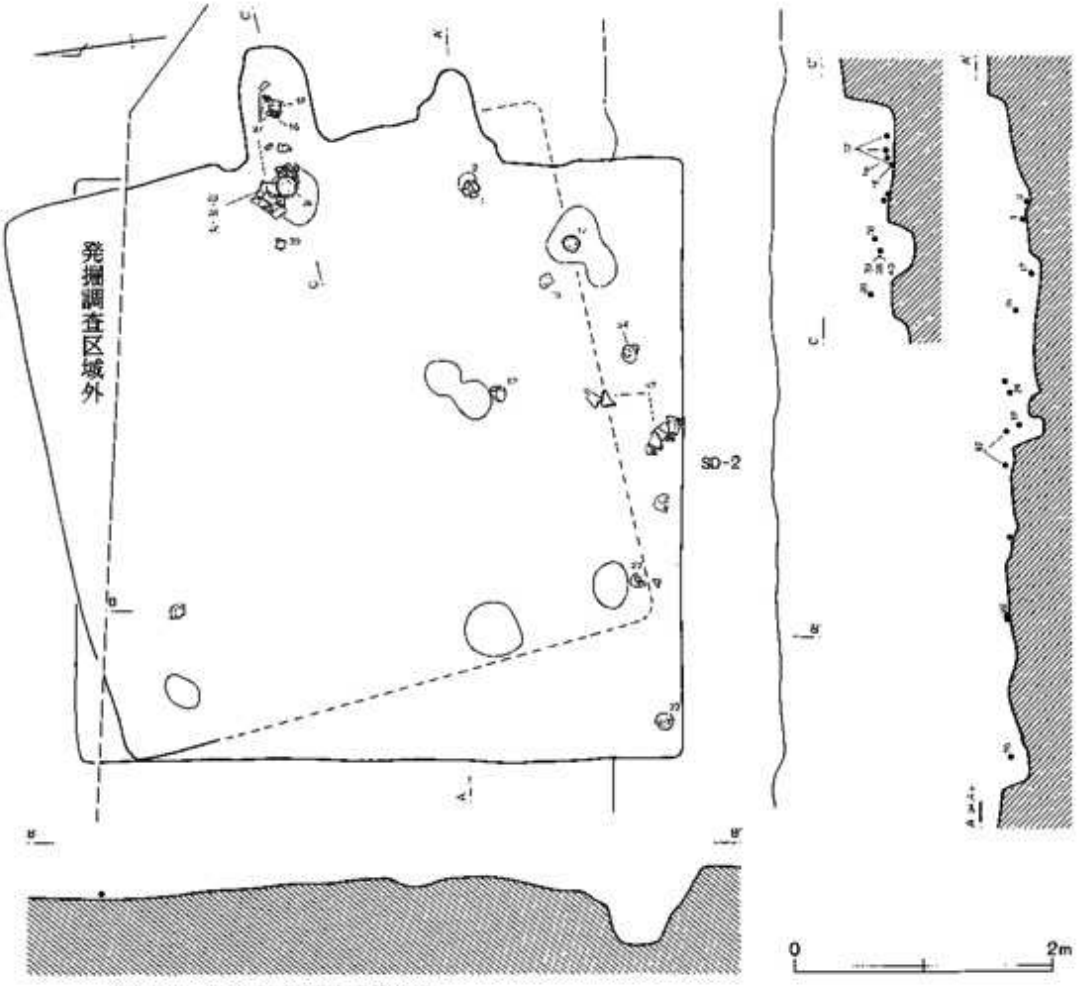
第９図　第１号住居跡

第1号住居跡

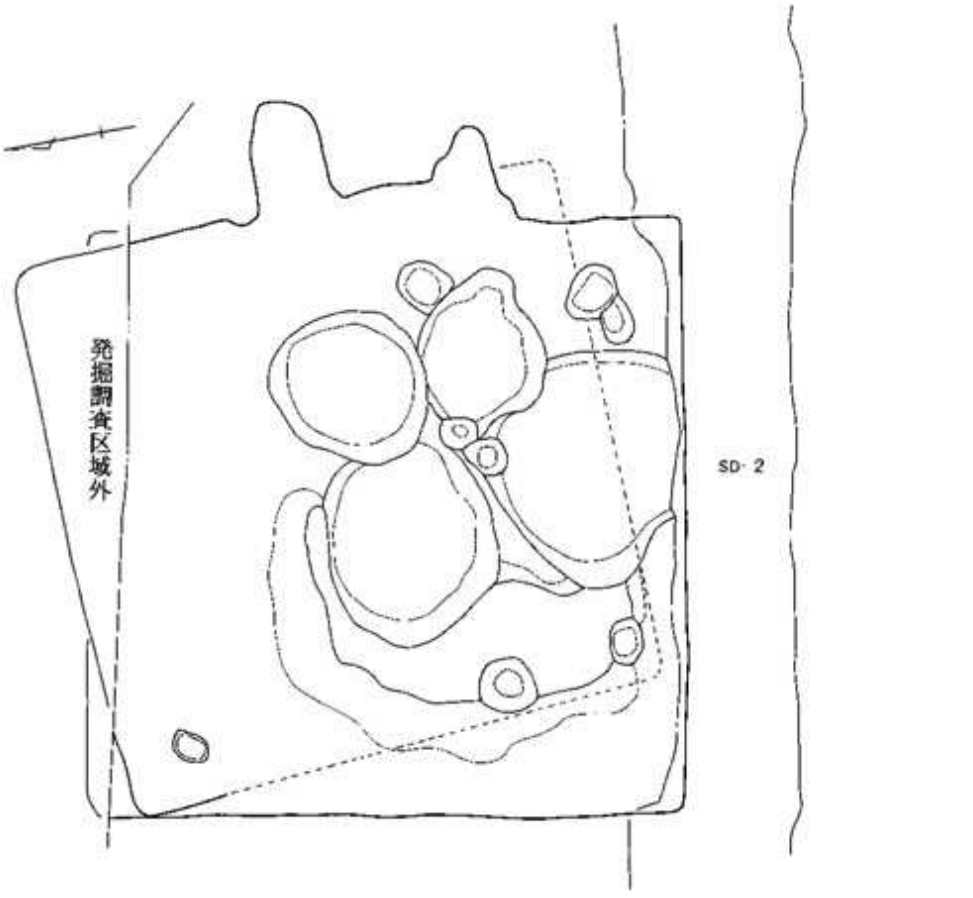
1　褐灰色土　土器片・炭化物まばら　白色微粒子　橙色土粒子（1cm）若干
2　暗赤褐色土　炭化物微量　砂質
3　黒褐色土　焼土粒子が混じり合う
4　褐灰色土　1に似る　焼土（1cm）若干
5　灰褐色土　炭（2cm）・焼土（3～4cm）斑状
6　褐灰色土　横しま状　土師器片集中
7　灰色土　粘性きわめて強
8　灰色土　焼土（1.5cm）まばら　暗い炭化物粒子わずか
9　にぶい黄褐色土　地山土・砂質ブロック若干　炭化物・焼土なし
10　褐灰色土　焼土・炭化物多量　土器片
11　黒褐色土　浅黄色砂質ブロック多量　炭化物混じりやや粘質
12　黒褐色土　浅黄色土ブロック・にぶい橙色土ブロック多量　炭化材片均質に多量
13　黒褐色土　11に似る　炭化物少量
14　黒褐色土　地山ブロック主体　炭化物少量
15　浅黄色土　地山ブロック　砂質
16　黒褐色土　11に似る　浅黄色砂質状に多量
17　黒褐色土　炭化物粒子・焼土ブロック（2cm）斑状　A住居跡作る際に掘される
18　暗褐色土　炭が層状に堆なる　カマド灰原
19　灰色土　上面に灰層（5mm）　焼土・炭化物粒子（1～3cm）多量　土器片多量
20　黒褐色土　12に似る　炭化物ほとんどなし
21　褐灰色土　1に似る　白色微粒子なし
22　黒褐色土　浅黄色砂ブロック（地山土）混じる
23　褐灰色土　1に似るが　炭化物稀少　堅緻
24　黒色土　灰層（3cm）　上部に焼土・浅黄色地山ブロック
25　明黄褐色土　砂質　灰状炭化物
26　黒褐色土　やや粘性あり
27　黒褐色土　13と同じ　浅黄色砂　斑状　砂質
28　黒褐色土　11と同じ　炭化物微量
29　黒褐色土　28に近い　浅黄色砂質ブロック多量
30　黒褐色土　浅黄色砂質土が層状
31　黒褐色土　22に同じ　地山ブロック特に多量

居跡がN－79°－Wである。ピットは8本検出された。いずれも直径20cm前後で、浅い窪み状である。柱痕が検出できたものはないがP7の覆土には、炭化物が詰まっていた。床面は凹凸が激しく、A住居跡には貼り床が認められ、B住居跡は掘り方を持つ。

遺物は、A住居跡がカマド煙道部と炊き口部に纏まり、B住居跡では、南壁際に集中して出土した。覆土中から土錘（43・44）が出土した。



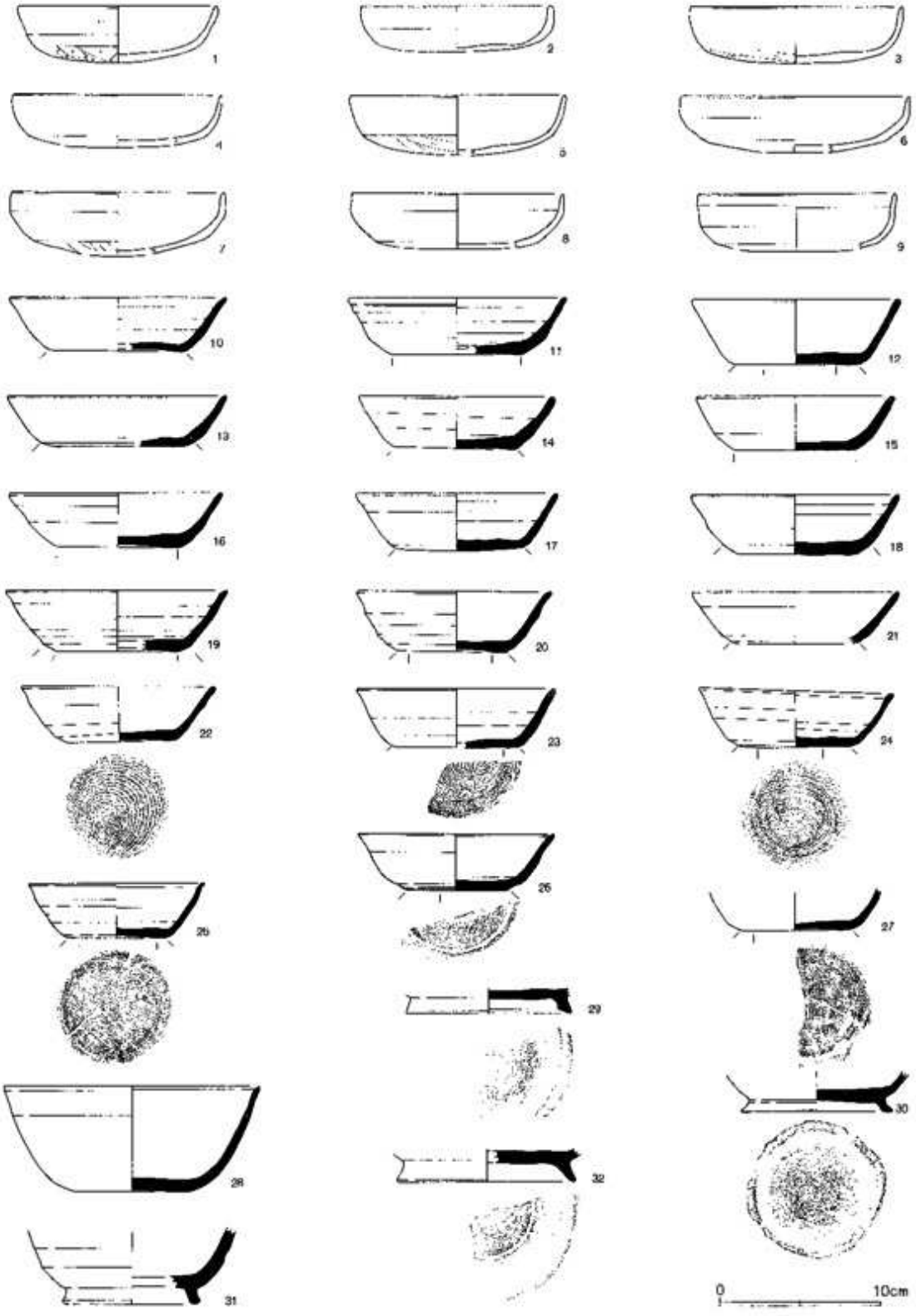
第10図　第1号住居跡遺物分布



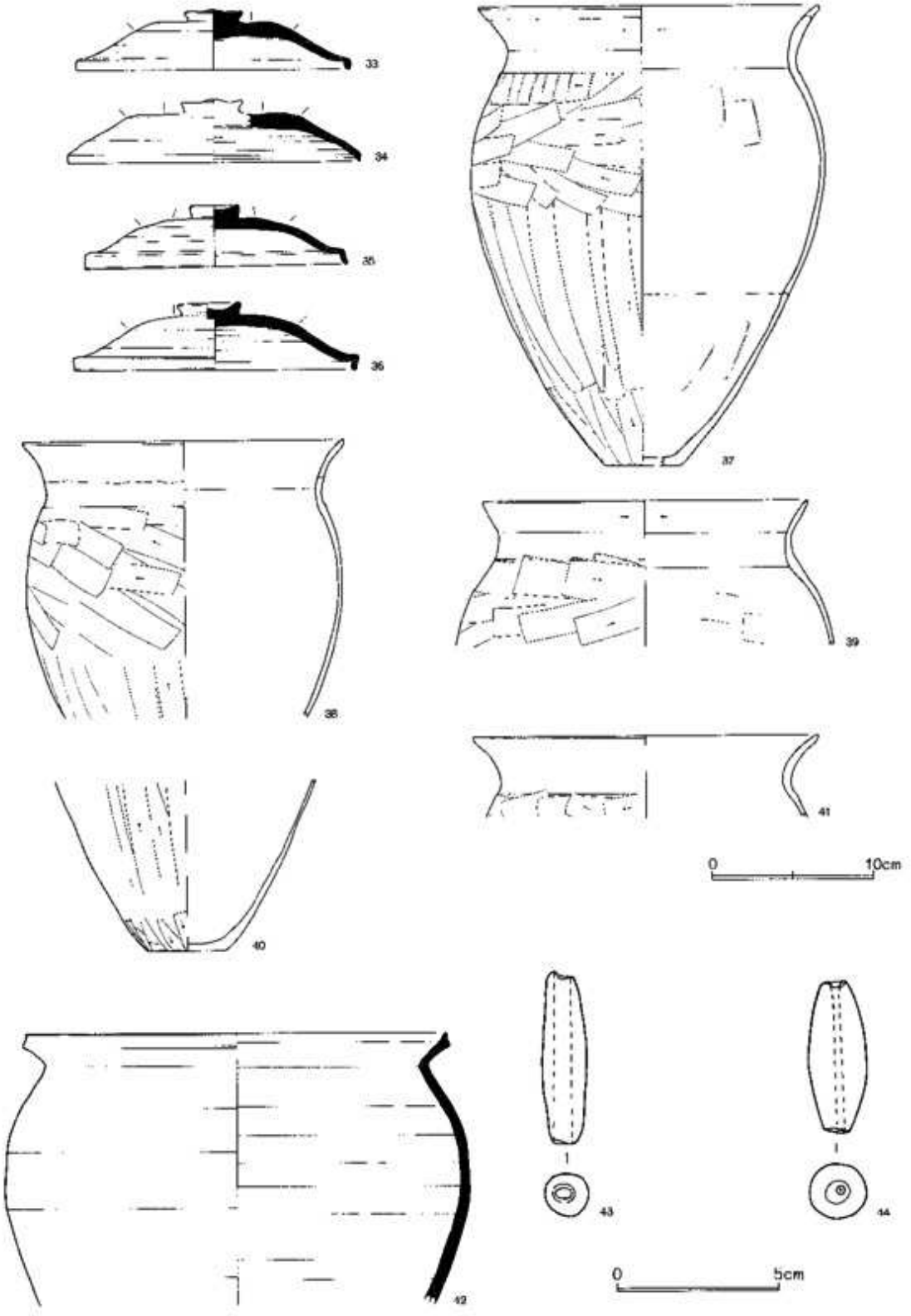
第11図　第1号住居跡(堀り方)

第1号住居跡出土遺物（第12・13図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	12.4	3.6		AA'B	A	橙	90%	覆土
2	坏	12.0	2.9	10.0	AA'BB'	A	明赤褐	100%	覆土
3	坏	(13.3)	3.6	(11.4)	AA'BC	B	暗赤灰	40%	覆土
4	坏	(12.9)	3.3	(11.0)	AA'BC	A	橙	25%	覆土　口縁部ヨコナデ
5	坏	(13.5)	4.7	(12.0)	AA'B'	A	橙	40%	覆土　B'粒子多
6	坏	(14.2)	3.5	(11.5)	AA'C	A	橙	30%	覆土　器面摩滅　C粒子多
7	坏	(13.3)			AA'BC	A	橙	20%	覆土
8	坏	(13.2)	3.4	(10.0)	AA'B	B	明赤褐	20%	覆土
9	坏	(12.3)	3.6	(10.0)	AA'B'	B	にぶい橙	25%	カマド
10	坏	(13.5)	3.3	(8.3)	AA'	A	灰	25%	覆土　A'粒子大　外縁手持ち篦削り
11	坏	(13.6)	6.5		AA'B'	A	灰	20%	覆土
12	坏	(13.0)	4.0	7.6	AA'B	B	灰オリーブ	40%	底部外周ヘラケズリ
13	坏	(13.6)	3.1	(8.0)	AA'B	A	灰	30%	覆土　AA'粒子大　僅かに糸きり痕残る
14	坏	12.2	3.3	7.6	AA'B	A	灰	60%	底部ヘラケズリ
15	坏	12.3	3.4	7.5	AA'	B	灰	60%	静止糸切り　手持ち篦削り　A'粒大きい
16	坏	13.2	3.4	7.5	AA'B	C	暗灰	80%	底部全面ヘラケズリ
17	坏	12.6	3.6	8.0	AA'B	A	灰	100%	覆土　A'粒子大
18	坏	13.0	3.7	7.0	AA'B	A	灰	80%	A'粒大きい　新カマド内

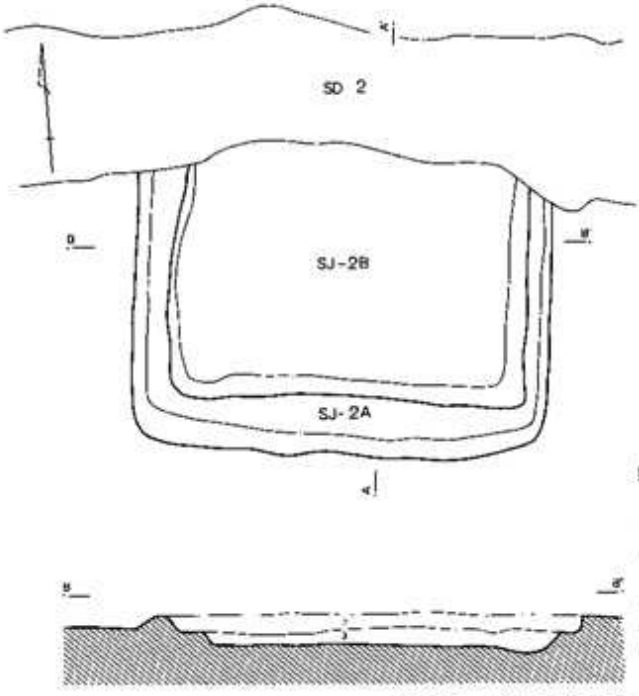


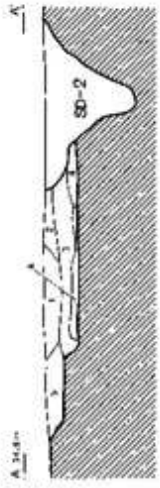
第12図　第１号住居跡出土遺物（１）



第13図　第１号住居跡出土遺物（２）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
19	坏	13.7	4.8	7.4	AA′BC	A	灰	25%	覆土　A′粒子大きい
20	坏	12.1	3.7	6.8	AA′B	A	灰	90%	外縁ヘラケズリ　A′粒大きい
21	坏	(12.9)	3.2	(8.0)	AA′B	A	灰	30%	底部篦削り　覆土
22	坏	12.0	3.6	6.5	AB	A	灰	80%	ケズリなし　A粒大きい
23	坏	(12.4)	4.6	(8.0)	AA′BC	A	灰	25%	覆土　底部周辺ヘラケズリ
24	坏	12.1	3.8	7.0	AA′BCE	B	青灰	90%	一部にぶい赤褐色　鳩山産
25	坏	(10.9)	3.4	6.1	AA′B	A	灰	40%	覆土　A′粒大きい　底部外縁篦削り
26	坏	(12.3)	3.5	(6.4)	AA′B	B	灰	25%	覆土　底部外縁ヘラケズリ
27	坏			6.9	AA′BD	B	灰	30%	覆土　A′粒大きい　底部外縁篦削り
28	椀	(15.9)	6.5		AA′B′	A	灰	30%	覆土　器面荒れる
29	高台坏			(10.3)	AA′B	A	灰	20%	
30	高台坏			9.5	AA′B	A	灰白	70%	No.2　A′粒子大　底部中央糸切り痕
31	高台坏			(8.6)	AA′B	A	灰	20%	覆土　A′粒子大
32	高台坏			(11.1)	A′	A	灰	30%	覆土
33	蓋	17.0	3.7		AA′B	A	灰	40%	頂上部篦削り　A′粒子大
34	蓋	18.0	3.9		AA′B	A	灰	30%	頂上部外縁ヘラケズリ
35	蓋	(16.4)	3.8		AA′BD	B	灰	30%	覆土　A′粒子大　頂上部篦削り
36	蓋	17.5	4.3		AA′B	C	暗灰	100%	覆土　A′粒子大多量　頂上部篦削り
37	甕	21.2	28.3	(4.7)	AA′BC	A	にぶい赤褐	70%	新カマド内
38	甕	(20.0)			AA′BC	A	赤褐	30%	カマド　No.4　口縁部外面スス付着
39	甕	(20.1)			AA′BC	A	にぶい赤褐	25%	覆土
40	甕			(4.8)	AA′BC	A	赤	30%	No.4　カマド手前
41	甕	(21.4)			AA′B	A	赤褐	30%	覆土
42	鉢	(26.5)			AA′B	B	灰白	40%	覆土　No.15・16
43	土　錘				AA′BC	A	橙	100%	覆土　長径5.4　最大径1.4　重さ7.96
44	土　錘				AA′BC	A	橙	100%	覆土　長径4.7　最大径1.9　重量10.46





第2号住居跡
1　暗褐色土　全体に白色パミス
2　黒褐色土　全体に白色パミス
3　暗赤褐色土　にぶい黄褐色砂ブロック（地山崩れ）　粘質強
4　暗褐色土　地山土しま状　白色パミスなし　粘性強
5　黒褐色土　地山土全体に斑状　白色パミス多量
6　暗黄褐色土　地山土に3が入り混じる

第2号住居跡
1　暗褐色土　全体に白色パミス
2　黒褐色土　全体に白色パミス
3　暗赤褐色土　にぶい黄褐色砂ブロック（地山崩れ）　粘質強
4　暗褐色土　地山土しま状　白色パミスなし　粘性強
5　黒褐色土　地山土全体に斑状　白色パミス多量
6　暗黄褐色土　地山土に3が入り混じる

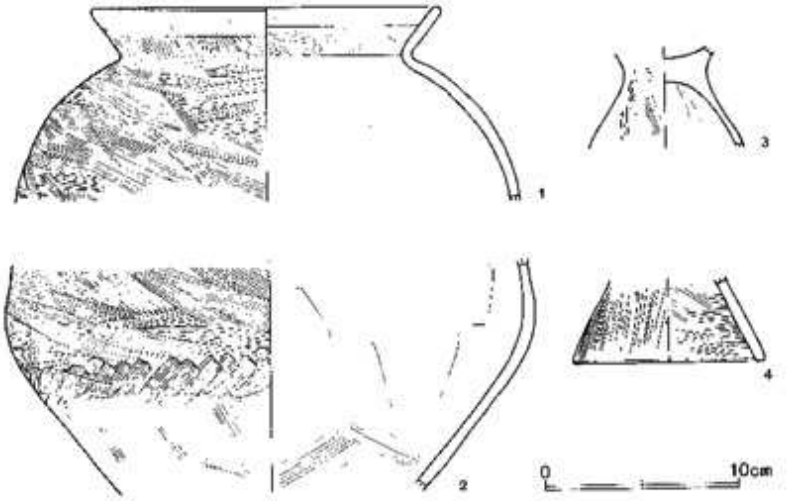
0　2m

第14図　第2号住居跡

第２号住居跡（第14図）

ね－73－８・９グリッドに位置する。第２号溝に切られ、入れ子状に２軒検出されたが、Ａ住居跡がＢ住居跡より新しく、主軸も同一である事から、拡張と判断した。形態は、方形でコオナーにわずかに丸みを持つ。規模は、Ａ・Ｂ住居跡のそれぞれ東西が3.2mと2.7m、深さ10cmと25cmである。主軸方向はＮ－７°－Ｅである。炉跡・ピットは検出されなかった。床面は、掘り方はなく平坦で、Ａ住居跡はＢ住居跡を埋め戻し貼り床をしている。

出土遺物は少ない。



第15図　第２号住居跡出土遺物

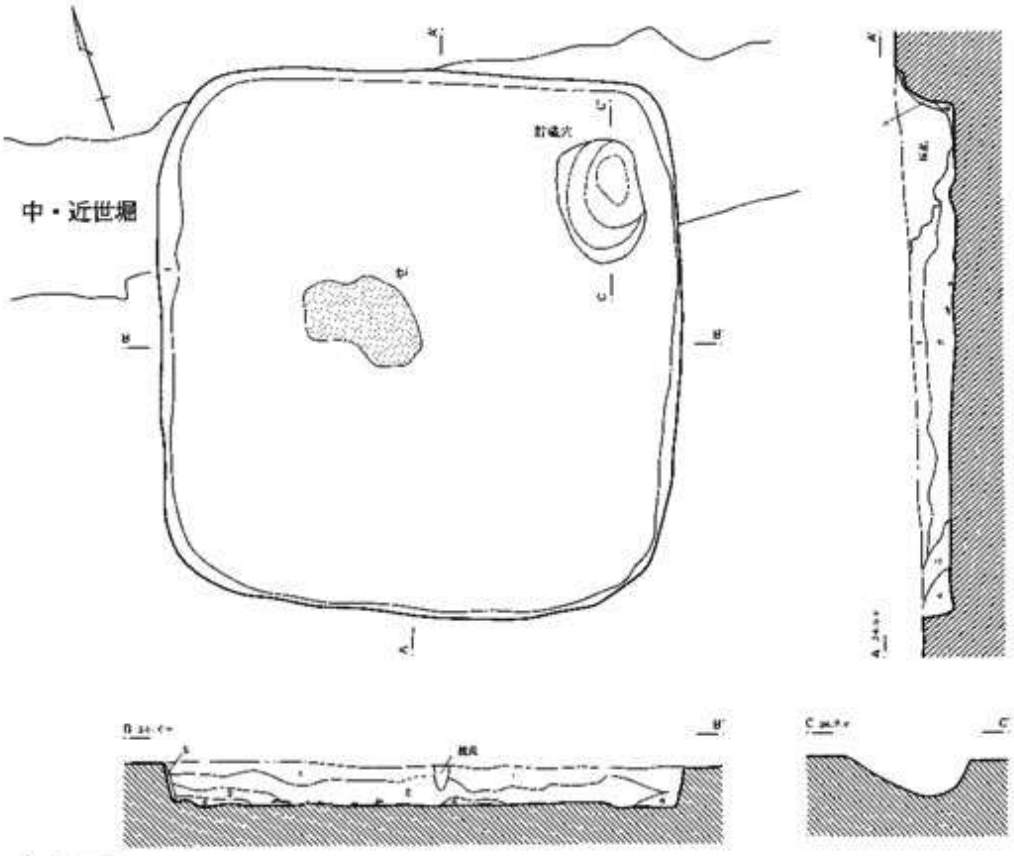
第２号住居跡出土遺物（第15図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	(18.0)			AA'B	A	黒褐	30%	覆土　肩部外面煤付着
2	甕				AA'B	A	にぶい赤褐	20%	覆土
3	台付甕				AA'BB'	A	にぶい赤褐	30%	覆土
4	台付甕			10.0	ABC	A	橙	60%	覆土　C粒子多い

第３号住居跡（第16図）

ね－73・ぬ－73グリッドに位置する。北側と東西一部の壁は、近代の水路と攪乱で壊される。形態は隅丸方形である。規模は、長径4.3m、短径4.02m、深さ32cmのほぼ正方形である。主軸方向はＮ－21°－Ｅである。床面の中央やや西寄りに地床炉が１基検出されている。地床炉は、掘り方が無く極く浅い皿状の窪みで、床面が直接焼け焼土が１mから50cmの範囲に広がる。貯蔵穴は北東コーナーに検出された、規模は長径１m、短径50cm、深さ約30cmの楕円形で南壁が緩やかに立ち上がる。床面は、ほぼ平坦で全面に屋根材・柱材の炭化物が多く見られる。壁の掘り込はやや斜めで、その面は赤く良く焼けている。このことから焼失家屋か廃屋処理のための焼却が考えられるが、床面に残る遺物がいずれも小破片であることなどから、廃屋処理を行った可能性がある。柱穴・ピットは検出されなかった。

遺物は、小破片が多く、いずれも炭化材上の覆土10cm程度に含まれる。主なものに甕（１・２・５）、器台（16）、高坏（13）、埦（14）などがある。２は口縁部にキザミがあり、埦は内外面がよく磨かれている。本跡出土土器と第２号住居跡出土土器の間に接合関係がある。

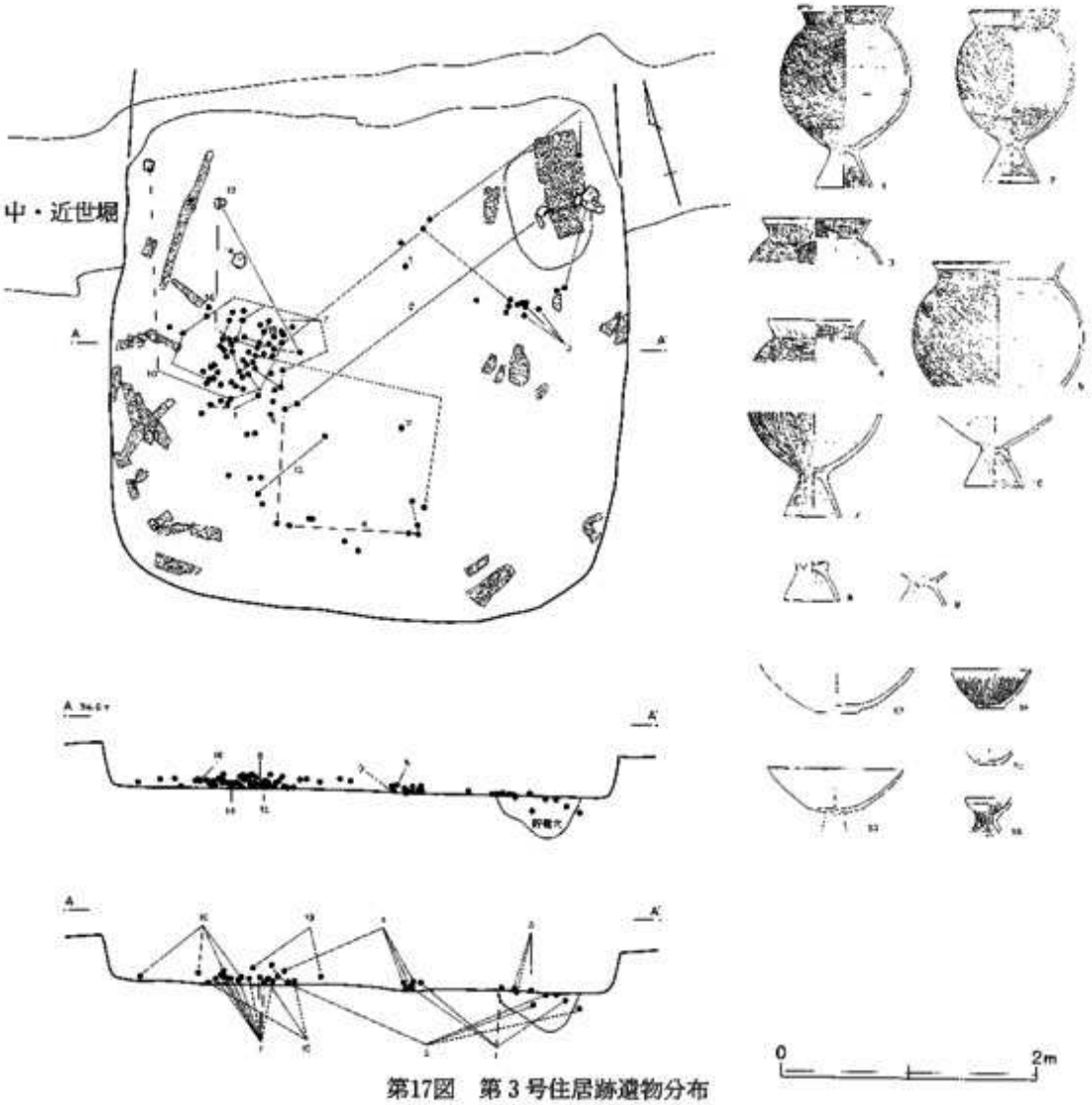


第3号住居跡
1　黒褐色土　明黄褐色土粒子を多量　粘質強　一部に浅黄色土ブロック
2　黒褐色土　1より明黄褐色土多量　炭化物粒子　粘質強　一部に暗褐色土を斑状
3　褐灰色土　明黄褐色土ブロック主体　多量の炭化物が斑状
4　黒褐色土　炭化物粒子・明赤褐色土粒子（壁焼土）　床面に多量の炭化物
5　にぶい赤褐色土　壁焼土の変化したもの

第16図　第3号住居跡

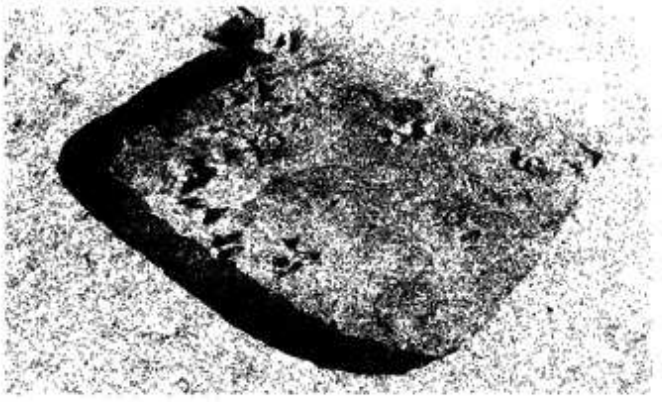
第3号住居跡出土遺物（第18・19図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	台付甕	16.0			AA′B	C	赤黒	60%	覆土　№23・27・41・47・50・52・58・60・61・71
2	台付甕	15.2	27.4	9.3	AA′B	C	赤黒	80%	覆土　№6・20・100・103・105・106・AA′粒子
3	甕	(18.5)			AA′B	C	褐灰	20%	覆土　№96・98・102
4	甕	16.4			AA′BC	B	赤	70%	覆土　№5・14・15
5	甕	(22.0)			AA′BB′C	C	赤黒	30%	覆土　№89　肩部外面煤付着
6	甕	(14.5)			AA′B	B	黒褐	20%	覆土　口唇部キザミ
7	台付甕			(9.5)	AA′BC	A	明赤褐	30%	覆土
8	台付甕			(9.3)	AA′BB′C	A	赤	30%	覆土　C粒子多い
9	台付甕				AA′B	A	赤灰	50%	覆土　№17
10	台付甕			10.2	AA′B	B	にぶい橙	70%	覆土　№30・42・88
11	台付甕				AA′B	B	赤灰	40%	覆土　内面煤付着
12	壺			6.8	AA′B	A	赤	40%	覆土　№57・59・73・86
13	高　坏	(22.8)			AA′B	B	暗赤	50%	覆土　№8・12　内外面赤彩　風化が著しい
14	鉢	13.2	6.3	4.7	AA′BD	B	暗赤	90%	№85　覆土　内面ヘラミガキ不明瞭

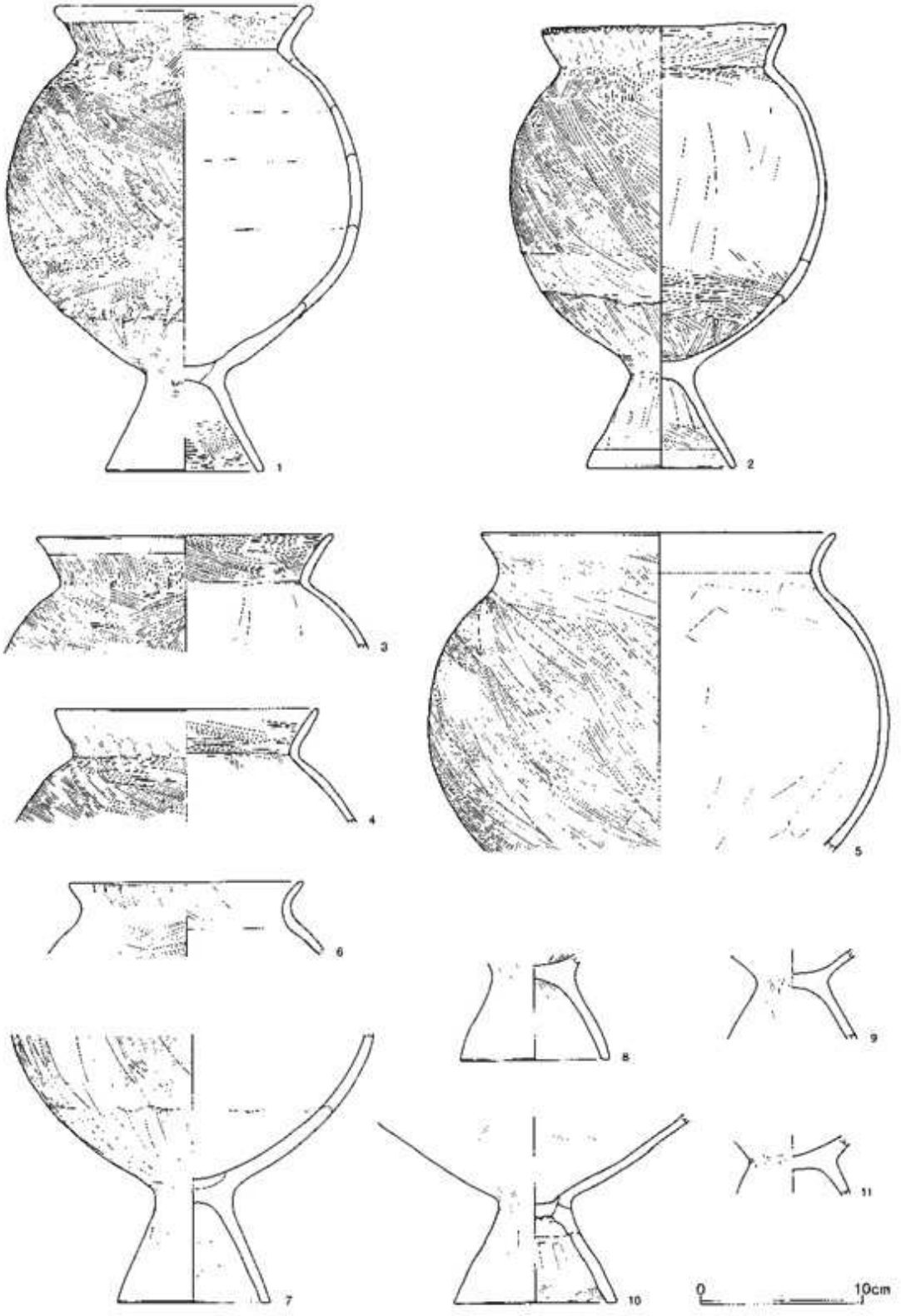


第17図　第３号住居跡遺物分布

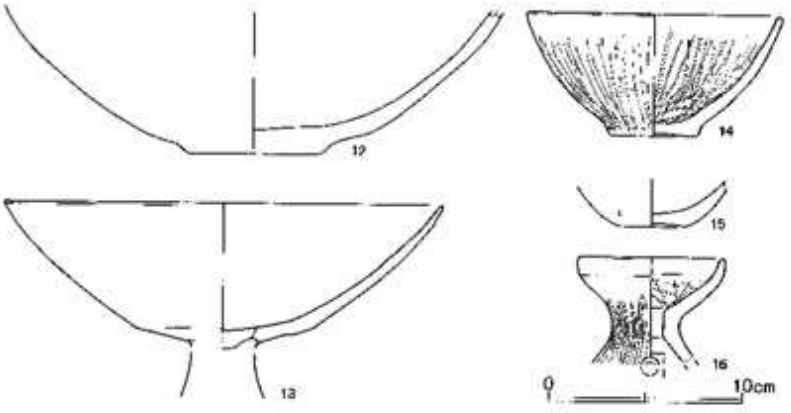
番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
15	坩			3.5	AA'B	B	赤	40%	覆土　№62
16	器　台	7.6			AA'B	B	赤	80%	覆土



第３号住居跡炭化物出土状態



第18図　第３号住居跡出土遺物（１）

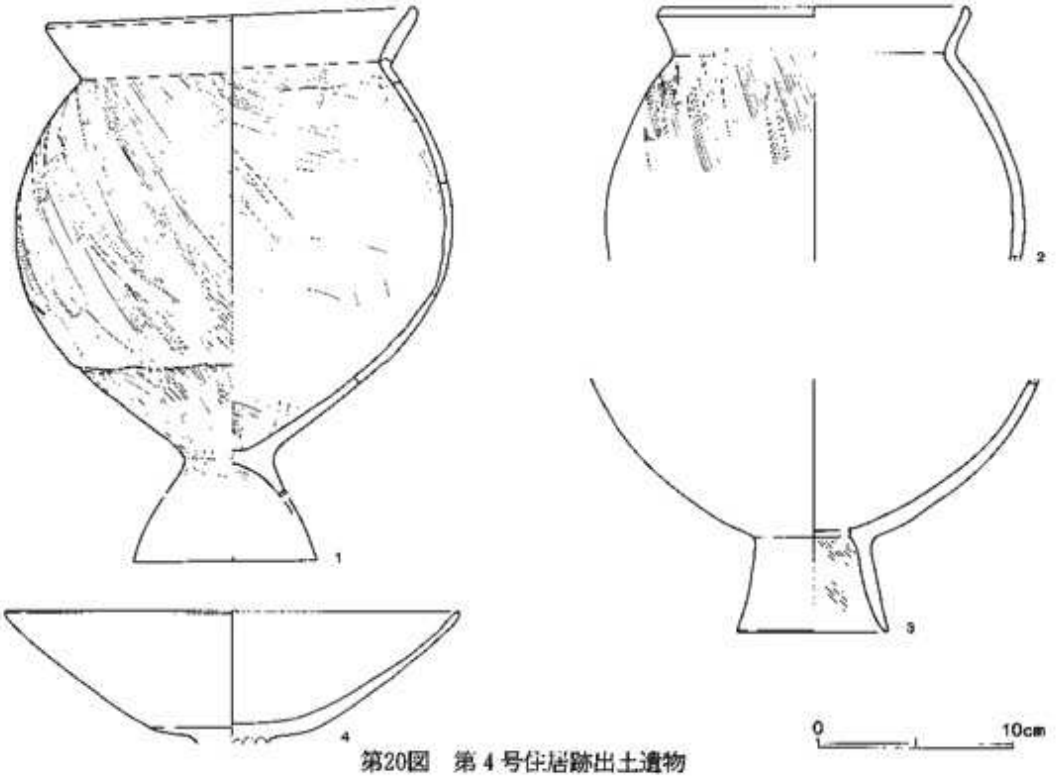


第19図　第３号住居跡出土遺物（２）

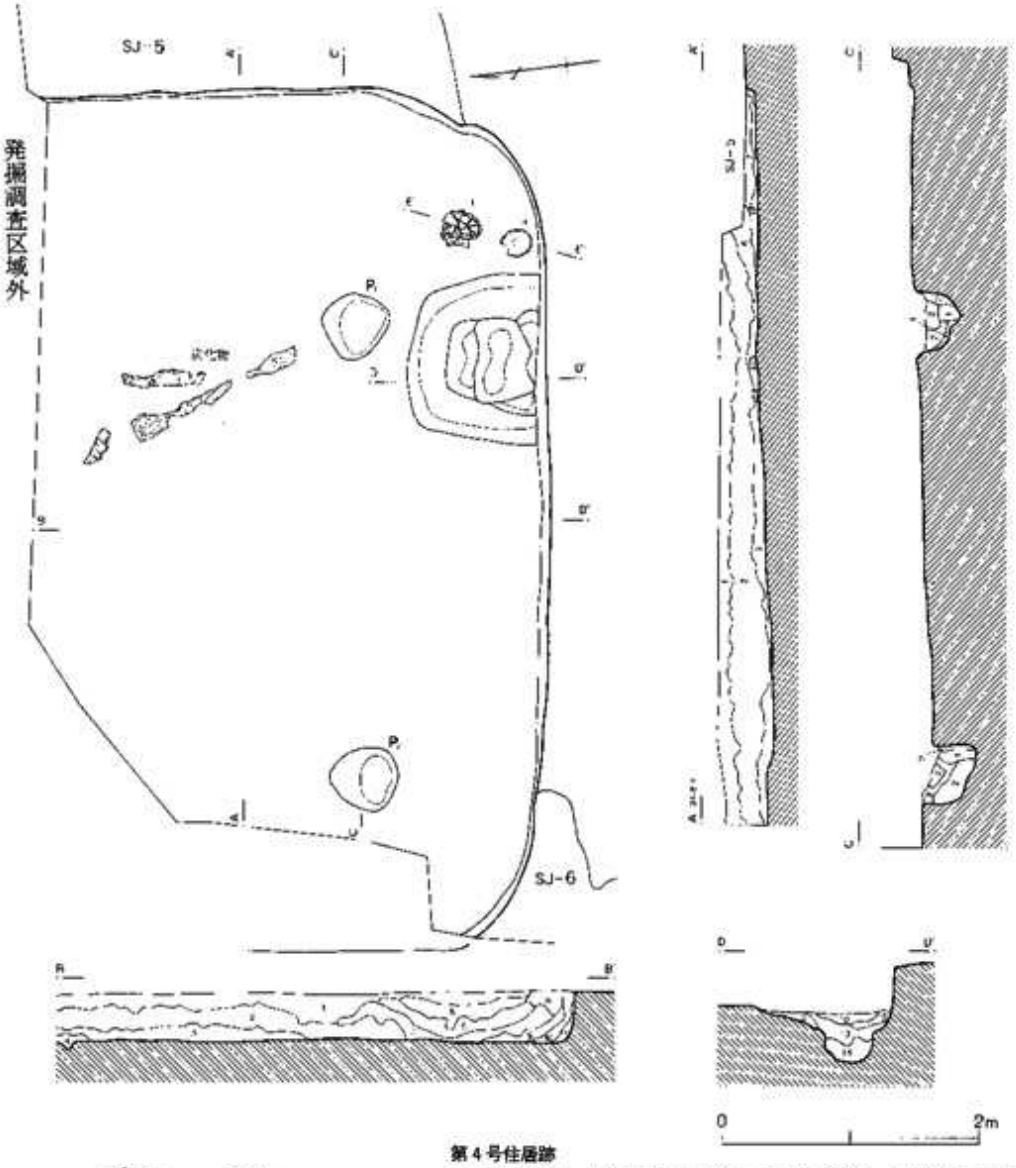
第４号住居跡（第21図）

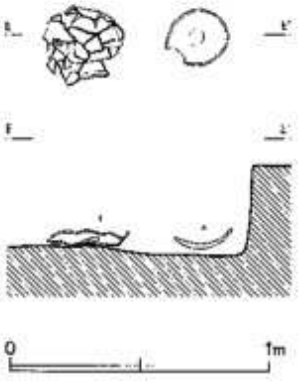
ね－72－12・13・17・18グリッドに位置する。第５・６号住居跡に切られ、北半分は調査区域外となる。形態は、コーナーが緩やかな隅丸方形である。規模は、東西で約6.67m、深さ40cmである。主軸方向はN－99°－Eである。ピットは主柱穴と思われるものが、南壁から約１m離れて壁に平行に２本（P_1・P_2）が検出された。また、南壁際の窪みは規模が1.0m×1.3m、深さ50cmで壁側が垂直に立ち上がり内側はなだらかに立ち上がる、壁際の出入口部等に関係する施設と思われる。床面は中央部がやや高く、西壁際がベッド状の高まりを持つ。全体的にしまりが無く不明瞭で、直上に炭化材が検出された。覆土は、黄色土ブロックを多量に含み、埋め戻しの状態を示す。

出土遺物には、目の細かい刷毛目を持つ甕（１）、大きく直線的に開く高坏（４）などがある。



第20図　第４号住居跡出土遺物





第4号住居跡

1　暗茶褐色土　火山灰多量　黄色土・ブロック多量　しまり強　粘性弱
2　褐色土　大形の黄色土・褐色土ブロック混じり合う
3　暗褐色土　炭化物粒子多量　黄色土小ブロック少量　しまり弱　粘性強
4　暗褐色土　3に準ずるが炉部敷土　炭化物・焼土粒子多量
5　黒褐色土　黄色土粒子・ブロック多量
6　褐色土　2に類似　ブロック小形
7　黒褐色土　5に類似　焼土粒子・炭化物多量
8　暗茶褐色土　1に準ずる　黄色土粒子・火山灰少量
9　黒褐色土　黄色土ブロック多量　焼土微量　炭化物
10　黒褐色土　黄色土粒子少量　概ね単一的　焼土・炭化物微量
11　暗褐色土　黄色土ブロックを主体
12　暗黄色土　地山主体
13　暗茶褐色土　黄色土粒子・ブロック多量　焼土微量　炭化物粒子
14　暗褐色土　黄色土少量大形

第4号住居跡　（$P_{1,2}$）

1　暗褐色土　黒色土粒子を基本　黄色土混じる　炭化物粒子少量　柱痕
2　黄色土　地山土を基本黒色土粒子・ブロック少量
3　褐色土　地山ブロックに黒色粒子少量　炭化物微量
4　褐色土　褐色土中に黒色土粒子多量

第21図　第4号住居跡

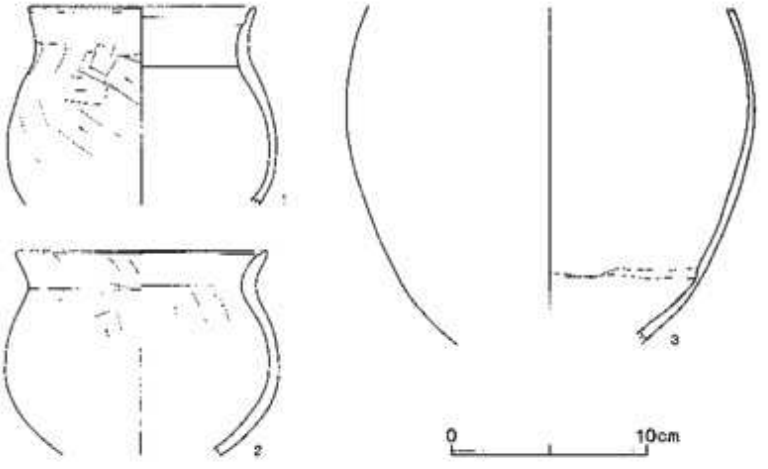
第4号住居跡出土遺物（第20図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	台付甕	19.3			AA'BB'C	B	暗赤褐	90%	覆土　№2他
2	甕	15.8			AA'BB'C	B	にぶい赤褐	40%	覆土
3	台付甕			(7.8)	AA'BC	A	赤褐	20%	覆土
4	高　坏	23.5			AA'BB'	A	赤	90%	覆土　№1　器面荒れる

第5号住居跡（第23図）

ね—72—11・12・16・17グリッドに位置する。西側で、第4号住居跡を切って重複する。形態は、やや南北に長い長方形で、コーナーに丸みがある。規模は、長径3.10m、短径2.80m、深さ18cmである。主軸方向はN—84°—Eである。東壁の南コーナー寄りに、カマド1基が検出された。カマドの燃焼部は長方形で壁がほぼ垂直に掘り込まる、比較的しっかりした造りで壁の外側に突出している。煙道は燃焼部から緩やかに立ち上がり、幅約30cm、長さ1mで浅く掘りこまれている、先端が若干深くなるり直線的に長く伸びる。炊き口部から燃焼部にかけて浅く窪む。ピットは南東コーナーのカマド手前に1個所検出した、直径約60cmの円形で深さ10cm弱と浅いため、貯蔵穴か柱穴とするには疑問がのこる。壁はやや斜めに立ち上がる。床面は、中央がやや高く、南北の壁際で僅かに窪む。

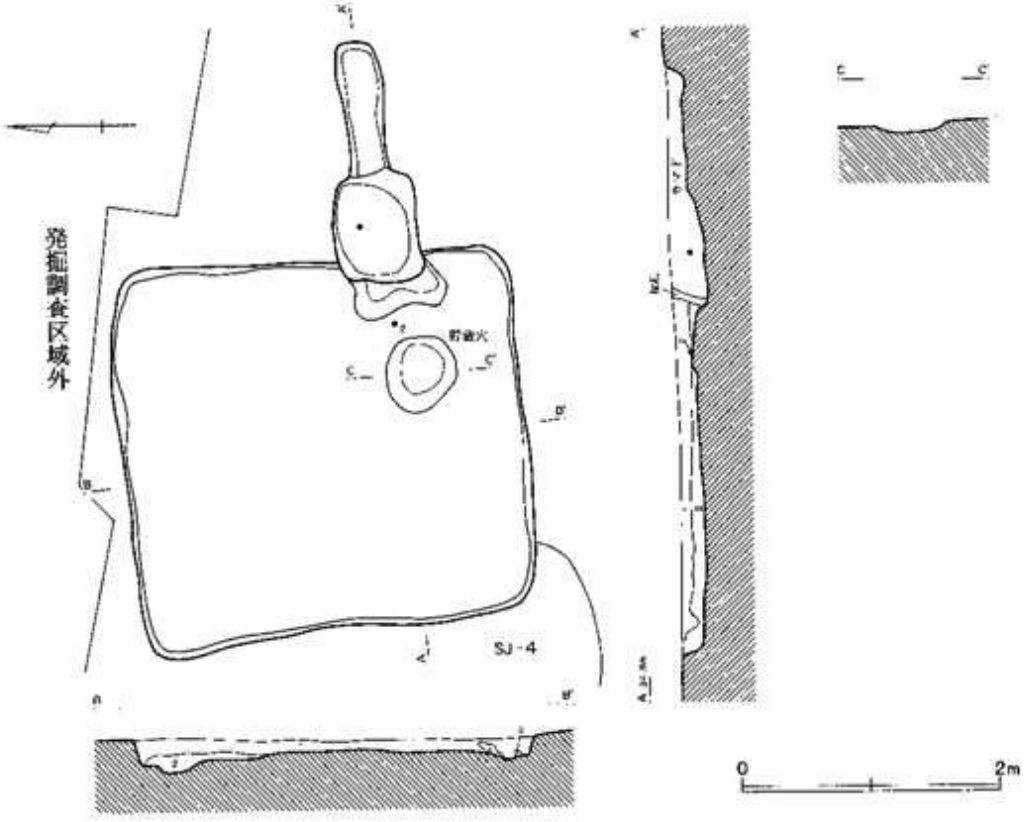
出土遺物は少ない。燃焼部上面に甕の小破片、炊き口部手前に甕（2）が出土した。1・2は体部外面へラケズリで口唇部内面に弱い稜がある。3は甕の体部で、胴部に膨らみをもっている、内面に輪積みの痕跡がある。

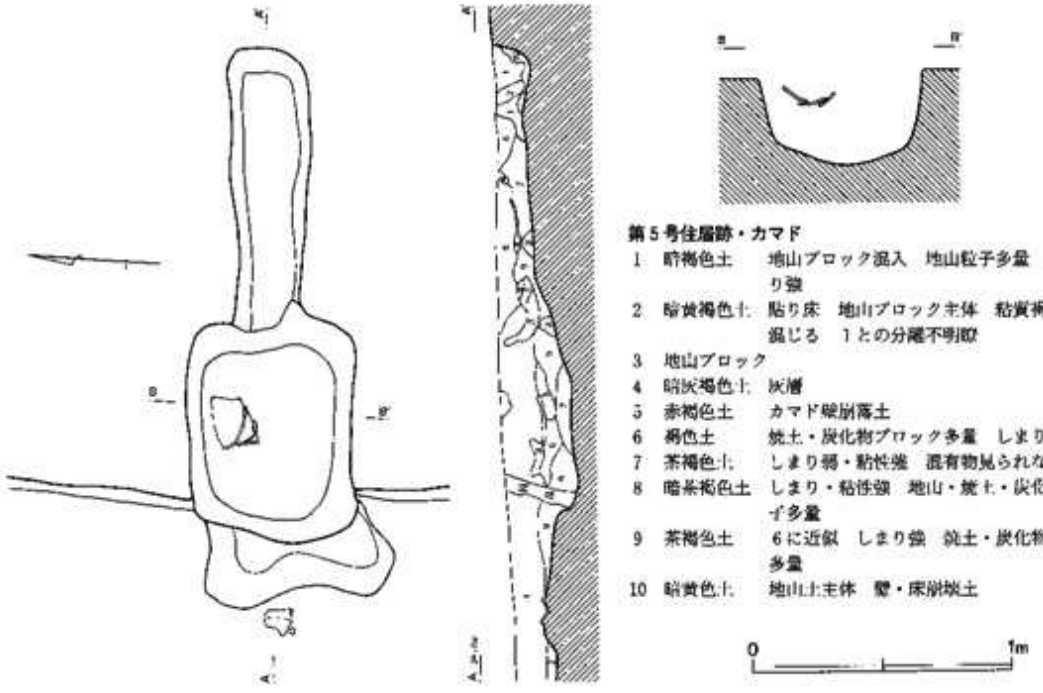


第22図　第5号住居跡出土遺物

第5号住居跡出土遺物（第22図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	甕	(11.9)			AA'BB'C	A	赤褐	40%	覆土
2	甕	(13.1)			AA'BC	A	赤褐	40%	カマド手前　№2　内面黒色
3	甕				AA'BC	B	赤	30%	覆土



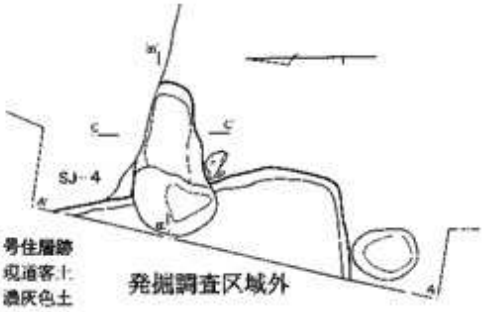


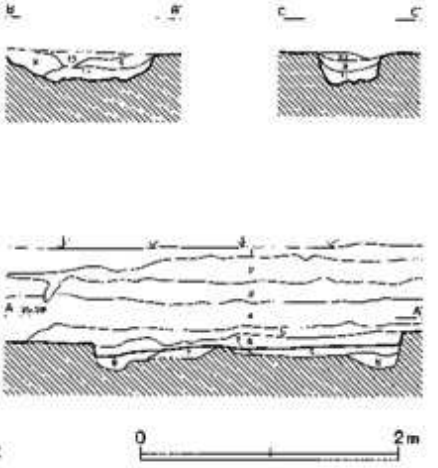
第23図 第5号住居跡・カマド

第６号住居跡（第24図）

ね―72―13・18グリッドに位置する。大半は調査区域外にある。北側で第４号住居跡を切って重複する。形態は方形で、規模は深さが10cmの他は不明である。主軸方向はN―86°―Eである。東壁にカマド１基が検出された。床面は、掘り方を持ち平坦で北に向かって僅かに傾斜している。時期は、出土遺物等より平安時代である。

出土遺物は少ない。灰釉長頸瓶片（６）が出土する。

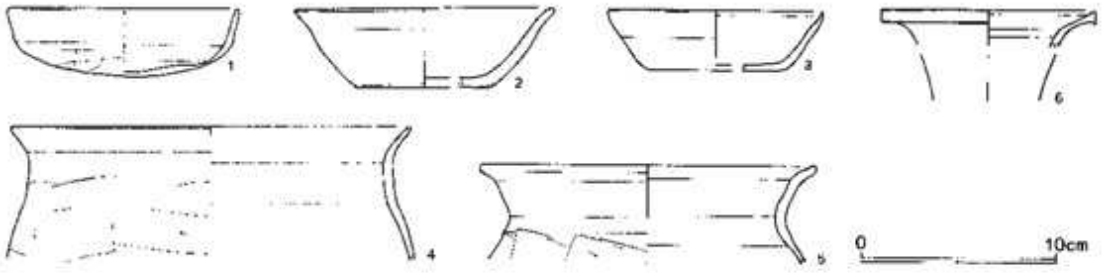




第６号住居跡

1　現道客土
2　濃灰色土
3　濃灰色土
4　暗茶褐色土　火山灰少量　土器・焼土粒子多量　しまり強
5　暗茶褐色土　４を基本　炭化物層４～５枚挟む　焼土粒子多量　遺物少量
6　灰白色砂層　やや粗目の砂で構成　小礫（1cm）多量
7　暗褐色土　地山粒子多量　焼土粒子若干　粘性強
8　暗褐色土　７を基本　地山ブロック・粒子多量　粘性ない
9　黒褐色土　炭化物・焼土ブロック多量　下位に薄い炭化物（灰）層
10　茶褐色土　炭化物微量　焼土粒子・ブロック多量　天井部
11　茶褐色土　焼土粒子若干　単一的　粘性強　燃性強　燃焼部

第24図　第６号住居跡



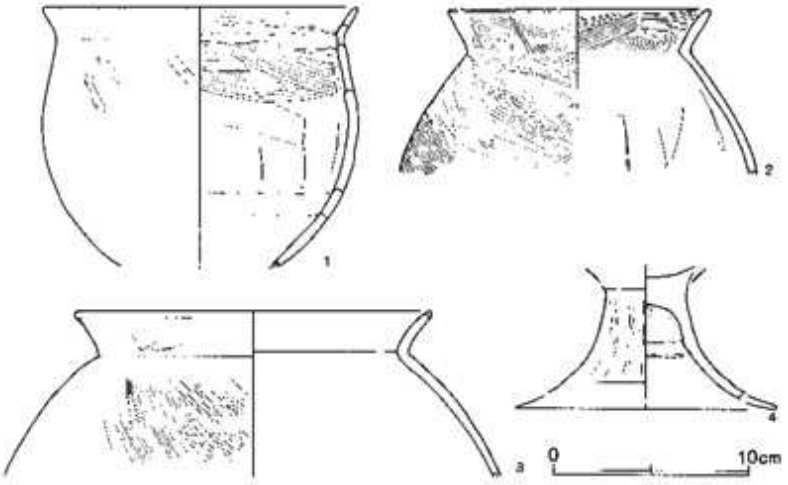
第25図　第６号住居跡出土遺物

第６号住居跡出土遺物（第25図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.0)	3.5	(10.7)	AA'BB'	A	橙	50%	覆土
2	坏	(13.5)	4.1	(7.1)	AA'BC	A	赤	20%	覆土　酸化炎焼成
3	坏	(11.2)	3.1	(7.2)	AA'B	B	明赤褐	20%	カマド　体部外面に粘土皺
4	甕	(20.7)			AA'BB'C	B	明赤褐	20%	覆土
5	甕	(17.5)			AA'BC	A	赤	20%	覆土　口縁部内面煤付着
6	瓶	(11.1)			AB	A	灰白	20%	覆土　内面灰釉

第７号住居跡（第27図）

ね―72―３・８グリッドに位置する。第２号溝に切られ、西側は調査区域外となる。形態は、隅丸方形である。規模は、南北が4.27m、深さ48cmである。主軸方向はN―106°Eである。ピットは北東コーナー付近に、２本検出された。P_1は直径40cm、深さ30cmの円形で内側に比べ壁側が緩やかに立ち上がる。P_2は長径60cm、短径35cmの楕円形で内側が緩やかに立ち上がる。床面は平坦で、薄い炭化物層が覆い炭化材がのる。壁は垂直に立ち上がる。



第26図　第７号住居跡出土遺物

出土遺物は少ない。床面のP_1付近から（１）が出土し、P_2中より（２）が出土した。

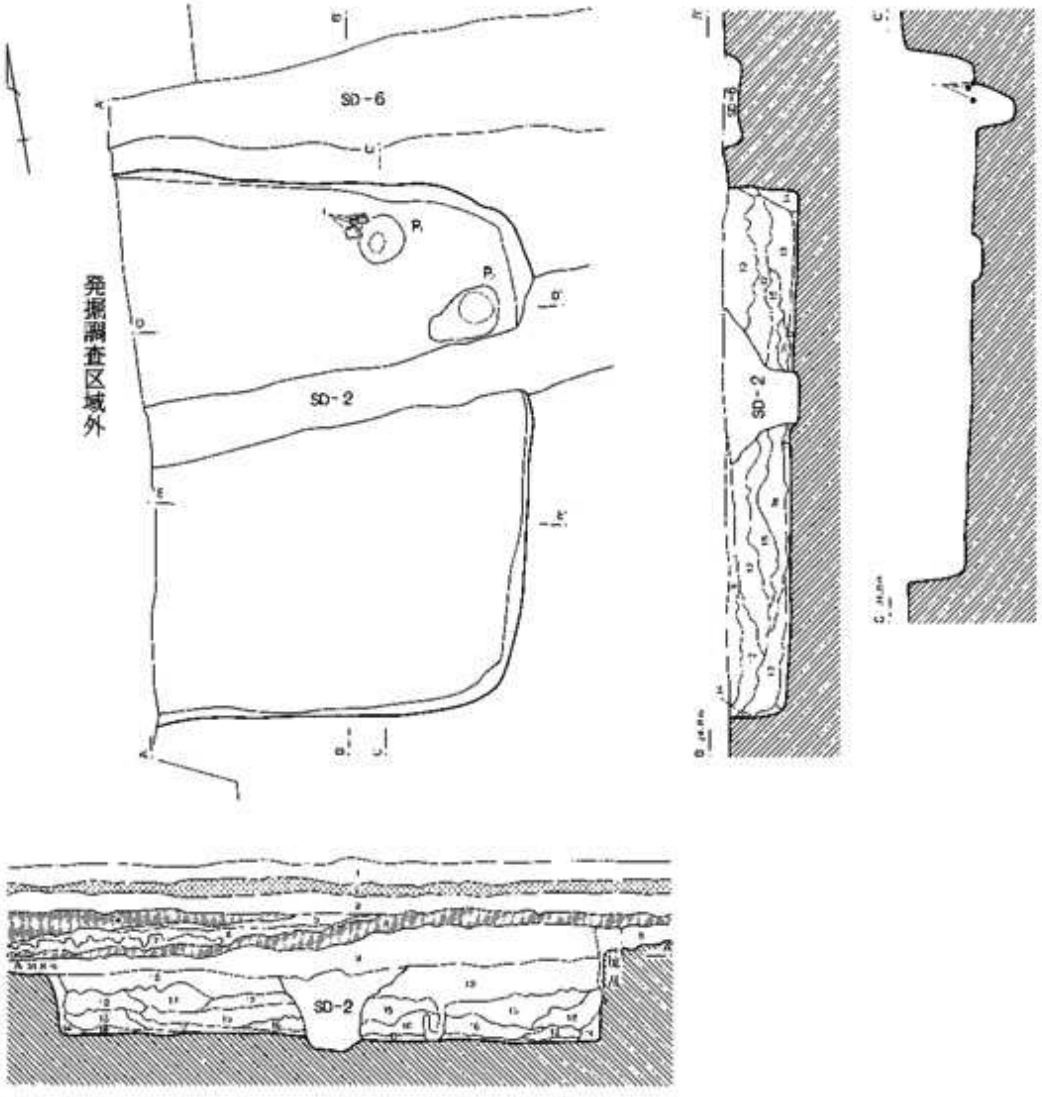
第７号住居跡出土遺物（第26図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	16.2			AA'B	C	赤黒	80	覆土 №1・2・3　器外面保存状態不良
2	甕	(13.6)			AA'B	C	黒褐	20%	P２
3	甕	(18.5)			AA'B	B	にぶい褐	40%	覆土　砂粒少
4	高坏				AA'BC	C	褐灰	80%	覆土

第８号住居跡（第28図）

ね―72―２・６・７グリッドに位置する。東壁から西コーナーにかけて第２・６号溝に切られる。形態は、方形であるが地震による噴砂の影響で、南コーナー部の壁が南にずれる。規模は、長径4.88m、短径4.11m、深さ47cmである。主軸方向はN―34°―Eである。ピットは検出されなかった。炉は中央やや東寄りに１基検出された、掘り込みは極く浅く内面に焼土が盛りあがっていた。また、東コーナー寄りにも焼土が検出されたが、掘り込みもなく、床面も焼けていなかった。床面は概ね平坦で、極めて堅く締まり、直上を炭化物層が薄く覆う。噴砂は、覆土確認面まで達しており、住居跡がほぼ埋没した段階で地震の影響を受けたことがわかる。

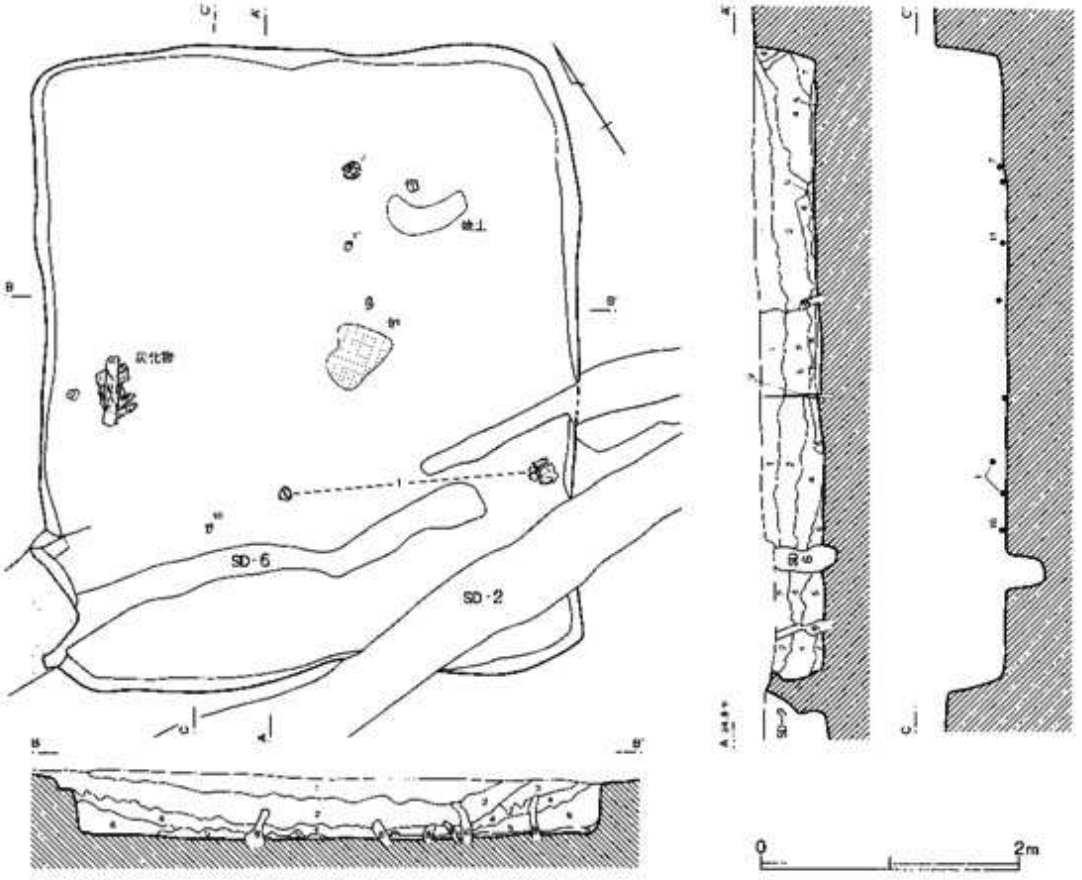
出土遺物は少ないが、高坏（７）・手捏（10・11）が床面から出土した。１は体部に張りがあり、口縁部は「く」の字に屈曲する、全面に刷毛目をよく残す。３はS字状口縁甕である、口唇部の屈曲は顕著だが、肩部の張りは弱い。４は頸部が強く屈曲する壮型の壺である。５は口唇部が尖り、底部が僅かに凹む。７は高坏脚部で二段互い違いに３個ずつの円孔を持つ。10・11の手捏土器は、短い口縁部で口唇部が尖る。内面に輪積み痕跡があり指頭の圧痕も確認できる。13・14は紛れ込み。



第7号住居跡

1　現道客土
2　濃灰色土　水田耕作土（1）　浅間A軽石多量
3　濃灰色土　水田耕作土（2）2との境に浅間A軽石薄層
4　灰褐色土　浅間B軽石多量　攪拌された水田耕作土
5　暗茶褐色土　黒色・白色粘質薄層が互層
6　浅間B軽石層
7　暗褐色土　白色粘質土粒子多量　粘性強　色調暗く他層との分層明瞭
8　暗灰褐色土　火山灰（B軽石）多量　砂質的　平安時代の遺物
9　暗灰褐色土　8に準じる　火山灰多量　平安時代の遺物
10　暗茶褐色土　砂質な地山ブロック薄く混じる
11　暗茶褐色土　12を基本　地山（砂質・黄色）ブロック多量
12　黒褐色土　地山粒子（粘質）・ブロック（砂質）　炭化物粒子少量
13　黒褐色土　12に準ずる　地山混入少量　粘性強
14　黄褐色土　地山混入層　砂質的で粘性強
15　暗黄色土　地山ブロック主体　10混入
16　黄色土　地山土主体　粘性強　埋戻しの可能性
17　黒褐色土　炭化物（カヤ？）多量　粘性強　埋戻しの可能性
18　暗黄色土　地山土体

第27図　第7号住居跡



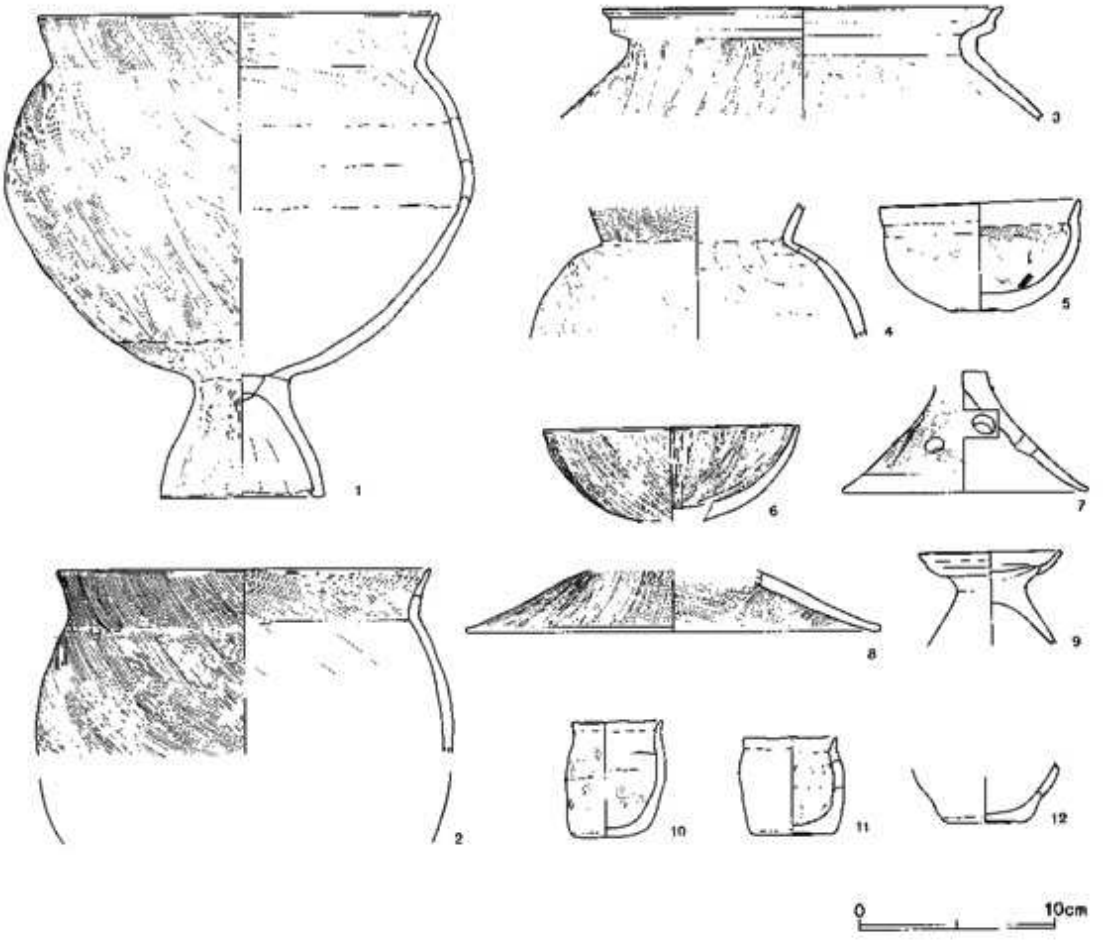
第8号住居跡

1　暗褐色土　白色火山灰粒子少量　黄色土小ブロック少量　溶混
2　暗茶褐色土　白色火山灰粒子少量　黄色土粒子・ブロック多量　焼土微量　炭化物粒子
3　暗茶褐色土　2を基本　焼土・黄色土粒子多量
4　暗黄色土　地山黄色土（砂質）を主体　焼土微量　炭化物
5　暗褐色土　黄色土粒子少量　上層境に多量の炭化物薄層
6　暗黄褐色土　3に近似　黄色土はブロック粒状に混じり合い　しまりない
7　暗黄色土　地山土主体　3と類似　他土の混有稀
8　暗褐色土　地割れ乃至は植物根の攪乱　黄色土粒子多量　しまり弱
9　暗褐色土　地割れ裂孔内への流入土　粘性強　単一的

第28図　第8号住居跡

第8号住居跡出土遺物（第29図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	台付甕	(20.8)	24.8	8.5	AA′BC	B	赤褐	50%	覆土　No.8
2	甕	(19.4)			AA′BC	B	明赤褐	20%	覆土
3	台付甕	(21.5)			AA′B	B	暗赤灰	20%	覆土
4	壺				AA′B	A	赤	30%	覆土　A′粒子多
5	椀	(10.4)	5.8	3.3	AA′B	B	赤褐	70%	覆土
6	高坏	13.3			AA′BC	B	赤褐	70%	覆土
7	高坏			12.8	AA′BB′C	B	にぶい赤褐	80%	床面
8	高坏			(21.5)	AA′BC	A	明赤褐	20%	覆土
9	器台	(7.4)			AA′BB′C	A	赤	60%	覆土
10	手捏	(4.7)	6.0	3.2	AA′BC	B	明赤褐	90%	床面　No.1　A′粒子多
11	手捏	(4.9)	5.0	4.4	AA′B	B	明赤褐	80%	床面　No.5
12	坩			4.1	AA′BB′C	A	赤	40%	覆土

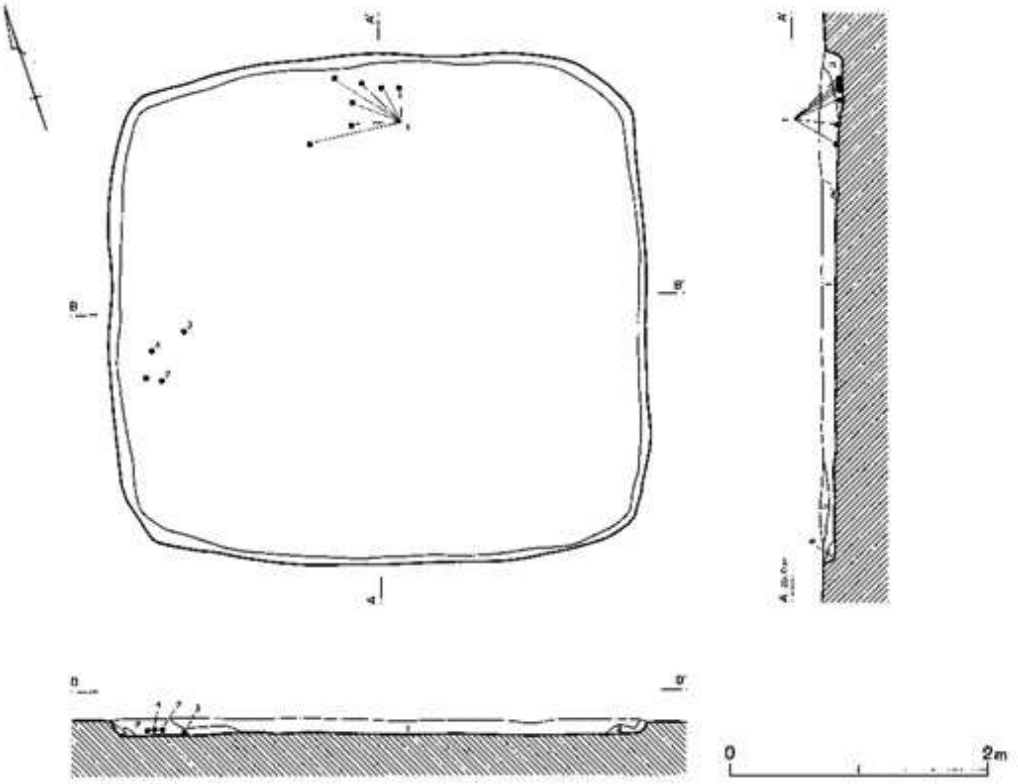


第29図　第８号住居跡出土遺物

第９号住居跡（第30図）

ね―71―11・15・ね―72―16・20グリッドに位置する。形態は、隅丸方形でやや張りがある。規模は、長径4.15m、短径3.93m、深さ13cmである。主軸方向はN―104°―Eである。炉およびピットは検出されなかった。床面は平坦で、北壁際がやや深くなる。壁はやや斜めに立ち上がる。他の同時期の住居跡に比べて掘り込みが浅い。また、壁の上半部が赤く焼けている事から焼失家屋かあるいは、廃屋焼却の可能性が高い。

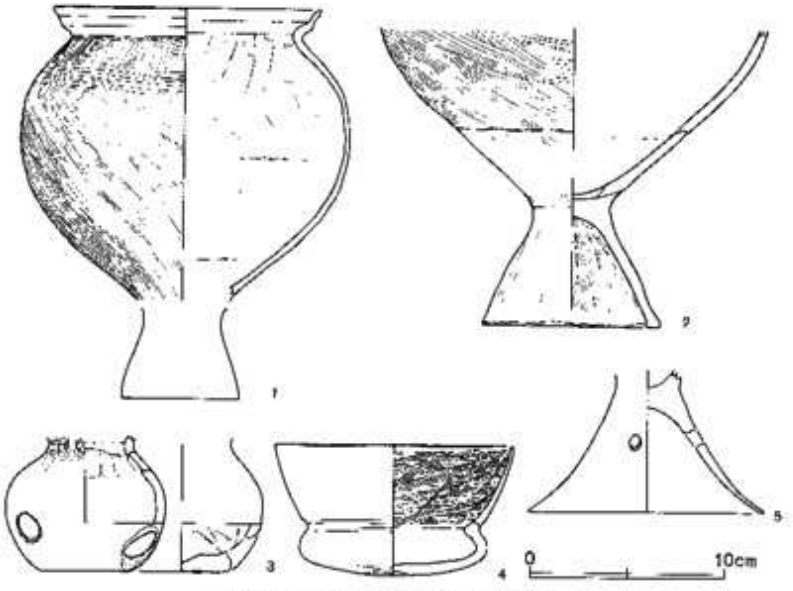
出土遺物は少ないが、床面から、台付甕（１・２）、坩（４）、覆土中から小型壺（３）が出土した。１はＳ字状口縁甕で、肩部に縦の櫛描文の後、横に櫛描文が施される。口縁部内面の屈曲は弱いが口唇部は尖って薄い作りである。肩部内面は木口状工具でナデ調整が加えられ、下半内面に輪積み痕跡がのこる。２の胴部下半には輪積み痕跡が内外面に明瞭に残る。３は、胴部に２ヶ所焼成後の穿孔があるが、穿孔の方向はそれぞれ内と外から加えられる。４は、体部が小さく口縁部が僅かに内彎して大きく開く、内面はヘラミガキされるが、外面は保存状態が悪く不明である。５は、脚部中位に３個の細い円孔があき、外反しながら開く。



第９号住居跡

1　灰黄褐色土　黒色土粒子（３㎜）・明黄褐色土粒子が全体に入る
2　暗褐色土　黄橙色粒子（１㎜）多量に混在　土器片多量
3　黒褐色土　きわめて堅い　地山粒子・焼土粒子
4　暗褐色土　焼土粒子ブロック・炭化物多量
5　暗茶褐色土　地山ブロック混入　地山粒子　焼土粒子多量
6　暗黄色土　地山ブロック
7　淡赤色土　焼土ブロック

第30図　第９号住居跡



第31図　第９号住居跡出土遺物

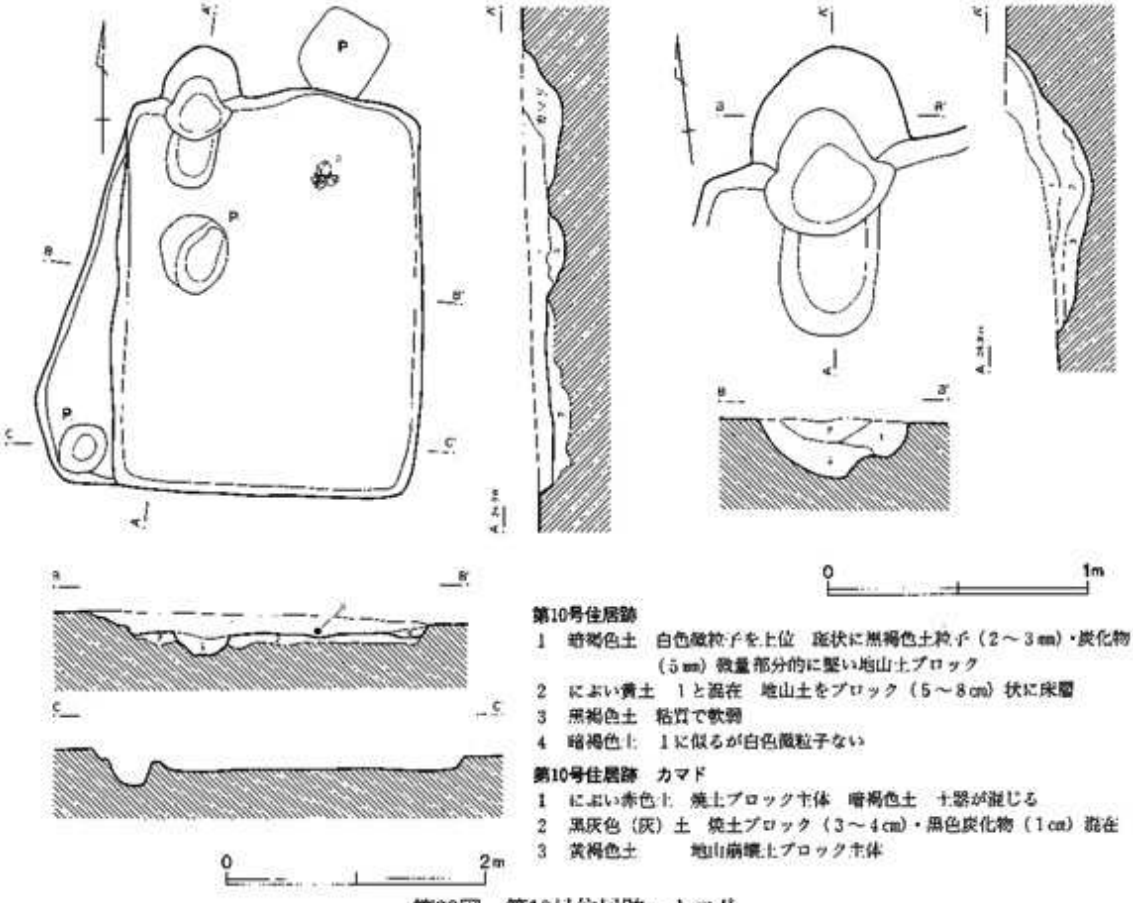
第9号住居跡出土遺物（第31図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	台付甕	13.9			AA'BB'C	A	赤	80%	覆土　№5～11
2	台付甕			9.3	AA'BB'CD	B	赤	60%	覆土　№1
3	小型壺			4.8	A'BC	A	赤橙	90%	覆土　体部2ヶ所穿孔　A'粒子多
4	坩	12.3	6.8	8.4	AA'B	A	赤	80%	覆土　№3　口縁部内外面一部円形剥落
5	高　坏			(12.2)	AA'BC	B	明赤褐	60%	覆土

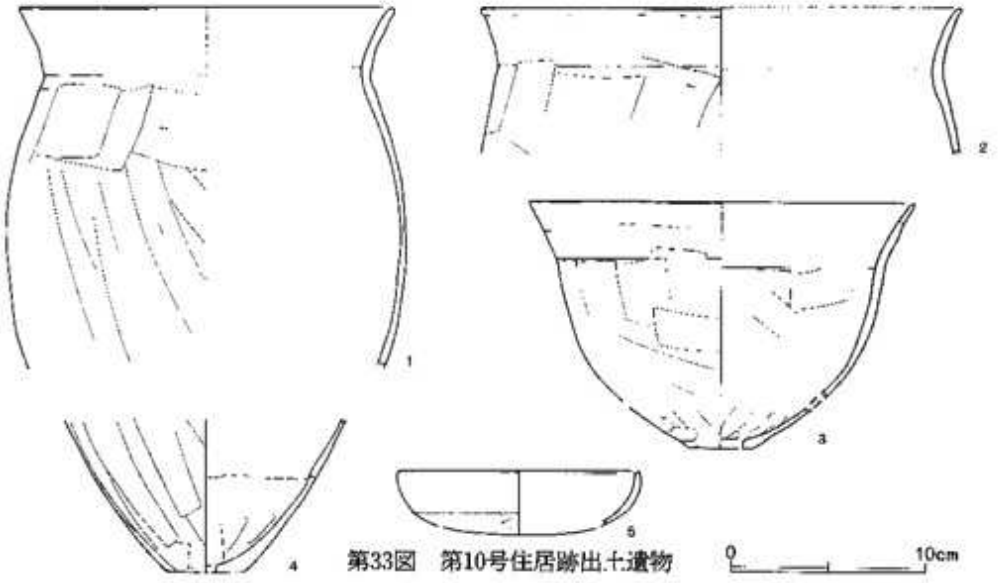
第10号住居跡（第32図）

ね―71―10・15グリッドに位置する。形態は、方形を基本とするが、西壁が外へ張りだし台形状である。規模は、長径3.07m、短径2.73m、深さ11cmである。主軸方向はN―2°―Eである。北壁西コーナー寄りにカマドが1基検出された。カマドは、燃焼部が壁外に出て炊き口部が浅く手前に窪む、煙道はのびないが燃焼部の先端がやや緩やかに立ち上がる。袖は確認できなかった。ピットはカマド手前と南西コーナーに2本検出されたが性格は不明である。床は掘り方を持ちよく締まった地山土で構成され、概ね平坦である。

出土遺物は少ないが、甑（3）は北西コーナー近くの床面に纏まって出土した、頸部の屈曲は弱く肩部の張りもない、甕（2）はカマド中から出土する。



第32図　第10号住居跡・カマド



第33図　第10号住居跡出土遺物

第10号住居跡出土遺物（第33図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	甕	(19.4)			AA′BB′C	A	赤	30%	覆土
2	甕	(24.8)			AA′BB′	A	赤橙	20%	覆土　カマド
3	鉢	(20.0)			ABB′	A	明赤褐	40%	覆土
3	甑			3.3	AB′	A	明赤褐	70%	覆土　底部内面指ナデ
3	鉢	(21.9)			ABB′	A	明赤褐	20%	覆土
4	甕			(4.1)	AA′B	B	黒褐	30%	覆土
5	坏	12.6	3.3		AA′BB′	A	明赤褐	20%	覆土

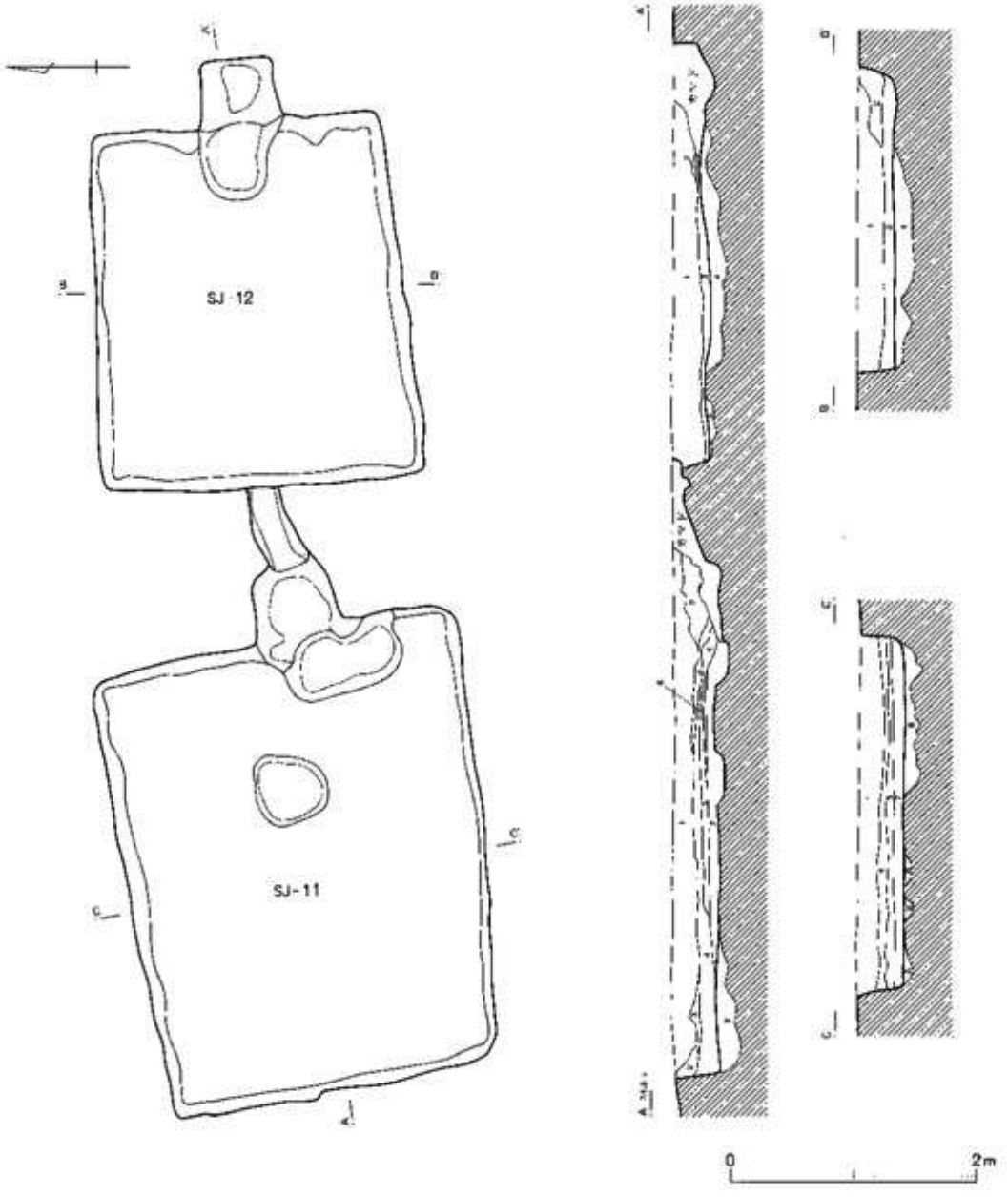
第11号住居跡（第34図）

ね―71―9グリッドに位置する。東側に1mの間隔をおいて第12号住居跡とほぼ主軸を同じにして、検出された。カマドの煙道部が第12号住居跡を切ることから、本住居跡の方が新しい。形態は、長方形である。規模は、長径3.66m、短径2.91m、深さ39cmである。主軸方向はN―84°―Eである。カマドは、東壁のやや南よりに壁に対し北に歪んで検出された。方形の燃焼部がプランの外に位置し、長い煙道を持つ。炊き口部は横長に浅く窪み、袖は確認できなかった。ピットは中央東寄りに1か所検出された、形態は楕円形で深さは約8cmと浅く底面は平らである。ピットの覆土は、床面の覆土と同じであることから、柱穴ではなく床面に開いた状態で存在していたものと思われる。住居の覆土には、炭と灰の層が、0.3～1cmの厚さで重層して4面堆積していた。床面は、西側がやや高く、中央で僅かに窪み、厚さ1mm程度の薄い灰層で覆われる。また、床下に南壁際が掘り込みが深い掘り方を持つ。地山土が充填されよく締まる。

出土遺物は、カマドから甕（11・14・21・22・24）、坏（7）、床面から甕（12・17・18）が出土した。7は放射状の暗文を持つ。

第12号住居跡（第34図）

ね―71―8グリッドに位置する。西壁で第11号住居跡の煙道に切られることから第12号住居跡よりも古い。形態は、概ね長方形だが東壁に比べて西壁がやや長い。規模は、長径2.94m、短径2.47



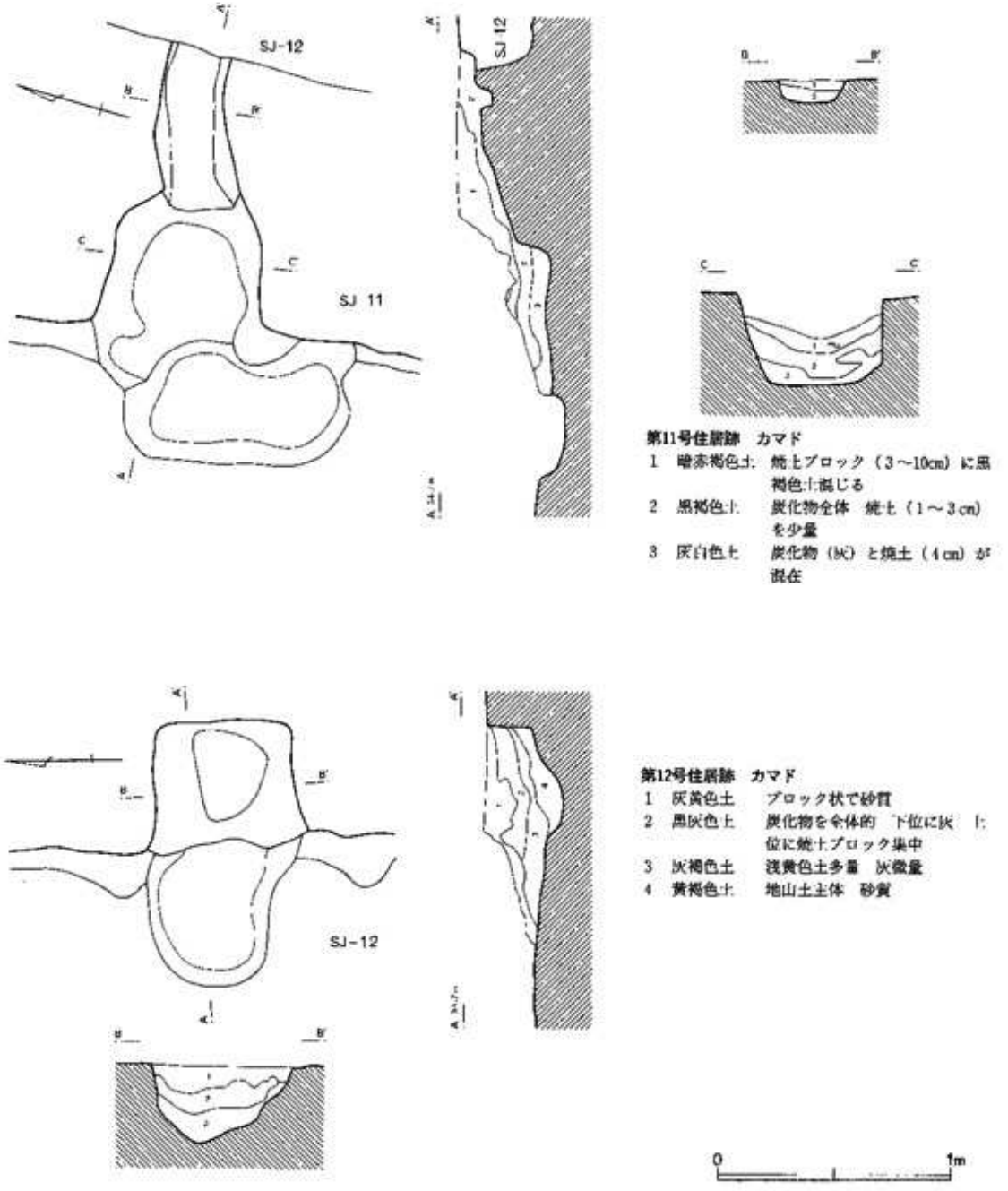
第11号住居跡

1　黒褐色土　底らに浅黄色土（一部ブロック状）　オリーブ黒土（3㎜）全面に混在
2　黒褐色土　1のような混在なし　焼土（5㎜）微量
3　黒褐色土　1に似る　浅黄色土多量
4　黒褐色土　1より浅黄色土が細かく（8㎜前後）・焼土ブロック（1.5cm）少量
5　黒褐色土　4に近似　浅黄色土が薄く広がり　炭化物まばら
6　褐灰色土　粘性強　焼土多量
7　黒褐色土　炭（2cm）・焼土（3cm）・褐灰色土をブロック状に混在
8　黒褐色土　地山ブロック主体　堅緻な貼り床

第12号住居跡

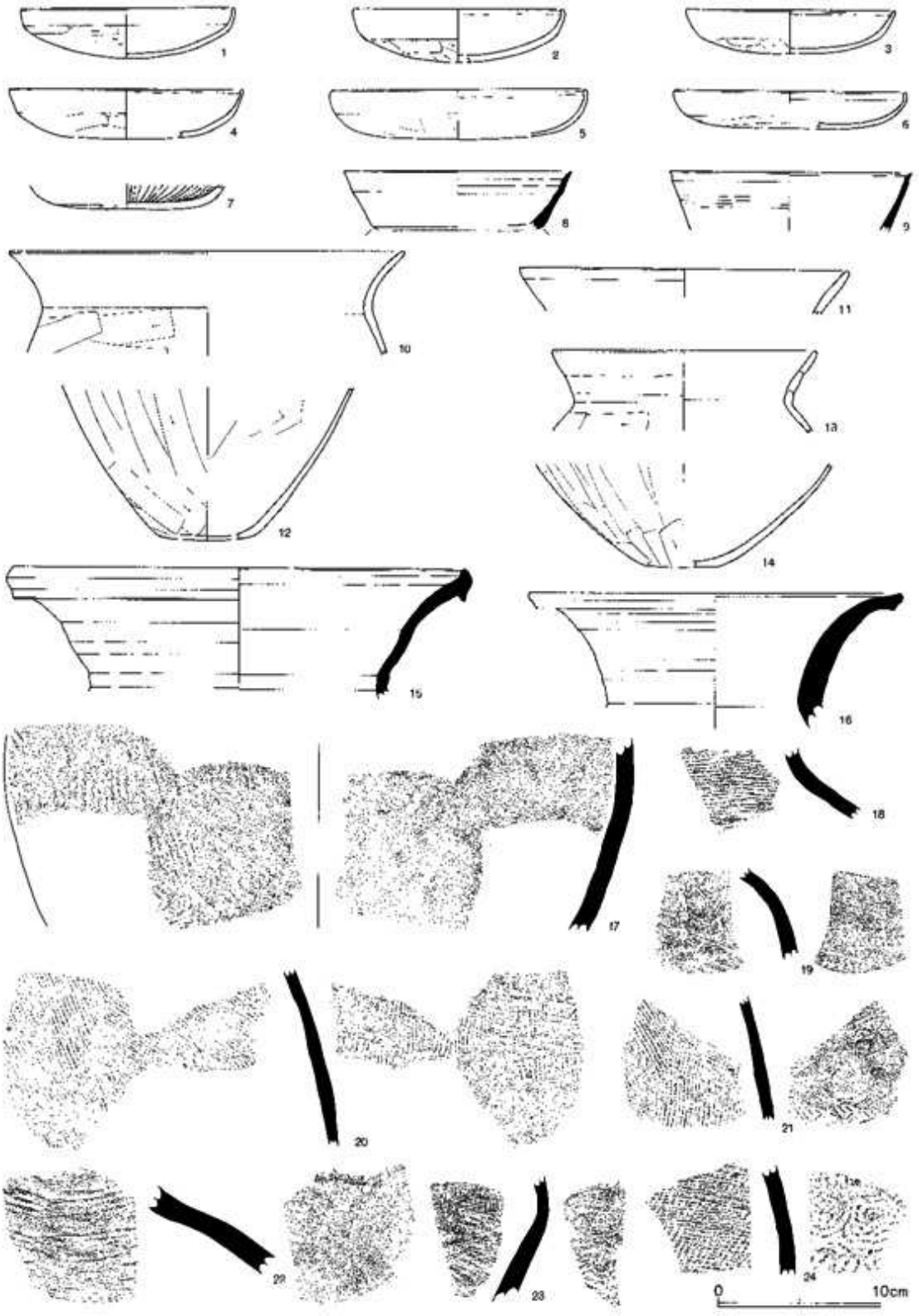
1　黒褐色土　浅黄色土塊に多量
2　灰黄褐色土　ブロック状で砂質
3　黒褐色土　浅黄色土主体　黒褐色土混じる
4　黒褐色土　地山ブロック多量　堅緻な貼り床

第34図　第11・12号住居跡



第35図　第11・12号住居跡カマド

m、深さ30cmである。主軸方向はN－90°－Eである。壁はやや斜めに掘り込まれる。東壁のほぼ中央にカマドが検出された。カマドは、方形の燃焼部でプランの外に位置する、左右の壁は緩やかに立ち上がるが、先端部は垂直に立ち上がり、煙道を有しない。炊き口部は僅かに窪み手前に延びる、明確な袖は確認できなかったが、炊き口部両脇の壁下場が張り出す。ピット・柱穴は確認されなかった。床面は、中央部と南・西壁際でやや窪む。床下にやや深めの掘り方を持ち、地山土ブロックが充填され堅緻な床を構築する。

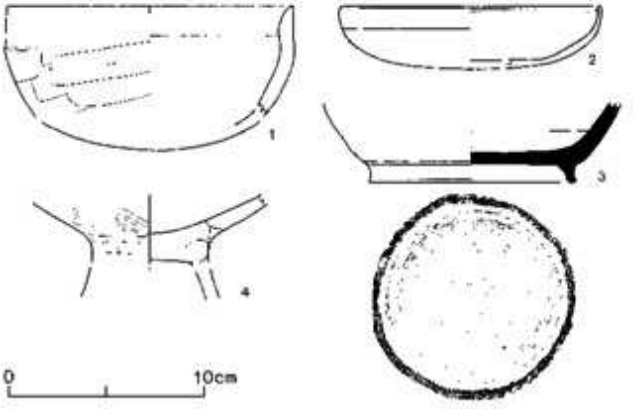


第36図　第11号住居跡出土遺物

第11号住居跡出土遺物（第36図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏	13.2	3.1		AA′BB′C	A	橙	70%	覆土
2	坏	13.2	3.4		AA′BB′	A	橙	60%	覆土
3	坏	(13.0)	2.7		AA′BC	B	橙	20%	覆土
4	坏	(14.6)	3.1		AA′BB′	A	にぶい赤褐	20%	覆土
5	坏	(16.0)	3.1		AA′BB′	B	明赤褐	20%	覆土
6	坏	(14.5)	2.3		AB′C	B	明赤褐	30%	覆土
7	坏			(9.5)	AA′BC	B	赤褐	30%	覆土　カマド　暗文
8	坏	(14.1)	3.7	(10.5)	ABC	A	灰	10%	覆土
9	坏	(15.0)			AA′B	B	暗赤灰	10%	覆土
10	甕	(24.5)			AA′BB′C	A	橙	25%	覆土
11	甕	(20.4)			AA′BB′C	A	橙	20%	覆土　カマド
12	甕			(6.0)	AA′BC	B	赤褐	50%	覆土　床面
13	甕	(16.4)			AA′BC	B	にぶい橙	20%	覆土
14	甕			(4.5)	ABC	B	赤褐	30%	覆土　カマド
15	甕	(28.8)			AA′	A	暗青灰	10%	覆土
16	甕	(23.1)			AA′	A	青黒	10%	覆土
17	甕				AA′B	A	暗青灰		床面
18	甕				AA′	A	灰		床面
19	甕				AA′	A	灰		覆土
20	甕				AA′B	A	暗灰		覆土
21	甕				AA′BC	A	暗赤灰		カマド
22	甕				AA′CD	A	暗青灰		カマド
23	甕				AA′B	A	青灰		覆土
24	甕				AA′B	A	灰		カマド

出土遺物は少ない。1は床面からの出土で、体部と口縁部の稜が弱く、口縁部内面は内削ぎ状である。2は体部が大きく開き、口縁部は内彎ぎみに立ち上がり、口唇部が内面に巻き込む。3は底部糸切り後にロクロ右回転で外周へラケズリを行い、高台を張り付ける。外面は黒色に仕上げられている。



第37図　第12号住居跡出土遺物

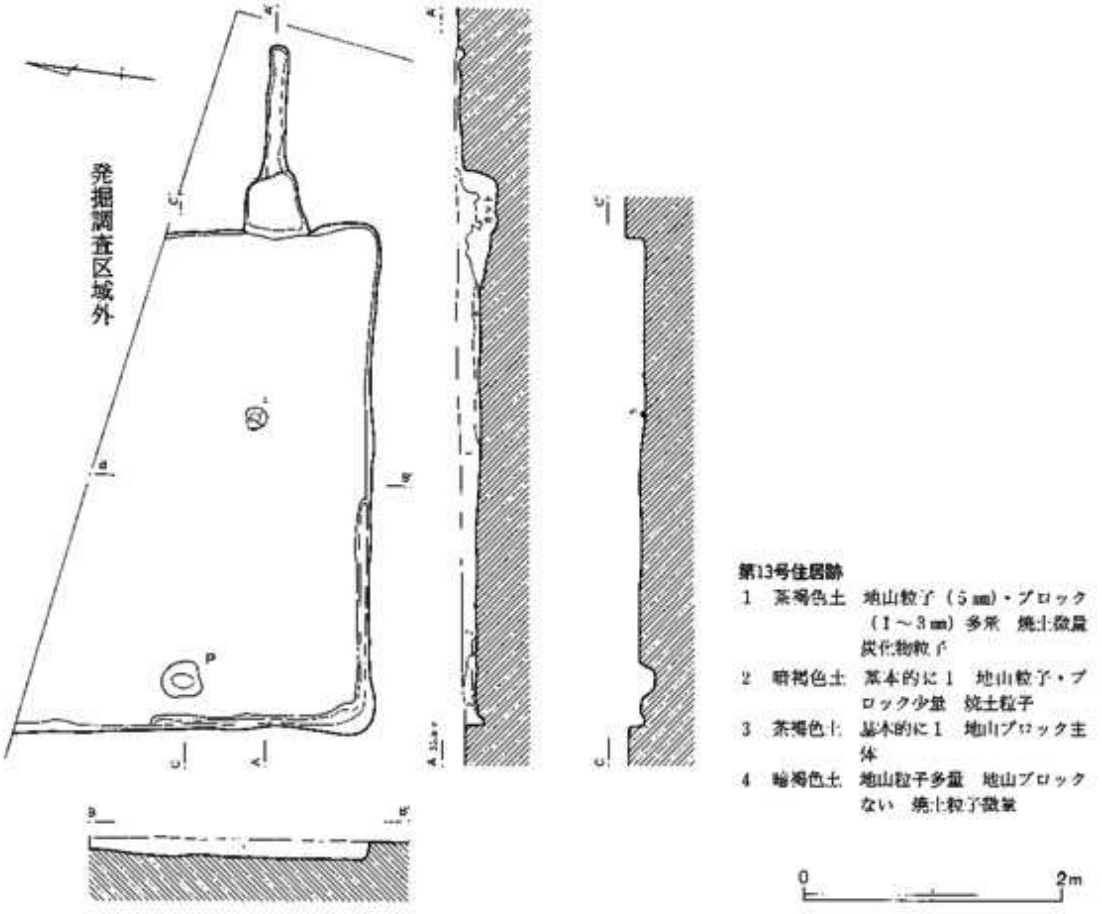
第12号住居跡出土遺物（第37図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	鉢	(14.8)			AA′B	B	暗赤褐	20%	床面
2	坏	(13.5)	3.2		AA′BC	A	にぶい橙	30%	覆土
3	高台坏			10.7	AA′BE	A	黒	40%	覆土　外縁へラケズリ　黒色土器
4	台付甕				AA′B	B	にぶい赤褐	30%	覆土

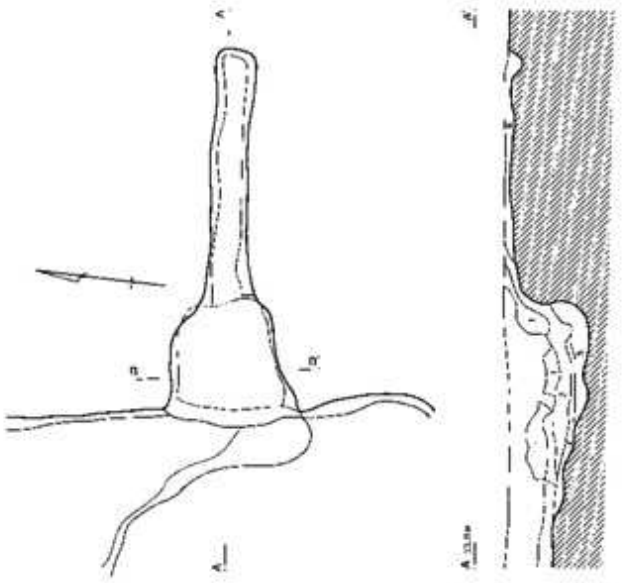
第13号住居跡（第38図）

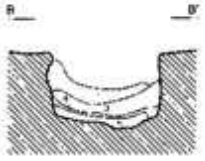
ね…69－5・10・ね－70－1・6グリッドに位置し、第12号住居跡から東に約40m離れて検出された。北側が調査区域外にあたり全体は不明であるが、比較的整った方形となるものと思われる。規模は、東西3.8m、深さ14cmである。主軸方向はN－83°－Eである。東壁の南コーナー寄りにカマドが壁に対して直角に検出された。カマドの燃焼部は、一辺約50cmの方形で壁は直立しプランの外にある。煙道は長さ1m、幅15cm、深さ5cm弱と浅く直線的に延び、先端が丸味を持ち深くなる。壁溝は南西コーナーのそれぞれの壁沿いに約1.5mずつ検出された。幅5～10cm、深さは床面から5cm弱である。ピットは西壁寄りに1本検出された、直径30cm、深さ12cmの不整形で、底面は平坦である。また、壁側の立ち上がりが壁に向かって傾斜している。床面は、中央部が僅かに窪む他は概ね平坦である。

出土遺物は、床面の中央やや南寄りに高台坏（5）が出土した。また、カマドから甕（10・11・14）が出土した。須恵器坏の底部は何れも糸切りである。8は口縁部が「く」の字に屈曲し体部との境に弱い稜があり、調整の変換点となる。12は「コの字口縁甕」で口唇部がやや肥厚する。



第38図 第13号住居跡



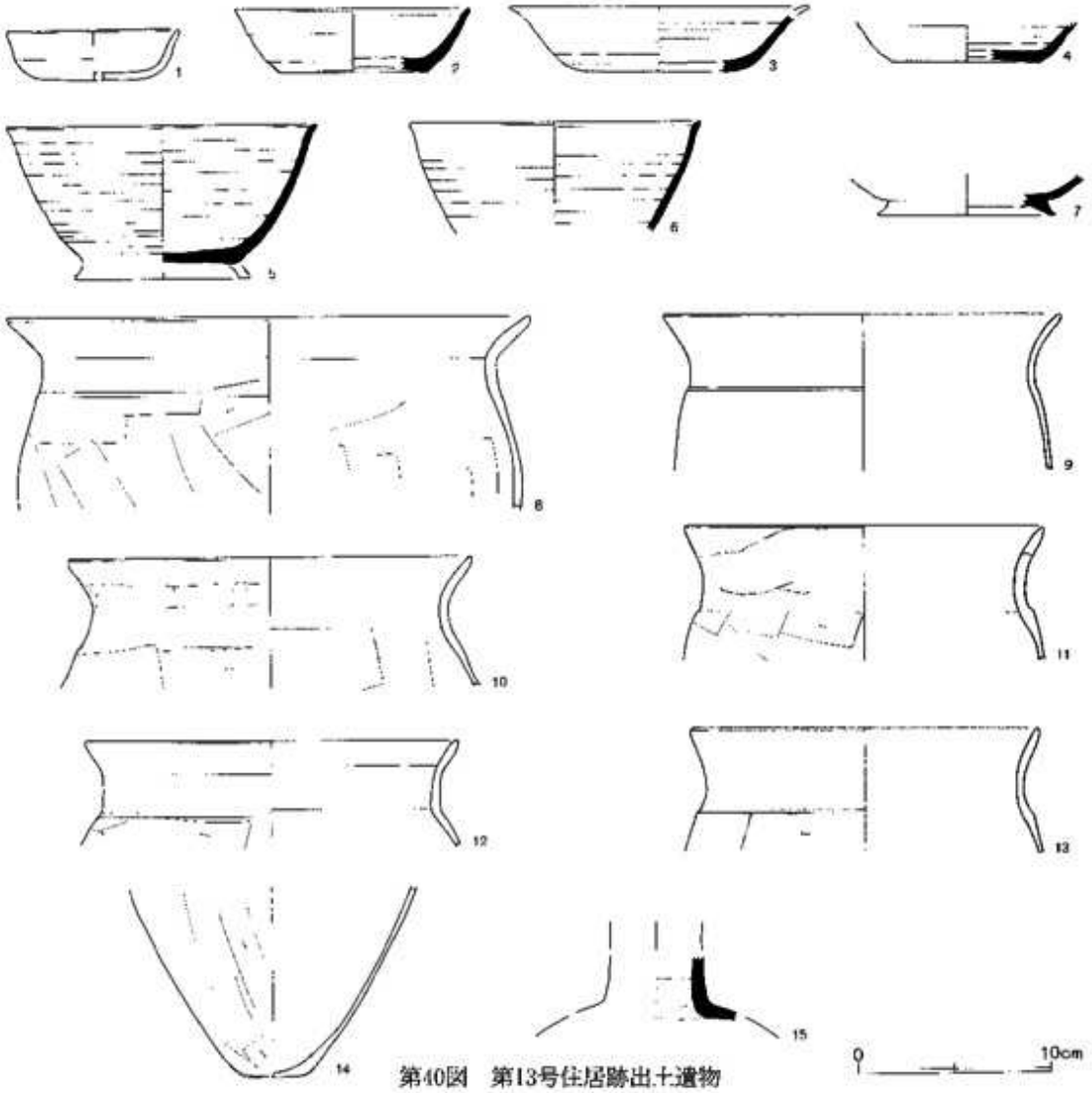


第13号住居跡　カマド

1　黄褐色土　地山ブロック（1cm）主体　焼土粒子少量　一部火熱により焼土ブロック化　天井部崩壊土層
2　茶褐色土　焼土・地山粒子多量　しまり弱　粘性強
3　黒灰色土　炭層　わずかに焼土粒子　部分的　しまり弱
4　黒色土　炭化物層
5　暗黄茶褐色土　地山土・焼土ブロック主体　炭化物少量　掘り方
6　茶褐色土　黄色土粒子微量　概ね部分的

0　1m

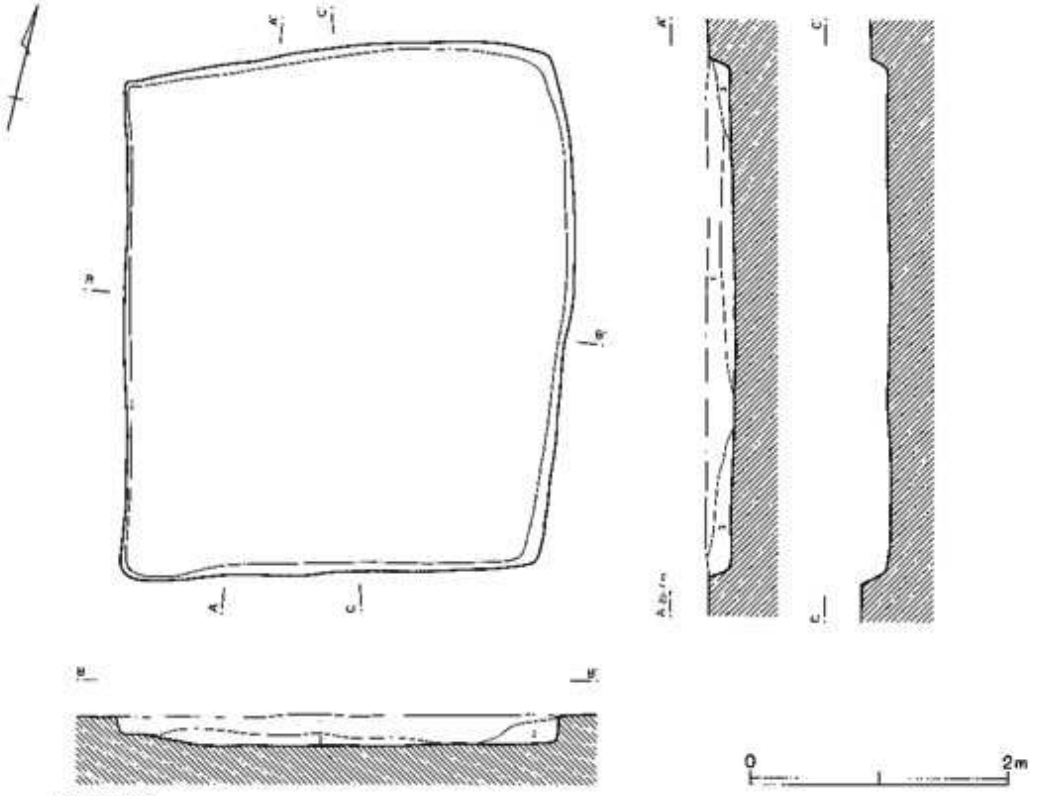
第39図　第13号住居跡カマド



第40図　第13号住居跡出土遺物

第13号住居跡出土遺物（第40図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏	(9.1)	2.6	(5.8)	AA′B′	B	明赤褐	30%	覆土
2	坏	(12.3)	3.3	(7.7)	AA′B	C	灰	30%	覆土
3	坏			(8.2)	AA′B	A	暗灰	20%	覆土　底部糸切り
4	坏			(8.0)	AA′BB′	A	灰	25%	覆土　底部糸切り
5	高台坏	16.2			AA′BC	C	灰	90%	覆土　№1　A粒子大・多　床面
6	坏	(15.3)			AA′BD	B	灰	20%	覆土
7	高台坏			(9.3)	AA′B	A	灰	20%	覆土　底部糸切り
8	甕	(27.4)			AA′BCD	A	赤	25%	覆土　カマド
9	甕	(20.7)			AA′B	B	赤褐	20%	覆土
10	甕	(21.1)			AA′BC	A	赤褐	20%	カマド
11	甕	(18.8)			AA′BC	A	赤	20%	覆土　カマド
12	甕	(19.6)			AA′BC	A	にぶい橙	20%	覆土
13	甕	(18.3)			AA′BC	A	赤	20%	覆土
14	甕			(3.5)	AA′BCD	B	にぶい橙	25%	カマド　外面煤付着
15	長頸瓶				AA′B	A	オリーブ　黒	25%	覆土　肩部の灰釉発泡



第14号住居跡

1　褐色土　砂粒子多量　焼土小ブロック・炭化物が少量　粘性なく　しまり強

2　暗褐色土　砂粒子多量　焼土粒子・炭化物を少量　粘性強

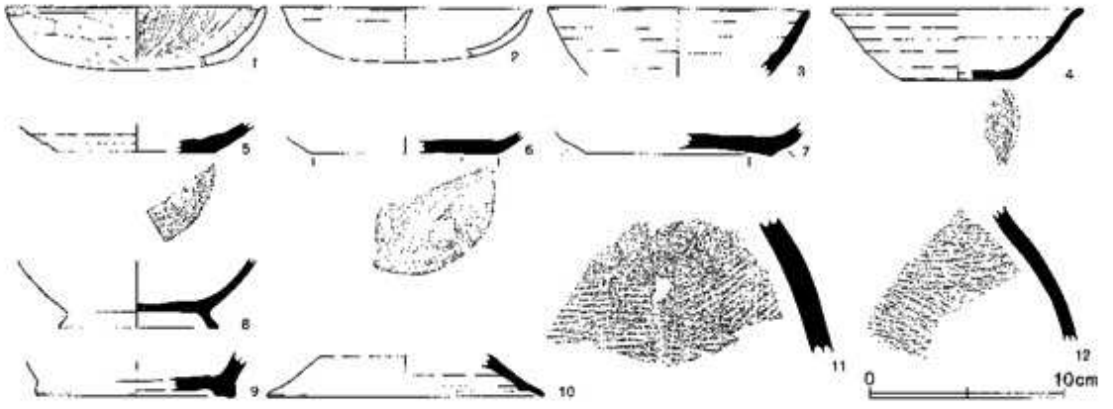
3　茶褐色土　粘土大ブロックを部分的　焼土ブロック・炭化物を若干　砂粒子は1より多量　砂質

第41図　第14号住居跡

第14号住居跡（第41図）

の—101—3グリッドに位置する。形態は方形を呈する。東壁は、やや外側に膨らむ。規模は長径4.03m、短径3.45m、深さ20cmである。主軸方向はN—18°—Wである。カマド・ピットは検出されなかった。床面は、粘土混じりの貼床で西壁寄りが高くなる。壁は、東壁が垂直に立ち上がり他はやや外側に傾斜する。

出土遺物は、覆土中より土師器小破片が多量に出土した。坏（1）は、放射状の暗文を持つ。蓋（10）には返りがある。



第42図　第14号住居跡出土遺物

第14号住居跡出土遺物（第42図）

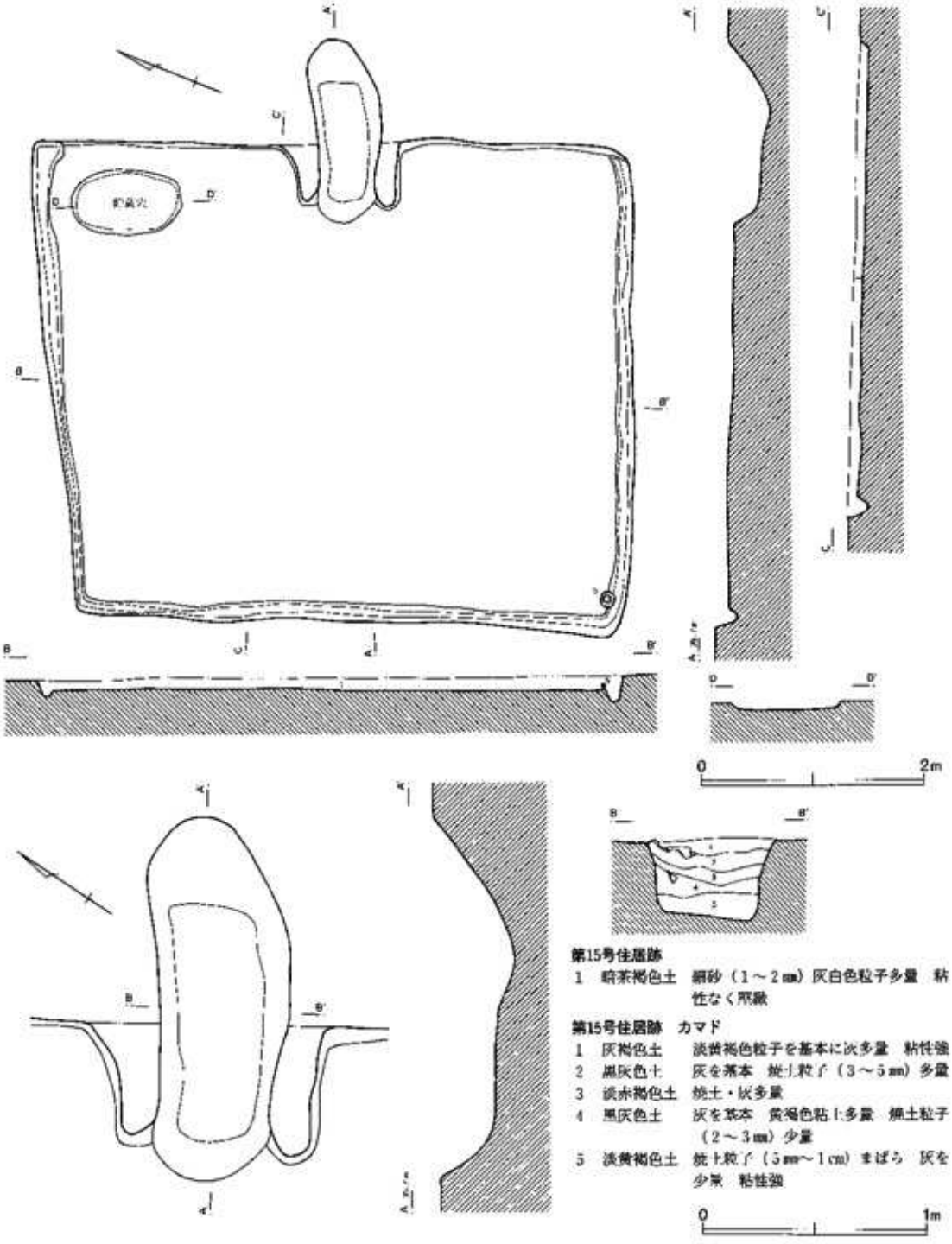
番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏	(13.3)	3.2		AA'BC	A	橙	20%	覆土　放射状暗文
2	坏	(12.9)			AA'BC	A	赤	10%	覆土
3	坏	(13.4)			AA'	A	灰	10%	覆土
4	坏	(14.3)	3.7	(7.0)	A'	A	灰	20%	覆土　底部糸きり
5	坏			(8.0)	AA'B	A	灰白	10%	覆土　底部糸きり
6	坏			(9.6)	AA'B	A	暗緑灰	40%	覆土　底部ヘラケズリ　ロクロ右
7	坏			(9.6)		A	暗青灰	20%	覆土　底部ヘラケズリ
8	高台坏			(8.0)	AA'B	B	灰	25%	覆土　B粒子多
9	高台坏			(10.2)	AB	A	暗青灰	10%	覆土
10	蓋	(14.3)			AA'B	C	黄灰	10%	覆土
11	甕				AA'D	B	灰	10%	覆土
12	甕				AA'	A	暗灰	10%	覆土

第15号住居跡（第43図）

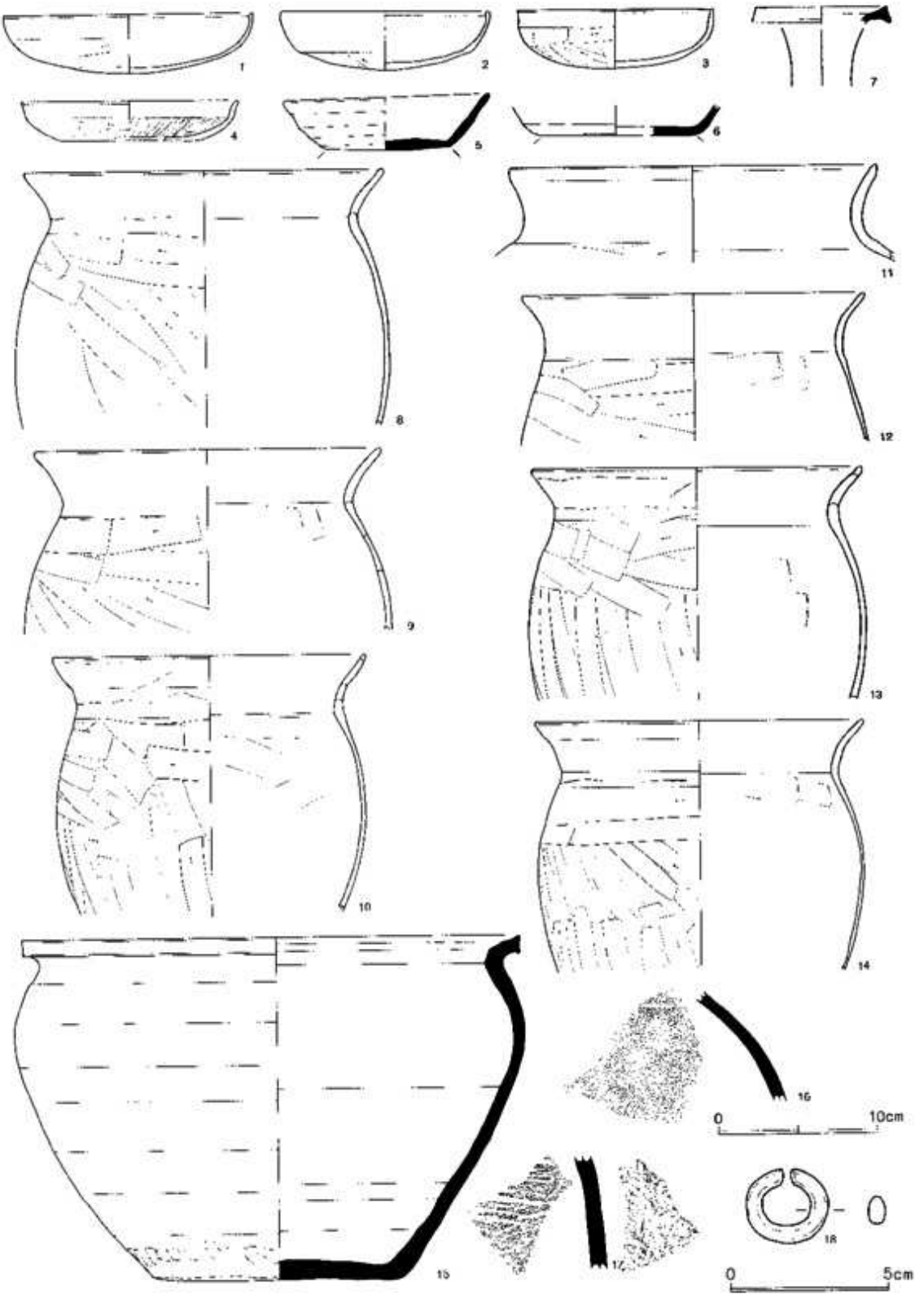
ね—101—23・24・の—101—3・4グリッドに、第14号住居跡と2mの間隔をおいて平行して位置する。形態は概ね方形だが西コーナーがやや開き気味である。規模は、長径5.22m、短径4.25m、深さ11cmである。主軸方向はN—17°—Wである。東壁のほぼ中央にカマド1基が検出された。カマドは、長方形にしっかりと掘り込まれ、炊き口部がほぼ同じ幅で煙道となる。炊き口部から煙道にかけて一度深く掘り込まれ、煙道は緩やかに立ち上がる。袖は幅約20cm、長さ約60cmで細長く取付けられる。貯蔵穴は北コーナー寄りに検出された。規模と形態は長径1m、短径58cm、深さ7cmの長楕円形で極く浅い。壁溝はカマドのある壁以外に、幅約10cmで巡る。床面は中央部が僅かに低い

他はほぼ平坦である。ピットは検出されなかった。

出土遺物はカマド内から、甕（8）（9）（10）（11）（12）（13）（14）、坏（3）（6）、長径瓶（7）がまとまって出土し、南コーナー床面には坏（16）が出土した。また、覆土中から金環（18）も出土する。



第43図　第15号住居跡・カマド



第44図　第15号住居跡出土遺物

第15号住居跡出土遺物（第44図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏	(15.7)	3.7		AA'BB'	C	橙	30%	覆土
2	坏	(12.9)	3.7		AA'BC	C	にぶい赤褐	50%	覆土
3	坏	12.4	3.7		AA'BC	B	にぶい橙	70%	カマド
4	坏	(13.7)	2.5	(8.5)	AA'BC	A	赤	20%	覆土　暗文
5	坏	13.0	3.4	7.7	AA'B	A	灰	100%	覆土　底部ヘラケズリ
6	坏			(9.7)	AA'B	A	灰白	50%	カマド　底部ヘラケズリ
7	長頸瓶	(8.3)			AA'B	A	暗緑灰	40%	カマド　内外面灰釉一部ガラス化
8	甕	22.8			AA'BB'C	B	赤褐	30%	カマド
9	甕	(22.0)			AA'BC	A	橙	30%	カマド
10	甕	(19.8)			AA'BC	A	明赤褐	30%	カマド
11	甕	(23.2)			AA'BC	B	赤	10%	カマド
12	甕	(21.7)			AA'BC	B	橙	40%	カマド
13	甕	(21.0)			AA'BC	B	明赤褐	20%	カマド
14	甕	(20.7)			AA'B	B	赤	20%	カマド
15	鉢	(31.5)	21.5	16.0	AA'BD	B	灰	70%	覆土
16	甕				AA'	A	暗青灰		覆土
17	甕				AA'	A	暗灰		覆土
18	金　環					B		100%	長径2.6　短径2.3

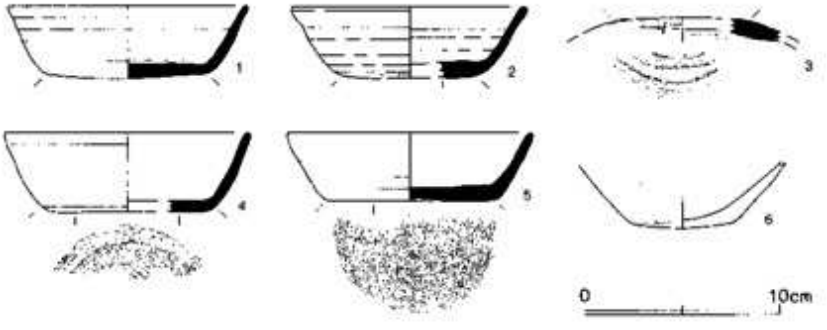
第16号住居跡（第46図）

の－101－8・9・13・14グリッドに位置する。北壁から東壁の一部が調査区域外となる。形態は方形である。規模は東西6.70m、南北はそれより若干長いかほぼ同等と思われる、深さは15cmである。主軸方向はN－22°－Wである。カマド等は検出できなかった。ピットは4本検出された、そのうちP_1・P_2・P_3が主柱穴である。柱穴の土層は自然堆積をしめし、床面に堆積する灰が流入する、柱痕は確認できなかった。P_4は、西壁やや南寄りの壁に接して検出された、直径1.2mの円形で内側で浅く、壁際で深くなる。床面は確認面から浅く、やや凹凸がある。主柱穴の内側には多量の灰が堆積していた。

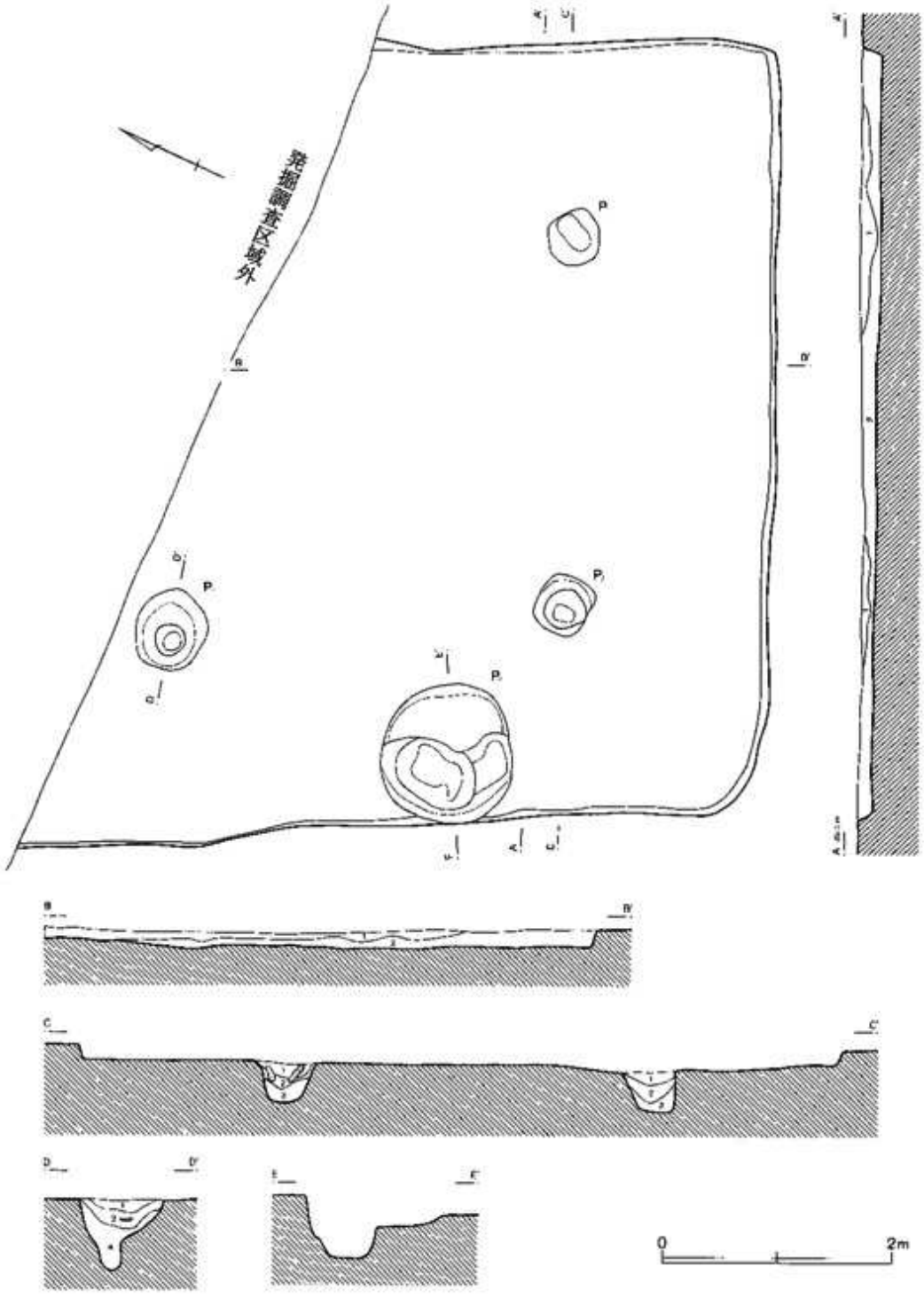
遺物は、坏（18）がP_2、（12・40）がP_3、（2）がP_4から出土した。高台坏（26）は大型で、底部を全面ヘラケズリした後に高台を貼り付け周辺をナデ調整する。また覆土中からも多量の土器が出土した。10・11・12は内面に放射状の暗文がある。

第17号住居跡（第49図）

の－101－5・10グリッドに位置する。カマドを含む南側半分が第20号住居跡と重複して作られる。形態は、南壁がやや長い方形である。規模は、長径（推定）3.77m、短径3.10



第45図　第17号住居跡出土遺物



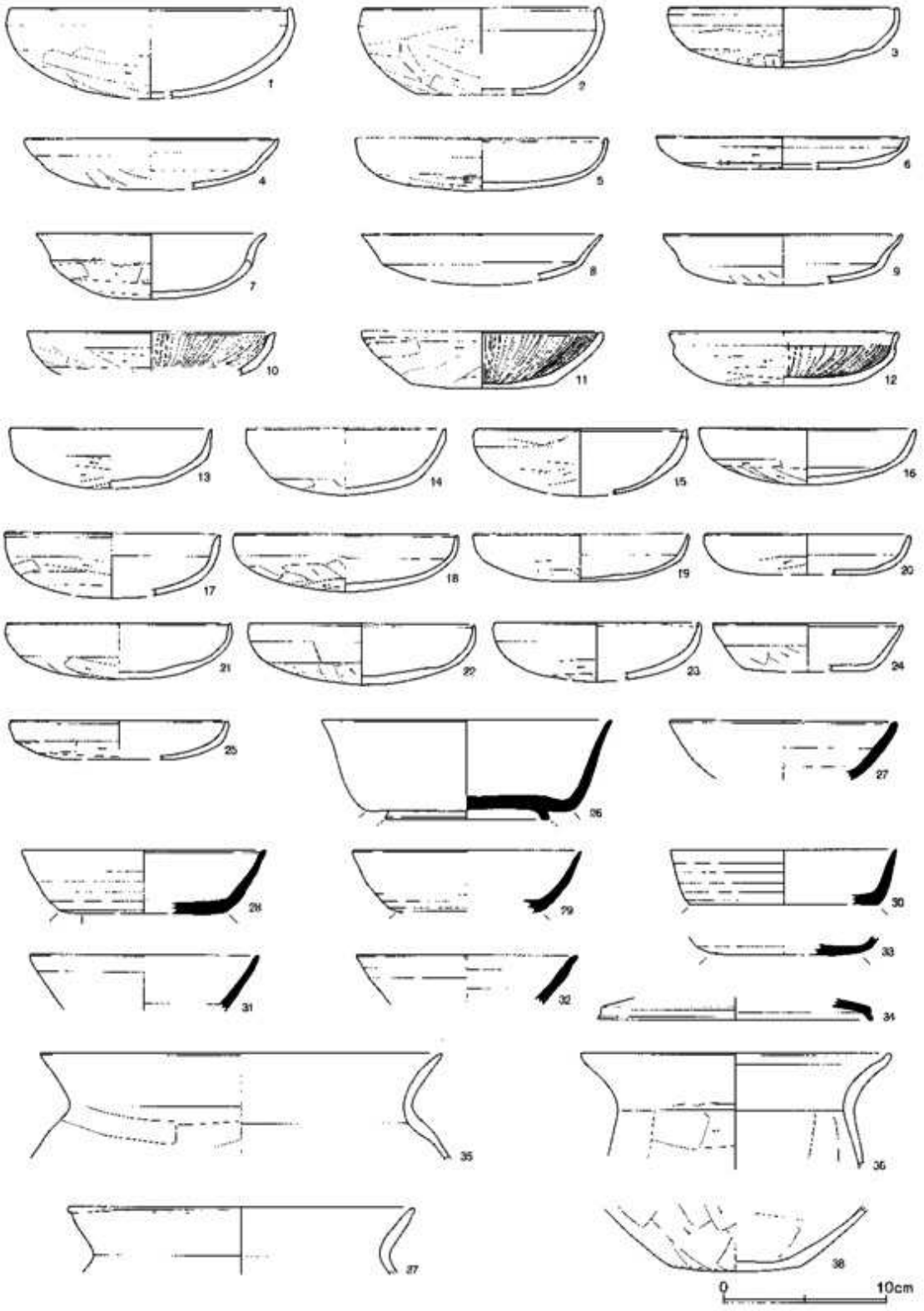
第16号住居跡

1　灰褐色土　多量の灰・炭化物　しまり強　粘性なし
2　暗茶褐色土　焼土粒子・炭化物少量　砂質

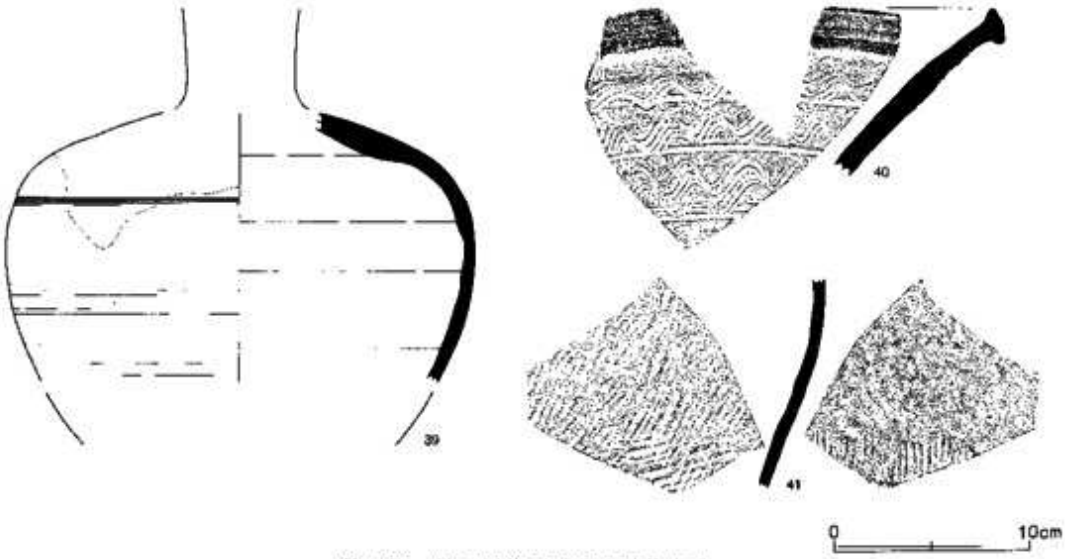
第16号住居跡　（$P_{1\sim4}$）

1　青灰色土　灰混じり粘土　しまり　粘性共に強
2　暗褐色土　焼土ブロック・炭化物多量　粘性強
3　茶褐色土　砂粒子多量　焼土粒子・炭化物少量　粘性強
4　暗灰褐色土　砂と粘土混じる　粘性強

第46図　第16号住居跡



第47図　第16号住居跡出土遺物（1）

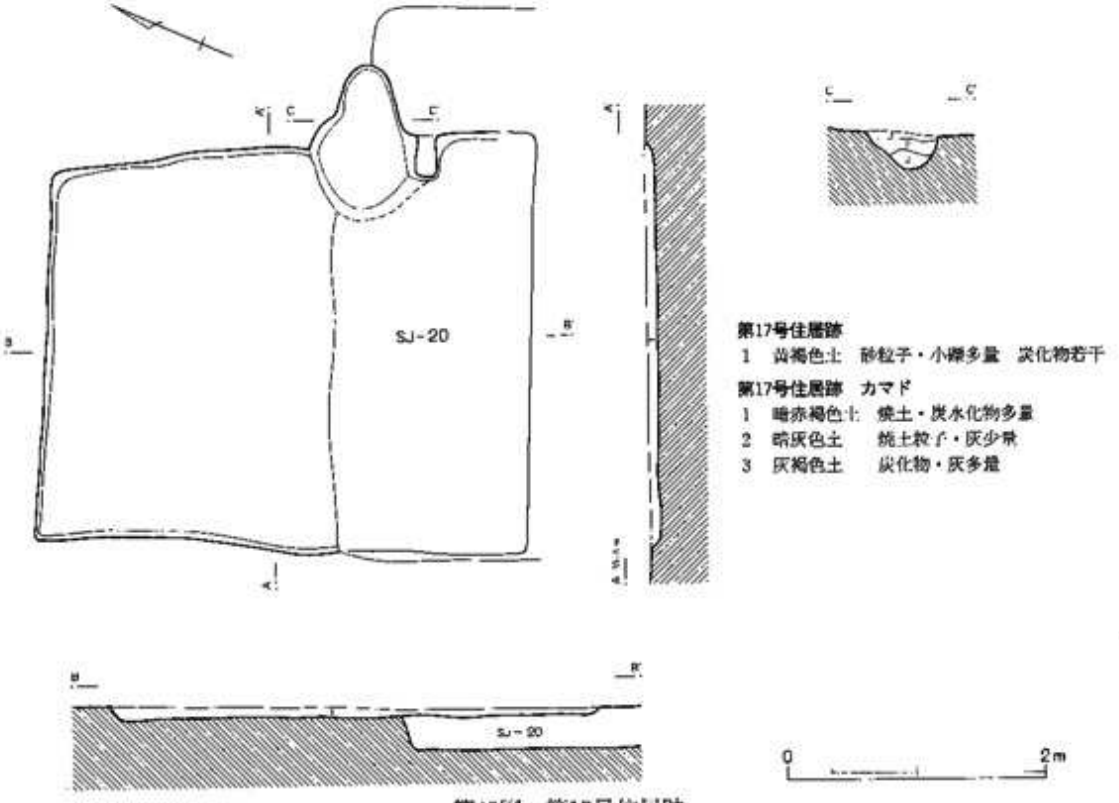


第48図　第16号住居跡出土遺物（2）

第16号住居跡出土遺物（第47・48図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	壺	(17.6)	5.6		AA′B	A	赤	30%	覆土
2	坏	(14.6)	5.4	(8.0)	AA′BC	A	橙	20%	P 4
3	坏	14.2	3.8		AA′BC	B	にぶい橙	50%	覆土　体部外面輪積痕
4	坏	(15.6)	3.2		ABC	B	橙	30%	覆土
5	坏	(15.8)	3.2		AA′BC	B	赤褐	20%	覆土　体部外面輪積痕
6	皿	(15.2)	2.0	(12.5)	AA′BB′C	B	橙	25%	覆土
7	坏	14.2	4.0		AA′BC	A	橙	80%	覆土　体部外面輪積痕
8	坏	(15.0)	3.2		AA′BB′C	C	橙	20%	覆土
9	坏	(14.8)	3.1		AA′BC	C	暗赤褐	20%	P 3
10	坏	(15.2)			ABC	A	橙	20%	覆土　暗文
11	坏	(15.0)	3.5	(4.6)	AA′BC	B	赤	25%	P 6　暗文
12	坏	(14.2)	3.3	9.0	ABC	B	暗赤	60%	覆土　暗文
13	坏	12.4	3.7		AA′B	B	橙	60%	覆土
14	壺	12.4	4.1		AA′B	C	灰褐	40%	覆土　B粒子多
15	壺	(13.2)	4.0		ABB′C	B	橙	25%	覆土　口縁部外面輪積痕
16	坏	(13.4)	3.5		AAB	A	橙	20%	覆土
17	坏	(13.4)	4.0		AA′B	B	橙	25%	覆土
18	坏	13.8	3.6		AA′B′C	B	赤褐	50%	P 2
19	坏	(13.2)	2.9		AA′BC	C	にぶい橙	30%	覆土
20	坏	(12.6)	2.5		AA′BC	B	橙	20%	覆土
21	坏	(14.0)	3.5		ABC	B	橙	25%	覆土
22	坏	(14.0)	3.7		AA′BC	B	橙	50%	覆土　体部外面粘土合わせ目
23	坏	(12.6)	3.7		ABC	B	にぶい橙	25%	覆土
24	坏	(11.7)	3.0	(8.0)	AA′B	B	暗赤褐	20%	覆土
25	坏	(13.4)	2.4		AA′BC	B	にぶい橙	20%	覆土
26	高台坏	(18.0)	6.1	10.2		A	暗灰	60%	覆土
27	坏	(14.1)			AA′B	B	褐灰	10%	覆土
28	坏	(15.1)	3.9	(10.3)	AA′B	A	灰白	40%	覆土　底部ヘラケズリ

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
29	坏	(14.1)		(9.0)	AA′	C	暗赤灰	20%	覆土
30	坏	(14.0)	3.4	(11.7)	AA′BC	A	暗灰	20%	覆土　B粒子多
31	坏	(14.2)			ABE	A	灰	10%	覆土
32	坏	(13.7)			AA′B	A	青灰	20%	覆土
33	坏			(9.2)	AA′BE	A	灰白	25%	覆土
34	蓋	(17.0)			AA′B	B	灰白	10%	覆土
35	甕	(16.6)			AA′BC	A	橙	25%	覆土
36	甕	19.2			AA′BC	B	赤褐	25%	覆土
37	甕	(21.5)			AA′BC	B	暗赤灰	20%	覆土
38	甕			8.0	AA′BB′	B	暗赤褐	70%	覆土
39	長頸瓶				AA′	A	暗オリーブ灰	40%	覆土　肩部灰釉　体部外面ケズリ
40	甕				AA′	A	青黒		P 3
41	甕				AA′	A	暗青灰		覆土



第49図　第17号住居跡

第17号住居跡出土遺物（第45図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.4)	3.7	(8.4)	AA′BE	A	灰	50%	覆土　底部ヘラケズリ
2	坏	(12.2)	3.6	7.0	AA′BE	A	灰	40%	覆土　底部ヘラケズリ
3	蓋				AA′B	B	灰黄	10%	覆土「十」線刻
4	坏	(12.7)	4.1	(8.0)	AA′B	C	暗灰	20%	覆土　底部ヘラケズリ
5	坏	(12.7)	3.6	8.9	AA′BE	A	灰	50%	覆土　底部ヘラケズリ　E粒子微量
6	甕			5.0	AA′BC	A	赤	60%	カマド

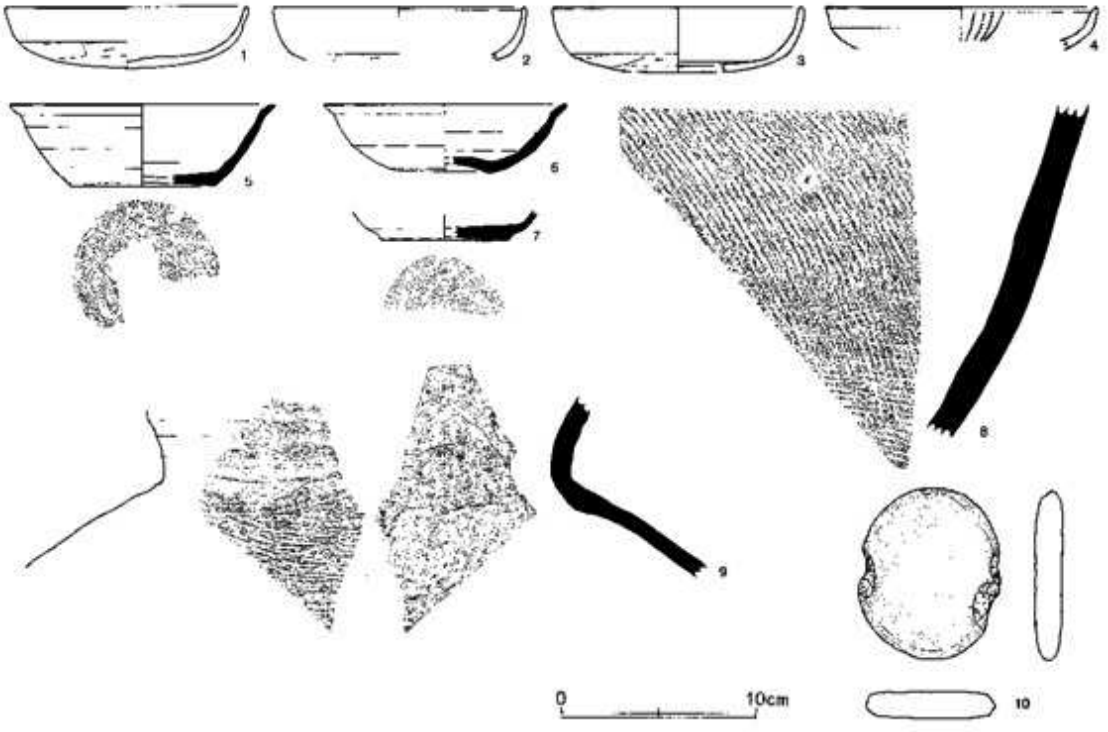
m、深さ8cmである。主軸方向はN－26°－Wである。カマドは、東壁のやや南寄りに1基が検出された。炊き口部から燃焼部にかけて広く半分が壁外にある、煙道は短く狭まる。袖は右側のみ検出できた。ピット・貯蔵穴は検出できなかった。床面は概ね平坦で第20号住居跡と重複する部分について貼り床となる。

出土遺物は少ない。蓋（3）は外面に「十」のヘラガキ文がある。

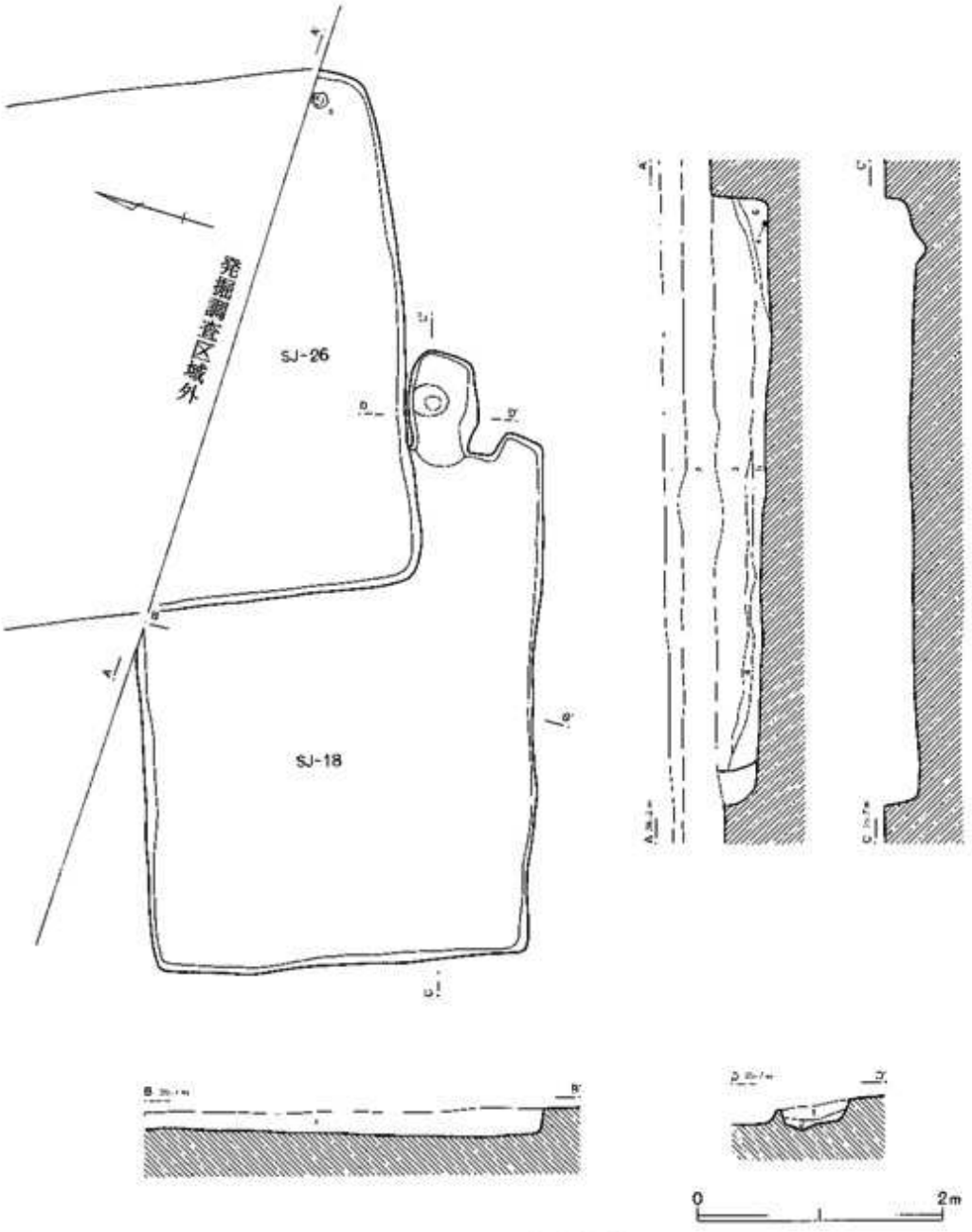
第18号住居跡（第51図）

の－102－6・11・グリッドに位置する。北東コーナーからカマド手前にかけて第26号住居跡に切られる。形態は東西に長い長方形である。規模は長径4.32m、短径3.20m、深さ12cmである。主軸方向はN－72°－Eである。カマドは南東コーナー寄りに、第26号住居跡に左袖を壊された状態で検出された、左袖は地山の掘り残しである。炊き口部が僅かに壁の内側にあるものの、燃焼部は壁外にある。形態は僅かに胴が張る長方形で奥壁が垂直に立ち上がり煙道はない。貯蔵穴・ピットは確認されなかった。床面はやや波をうち、南側に向かって低く傾斜している。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

出土遺物は少ない。4は内面に間隔をあけた細い放射状の暗文がある。5・6・7は底部が上げ底で回転糸切で、体部が大きく開き口縁部で外に屈曲する。このほかに、覆土中から小判形で扁平の石錘（10）が出土する。



第50図　第18号住居跡出土遺物



第18号住居跡

1　暗茶褐色土　細砂（1～2mm）多量　礫（5～10mm）を少量　灰白色粒子（1mm以下）上層に多量

第18号住居跡　カマド

1　暗褐色土　焼土ブロック多量　炭化物少量

2　黒褐色土　灰・炭化物多量

第26号住居跡

1　現代水田耕作土

2　赤褐色土　白色粒子（1mm以下）多量　焼土・炭化粒子わずか　粘性なく脆弱　土器含む

3　暗茶褐色土　白色粒子（1mm以下）多量　黄褐色土ブロック（5mm～1cm）少量　焼土炭化粒子僅か

4　黒褐色土　暗茶褐色土主体　焼土・炭化物多量　土器多量　若干粘性があり堅緻

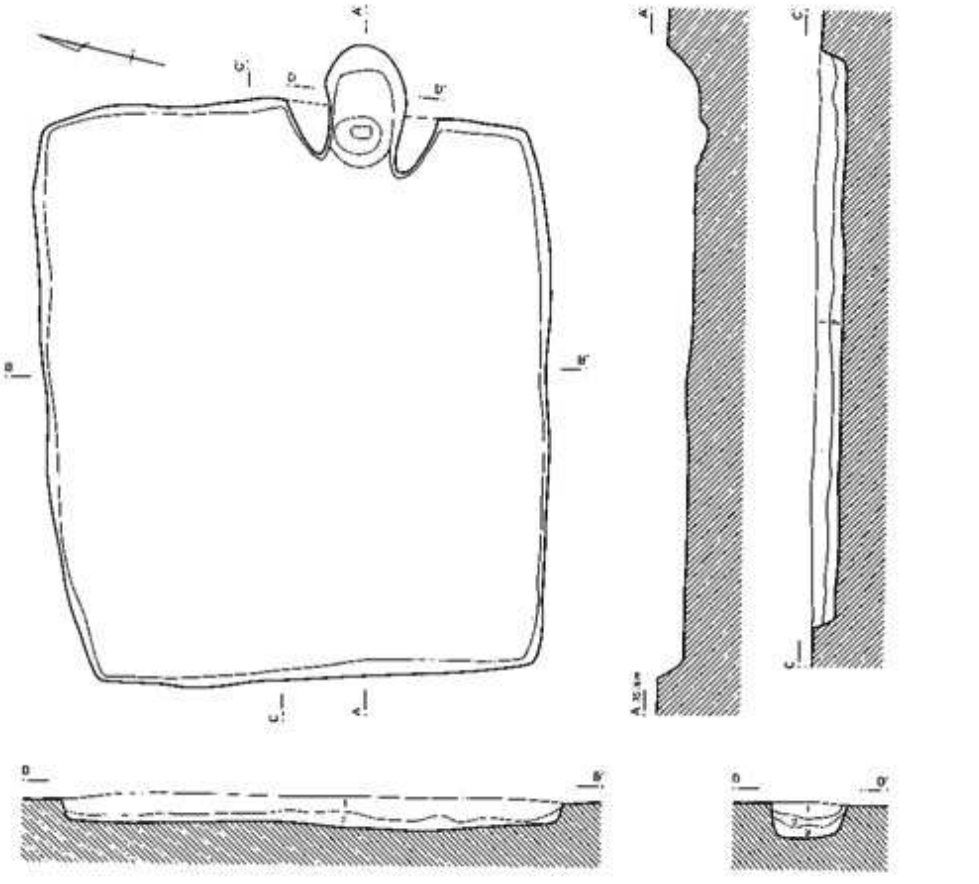
5　暗灰褐色土　白色粒子（1mm以下）を全体的に多量　黄褐色砂ブロック（1～2cm）まばら　炭化粒子多量　粘性なく堅緻

6　黄褐色土　黄褐色砂ブロック（1～2cm）主体　茶褐色土少量　一部に焼土ブロック　粘性なく堅緻

第51図　第18・26号住居跡

第18号住居跡出土遺物（第50図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏	12.5	3.1		AA'B	B	赤	90%	覆土　保存状態不良
2	坏	(13.1)			AA'BC	B	明赤褐	30%	覆土　C粒子多
3	坏	(13.0)	3.3		AA'BC	B	赤	40%	覆土　保存状態不良
4	坏	(14.0)			AA'B	B	赤	20%	覆土　暗文
5	坏	(13.6)	4.2	7.5	AA'B	B	灰	60%	覆土　底部糸きり
6	坏	(14.0)	3.5	(6.0)	AA'BD	A	灰	25%	覆土　底部糸きり
7	坏			(6.8)	A'	A	青灰	50%	覆土　底部糸きり
8	甕				AA'C	A	暗灰		覆土
9	甕				AA'	A	暗青灰		覆土
10	石　錘					A		100%	覆土　長径8.8　短径7.4　重さ116.1



第19号住居跡

1　暗茶褐色土　砂粒子多量　小礫少量　焼土ブロックまばら　若干の炭化物
2　暗褐色土　砂粒子多量　小礫なし　炭化物・焼土少量

第19号住居跡　カマド

1　暗茶褐色土　焼土ブロック多量　砂質
2　灰褐色土　焼土粒子・灰・炭化物多量　しまりなく粘性
3　暗褐色土　焼土粒子・炭化物若干　砂質で良くしまる

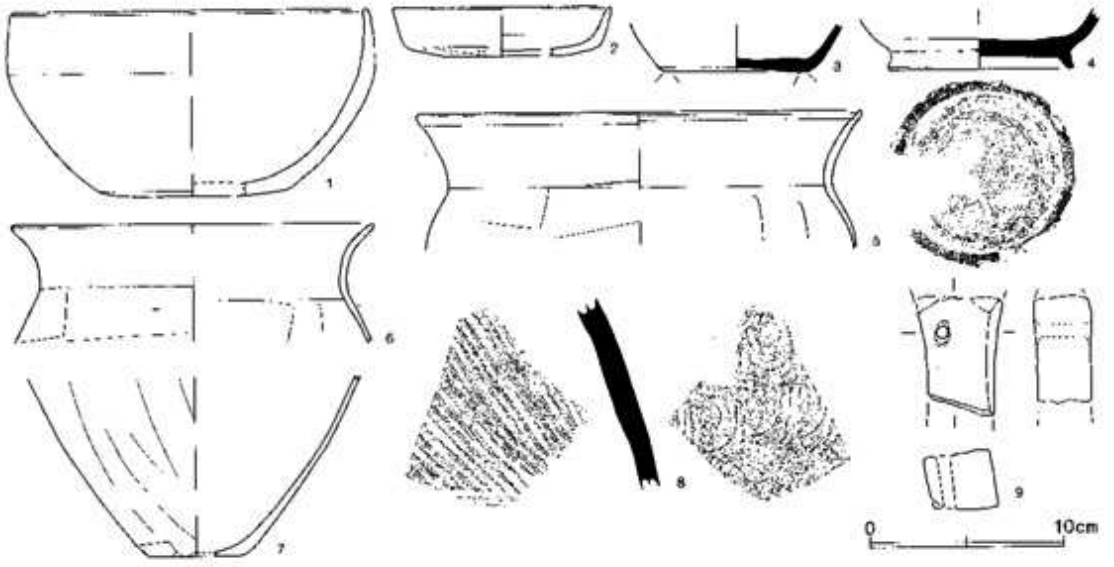
0　1　2m

第52図　第19号住居跡

第19号住居跡（第52図）

の—102—1・2・6・7グリッドに位置する。形態は方形である。規模は、長径4.47m、短径3.88m、深さ20cmである。主軸方向はN—76°—Eである。カマドは東壁のやや南寄りに検出された。形態は、炊き口部から燃焼部にかけてほぼ同じ幅で、燃焼部の半分はプランの外にある。炊き口部で一段深くなり、奥壁が緩やかに立ち上がり、煙道は延びない。左右に短めの袖を持つ。貯蔵穴・ピットは確認されなかった。壁はやや斜めに掘り込まれる、床面は平坦であるが地山の礫が露出している。

出土遺物は少ない、1は口縁部が僅かに内傾する大型の鉢でカマドから出土した。3は底部外面回転糸切り後に外周を僅かにヘラケズリを行う。4は回転糸切り後に高台を貼り付け、外周を撫でる。覆土中から砥石（9）が出土した。



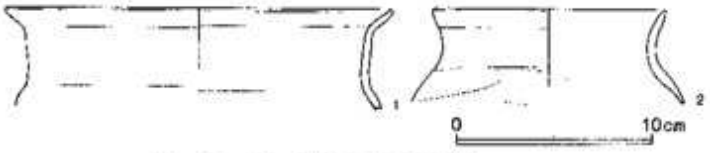
第53図　第19号住居跡出土遺物

第19号住居跡出土遺物（第53図）

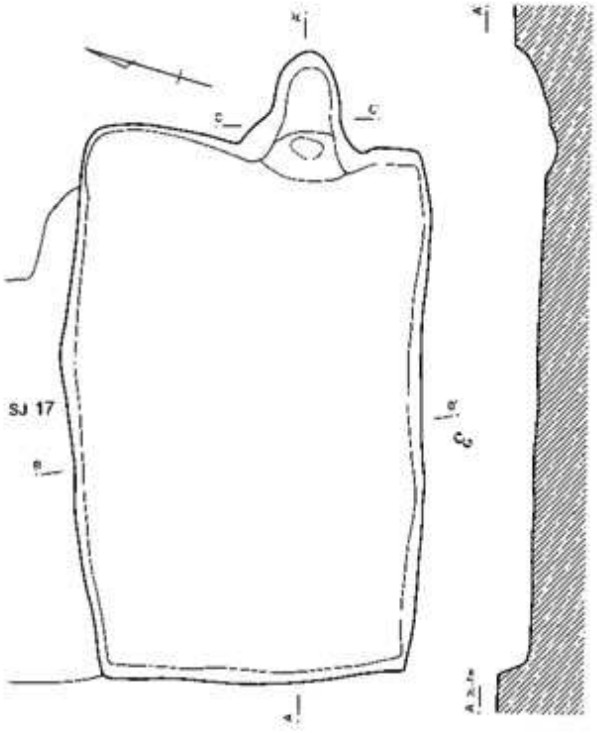
番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	鉢	(18.2)	9.5	(9.7)	AA'BC	C	にぶい橙		カマド　底部ヘラケズリ
2	坏	(11.3)	2.5	(10.0)	AA'BB'	B	橙	30%	覆土
3	坏			7.4	AA'BD	C	オリーブ灰	70%	覆土　底部糸きり外周ヘラ　保存状態不良
4	高台坏			9.6	AA'	A	青灰	60%	覆土　底部糸きり　外面ナデ
5	甕	(22.9)			AA'BC	B	赤	20%	覆土
6	甕	(18.6)			AA'B	B	明赤褐	20%	覆土
7	甕			5.1	AA'BC	B	明赤褐	40%	覆土
8	甕				AA'B	A	灰		覆土
9	砥　石								長径6.2　短径4.1

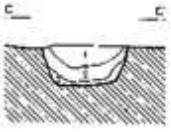
第20号住居跡（第55図）

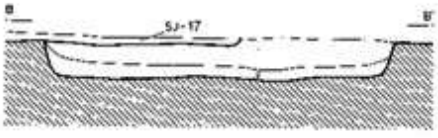
の…101－4・5・10グリッドに位置する。北壁から住居の中央にかけて第17号住居跡が重複する。第17号住居跡は重複部が貼り床となることから当住居跡が古い。形態は、主軸方向に長い長方形である。規模は、長径4.03m、短径2.72m、深さ27cmで、西壁に比べて東壁がやや長い。主軸方向はN－73°－Eである。カマドは東壁の南寄りに検出された。炊き口部から奥壁に向かって狭くなる形態で、極く短い袖を粘土で補強する、燃焼部はほぼ壁外となる。炊き口部が窪み燃焼部から奥壁は緩やかに立ち上がる。貯蔵穴・ピットは確認できなかった。床面は平坦だが一部で礫が露出する。出土遺物は極めて少なくいずれも土師器甕の小破片である。



第54図　第20号住居跡出土遺物







第20号住居跡
1　褐色土　砂粒子多量　炭化物・焼土粒子少量　粘性あり
2　暗褐色土　砂粒子少量　若干の炭化物・焼土粒子　1よりしまる　粘性強

第20号住居跡　カマド
1　暗灰褐色土　砂粒子・小礫多量　焼土粒子少量
2　灰褐色土　炭化物と灰が層を成す　焼土多量
3　暗褐色土　粘性強　カマドの底に粘土を貼る

第55図　第20号住居跡

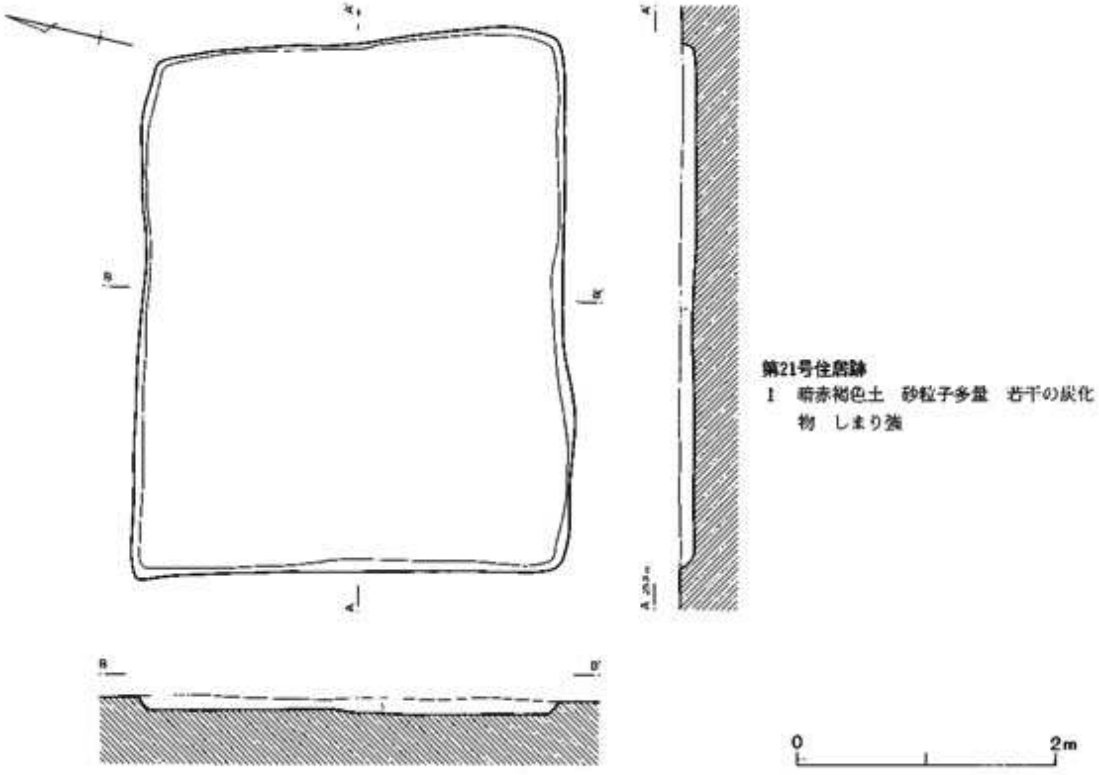
第20号住居跡出土遺物（第54図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	甕	(11.6)			AA'BC	B	にぶい橙	10%	覆土
2	甕	(19.6)			AA'BB'C	A	赤	10%	覆土

第21号住居跡（第56図）

ね—101—25・ね—102—21・の—101—5・の—102—1グリッドに位置する。形態は長方形である。規模は、長径4.06m、短径3.25m、深さ11cmである。主軸方向はN—80°—Eである。カマド・ピット等は検出されなかった。床面は平坦で一部で礫が露出する。

出土遺物は、検出されなかった。



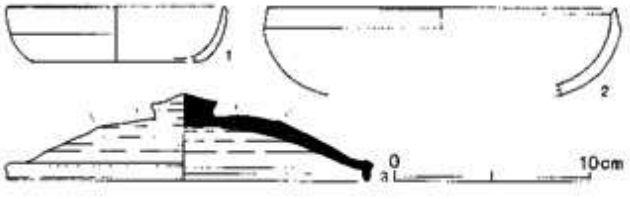
第56図　第21号住居跡

第22号住居跡（第58図）

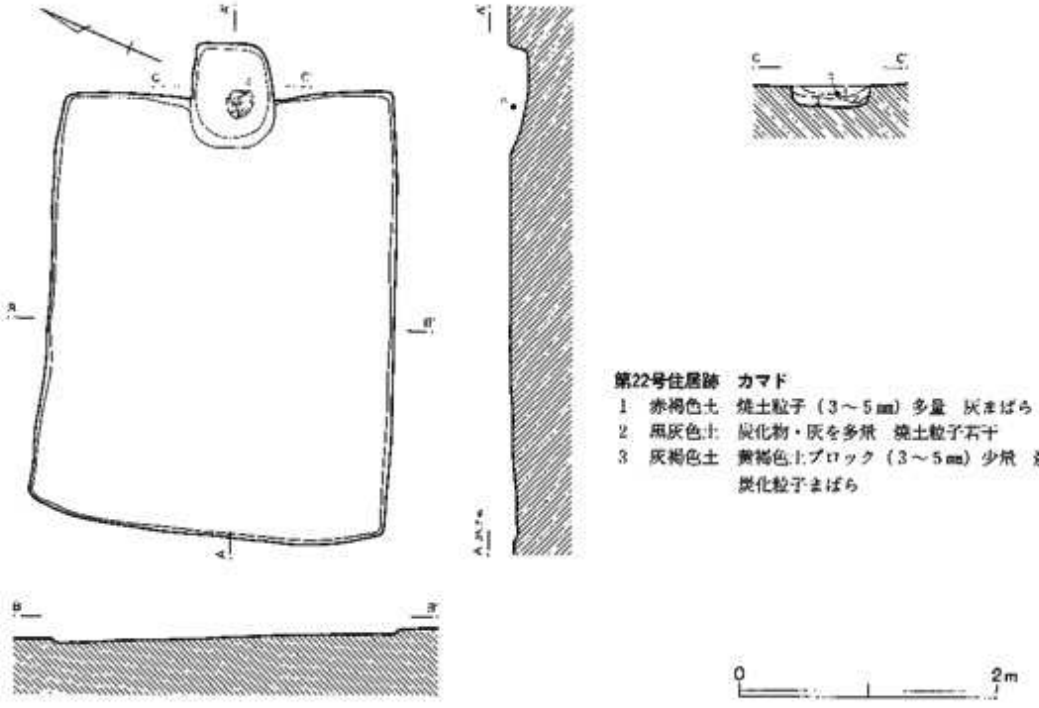
の—102—4・5グリッドに位置する。形態は主軸方向に長い長方形である。規模は、長径3.47m、短径2.67m、深さ3cmである。主軸方向はN—67°—Eである。カマドは東壁中央に検出された。形態は方形で燃焼部は壁外にある。炊き口は緩やかな傾斜で、側壁奥壁とも垂直に立ち上がる。貯蔵穴・ピットは確認できなかった。床面に礫の露出はなく平坦である。

出土遺物は少ないが、ほぼ完形の鉢（1）がカマドの燃焼部に床から約10cm浮いた状態で出土した。

出土遺物は少ない。1・2・3ともカマドより出土した。3は天井部に回転ヘラケズリされる須恵器蓋である。カマド燃焼部からほぼ完形で出土した。



第57図　第22号住居跡出土遺物



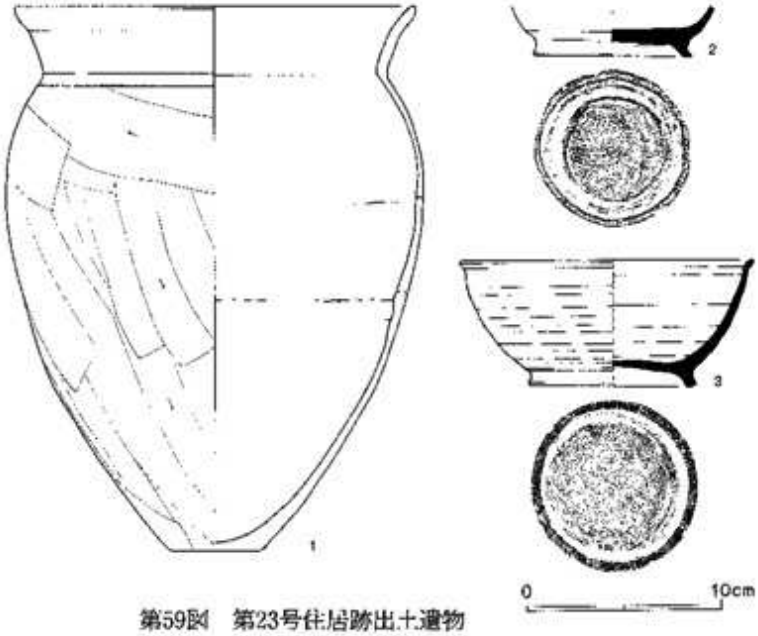
第58図　第22号住居跡

第22号住居跡出土遺物（第57図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.3)	3.0	(9.0)	AA'BC	B	赤	20%	カマド　体部外面粘土皺
2	埦	(18.0)			AA'BC	B	赤	10%	カマド　保存状態不良
3	蓋	18.4	4.5		AA'B	C	灰オリーブ	90%	カマド

第23号住居跡（第60図）

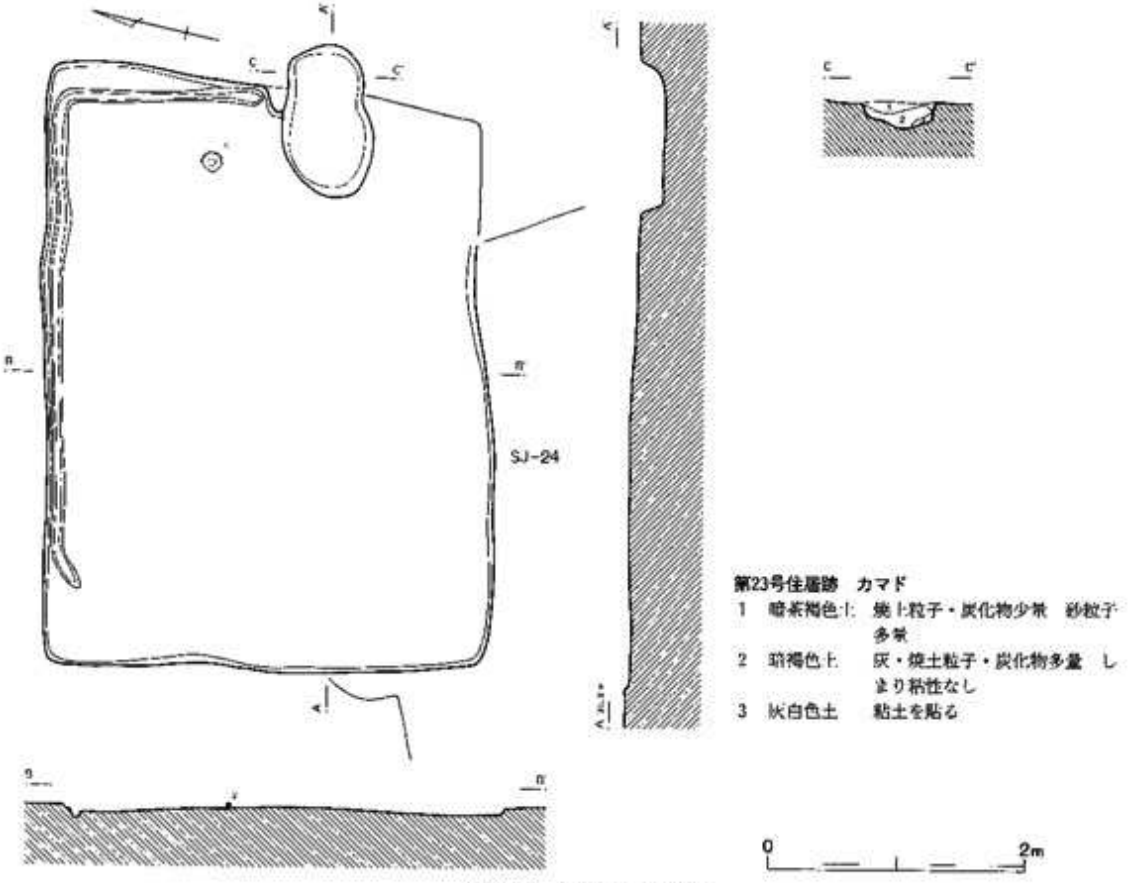
の－102－2・3・7・8グリッドに位置し南側で第24号住居跡を切って重複する。形態は主軸方向に長い長方形で、北東コーナーがやや不整形である。長径4.50m、短径3.42m、深さ3cmである。主軸方向はN－77°－Eである。カマドは東壁のやや南寄りに検出された、燃焼部の形態は楕円形で炊き口部から燃焼部にかけ同じ深さである。燃焼



第59図　第23号住居跡出土遺物

部の主体は壁内にあり、奥壁は斜めに立ち上がり、煙道は無い。袖は左側で確認されたが、短く遺存状態も悪く明確でない。壁溝はカマド袖の手前から北東コーナーと北壁にかけて検出した。コーナー付近では壁から約20cm離れる、西の先端では、内側に折れ曲がる。床面は平坦で、重複部は砂質土で厚く貼り床を施す。

出土遺物は少ないが、カマド内より甕（1）、カマド左手床面より高台坏（2）が出土する。



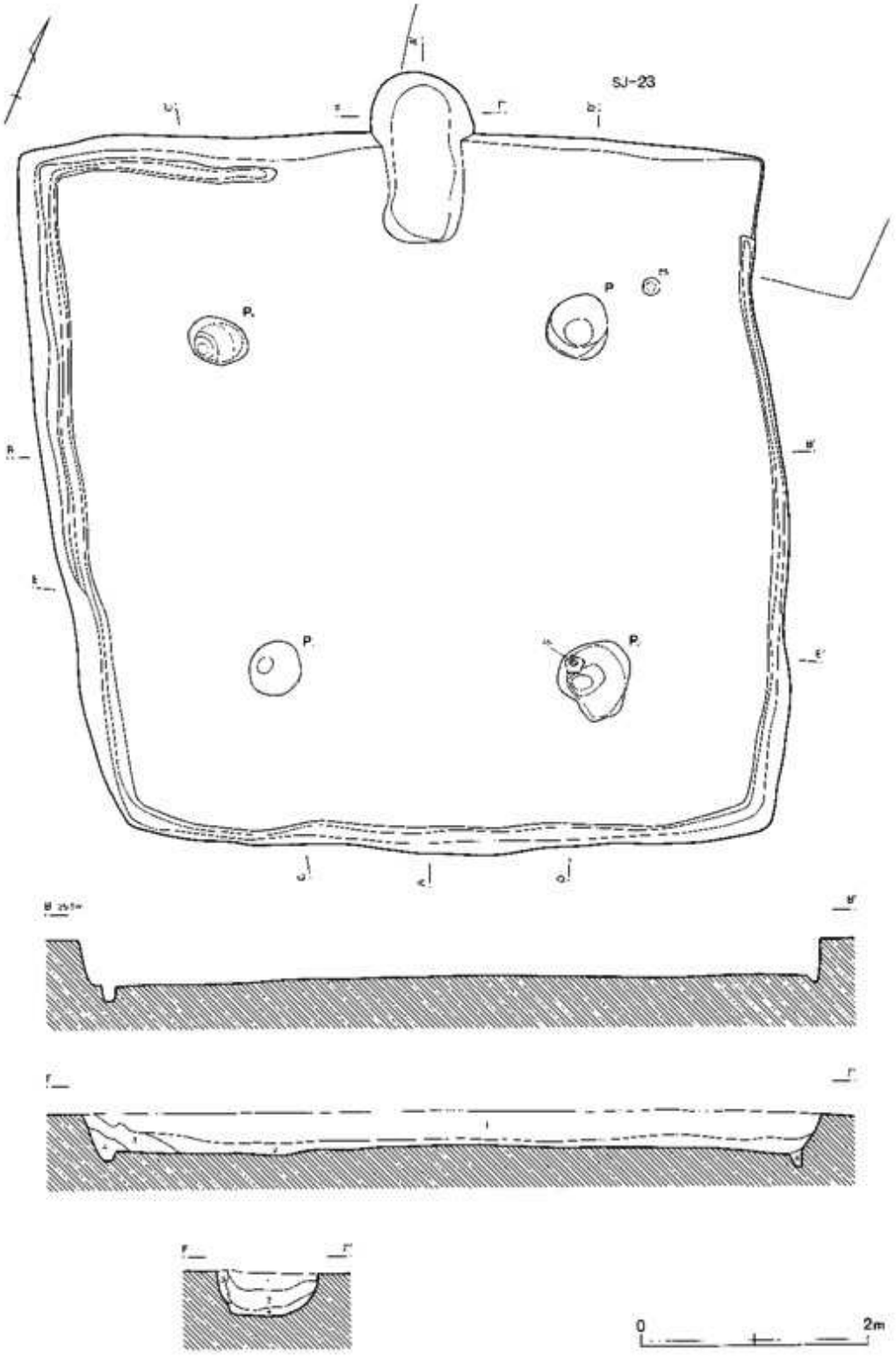
第60図　第23号住居跡

第23号住居跡出土遺物（第59図）

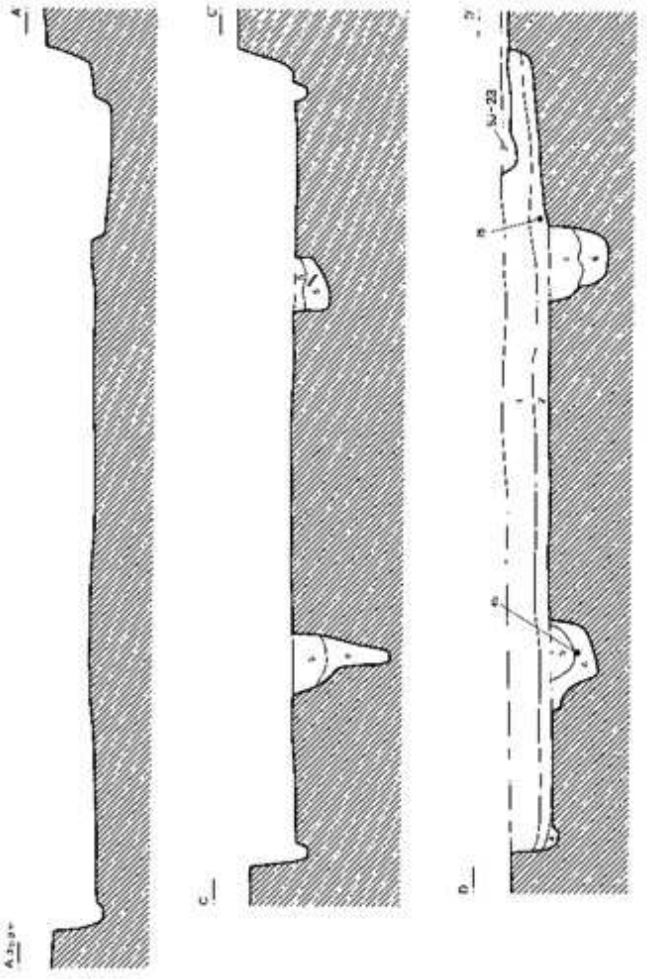
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	20.4	27.7	4.6	AA'BC	A	明赤褐	70%	カマド
2	高台坏			10.2	AA'BD	A	オリーブ灰	50%	カマド
3	高台坏	15.1	6.6	8.6	AA'BD	A	暗青灰	80%	覆土　口縁部やや歪む

第24号住居跡（第61図）

ね—102—22・23、の—102—2・3・7・8グリッドに位置し北コーナーからカマドにかけて第23号住居跡に切られる。形態は方形で、東・南壁はやや波を打つように歪む。規模は長径6.55m、短径6.30m、深さ35cmで大型である。主軸方向はN—24°—Wである。カマドは北壁の中央に検出された。全体の3分の2を壁内にもち、炊き口部から燃焼部は同じ深さで窪み、奥壁の手前で段がつき壁の立ち上がりは急である。袖は確認されなかった。壁溝はカマド付近と北東コーナーを除いて



第61図　第24号住居跡



第24号住居跡

1　黒炭色土　焼土・炭化粒子多量　粘性なし　礫をまばら

2　暗茶褐色土　焼土・炭化粒子1より多量　部分的に灰　粘性なく脆い

3　黒褐色土　炭化粒子多量　焼土粒子まばら

4　茶褐色土　淡黄褐色土粒子（3～5mm）少量　若干粘性

第24号住居跡　カマド

1　淡黄褐色土　第23号住居跡の貼り床

2　暗褐色土　小礫　焼土ブロック多量　炭化物少量

3　暗灰褐色土　若干の炭化物　粘性強

4　暗茶褐色土　灰・炭化物多量　粘性強　しまり弱

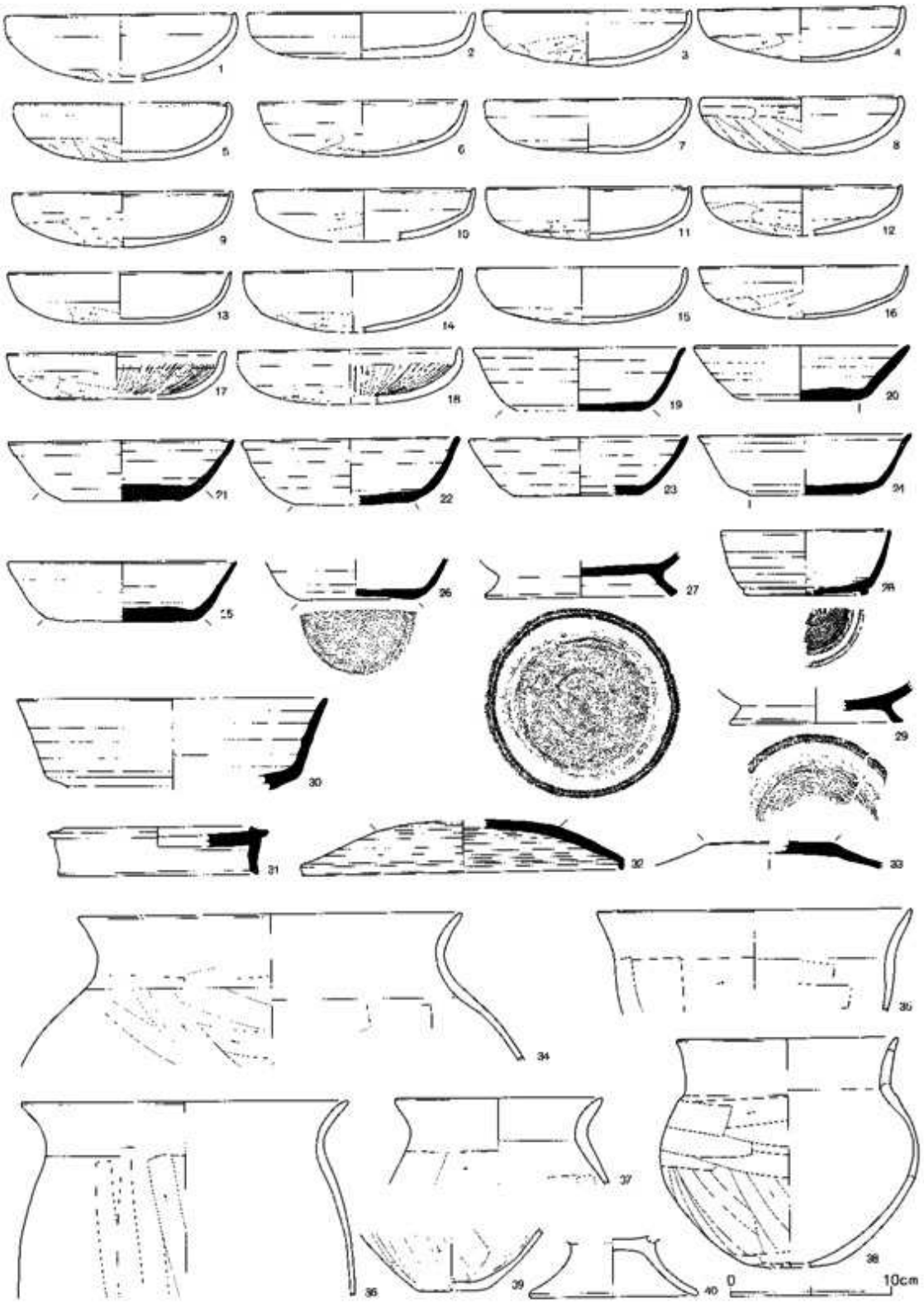
第24号住居跡　（$P_{1\sim4}$）

5　暗灰褐色土　粘性しまり強　炭化物・焼土粒子多量

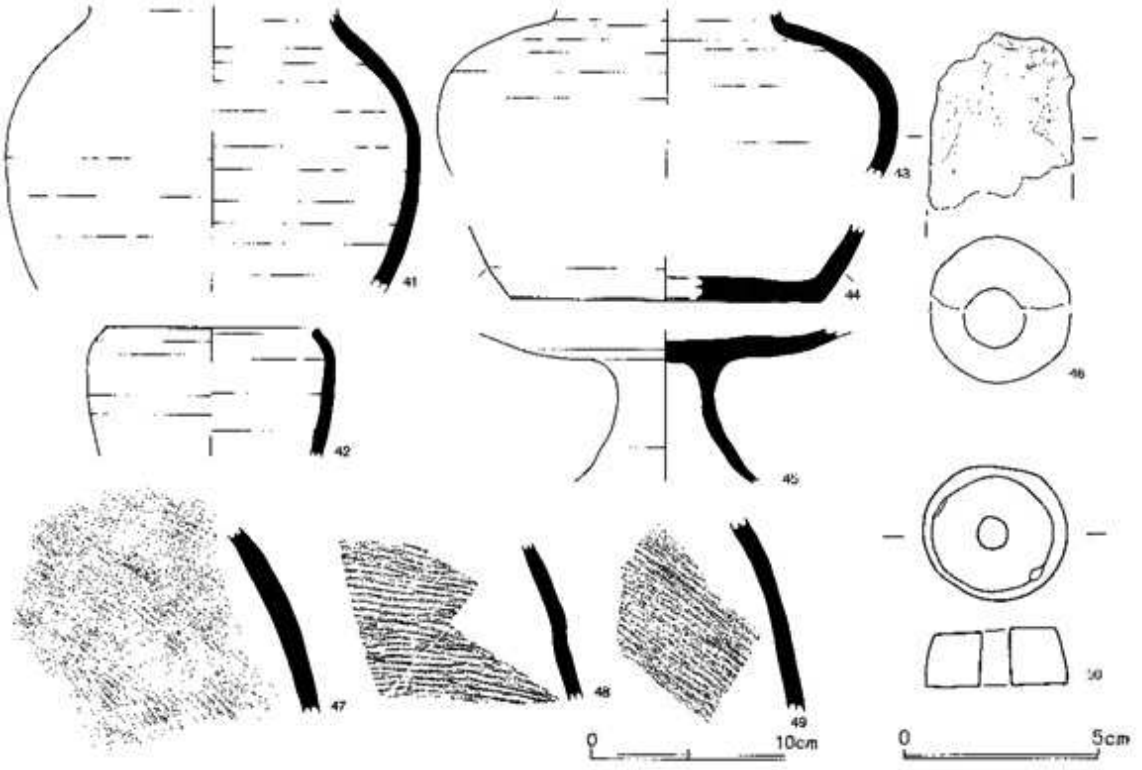
6　暗茶褐色土　砂粒子多量　炭化物少量　粘性なくしまり強

ほぼ全周するが、西壁では一部壁から離れる。ピットは主柱穴が4本（P_1・P_2・P_3・P_4）整然と検出された。床面の一部に礫が露出するもののおおむね平坦である。

出土遺物は非常に多く須恵器の出土が目立つ。主なものに、放射状の暗文を持つ坏（17・18）、短頸壺（42）、高盤（45）、蓋（31）、器肉が薄く極細の沈線を6条巡らせた高台坏（28）などがある。この内、高盤、蓋、高台坏については他と胎土、色調とも大きく異なり丁寧な作りである。また、坏（25）が床面から、覆土中から羽口（46）・紡錘車（50）なども出土する。須恵器坏については、26以外は回転ヘラケズリが施され、底部が大きく口縁部は直線的に開く。21・25においては、外縁にも及ぶ。30・31については、灰白色の胎土をもち、31は鍔状凸帯を持つことから群馬県秋間窯跡との関係が注目される。この他にも図示できなかったが、大型の高盤の坏部口縁と思われる小片も出土している。



第62図　第24号住居跡出土遺物（1）

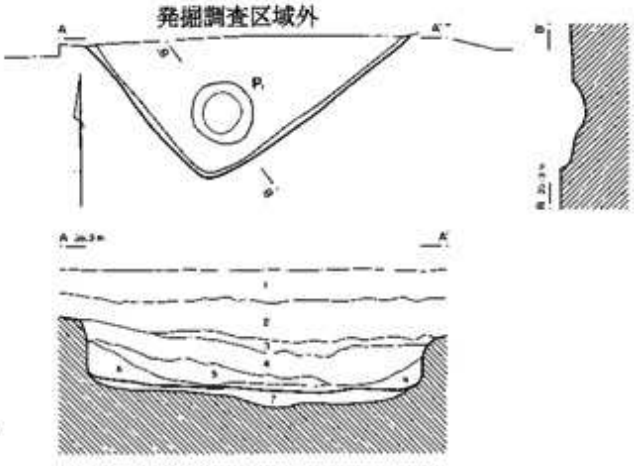


第63図　第24号住居跡出土遺物（2）

第24号住居跡出土遺物（第62・63図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏	14.5	4.2		AA'B	A	橙	90%	覆土
2	坏	(14.3)	2.9	(10.7)	AA'BB'C	C	灰赤	25%	覆土
3	坏	13.0	3.5		AA'BC	B	にぶい赤褐	70%	覆土
4	坏	13.0	3.3		AA'B	A	明赤褐	90%	覆土
5	坏	13.2	3.6		AA'BC	A	橙	80%	覆土　C粒子多
6	坏	13.1	3.5		AA'BC	B	赤褐	70%	カマド　C粒子多
7	坏	11.8	3.4		AA'B	A	橙	90%	覆土
8	坏	12.5	3.6		AA'BC	A	橙	80%	覆土
9	坏	(13.7)	3.4		AA'BC	B	暗赤褐	50%	覆土
10	坏	(13.9)	3.3		AA'BC	B	にぶい赤褐	50%	覆土　C粒子多
11	坏	12.8	3.3		ABB'C	B	にぶい赤褐	70%	覆土　C粒子多
12	坏	12.5	3.0		AA'B	B	明赤褐	90%	カマド
13	坏	14.0	3.2		AA'BB'	A	にぶい橙	50%	覆土
14	坏	(13.7)	3.8		AA'BB'	A	橙	40%	覆土
15	坏	(13.0)	3.5		AA'BC	A	橙	50%	覆土　C粒子多
16	坏	13.0	3.3		AA'BB'C	A	橙	70%	覆土
17	坏	(13.7)	2.9	(9.0)	AB'C	B	にぶい赤褐	20%	P 2
18	坏	(14.0)	3.4		AA'BC	A	赤	30%	覆土　暗文
19	坏	(13.2)	4.0	7.6	AA'BC	C	明赤褐	50%	覆土　底部全面篦削り　C粒子多
20	坏	13.4	3.4	5.3	AA'BE	A	灰	60%	覆土　底部ヘラケズリ
21	坏	(14.1)	3.8	7.5	AA'B	A	暗緑灰	50%	覆土　底部・外縁ヘラケズリ
22	坏	(13.6)	4.1	7.3	AA'BC	B	黄灰	50%	覆土　底部手持ちヘラケズリ　A粒子多

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
23	坏	13.6	3.6	8.1	AA′BE	A	灰	60%	覆土　底部へラケズリ
24	坏	(13.3)	3.7	7.0	AA′B	B	灰白	40%	覆土　底部へラケズリ
25	坏	14.3	3.7	9.8	AA′BCD	A	オリーブ灰	90%	№1　底部全面篦削り　内面ロクロ痕
26	坏			7.2	AA′BD	B	黄灰	40%	覆土　底部へラケズリ
27	高台坏			12.0	AA′BD	A	暗青灰	90%	覆土
28	高台坏	(10.6)	4.0	(7.8)	AA′	A	暗緑灰	25%	覆土　内面ロクロ痕
29	高台坏			(10.8)	AA′BC	B	灰	40%	覆土
30	坏	(19.2)			AA′B	A	灰白	20%	覆土
31	蓋	11.8	3.0	(12.5)	AA′B	A	灰白	30%	P 2
32	蓋	20.0			AA′BE	A	灰	70%	覆土
33	蓋				AA′BC	C	明赤褐	30%	覆土　C粒子多
34	甕	24.0			AA′BC	A	明赤褐	70%	覆土
35	鉢	(19.6)			AA′BC	A	明赤褐	20%	P 4
36	甕	20.5			AA′BC	A	明赤褐	30%	覆土
37	甕	(13.0)			AA′BC	A	暗赤褐	30%	覆土
38	甕	(13.8)	14.2	(6.0)	AA′BC	B	暗赤褐	40%	覆土
39	甕			4.2	AB′C	A	赤褐	30%	覆土
40	台付甕			(10.5)	AA′BB′C	A	赤	60%	覆土
41	壺				AA′B	A	暗灰	20%	覆土
42	壺	(11.1)			AA′BC	A	暗青灰	30%	覆土
43	壺				AA′BD	A	灰	20%	覆土
44	甕			16.0	AA′BC	A	暗青灰	30%	覆土　底部・外縁へラケズリ
45	高　盤				AA′BC	A	黄灰	50%	覆土
46	羽　口				AA′BB′C	A	暗灰		覆土　先端部発泡し一部ガラス化
47	甕				AA′BC	A	赤褐		覆土
48	甕				AA′BC	A	赤褐		覆土
49	甕				AA′BC	A	赤褐		覆土
50	紡錘車					A		100%	直径3.2　円孔0.7　重さ52.38　材質滑石



第25号住居跡

1　灰褐色土　白色粒子（1㎜以下）・礫（5㎜～1㎝）をわずか　土器少量　粘性なく堅緻

2　茶褐色土　白色粒子（1～3㎜）多量　焼土・炭化粒子をまばら　土器少量　粘性なく堅緻

3　黒褐色土　灰・焼土・炭化物主体　茶褐色土を少量　白色粒子（1㎜以下）を少量　土器多量　粘性なく堅緻

4　暗茶褐色土　白色粒子（1㎜以下）多量　焼土・炭化粒子をまばら　若干粘性があり堅緻

5　赤褐色土　焼土・炭化物を基本　淡黄褐色粘土をブロック状　粘性がありやわらかい

6　暗茶褐色土　白色粒子（1㎜以下）多量　焼土・炭化粒子をわずか　4によく似る　若干粘性があり堅緻

7　黒灰色土　黄褐色土ブロック（5㎜～1㎝）多量　炭化物多量　粘性が強く堅緻　掘り方部分と思われる

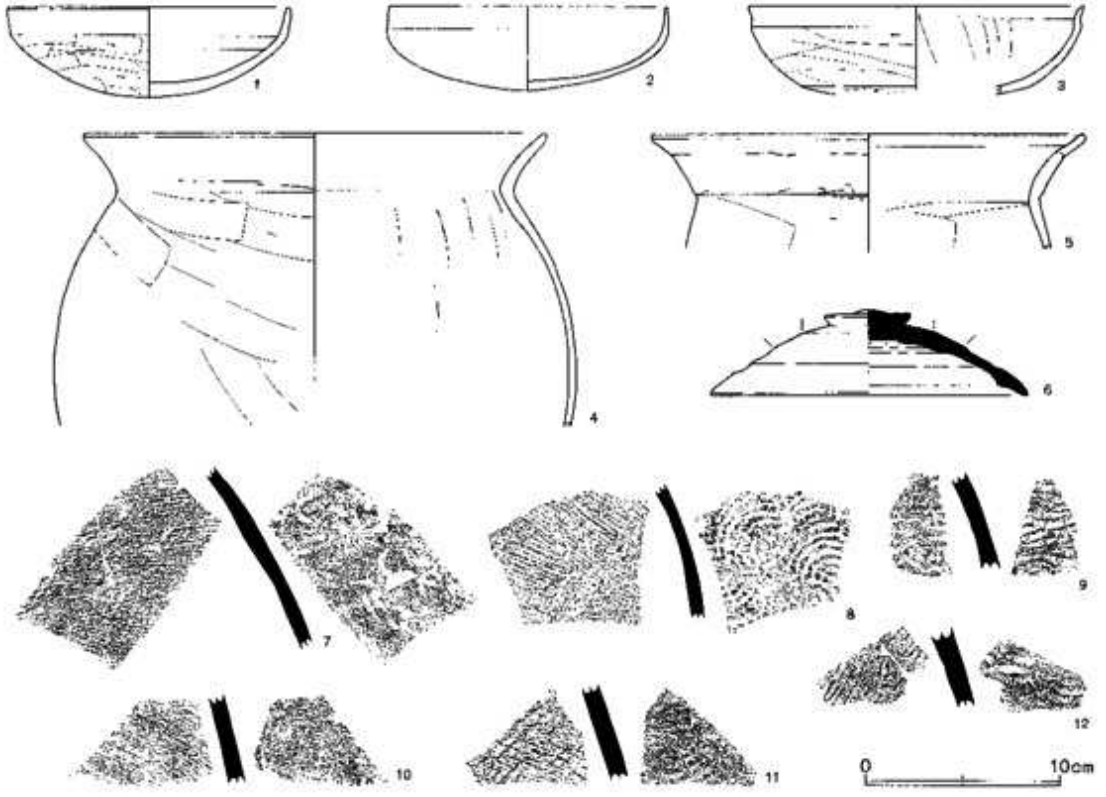
0　2m

第64図　第25号住居跡

第25号住居跡（第64図）

の－101－12グリッドに位置する、大半が調査区域外にあり南側のコーナーのみ検出できた。形態は方形をなすと思われるが、規模は不明である。カマド等は確認されずコーナー部に直径50cm、深さ約10cmの円形で浅いピットが検出された。床面は中央がごく浅く窪む他は概ね平坦である。

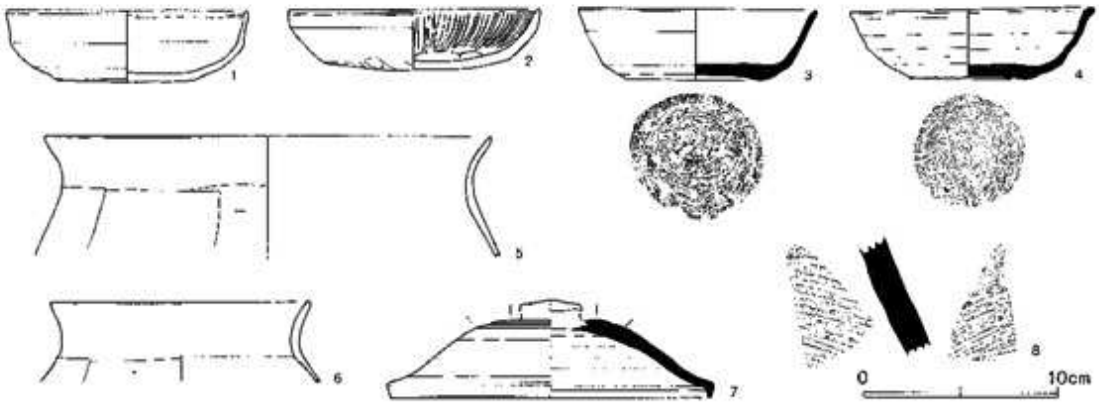
出土遺物は、土師器小破片が多い。6は内面に明瞭なロクロ痕を残し、口唇部内面に返りを持つ。3は、外反する短い口縁部を持ち、内面に細く荒い暗文が認められる。



第65図　第25号住居跡出土遺物

第25号住居跡出土遺物（第65図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(14.6)	4.7		ABC	A	明赤褐	40%	覆土
2	坏	(14.4)	4.3		AA'BB'	B	明赤褐	30%	覆土
3	坏	(17.2)			AA'BC	A	赤	20%	覆土　暗文
4	甕	(24.0)			AA'BC	A	明赤褐	20%	覆土
5	甕	(22.3)			AA'BC	B	明赤褐	20%	覆土　C粒子多
6	蓋	(16.3)	4.4		AA'B'	C	黒褐	40%	覆土　内面ロクロ痕
7	甕				AA'	A	暗赤灰		覆土
8	甕				AA'	A	黄灰		覆土
9	甕				AA'C	A	暗灰		覆土
10	甕				AA'BC	A	灰		覆土
11	甕				AA'	A	灰		覆土
12	甕				AA'	A	灰		覆土



第66図　第26号住居跡出土遺物

第26号住居跡出土遺物（第66図）

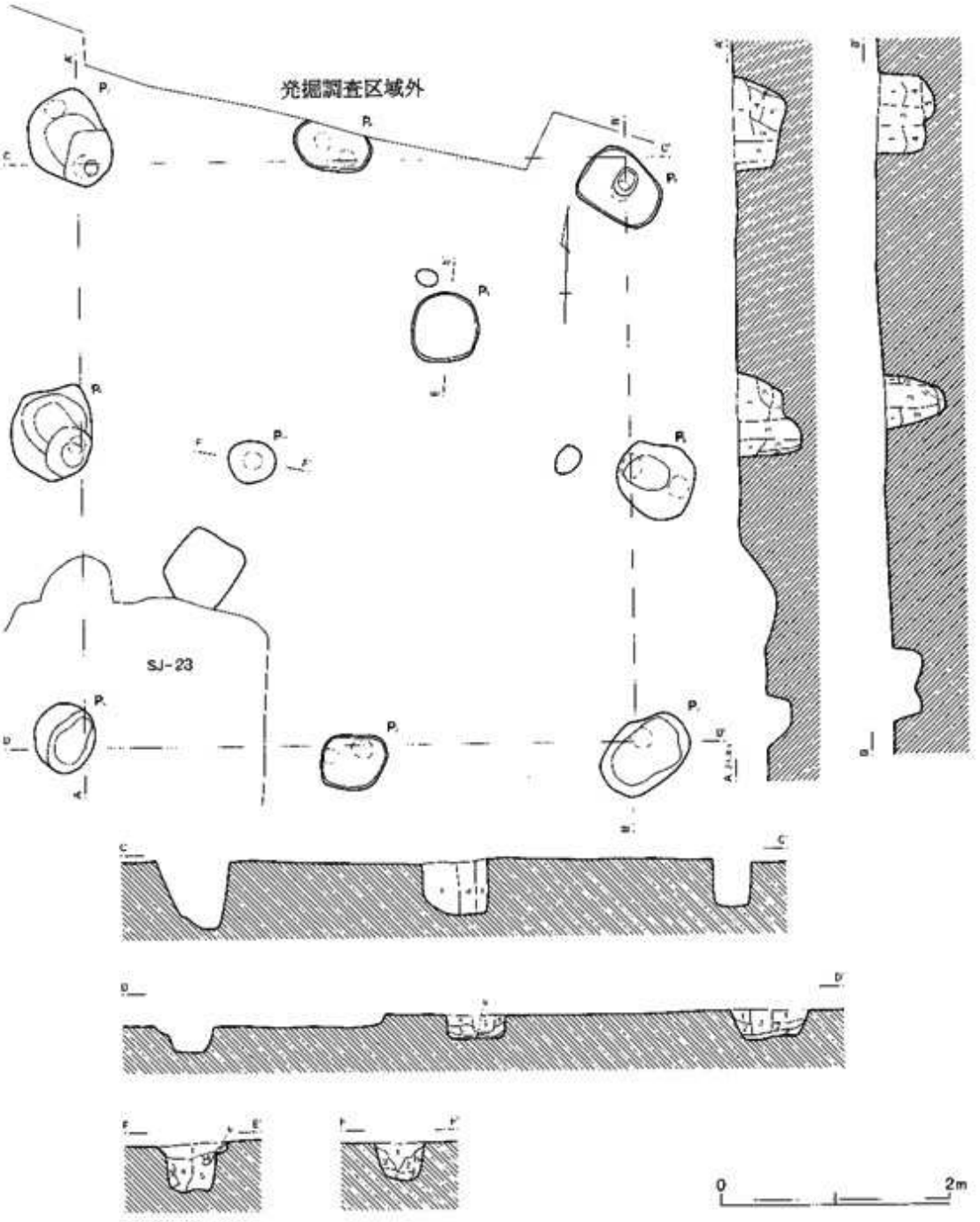
番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏	12.5	3.7	7.4	AA'BB'C	B	明赤褐	70%	覆土
2	坏	13.0	3.1	9.5	AA'BC	A	赤	80%	覆土　暗文
3	坏	(12.4)	3.7	7.0	AA'B	C	灰	60%	覆土　底部糸きり　保存状態不良
4	坏	12.6	3.7	6.0	AA'BE	A	灰	90%	No.1　底部糸きり
5	甕	(23.0)			AA'BB'C	A	にぶい橙	20%	覆土
6	甕	(13.3)			AA'BB'C	B	橙	20%	覆土
7	蓋	(16.5)	5.0		AA'BC	C	灰赤	20%	覆土　頂上部ヘラケズリ
8	甕				AA'BC	A	青灰		覆土

第26号住居跡（第51図）

の－101－10・15グリッドに位置し、西コーナー部分を第18号住居跡と重複する。土層断面の観察および第18号住居跡のカマドを切ることから本跡のほうが新しいことがわかる。形態は方形と思われるが、北側が調査区域外になるために全体の規模は不明である。南壁は約4.2mと推定され、深さ25cmで、主軸方向はN－67°－Eである。カマド・ピット等は確認されなかった。床面は、中央がやや窪み東側に向かって傾斜している、第18号住居跡より僅かに低い。

出土遺物は、坏（4）が床面より10cm程浮いた状態で出土した、また2は、放射状と弧状の暗文をもつ。

2　掘立柱建物跡



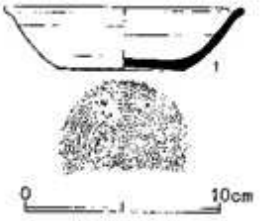
第1号掘立柱建物跡

1　暗茶褐色土　焼土・炭化物粒子多量　上部に地山ブロック多量
2　暗茶褐色土　1＋地山ブロック（大形）
3　暗褐色土　柱痕　木質が粘土化　しまり弱
4　暗褐色土　1に近似　焼土・炭化物なし
5　暗褐色土　4＋地山ブロック（5cm）
6　暗褐色土　4＋地山粒子（5～10mm）多量

第67図　第1号掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第67図）

ね—71—14・15グリッドに位置する。規模は桁行2間、梁間2間で、柱間寸法は2・40mである。主軸方向は、南北を指す。柱穴の形態は長方形と楕円形で、深さは30cmないし60cmである。柱痕はP_8以外で確認され、直径約15cmである。P6には柱痕の最下部に、根板が腐食した痕跡と思わる部分が確認された。覆土上層には焼土と炭化物を多量に含む。また掘り方が二重の柱穴については、黒色土の柱状の堆積があることから、建て替えの可能性が考えられる。出土遺物はP_3より坏（1）が出土した。



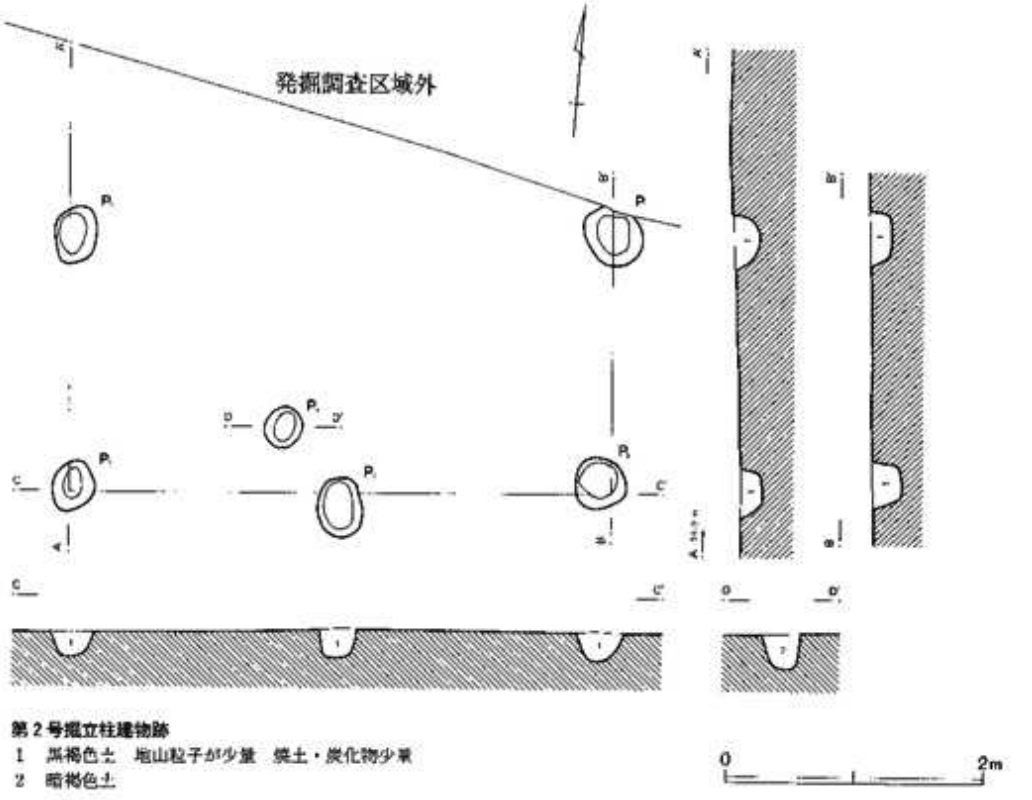
第68図　第1号掘立柱建物跡出土遺物

第1号掘立柱建物跡出土遺物（第68図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏	12.4	3.3	6.5	AA'BD	A	灰	50%	P33　底部糸きり

第2号掘立柱建物跡（第69図）

ね—71—13・14グリッドに位置する。第1号掘立柱建物跡の東に2mの間隔をおいて並行している。東西の2間が検出され、南北は調査区外へ延びる。柱間寸法は2.0mである。柱穴の形態は楕円形で、深さ約20cmである。覆土に焼土と炭化物が少量含まれる。柱痕は確認できなかった。出土遺物はない。



第2号掘立柱建物跡
1　黒褐色土　地山粒子が少量　焼土・炭化物少量
2　暗褐色土

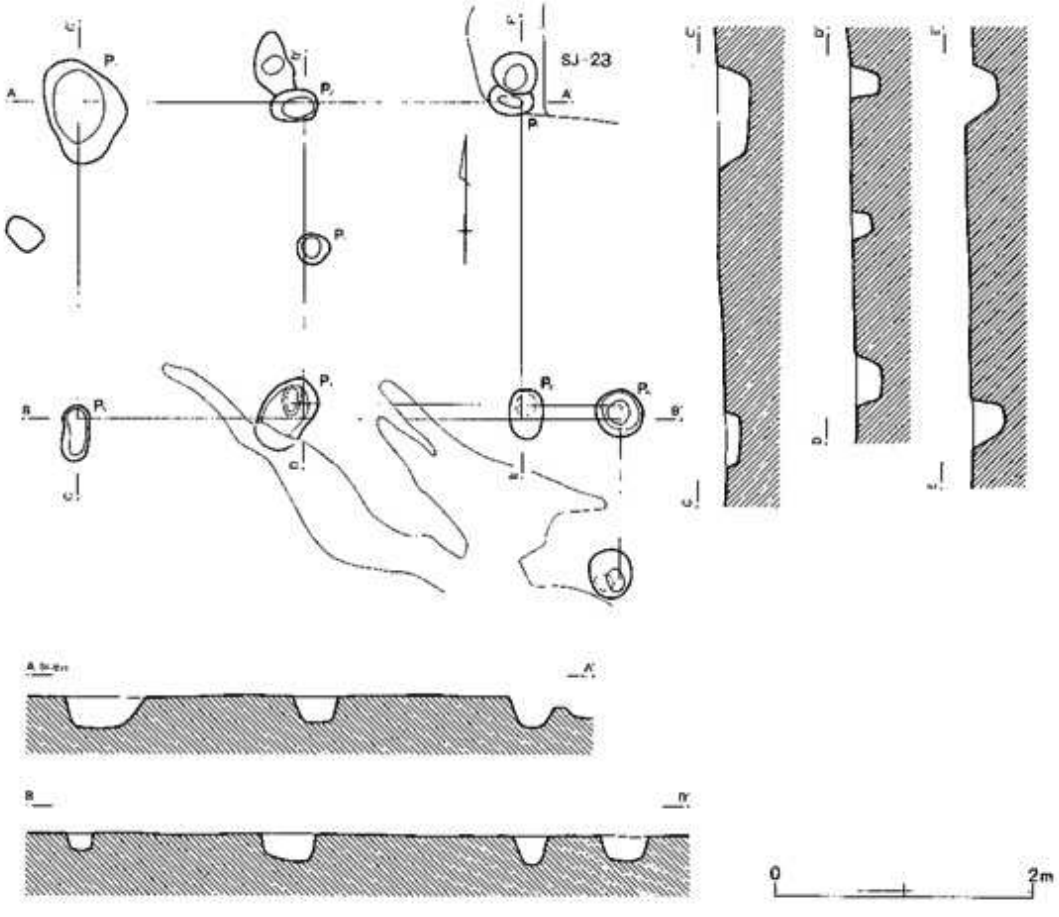
第69図　第2号掘立柱建物跡

第3号掘立柱建物跡（第70図）

ね—71－10、ね—72－6グリッドに位置する。第1号掘立柱建物跡の南西に1.2mの間隔をおいて並行している。規模は桁行2間、梁間1間で、柱間寸法は1.8mと2.40mである。主軸方向は、東西を指す。柱穴の形態は楕円形で、深さ15～25cmである。柱痕は確認できなかった。P_3とP_6の中間にP_7があり、棟持柱の可能性がある。P_8・P_9は軸上にあるが伴うかは不明である。出土遺物はない。

第4号掘立柱建物跡（第71図）

の—102—5・9・10グリッドに位置する。第22号住居跡と重複するが新旧は不明である。規模は桁行2間、梁間1間で、柱間寸法は3.3mである。主軸方向は、N－13°—Eである。柱穴の形態は円形で、深さ15～25cmである。柱痕は確認できなかった。出土遺物はない。



第3号掘立柱建物跡

P 2
暗褐色土　焼土・炭化粒子多量　下位地山ブロック

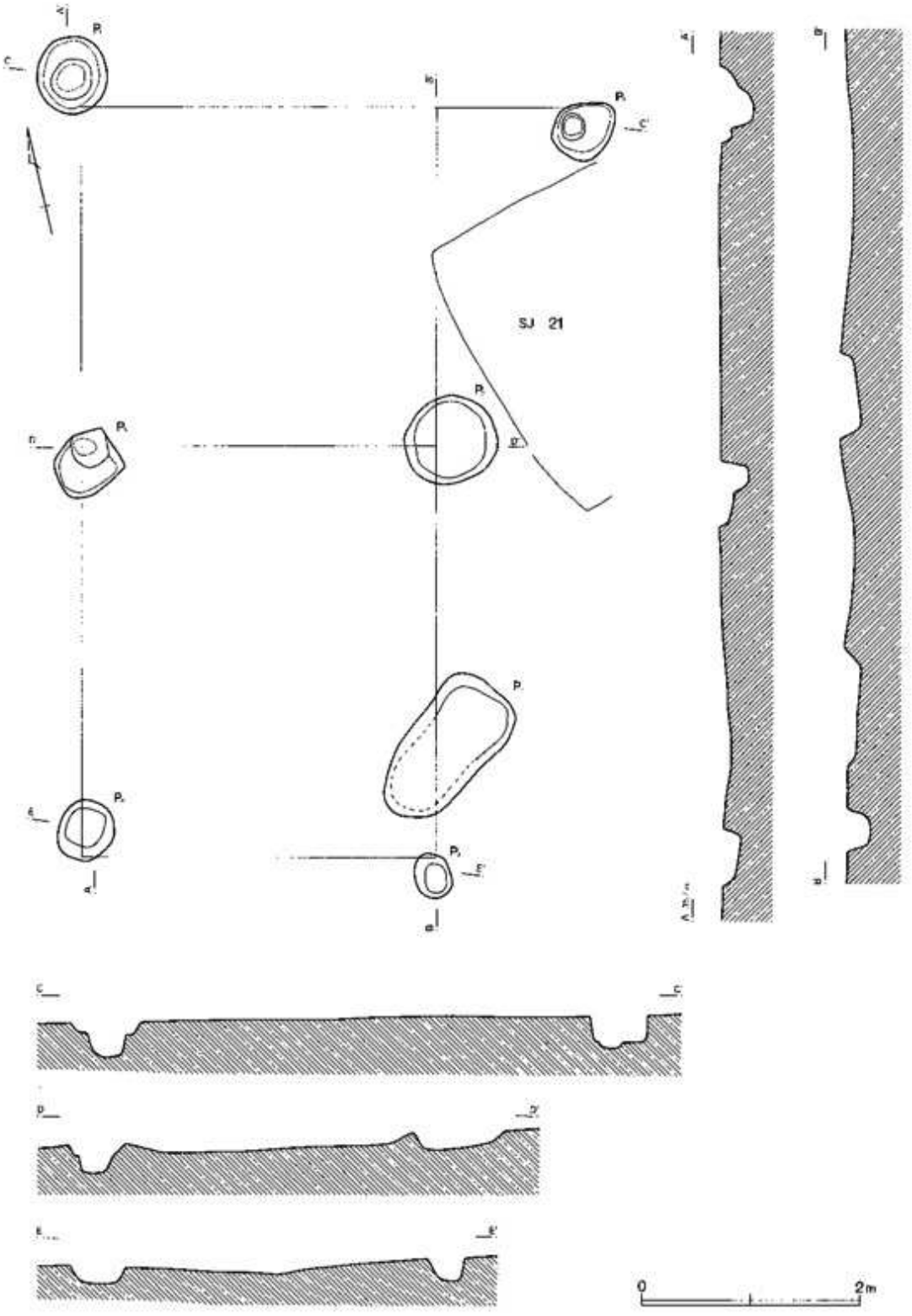
$P_{4,5}$
暗褐色土　焼土・炭化粒子少量　下位地山ブロック

$P_{6,7}$
暗茶褐色土　地山粒子極少

P_8
暗茶褐色土　焼土・炭化粒子なし　上位地山ブロック

P_9
黄褐色土　地山土主体　焼土粒子極少

第70図　第3号掘立柱建物跡



第71図　第４号掘立柱建物跡

3　井戸跡

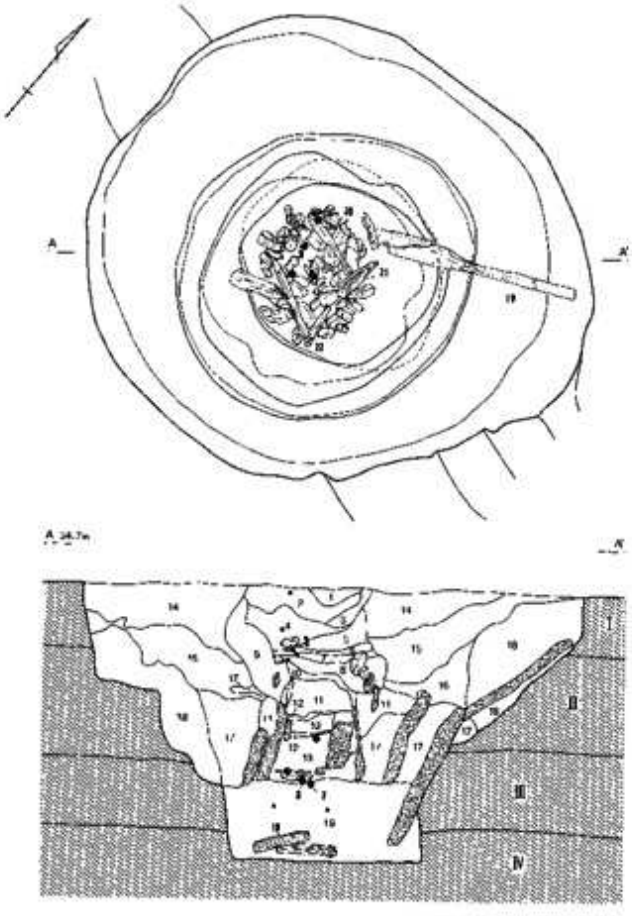
第1号井戸跡（第72図）

ね－71－10グリッドに位置する。平面形は楕円形で、直径約2.58m、深さ約1.41mである。掘り込みは、上位を垂直、中位はなだらか、下位で垂直に掘られ、基本土層Ⅳ（青灰色土）に達していて、現在でもこの地点で湧水がある。確認面から70cmのところで井戸側が確認できたが土層断面の観察から上面まで設置したことがわかる。井戸側の構造は、容器底板を二次利用した板材(17)などを用いて一辺約50cmの方形に組み、裏側を30本程度の杭材で押えて固定する、さらに四隅には角材もしくは割材が用いられる。杭材の先端は何れも鋭く加工される(20～23)。覆土は1～13が井戸側内部で、14～18が掘り方の埋土である。13層には人頭大の河原石を含み、その下の19層は青黒色粘土と黒灰砂が混じる、湧水が激しく断面の観察はできなかった。さらに、最下面に曲げ物(19)が据えられる。

出土遺物は須恵器が主体で、坏・高台坏・高台皿のほか壺（12）・長径瓶（13）などがある。13は円形の底板で側縁に目釘穴が見られる。19の曲物側板は、合わせ面が桜皮で綴じられ、内面には平行のケビキ線が入れられる。

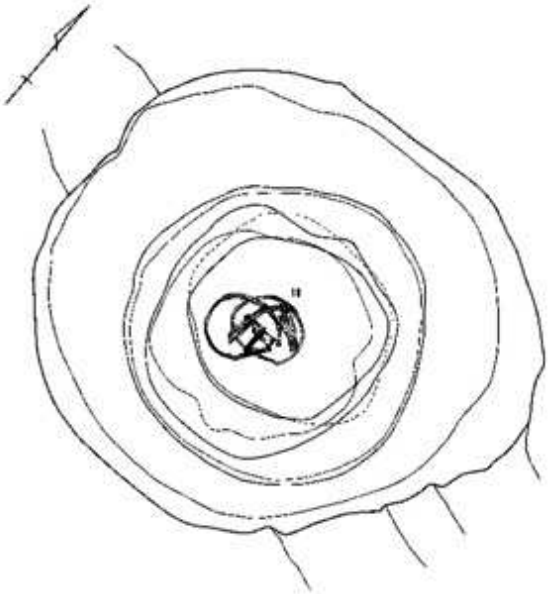
第1号井戸跡出土遺物（第73・74図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	成形	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.4)	3.2	(8.8)	AA'BC	A	橙	40%	覆土　口縁部横撫で、体部外面指押え
2	坏			(10.0)	AA'BC	A	赤	30%	覆土　底部へラケズリ
3	坏	(14.7)			AB	A	暗灰	20%	覆土　No.4
4	坏	(12.0)	3.4	(6.7)	AA'B	A	灰	25%	覆土　底部糸きり
5	坏	(13.4)	3.7	(7.2)	AA'BD	C	灰	25%	覆土　底部糸きり　A'粒子大粒　器内外多
6	坏	(12.9)	4.0	5.8	AA'BD	C	灰	30%	覆土　器内外面多孔　底部糸きり
7	坏	(15.1)	6.8	(8.3)	AA'BCD	B	灰	20%	覆土　No.3　D粒子大きい
8	高台坏	(15.0)	7.4	8.1	AA'B	B	灰	40%	覆土　A'粒子大、多量　器内外面多孔　糸
9	高台付	(13.5)	2.6	7.0	AA'BD	A	灰	30%	覆土　D粒子大きい
10	高台坏			8.9	AA'B	B	灰白	60%	覆土　底部糸きり
11	蓋	(15.2)	2.8	(6.0)	AA'BD	A	暗青灰	40%	覆土　A'、D粒子大きい
12	壺	(19.5)			AB	B	暗緑灰	30%	土壙　第2号井戸遺物に接合　肩部に自然
13	長頸瓶				AA'B	A	灰	30%	覆土　肩部に自然釉　胎土緻密B粒子多い
14	甕			15.3	AA'C	A	暗灰	25%	覆土　A'粒子大　多量
15	鉢	(31.4)			AA'BCD	A	暗灰	20%	覆土　A'粒子大　多量
16	甕	(42.6)			AA'BD	A	暗灰	20%	覆土　A'粒子大　多量
17	杭								井戸側　長さ39　直径7.5　材質ヒノキSAT-6
18	曲物								直径36.5　材質ヒノキ　SAT-4
19	杭								井戸側　長さ53.0　直径12.5　材質クリSAT-2
20	杭								井戸側　長さ41.0　直径4.0
21	杭								井戸側　長さ39.0　直径7.5　材質クリSAT-3
22	杭								井戸側　長さ27　直径4.5　材質クヌギ節　SAT-1

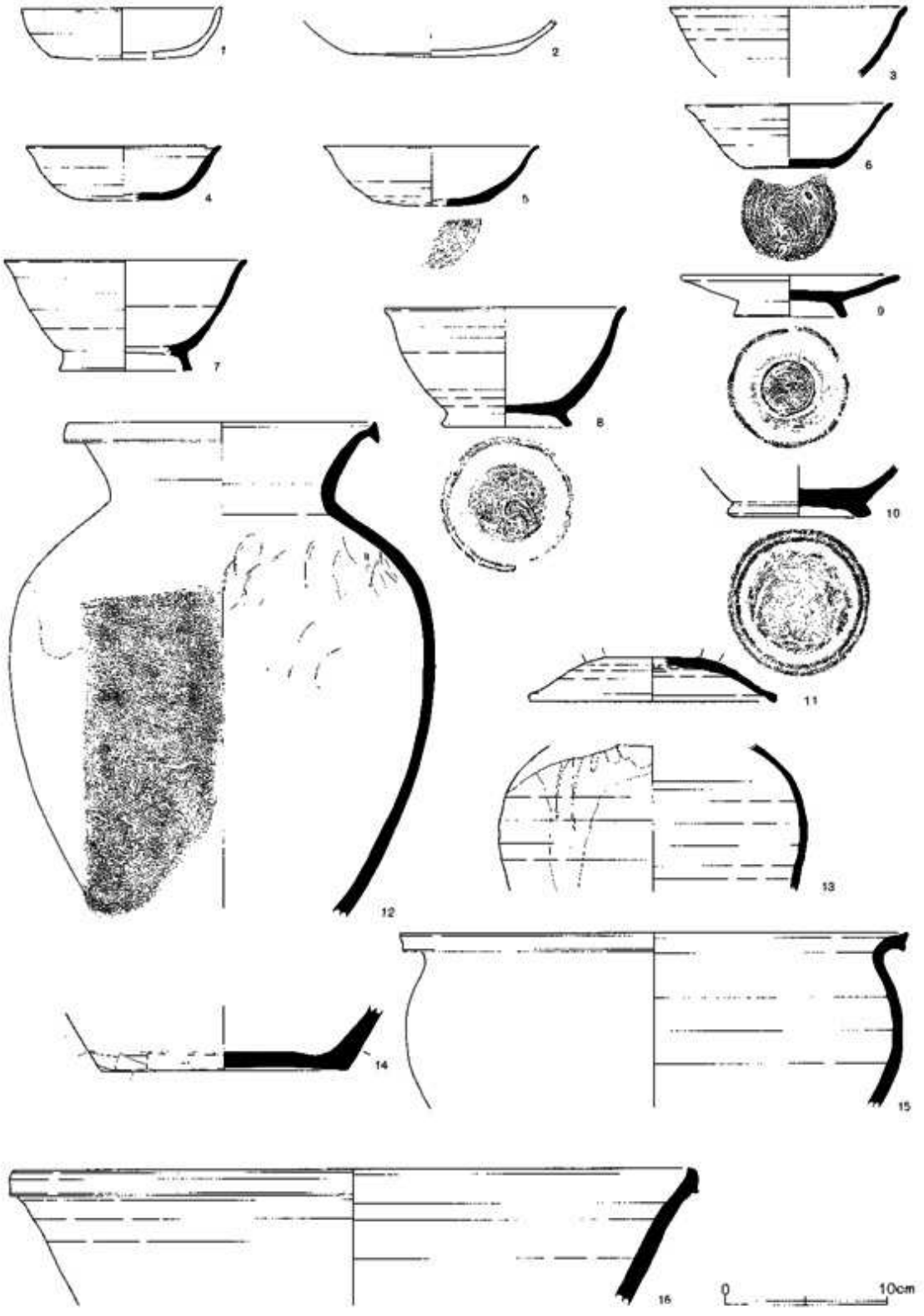


第1号井戸

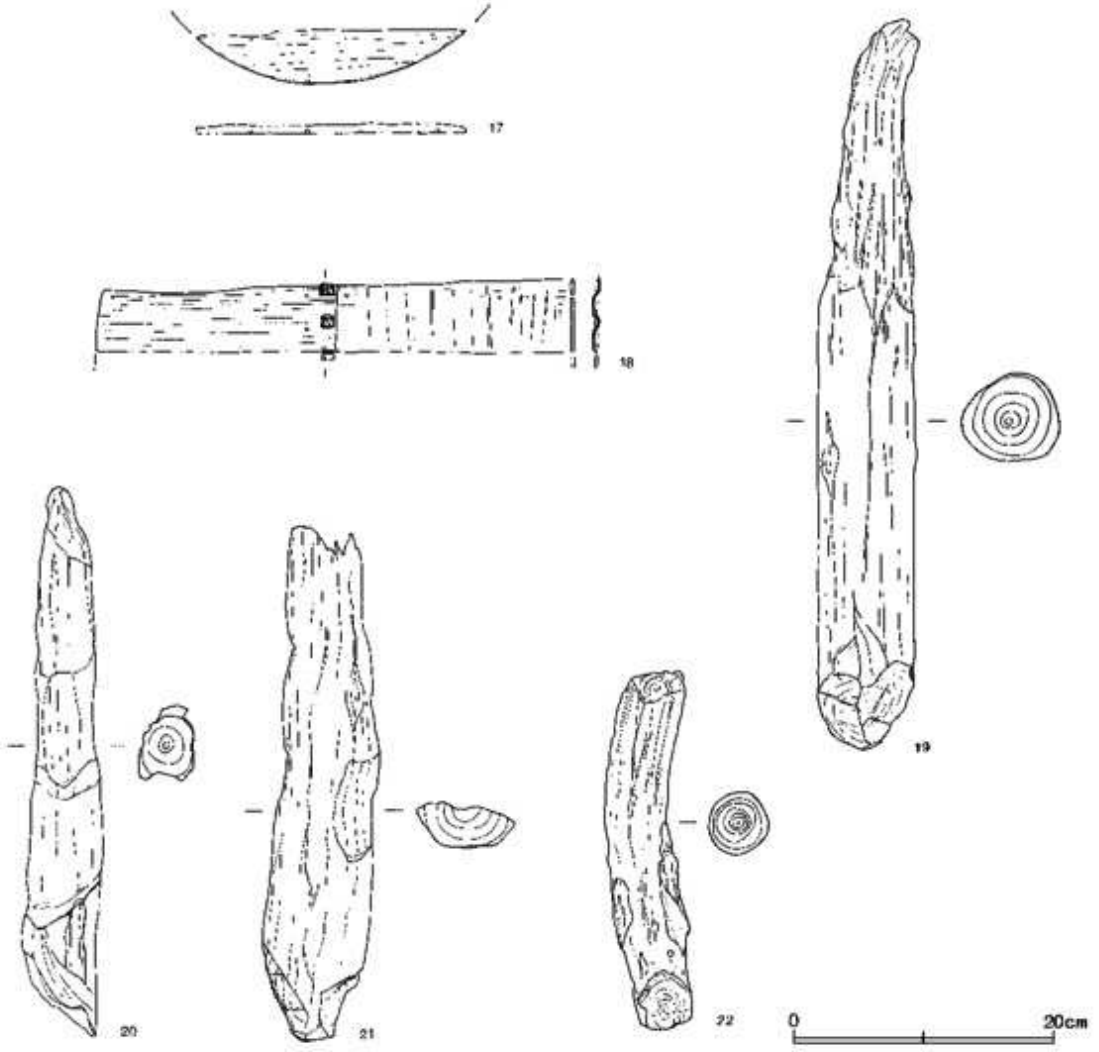
1	黒褐色土	2の砂粒子（0.8cm既状）
2	オリーブ黄色土	ガラス質粒子・長石微粒子
3	黒褐色土	1に似る　やや緊くしまる
4	黒褐色土	明赤褐色土粒子（1cm前後）・焼土粒子
5	黒褐色土	炭化物（1cm以上）・オリーブ黒色土粒子（0.3cm）多量　若干粘性
6	黒褐色土	基本的に5に同じ　炭化物なし
7	黒褐色土	基本的に5に同じ　粘性強
8	黒褐色土	底面全体に炭化物層（3cm）
9	黒褐色土	樹枝状にタテに鉄分
10	灰色土	粘性強
11	暗灰色土	水分多　粘性強
12	黒色土	水分多　粘性強　炭化物が層状に広がる
13	暗オリーブ灰色土	水分多　粘性強
14	黒褐色土	樹枝状に鉄分　浅黄色土ブロック（2～8cm）地山土縁辺に多量 オリーブ黒色土粒子（0.3cm）・白色パミス
15	黒褐色土	浅黄色混在
16	浅黄色砂	地山土
17	青灰色粘土	粘性弱
18	オリーブ黄色土	地山土埋戻し　よくしまる
19	暗灰色粘土	粘性強　しまりなし



第72図　第1号井戸跡



第73図　第１号井戸跡出土遺物（１）

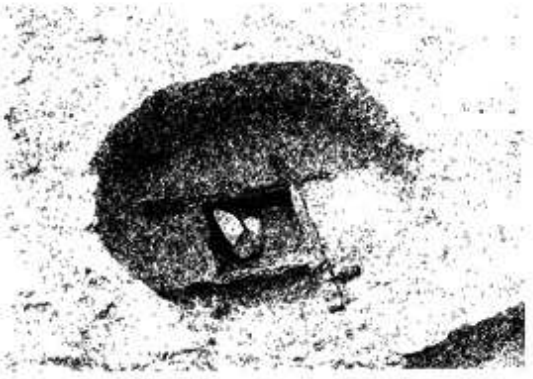


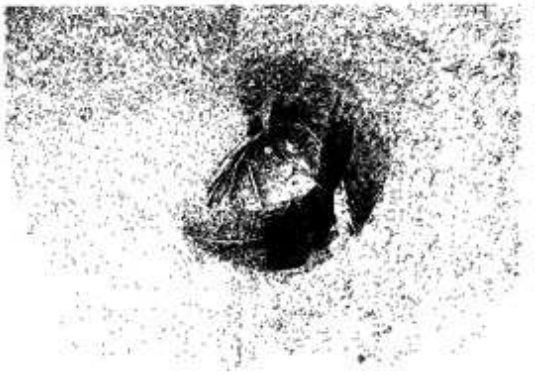
第74図　第１号井戸跡出土遺物（２）

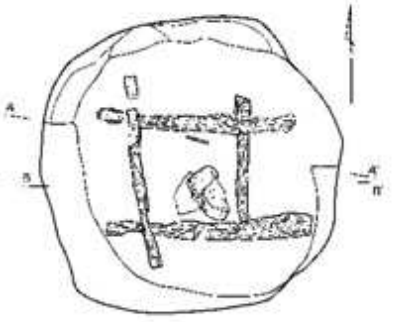
第２号井戸跡（第75図）

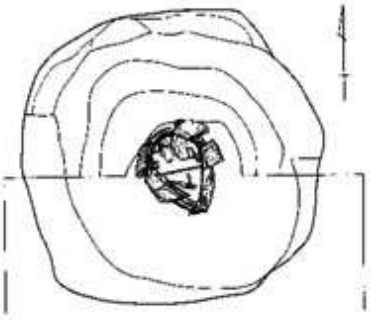
ぬ－69－21・ね－69－３グリッドに位置する。規模と形態は、直径約1.6m、深さ約1.2mの円形で第１号井戸跡と同様に基本土層Ⅳの上面に達している。掘り込みは、上半が垂直、中位から底面にかけて斜めに掘り込まれる、底面で直径が約60cmとなる。確認面から約70cmの地点で井戸側が検出された。井戸側の構造は、長さ約1m前後、厚さ10～15cmの両端を凹形に加工した材やほぞ穴を開けた材（17）を井桁状に組み合わせたもので、３～４段が積み上げられていたものと思われる。土層断面のでは、確認面下から15cmほどまで縦に走る腐植土層８がそれにあたる。地表まで達していたものかについては不明である。また、さらにその下層には、底面中央に曲げ物が据えられており、その周囲は井桁により外側から押えて固定された板材(11)・転用材（15）などが円形に覆う。施工の工程は、素掘りされた井戸の底面中央に、底を抜いた曲げ物を２～３段重ね、周りを板材と容器の底板などで覆い、外側に土を埋め戻す。さらに、その上に井桁を数段積み重ねて周囲を再度埋め戻して完成させている。

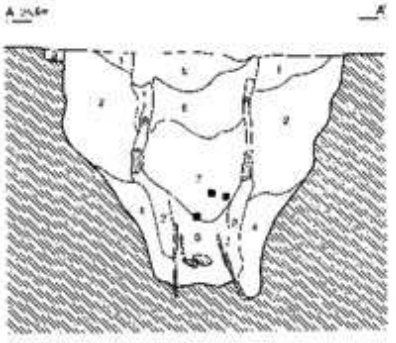
出土遺物は少ないが、須恵器甕が目立つ。13・14は曲物側板である、ともに下端部に目釘穴が開けられる、14は重ね部が桜皮で縦に綴じられる。15・16は容器の底板と思われ、形態がよく似ている。15は長径の端部が張りだし浅く丸みのある窪みが2か所確認できる。16は15より小ぶりでやや隅丸長方形を成すと思われる。両者とも外縁部に綴じ材の桜皮が残る、15には外周に穿孔がある。

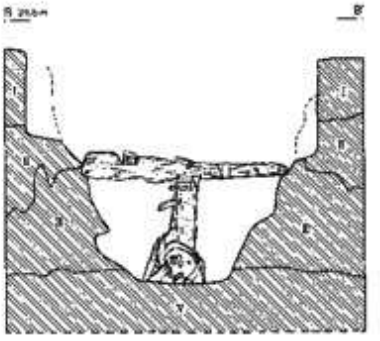












0　1m

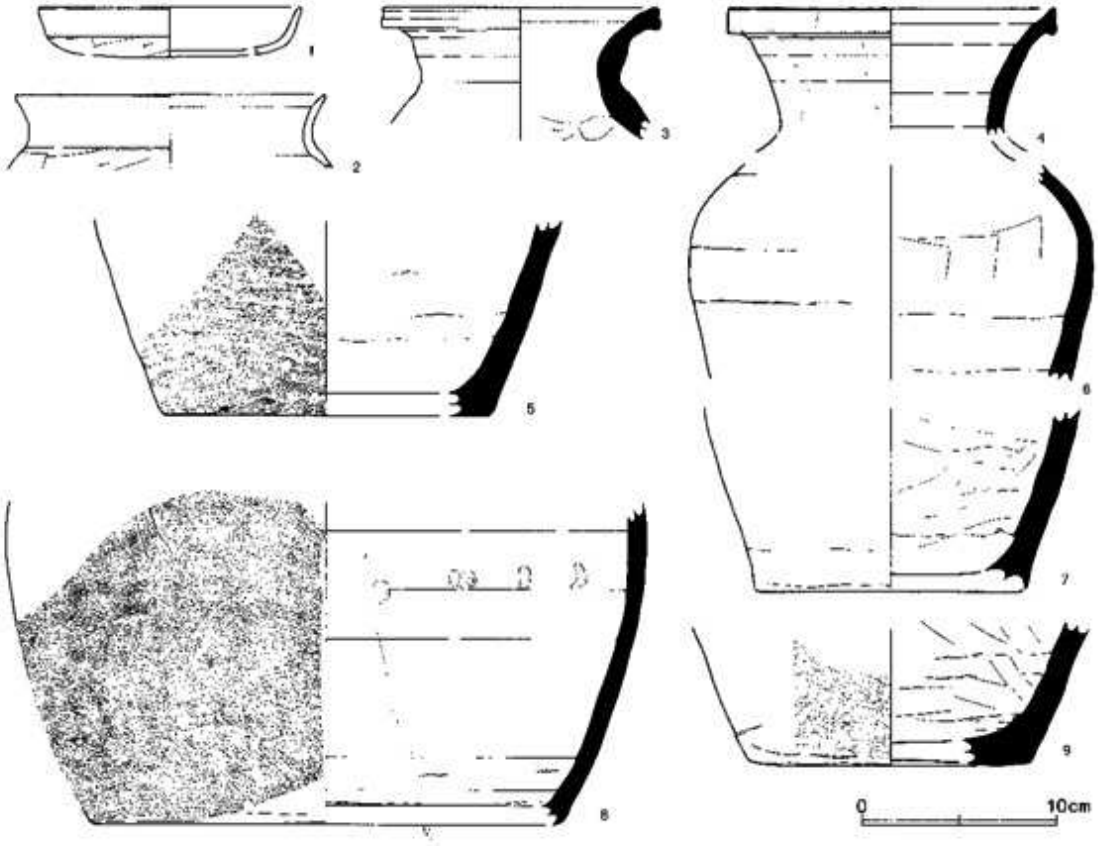
第2号井戸

1　暗褐色土　地山粒子ブロック（1cm）多量　焼土微量　炭化物粒子　充填土
2　暗褐色土　1と同質　地山粒子ブロック（1～5cm）と褐色土が同量
　部分的に地山と褐色土が互層となり壁側から内側へ傾斜
　掘り上げ土で埋め戻した結果の充填土
2'　黒褐色土　2・9に準ずる　木質はなく曲物をおさえる板材の固定土
　5の土が入り込む充填土
3　黄褐色土　地山漸移層
4　青灰色土　ほとんど地山土体　砂質粘質土（充填土）
5　茶褐色土　地山粒子少量　焼土粒子・炭化粒子わずか　土師・須恵器多量
6　茶褐色土　地山粒子・焼土粒子・炭化粒子・木片多量　粘性強
7　黒褐色土　地山粒子（青灰色粘質土化）・炭化粒子多量
8　暗褐色土　井戸枠板材痕　一部木質残る　粘性強
9　青灰色土　地山土・黒褐色土ブロック多量　粘土質

第2井戸基本土層

Ⅰ　黄褐色土　しまり強　鉄分黒斑粒子
Ⅱ　灰黄色土　しまり弱　砂質的　粘性強
Ⅲ　暗青灰色土　Ⅱと同質　粘性強　しまり弱
Ⅳ　青灰色土　基本的にⅢに同じ　より砂質

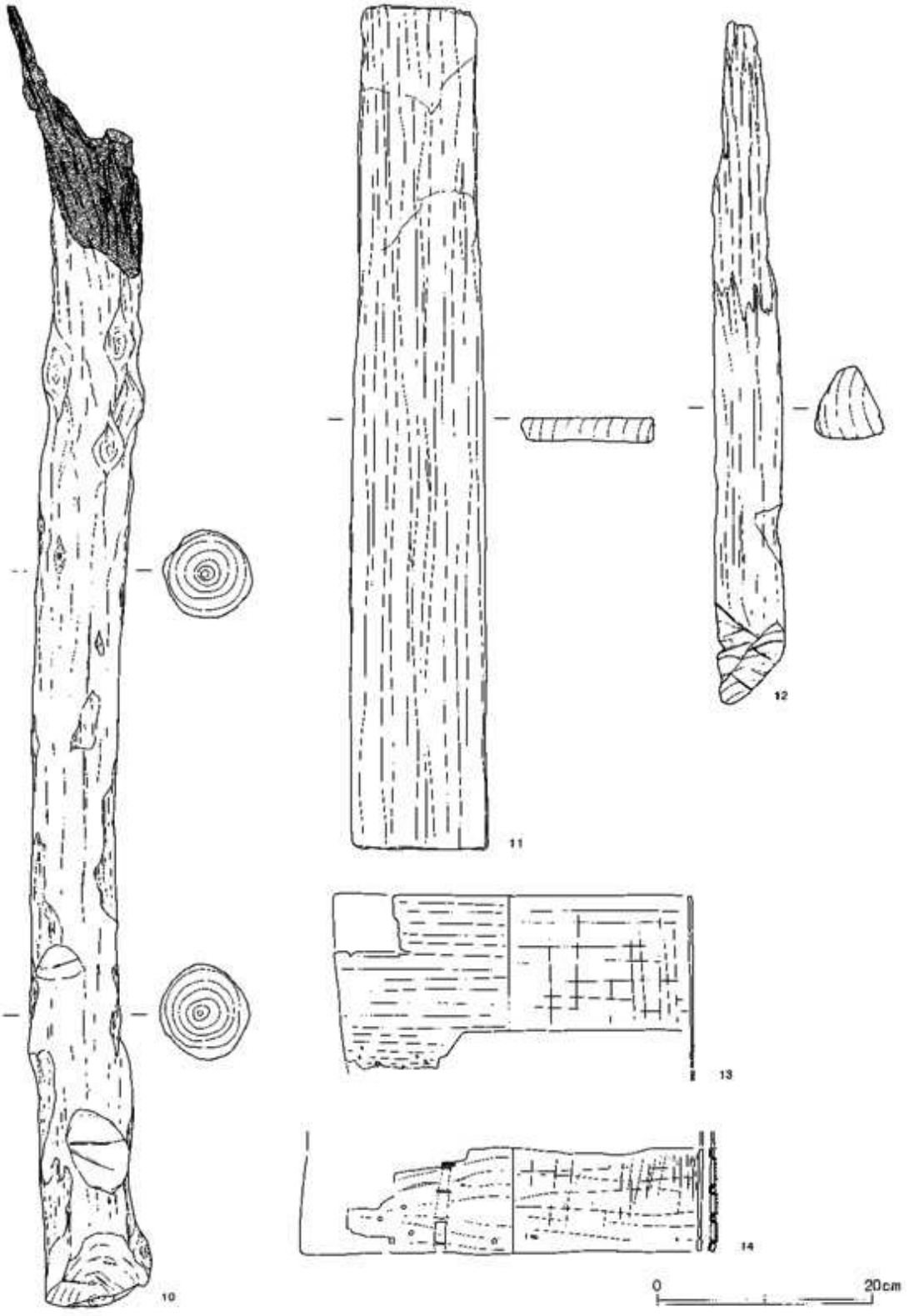
第75図　第2号井戸跡



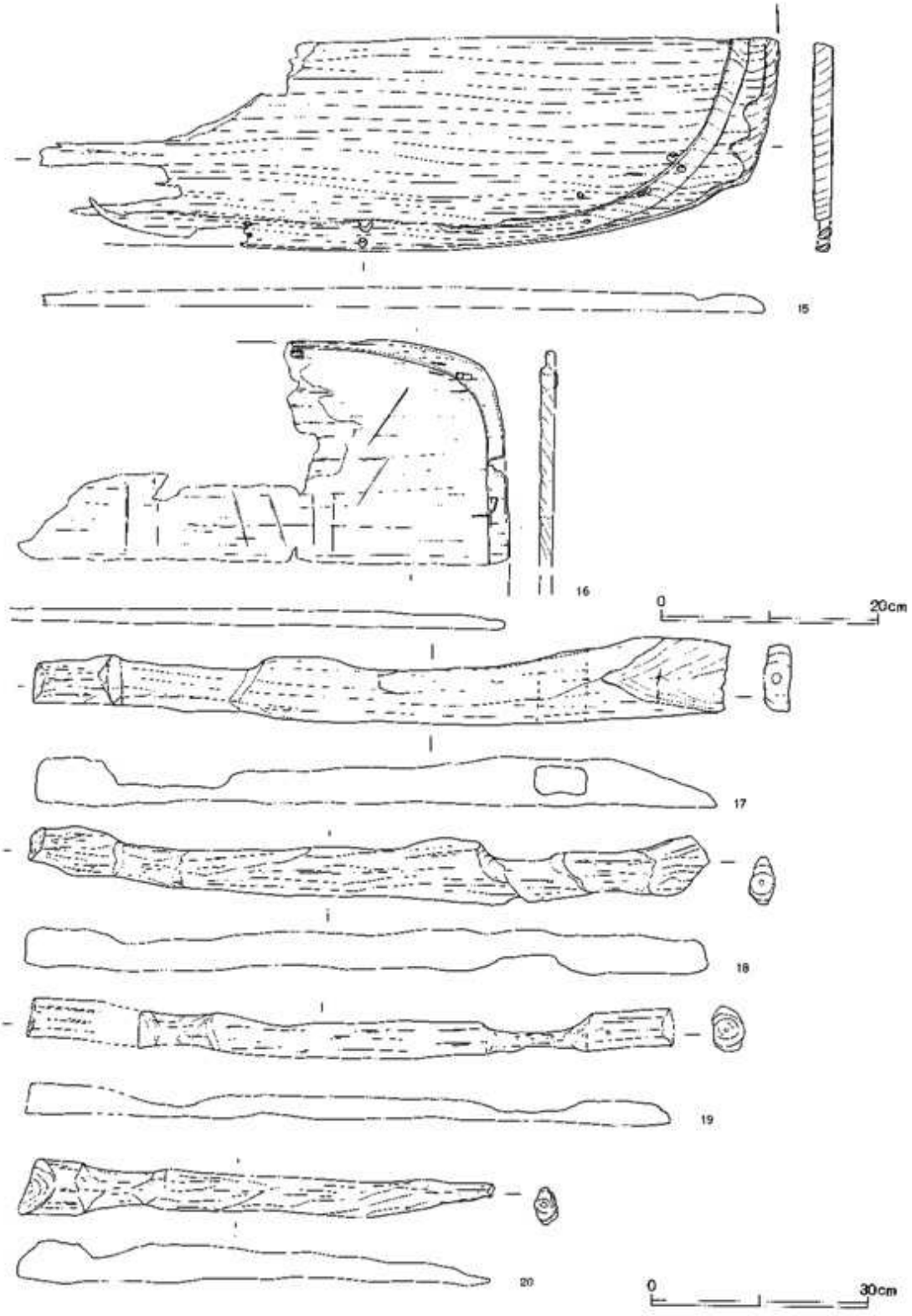
第76図　第２号井戸跡出土遺物（１）

第２号井戸跡出土遺物（第76～78図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏	(13.6)	2.6		AA'BC	A	橙	10%	覆土
2	甕	(16.0)			AA'BC	A	明赤褐	10%	覆土　砂粒小、多量
3	甕	(14.4)			AA'B	A	灰	30%	覆土　A'粒子大
4	甕	(16.9)			AA'B	A	灰	30%	覆土　A'粒子大　口縁部、頸部外面自然釉
5	甕			(17.0)	AA'B	B	灰白	20%	覆土　内外面横方向撫で　底部箆削り
6	壺				AA'B	A	灰	20%	覆土　A'粒子大　内面小口工具撫で
7	甕			(14.0)	AA'B	A	灰	30%	覆土　A'粒子大　内面横方向撫で
8	甕			(24.5)	AA'B	A	灰	20%	覆土　A'粒子大　外面叩き残す
9	甕			(14.6)	AA'B	A	青灰	20%	覆土　内面ヘラナデ　内外面自然釉
10	杭								長さ117.6　直径8　材質クリ　SAT-11
11	杭								長さ76.8　幅12.5　材質ヒノキ　SAT-13
12	杭								長さ62.0　材質クリ　SAT-9
13	曲　物								直径32.0　材質ヒノキ　SAT-7
14	曲　物								直径(35.0)
15	底　板								井戸側　材質スギ　SAT-8
16	底　板								井戸側　材質ヒノキ　SAT-5
17	井　桁								北　長さ105.0　ほぞ穴あり
18	井　桁								西　長さ103.0
19	井　桁								南　長さ98.0
20	井　桁								東　長さ72.0　材質クリ　SAT-12



第77図　第２号井戸跡出土遺物（２）



第78図　第２号井戸跡出土遺物（３）

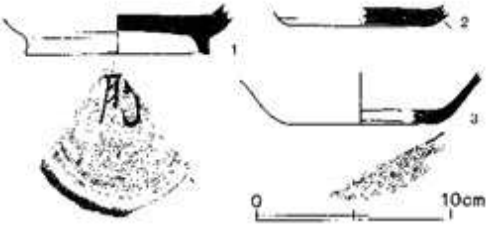
4　土　　壙

第1号土壙（第81図）

ね—74—3グリッドに位置する。形態は不整形で床面の高低差が激しい。規模は長径1.75m、短径66cm、深さ34cmである。主軸方向はN—47°—Eである。覆土は黒色土で、炭化物を多量に含み僅かに骨片を含む。出土遺物はなく時期は不明であが、噴砂を切って構築されることから概ね十世紀以降と思われる。また、その性格は覆土の状態から墓壙などが想定される。

第2号土壙（第81図）

ね—74—7・12グリッドに位置し第2号溝と重複する。形態は長楕円形で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は長径2.10m、短径90cm、深さ28cmである。出土遺物は少ないが、底部外面に墨書を持つ高台坏（3）が出土する。遺構の時期・性格とも不明である。



第79図　第2号土壙出土遺物

第2号土壙出土遺物（第79図）

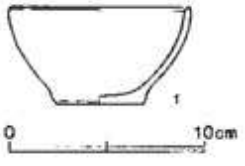
番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	高台坏			(9.5)	AA'BD	A	灰白	30%	覆土　底部糸きり　墨書
2	坏			(7.1)	AA'	A	灰	50%	覆土　底部ヘラケズリ
3	坏			(7.6)	AA'B	B	暗灰	20%	覆土　底部糸きり

第3号土壙（第81図）

ね—73—4・9グリッドに位置し礫層に切られる。形態は楕円形を呈する。規模は長径2.25m、短径1.30m、深さ30cmである。主軸方向はN—90°—である。出土遺物はなく時期・性格は不明である。

第4号土壙（第81図）

ね—70—1グリッドに位置する。形態は不整長方形で、壁は斜めに立ち上がり、床は概ね平坦である。規模は長径2.10m、短径1.05m、深さ10cmである。主軸方向はN—130°—Eである。出土遺物には鉢（1）と小破片で図示できなかったがS字状口縁甕、口縁部内面ヘラミガキの甕などがある。時期は、古墳時代前期の遺物以外出土していないので当期の遺構と考えられる。



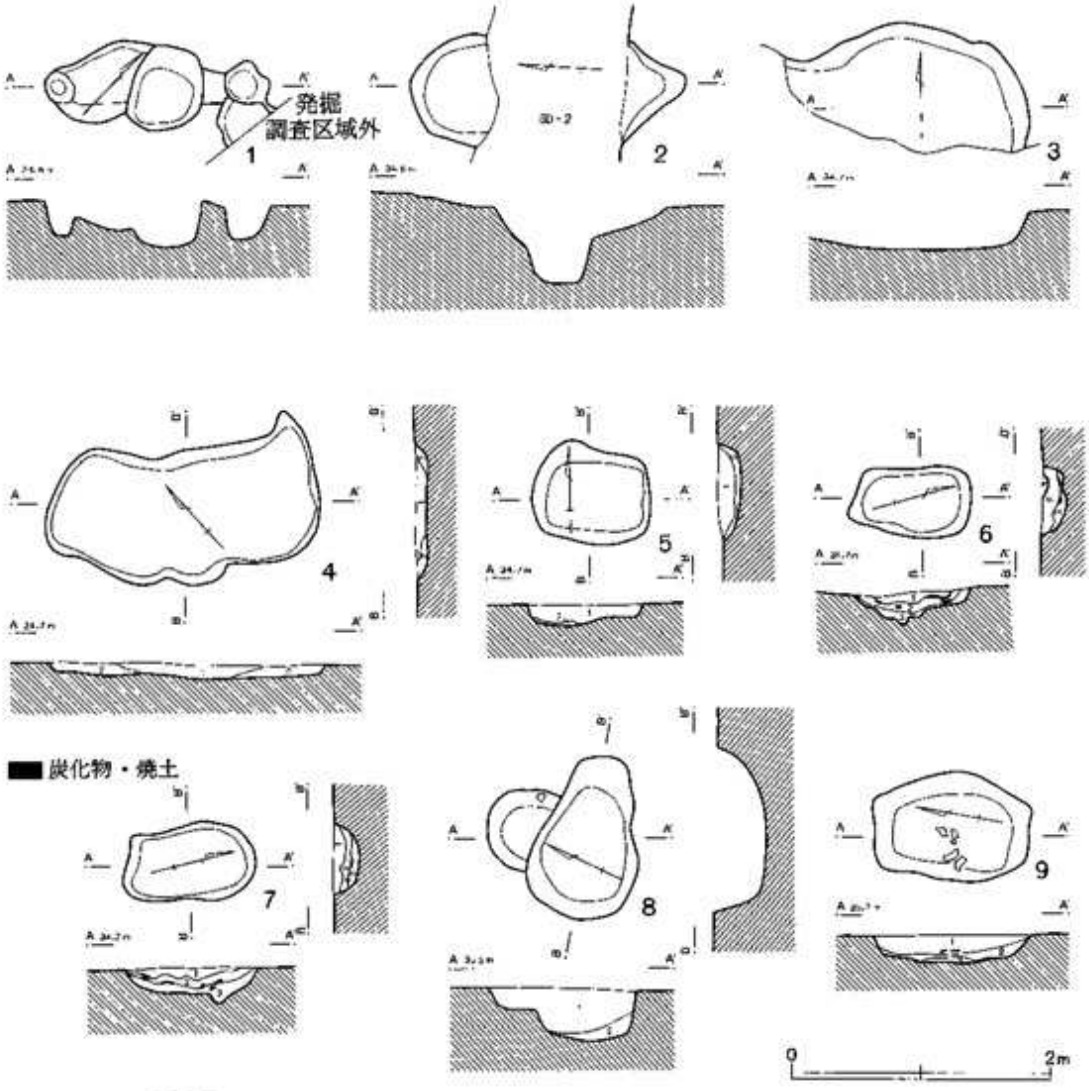
第80図　第4号土壙出土遺物

第4号土壙出土遺物（第80図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	鉢	(9.5)	5.0	4.8	AA'BCD	B	赤	40%	覆土　D粒子多

第5号土壙（第81図）

ね—71—6グリッドに位置する。形態は方形で、規模は長径91cm、短径74cm、深さは18cmである。



第4号土壙
1　黒褐色土　黄色土粒子少量　概ね単一的
2　暗褐色土　黄色土粒子・ブロック多量　斑文状

第5号土壙
1　黒褐色土　焼土（0.5～3cm）・炭化物・地山土粒子（1cm以下）多量　樹枝状に鉄分
2　黄褐色土　地山土主体　炭化物混じる

第6号土壙
1　黒褐色土　炭化物層状
2　黒褐色土　炭化物部分的　地山土ブロック（3cm以上）・焼土粒子若干
3　黄褐色土　地山土主体　黒褐色土若干

第7号土壙
1　黒褐色土　炭化物粒子若干　均質でやや堅い
2　黒褐色土　1と炭化物・焼土粒子・地山土が混在
3　黒褐色土　1と地山土同量混在

第8号土壙
1　灰褐色土　焼土粒子・炭化物少量　しまり強　上位に黒色粒子（1～3mm）少量
2　灰褐色土　炭化物多量　焼土少量

第9号土壙
1　灰褐色土　焼土粒子・炭化物少量　しまり強
2　灰褐色土　炭化物・焼土粒子多量
3　灰褐色土　炭化物・焼土粒子微量

第10号土壙
1　灰褐色土　シルト質焼土粒子・炭化物少量
2　灰褐色土　シルト質焼土粒子少量　炭化物少量

第81図　第1～10号土壙

主軸方向はN－97°－Eである。覆土に焼土・炭化物が多量に含まれ、地山ブロックを含む埋めもどし土であることから、火葬墓の可能性が考えられる。出土遺物はなく時期は不明である。

第6号土壙（第81図）

ね－71－6グリッドに位置する。形態は長方形で、規模は長径90cm、短径53cm、深さ20cmである。主軸方向はN－12°－Eである。覆土上層は炭化物層、中層は焼土粒子と地山ブロックが混在する埋めもどし土であることから、火葬墓である可能性がある。出土遺物はなく時期は不明である。

第7号土壙（第81図）

ね－70－15グリッドに位置する。形態は隅丸長方形で、規模は長径1.0m、短径55cm、深さ20cmである。主軸方向はN－13°－Eである。覆土は炭化物、焼土、地山土が混在する埋めもどし土である。このことから、火葬墓の可能性が考えられる。出土遺物がなく時期は不明である。

第8号土壙（第81図）

の－85－1グリッドに位置する。形態は楕円形で北側に浅い半円形の張り出しがある。規模は長径1.23m、短径81cm、深さ36cmである。主軸方向はN－84°－Eである。覆土に炭化物を多量に含み焼土を少量含む。出土遺物はなく性格・時期は不明である。

第9号土壙（第81図）

の－85－1グリッドに位置する。形態は胴張り長方形で、規模は長径1.20m、短径83cm、深さ22cmである。主軸方向はN－10°－Wである。覆土に多量の炭化物と焼土粒子を含む。また、壁面は良く焼けている。出土遺物はなく性格・時期は不明である。

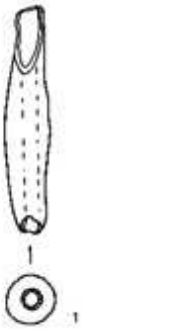
第10号土壙（第81図）

の－85－2グリッドに位置する。形態は長方形で、規模は長径88cm、短径52cm、深さ10cmである。主軸方向はN－3°－Wである。覆土に炭化物、焼土粒子を少量含む。出土遺物はなく性格・時期は不明である。

5　溝　　跡

第1号溝跡（第92図）

ぬ・ね－70グリッドに位置し第2号溝に切られる。調査区を南北に横断し、調査区域外に延びる。そのうち31mを調査した。主軸はN－15°－Wである。幅70cm～1m、深さ40～90cmで、南から北に深くなる。出土遺物は少なく、土錘（1）が出土する。そのほかは古墳時代前期土器の小破片である。時期は、出土遺物等より古墳前期と考えられる。



第82図　第1号溝跡出土遺物

第1号溝跡出土遺物（第82図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	土　錘				AA'B	A	明赤褐	90%	覆土　砂粒多　長径5.7　径1.2　重さ5.6

第２号溝跡（第92・94図）

ね－71・72・73・74グリッドに位置し、第１・９号溝と重複する。ほぼ東西に一直線で、東は調査区外に西は直角に方向を変え南に延びる、約138mの調査を行った。幅1.5m～50cm、深さ35～40cmで、断面形は底面が平らで、壁の下半は垂直、上半で緩やかに立ち上がる。出土遺物は多く、古墳時代後期の土器を主体とする。時期は出土遺物等より古墳時代後期と考えられ、第２号住居跡の時期には埋没したことがわかる。

第３号溝跡（第94図）

ね－74－８・13グリッドに位置し、第２号溝に接続するが攪乱により詳細は不明である。主軸方向はN－21°－W、幅70cm～1.3m、深さ35～40cmで、丸みを持つ断面形である。出土遺物には、坏（１）と周辺へラケズリの須恵器底部の小片がある。

第83図　第３号溝跡出土遺物

第３号溝跡出土遺物（第83図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏	(13.2)			AA'B	A	黒褐	20%	覆土

第４号溝跡（第94図）

ね－74－４・９グリッドに位置する。北端は確認できたが、南側は調査区域外へ延びる。途中礫層をはさみ約５m途切れる。主軸方向はN－４°－W、幅約70cm、深さ約20cmである。出土遺物は古墳時代後期の土師器小片と高台坏（１）が出土した。

第84図　第４号溝跡出土遺物

第４号溝跡出土遺物（第84図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏			(9.3)	AA'B	B	灰	30%	覆土

第５号溝跡（第94図）

ね－75－２～ね－74－14グリッドに位置する。南端は確認できたが、北側は調査区外へ延びる。主軸方向はN－49°－E、幅30～50cm、深さ約20cmである。出土遺物はない。

第６号溝跡（第92図）

ね－72－７グリッドに位置し第８号住居跡と重複する。主軸方向はN－70°－W、幅約30cm、深さ約45cmである。

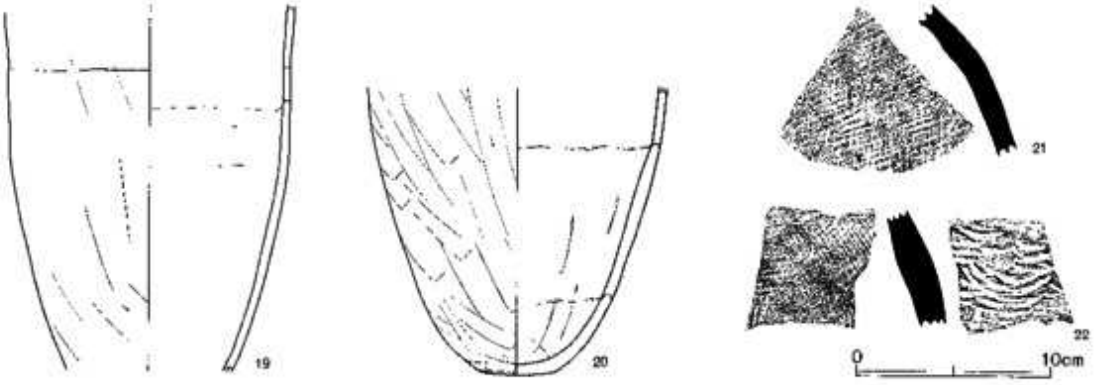
第85図　第６号溝跡出土遺物

出土遺物は古墳時代前期と後期の土器小片が少量と高台坏（１）、須恵器壺（２）が出土する。

第６号溝跡出土遺物（第85図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏	(14.3)	4.8	(5.7)	AA'BC	B	黄灰	25%	覆土　高台部欠失　内面に黒色付着物
2	壺	(15.8)			AA'B	A	青灰	20%	覆土

第86図　第２号溝跡出土遺物（１）



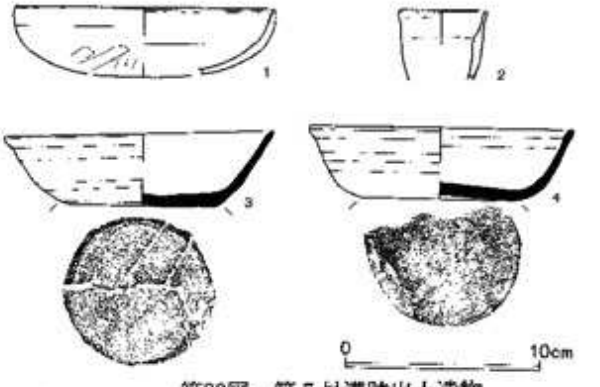
第87図　第２号溝跡出土遺物（２）

第２号溝跡出土遺物（第86・87図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.8)	5.3		AA'BC	C	赤黒	40%	覆土
2	坏	12.0	4.1		AA'BC	A	明赤褐	80%	覆土№１　保存状態不良
3	坏	(13.9)			AA'BC	B	赤褐	40%	覆土
4	坏	14.3	4.0	11.0	AA'BC	B	暗赤褐	50%	覆土　№２
5	坏	(13.5)	2.9	11.0	AA'B'	B	褐灰	30%	覆土
6	坏	(13.8)			AB	C	オリーブ黒	50%	覆土　焼成一部赤化　内面に黒色の付着物
7	甕	(15.2)			AA'BB'C	A	橙	20%	覆土　口縁部外面に輪積み痕
8	甕	(19.6)			AA'BC	A	明赤褐	30%	覆土　保存状態不良
9	甕	(16.0)			AA'BB'	C	明赤褐	50%	覆土
10	甕	(16.7)			AA'BC	B	にぶい褐	20%	覆土　口縁部外面工具痕跡
11	甕	(21.3)			AA'BB'C	A	赤	25%	覆土　口縁部外面工具痕跡
12	甕	(19.7)			AA'B	A	赤	25%	覆土　口縁部外面工具痕跡
13	甕	(20.8)			ABB'C	C	にぶい赤褐	25%	覆土
14	甕	(19.1)			AA'BC	B	明赤褐	40%	覆土　器面あれる
15	甕			(9.7)	ABC	B	赤	25%	覆土
16	甕	(19.5)			AA'B	A	明赤褐	20%	覆土
17	甕	(20.2)			AA'BC	A	橙	20%	覆土　口縁部外面刷毛状工具ヨコナデ
18	鉢	(20.0)			AA'BC	B	赤	30%	№２
19	甕				AA'B	B	赤	60%	覆土　A'粒子多い　内面に輪積み痕
20	甕			4.0	ABC	B	赤褐	60%	覆土
21	甕				AA'C	A	灰		覆土
22	甕				AB	C	黒		覆土

第７号溝跡（第92図）

ね―71―７・12グリッドに位置し、第２号溝跡から真北に延びる。第２号溝跡との関連は不明である。幅１～1.5m、深さは約45～90cmで、南側に大きく傾斜する。底面は平坦で壁は垂直に立ち上がる。出土遺物には、手捏（２）、須恵器坏（３・４）などが出土する。



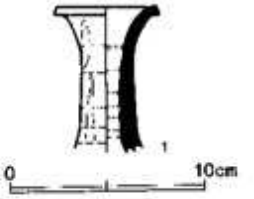
第88図　第７号溝跡出土遺物

第７号溝跡出土遺物（第88図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏	(13.5)	3.6		AA'BC	A	にぶい橙	30%	覆土
2	手　捏	(4.6)			AA'BC	B	にぶい橙	30%	覆土
3	坏	14.0	4.0	7.6	AA'BCD	C	明赤褐	80%	覆土　底部ヘラケズリ　全面赤彩
4	坏	(13.7)	3.7	8.2	ABE	A	暗灰	60%	覆土　底部ヘラケズリ

第８号溝跡（第92図）

ぬ－70―21～23グリッドに位置する。主軸方向はほぼ東西に延び、全長13.5m、幅40～90cm、深さ20cmである。出土遺物は少ないが、灰釉長頸壺（１）が出土する。



第89図　第８号溝跡出土遺物

第８号溝跡出土遺物（第89図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	長頸瓶	5.5			AA'	A	オリーブ灰	90%	覆土　外面、口縁部内面灰釉一部発泡

第９号溝跡（第92図）

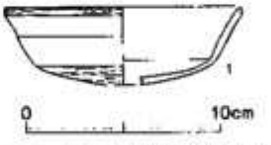
ね―70－３・８グリッドに位置し、第２号溝跡と重複するが新旧関係は不明である。主軸方向はほぼ南北に延び、全長8.7m、幅５～90cm、深さ約20cmである。底面は広く壁は急な立ち上がりである。出土遺物はない。

第10号溝跡（第92図）

ね―69－３～９グリッドに位置し、東側は調査区外となる。主軸方向はほぼ東西に延び、幅約40cm、深さ約10cmである。底面は広く壁は緩やかに立ち上がる。出土遺物はない。

第11号溝跡（第96図）

の―82―６からね－83―17グリッドにかけて位置する。主軸方向はN―60°―Eで、幅１.1～2.0m、深さ約10cmで断面は浅い皿状である。覆土上層に僅かに窪んで浅間Ｂ軽石が堆積することから、遺構の時期は12世紀初頭かそれより若干古いものと思われる。出土遺物は少なく、坏（１）が出土する。



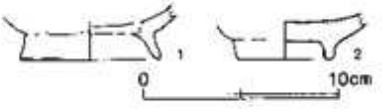
第90図　第11号溝跡出土遺物

第11号溝跡出土遺物（第90図）

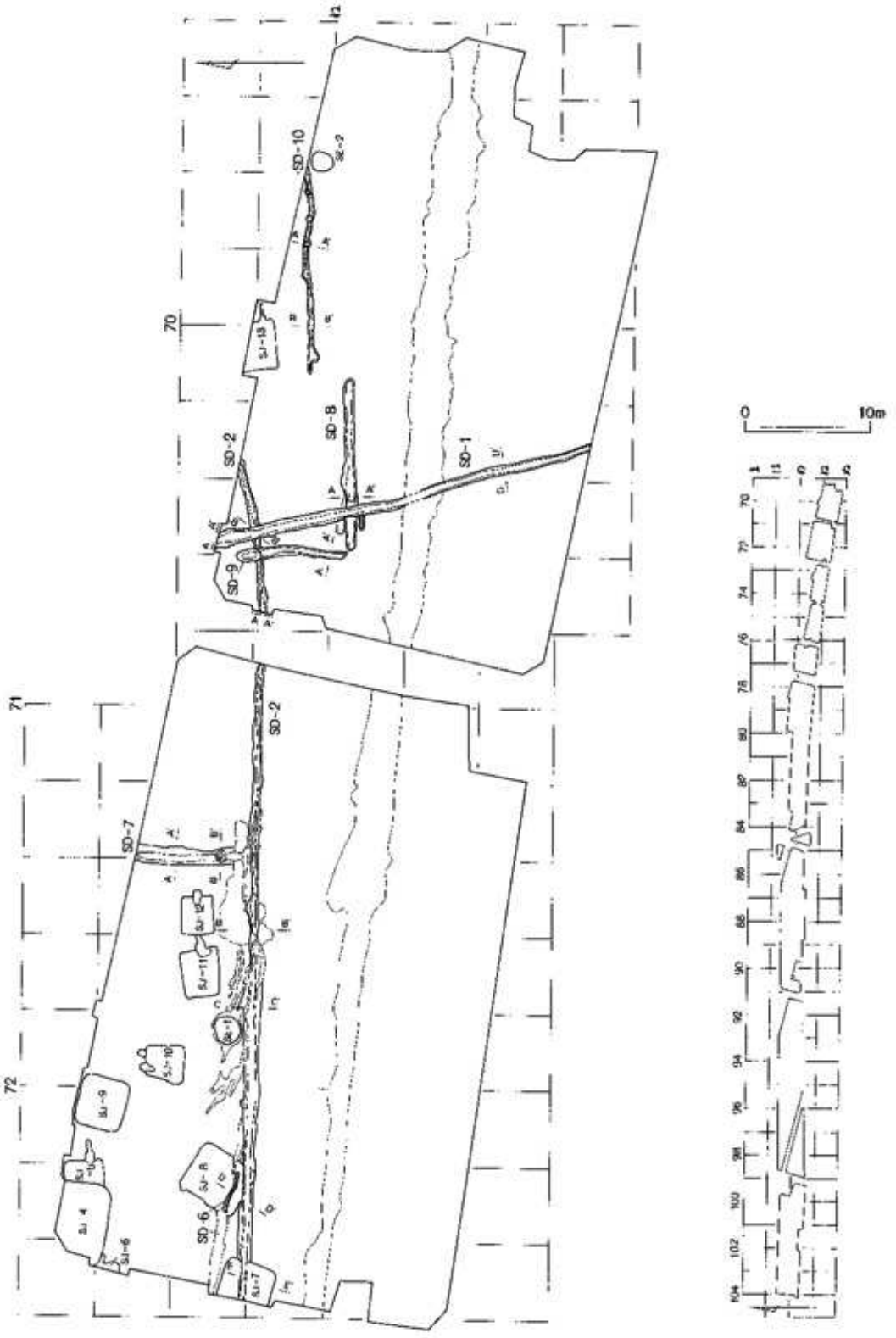
番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏	12.2	4.0		AB	C	暗赤褐	60%	覆土　体部外面調整雑

第12号溝跡（第97図）

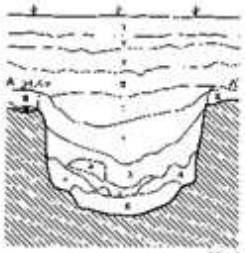
の―96―２・７・12、ね―96―12・17・22グリッドに位置する。主軸方向は南北に向き、一部底面が２か所に分かれる。幅は１.5～3.0m、深さ５～25cmで南から北へ深くなる。覆土には浅間Ｂ軽石を含むことから、遺構の時期は12世紀以降と思われる。出土遺物は少なく中世陶磁器片が若干出土する。

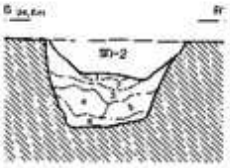


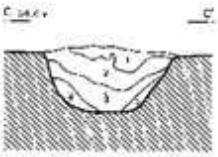
第91図　第12号溝跡出土遺物



第92図　1区-1・II区溝跡







第1号溝（A A'）

1　茶褐色土　火山灰少量　地山粒子多量
2　暗茶褐色土　1に近似　地山粒子多量　炭化物少量
3　黒褐色土　地山粒子・ブロック多量
4　黄色土　地山ブロック
5　黒褐色土　3に酷似　黄色土粒子・ブロックは白色粘質土化
6　青灰色土　青灰色粘質シルト　地山ブロック中に5を混入

第1号溝（B-B'）

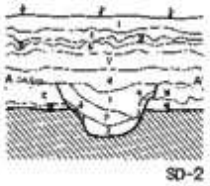
1　黄色土　地山ブロック
2　黒褐色土　地山粒子・ブロック多量
3　黄色土　地山ブロック
4　黒褐色土　地山粒子・ブロック多量
5　黒褐色土　黄色土粒子・ブロックは白色粘質土
6　青灰色土　青灰色粘質シルト化　地山ブロック中に黒褐色土混入

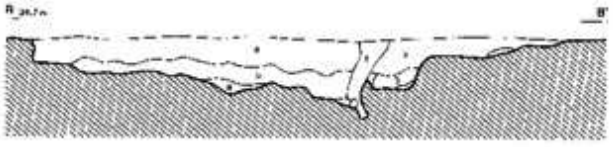
第1号溝（C-C'）

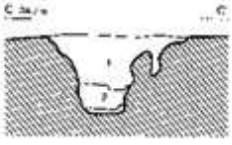
1　褐灰色土　黒色土微粒子　粘性なし
2　黒褐色土　黄色土粒子・黒色土微粒子　粘性なし
3　黒褐色土　若干砂質の黄色土ブロック多量　粘性あり
4　黒褐色土　3に似る　黄色土ブロックなし
5　黒褐色土　3に似る　ブロック細かく均一

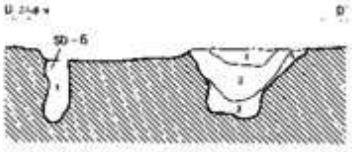
第1号溝（D D'）

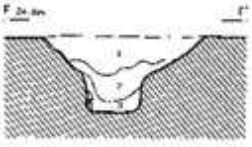
1　黒褐色土　黄色土粒子・黒色土微粒子　粘性なし
2　黒褐色土　若干砂質の黄色土ブロック少量　粘性あり
3　黒褐色土　粘性あり

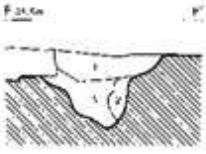


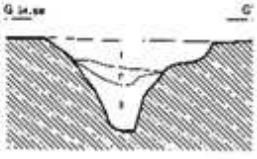


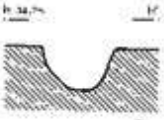












第2号溝（A-A'）

1　暗茶褐色土　火山灰少量　概ね単一化　しまり粘性強
2　黒褐色土　地山粒子・小ブロック多量
3　黒褐色土　2に近似　地山ブロック多量　白色粘質土粒子
4　茶褐色土　地山ブロック多量　しまり弱

第2号溝（B B'）

1　黒褐色土　粘性強　地割れによる変質
2　黒褐色土　白色パミス多量　やや砂質
3　黒褐色土　水分多　粘性強
4　黒褐色土　2と異なり粘質　淡黄色土はほとんどない
5　黒褐色土　基本的に4に同じ　緊密
6　黒褐色土　5に同じ　地山土ブロック（2～3cm）混る

第2号溝（C-C'）

1　黒褐色土　オリーブ黒土粒子（3mm）　上位に白色パミス
　　樹枝状に鉄分入
2　黒褐色土　粘性強

第2号溝（D-D'・E E'）

1　暗褐色土　火山灰少量　単一的　粘性強
2　黒褐色土　しまり・粘性強　単一的　地山粒子若干
3　黒褐色土　2を基本とする　地山ブロック多量
4　暗黄色土　地山土主体　壁の崩壊土

第6号溝

1　暗褐色土　地割れ裂孔内に流入した土

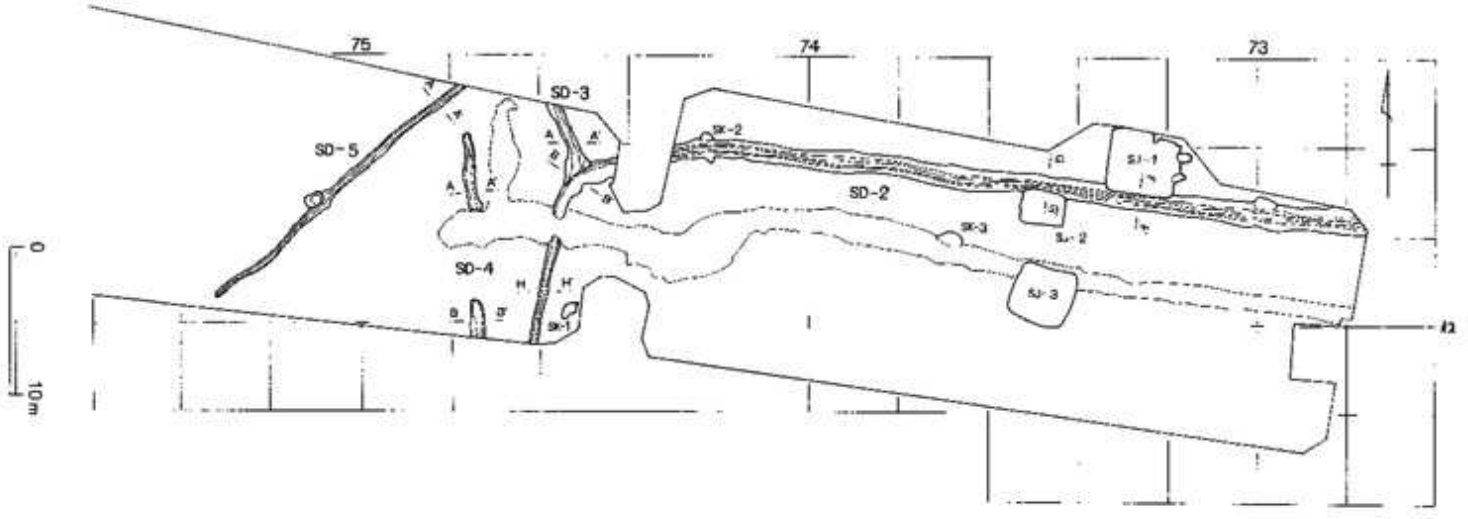
第2号溝（F-F'）

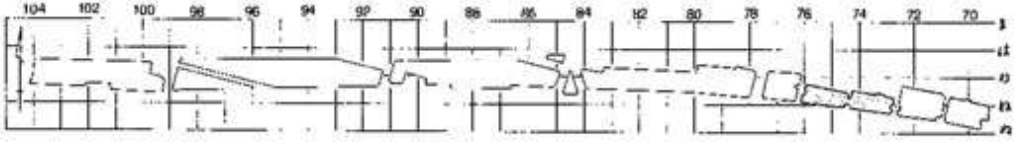
1　黒褐色土　白色粘土粒子まばら
2　黒褐色土　褐灰砂ブロック混在
3　黒褐色土　粘性強　白色微粒子なし

第2号溝（G-G'）

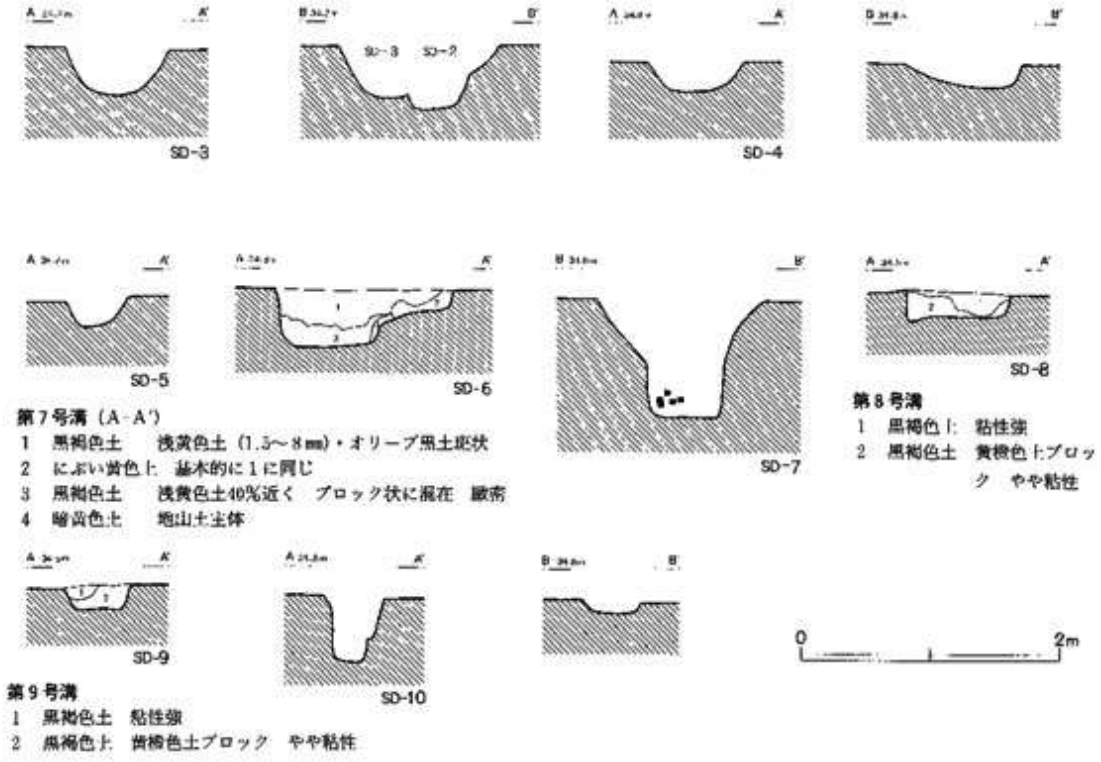
1　黒褐色土　白色パミスまばら　褐色土粒子まばら　緊密
2　黒褐色土　黒色土粒子（2～4cm）がまばら　粘性強
3　黒褐色土　底面に地山ブロック

第93図　第1・2号溝跡土層断面





第94図　1区-III・IV区遺構



第95図 第3～10号溝跡土層断面

第12号溝跡出土遺物（第91図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	高台坏			(7.2)	AA'C	C	黒褐	20%	覆土
2	高台椀			5.0	A'	A	青灰	80%	覆土 陶器

第13号溝跡（第97図）

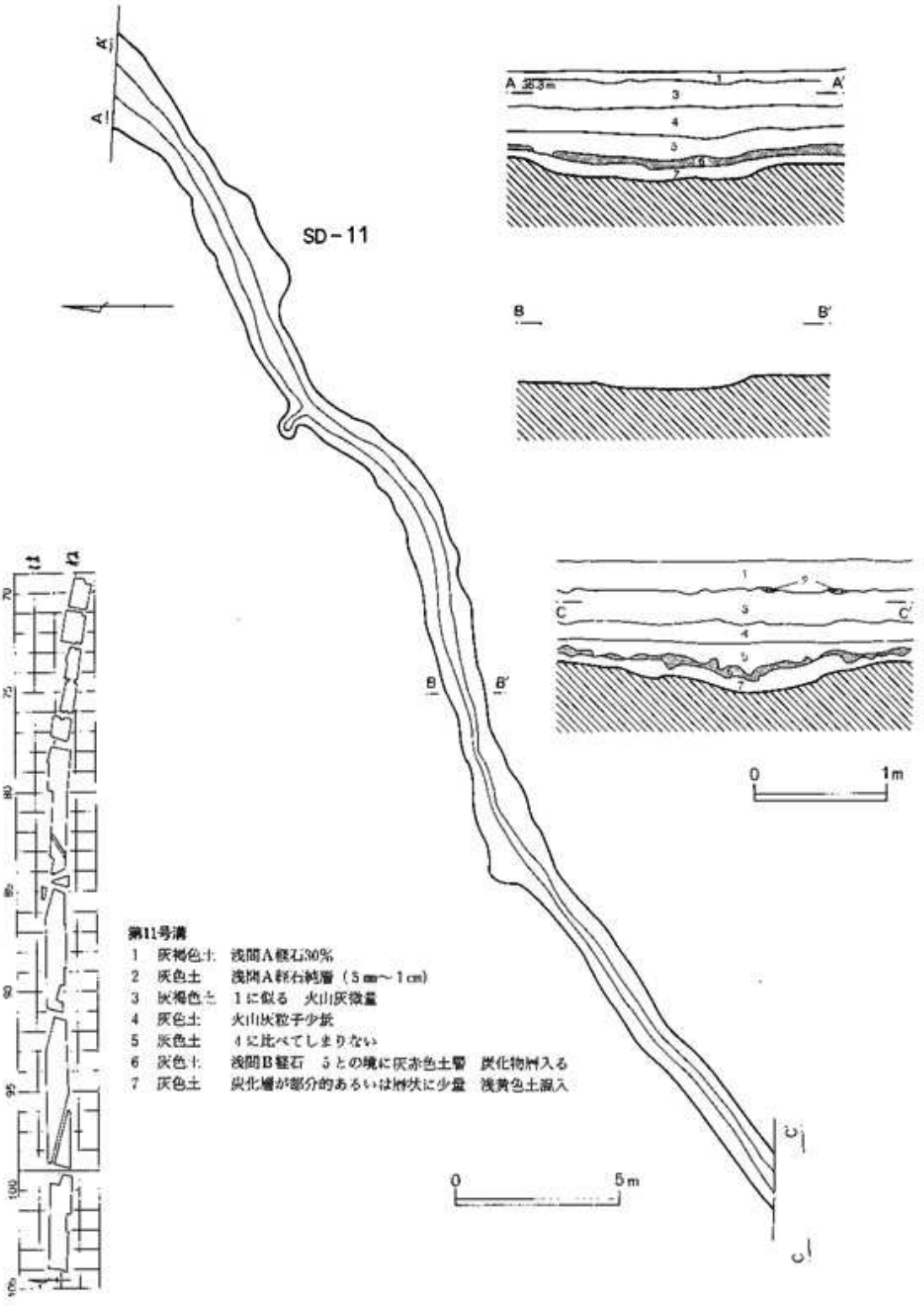
の—100—2・8グリッドに位置し北側へ延びる。主軸方向はN—40°—Wである。幅約90cm、深さ25cmで北から南へ深くなる。出土遺物はない。

第14号溝跡（第97図）

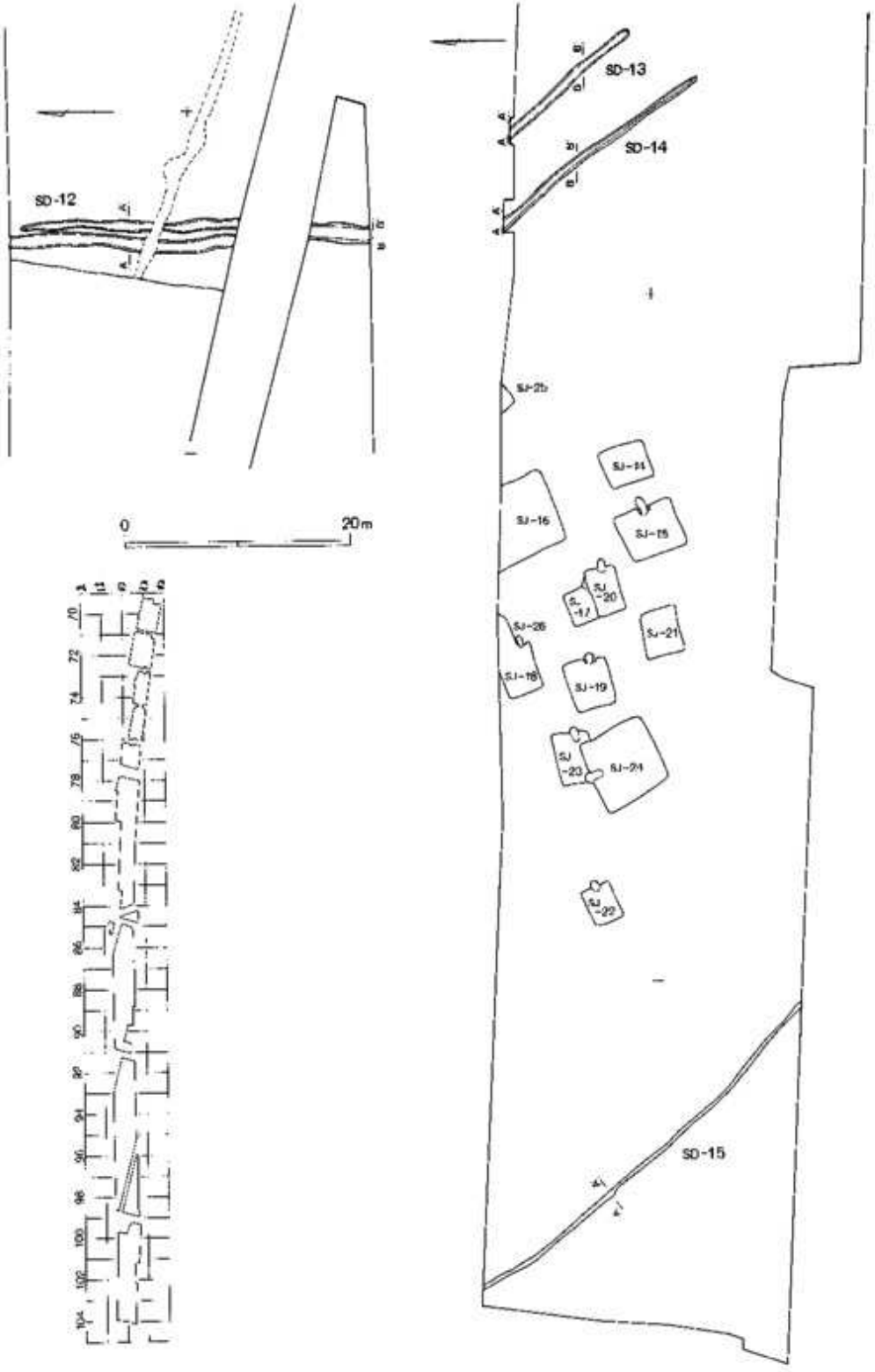
ね—100—22・23、の—100—3・9グリッドに位置する。主軸方向はN—37°—Wで第13号溝跡と並行して調査区域外へ延びる。幅は40～70cmで、深さ30cm前後である。出土遺物はない。

第15号溝跡（第97図）

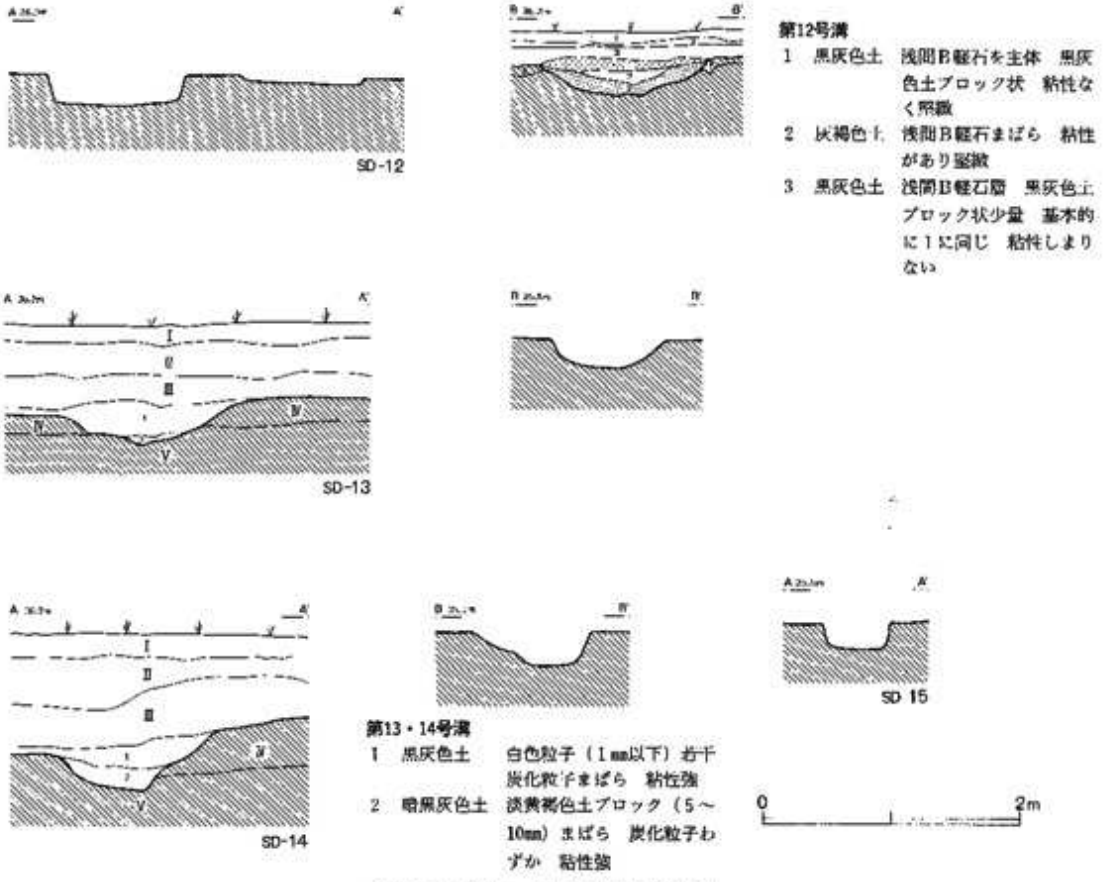
ね—103—16から—103—15グリッドに位置し南・北とも調査区域外へのびる。主軸方向はN—40°—Wである。幅は約40cm前後で、深さ約20cmである。出土遺物はない。


SD－11
A
A'
B
B'
C
C'
0
5m
0
1m
第11号溝
1　灰褐色土　浅間A軽石30%
2　灰色土　浅間A軽石純層（5cm～1cm）
3　灰褐色土　1に似る　火山灰微量
4　灰色土　火山灰粒子少量
5　灰色土　4に比べてしまりない
6　灰色土　浅間B軽石　5との境に灰赤色土層　炭化物混入る
7　灰色土　炭化層が部分的あるいは層状に少量　浅黄色土混入

第96図　第11号溝跡



第97図　第12～15号溝跡



第98図 第12～15号溝跡土層断面

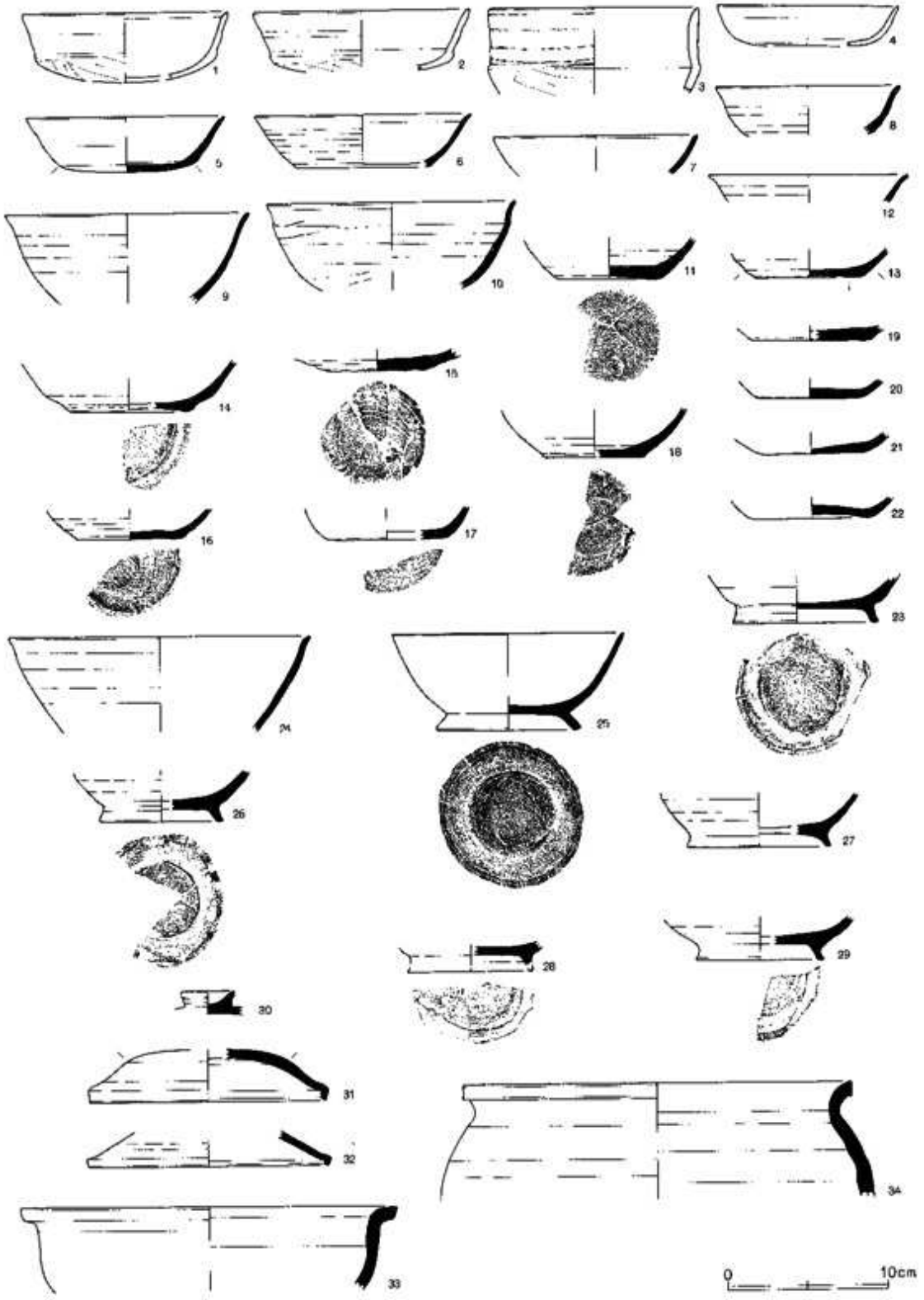
6 包含層

1区包含層

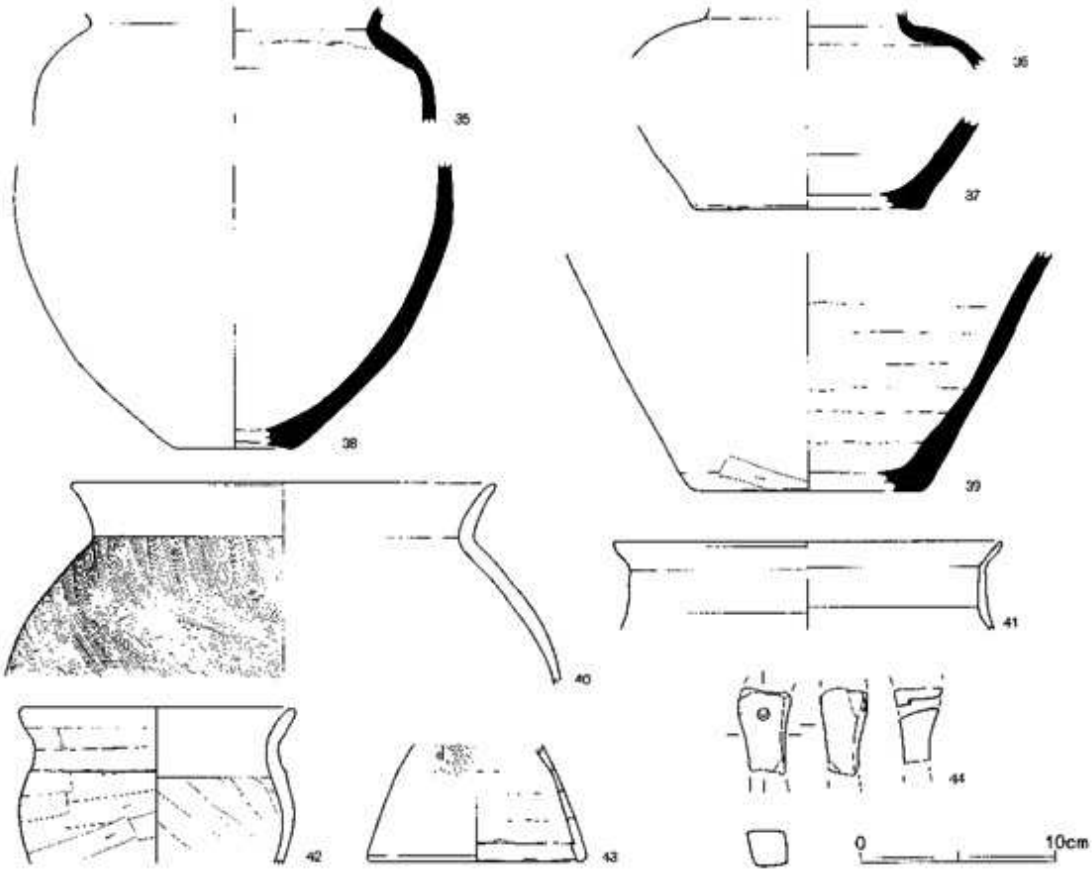
1区の包含層はII区とIII区の北側で住居跡周辺に形成される。平安時代の土器を主体に古墳時代後期の土器を少量含む。主な遺物にII区から砥石（44）、III区から方形の透し孔の甑（32）、片口の長径瓶（33）が出土する。

2区包含層（第103・104図）

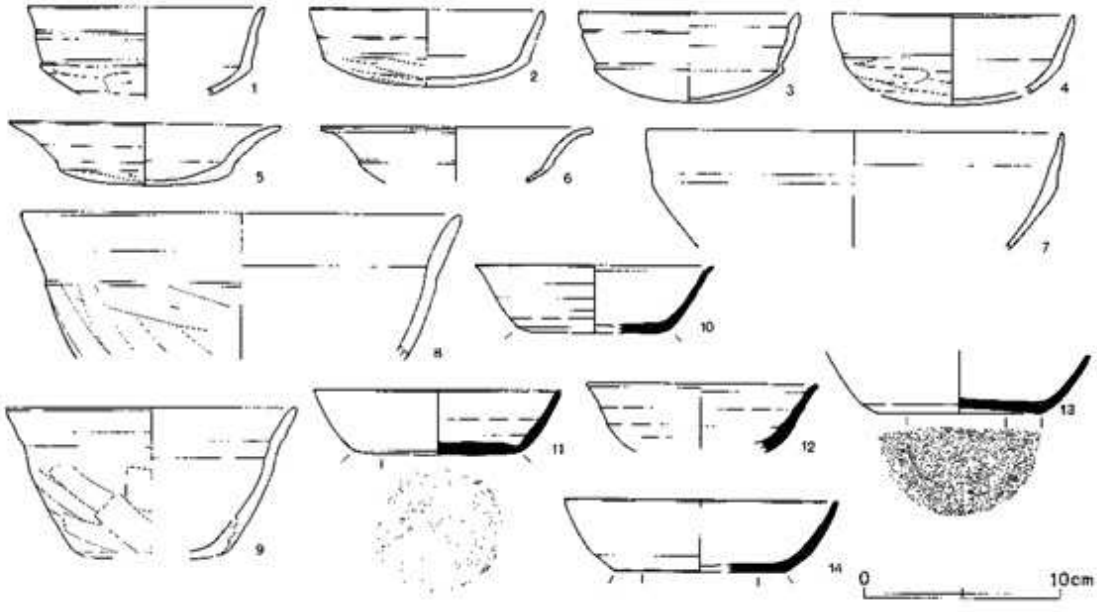
2区の包含層は、縄文時代後期および平安時代の遺物を主体に、幅約20mで、東西方向に薄く形成される。縄文時代後期の遺物は、の—85グリッドに集中し遺物の下面が周辺に比べて僅かに窪む。北側に分布の中心があり集落の存在が予想される。平安時代の遺物は、第8から9号土壙の周辺、ね・の—86グリッド、ね—87グリッドに数ブロックに分かれて分布する傾向がある。しかし遺物の下に遺構は検出されなかった。主な出土遺物には、羽口（22）がある。



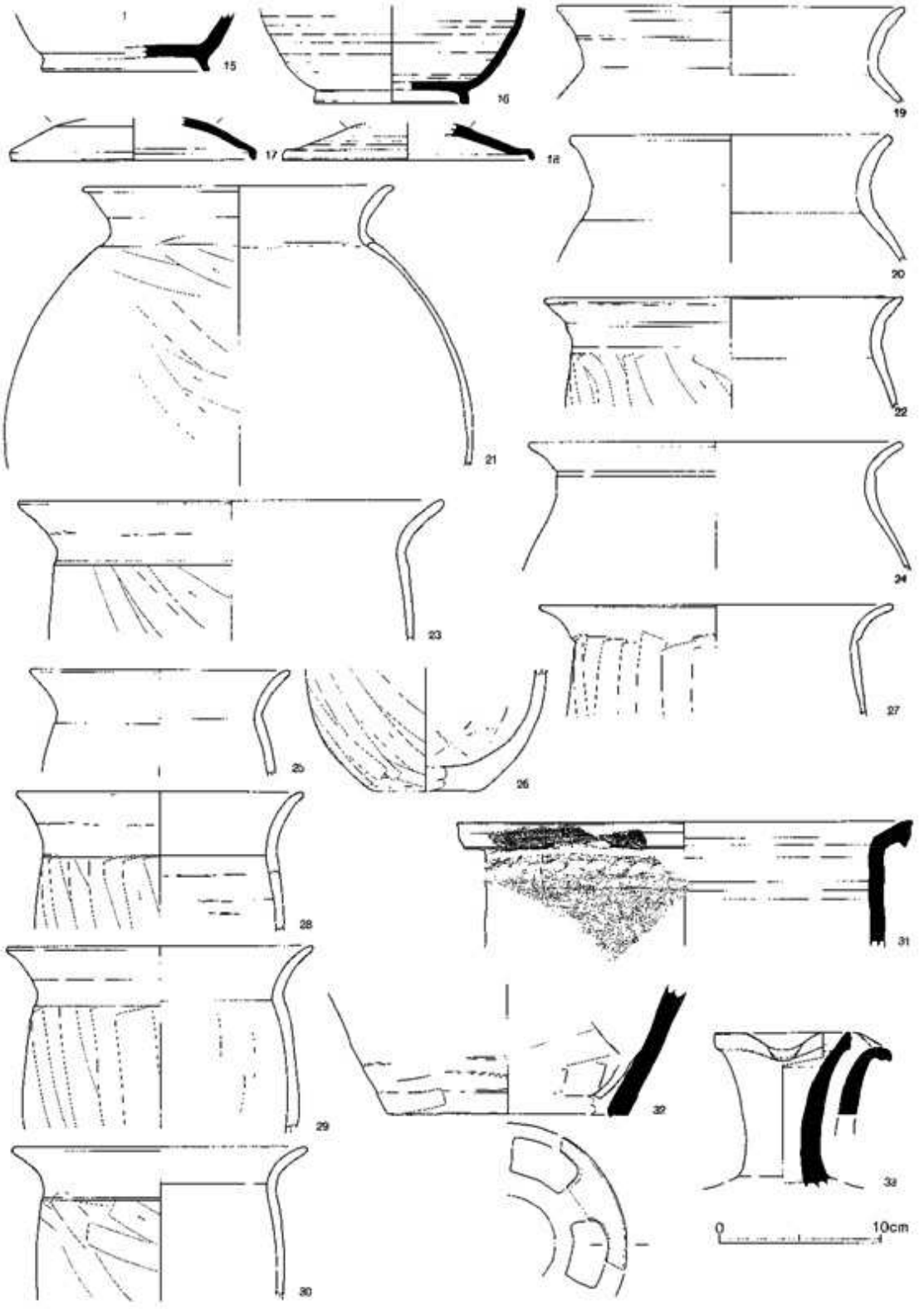
第99図　1区・II区包含層出土遺物(1)



第100図　1区-II区包含層出土遺物(2)



第101図　1区-III区包含層出土遺物(1)



第102図　I区 III区包含層出土遺物(2)

包含層（II区）出土遺物（第99・100図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.5)	4.4	(11.4)	AA'BC	B	赤褐	25%	II区
2	坏	(13.6)		(11.6)	AA'B	A	暗赤褐	20%	II区
3	坏	(13.2)			AA'BC	B	赤	20%	II区
4	坏	(11.3)	2.5	(7.7)	AA'B	A	橙	40%	II区
6	坏	(12.4)	3.5	(8.3)	AA'B	C	灰白	20%	II区　底部篦削り　ロクロ石右
6	坏	(13.7)	3.3	(8.5)	AA'B	A	灰	10%	II区
7	坏	(12.8)			AA'BE	A	暗青灰	10%	II区　鳩山産
8	坏	(11.6)			AA'BC	C	にぶい橙	10%	II区
9	坏	(15.2)			AA'BC	C	にぶい橙	10%	II区
10	埦	(15.6)			AA'BE	A	灰	40%	II区　巻き上げ痕残る
11	坏			6.3	ABE	B	暗緑灰	50%	II区　底部糸きり　鳩山産
12	坏	(12.5)			AA'B	A	暗灰	10%	II区
13	坏			(7.0)	AA'BC	B	黄灰	30%	底部外縁ヘラケズリ
14	坏			(8.1)	AA'	A	暗青灰	25%	II区　底部糸きり後外縁撫で
15	坏			(6.6)		A			II区　墨書
16	坏			(6.4)	AA'B	C	赤黒	50%	II区　底部糸きり
17	坏			(7.5)	AA'BD	B	暗灰	20%	II区　底部糸きり
18	坏			6.4	AA'B	A	灰	30%	II区　底部糸きり
19	坏			(7.3)	AA'B	A	灰	30%	II区　底部糸きり
20	坏			6.5	AA'BD	B	灰黄褐	50%	II区　底部糸きり　底部いびつ
21	坏			6.0	AA'B	C	灰黄	70%	II区　底部糸きり
22	坏			7.6	AA'BD	C	灰白	50%	II区　底部調整不明
23	高台坏			9.1	AA'B	B	褐灰	70%	II区　底部糸きり　貼り付け高台
24	坏	(19.8)			AA'BD	A	灰	25%	II区　A'粒子大
25	高台坏	(14.5)	6.0	9.1	AA'B	B	褐灰	40%	II区　底部糸きり　貼り付け高台
26	高台坏			7.8	AA'B	B	灰	30%	II区　底部糸きり　貼り付け高台
27	高台坏			(9.1)	AA'BCD	B	灰白	30%	II区　底部調整不明　貼り付け高台
28	高台坏			(8.0)	AA'	A	青灰	50%	II区
29	高台坏			(8.0)	AA'B	B	灰	25%	II区　底部糸きり　貼り付け高台
30	蓋				AB	C	明黄褐	60%	II区
31	蓋	(14.8)			AA'B	A	暗灰	30%	II区　天井部篦削り　ロクロ右
32	蓋	(15.0)			AA'B	A	灰	10%	II区
33	鉢	(23.5)			AA'B	B	灰	10%	II区
34	甕	(24.3)			AA'BE	A	灰	10%	II区
35	壺				AA'A	A	灰	25%	II区　肩部内面巻き上げ痕
36	壺				AA'B	A	灰	20%	II区
37	甕			(12.0)	AA'B	B	暗赤灰	10%	II区
38	壺			(6.0)	AA'BC	C	褐灰	25%	II区　No.230.63
39	甕				AA'BD	A	暗緑灰	25%	II区　内面横方向ナデ　底部外縁ヘラケズリ
40	甕	22.0			AA'BC	C	黒褐	30%	II区
41	甕	(20.0)			AA'BC	C	にぶい赤褐	10%	II区
42	甕	(14.3)			AA'BB'C	B	赤褐	30%	II区　口縁部外面篦状工具ヨコナデ
43	台付甕			(11.3)	AA'B	A	赤	10%	II区
44	砥石					A	にぶい橙	60%	II区　四面ともよく使用される　穿孔は2

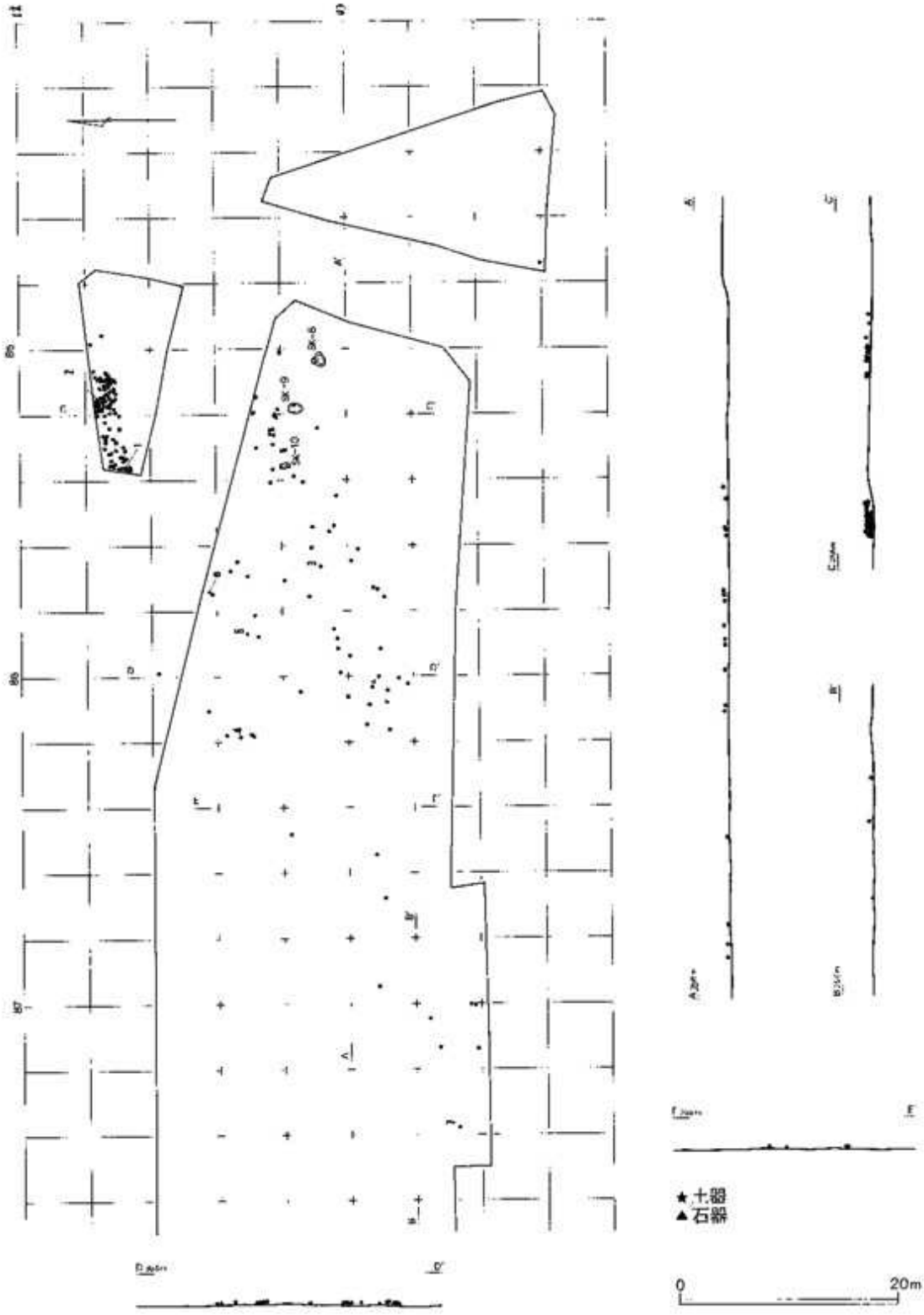
包含層（Ⅲ区）出土遺物（第101・102図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.1)			ABC	B	暗赤褐	20%	Ⅲ区
2	坏	(12.0)	3.9	(10.7)	AA′B	C	にぶい橙	25%	Ⅲ区
3	坏	(11.5)	4.6		AA′BC	C	灰褐	50%	Ⅲ区
4	坏	(12.5)	4.6	(11.1)	AA′B	A	明赤褐	40%	Ⅲ区
5	坏	(14.0)	3.2		AA′BC	B	にぶい橙	40%	Ⅲ区
6	坏	(13.9)			AA′B	C	にぶい橙	20%	Ⅲ区
7	坏	(21.4)			AA′B	B	赤	20%	Ⅲ区　砂粒極少
8	鉢	(22.5)			AA′B	B	橙	25%	Ⅲ区
9	鉢	(14.9)	7.8	(7.7)	AA′B	B	橙	30%	Ⅲ区
10	坏	(12.4)	3.5	(6.6)	AA′B	C	灰褐	25%	Ⅲ区　底部外縁ヘラケズリ
11	坏	(12.6)	3.3	8.6	AA′BD	B	灰白	40%	Ⅲ区　底部糸きりヘラケズリ　ロクロ右
12	坏	(11.7)			AA′BC	C	暗赤灰	20%	Ⅲ区
13	坏			8.4	AA′BE	A	明褐灰	50%	Ⅲ区　鳩山産
14	坏	(14.0)	3.7	(8.8)	AA′B	B	灰	25%	Ⅲ区　底部糸きりヘラケズリ、ロクロ右
15	高台坏			(10.2)	AA′BD	C	灰白	25%	Ⅲ区
16	長頸瓶			(9.6)	AA′B	A	灰	30%	Ⅲ区
17	蓋	(15.0)			AA′BD	A	灰	20%	Ⅲ区　天井部ヘラケズリ　ロクロ右
18	蓋	(15.6)			AA′BD	B	黄灰	20%	Ⅲ区　天井部ヘラケズリ　ロクロ右
19	甕	(21.5)			AA′BB′C	A	赤	40%	Ⅲ区
20	甕	(19.6)			AA′BC	A	赤橙	30%	Ⅲ区
21	甕	18.8			AA′BC	A	明赤褐	50%	Ⅲ区
22	甕	(22.0)			AA′BC	A	赤褐	20%	Ⅲ区
23	甕	(26.2)			AA′B	B	にぶい橙	20%	Ⅲ区
24	甕	(22.9)			AA′BC	B	赤橙	25%	Ⅲ区
25	甕	(15.9)			AA′B	B	赤橙	30%	Ⅲ区
26	壺			(6.7)	AA′BC	A	赤	40%	Ⅲ区
27	甕	(21.7)			AA′BC	A	赤	25%	Ⅲ区　C粒子多い
28	甕	(17.6)			AA′BC	B	にぶい赤褐	25%	Ⅲ区
29	甕	(18.8)			ABC	A	赤橙	30%	Ⅲ区　B′粒子多量
30	甕	(17.9)			AA′BC	B	赤	60%	Ⅲ区
31	鉢	(28.3)			AA′B	A	灰	20%	Ⅲ区
32	甑			(14.9)	AA′B	A	暗青灰	25%	Ⅲ区　方形孔
33	長頸瓶	8.3			AA′C	A	暗灰	80%	Ⅲ区　片口　A′粒子多

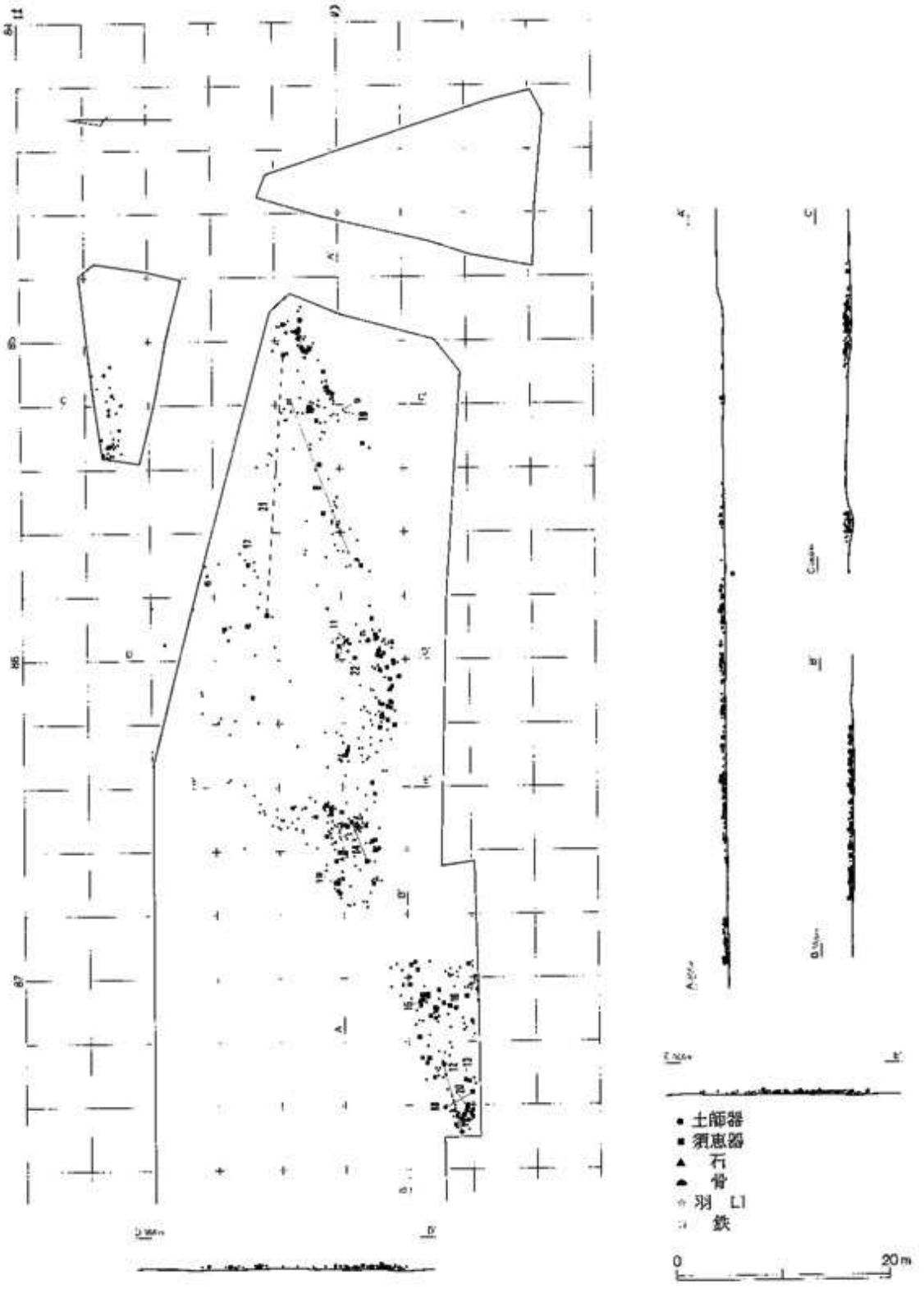
7　グリッド・表採遺物

グリッド遺物は、3区調査区出土である。主な遺物に高台坏（1）、坏（2）、紡錘車（4）、打製石斧（5）などがある。

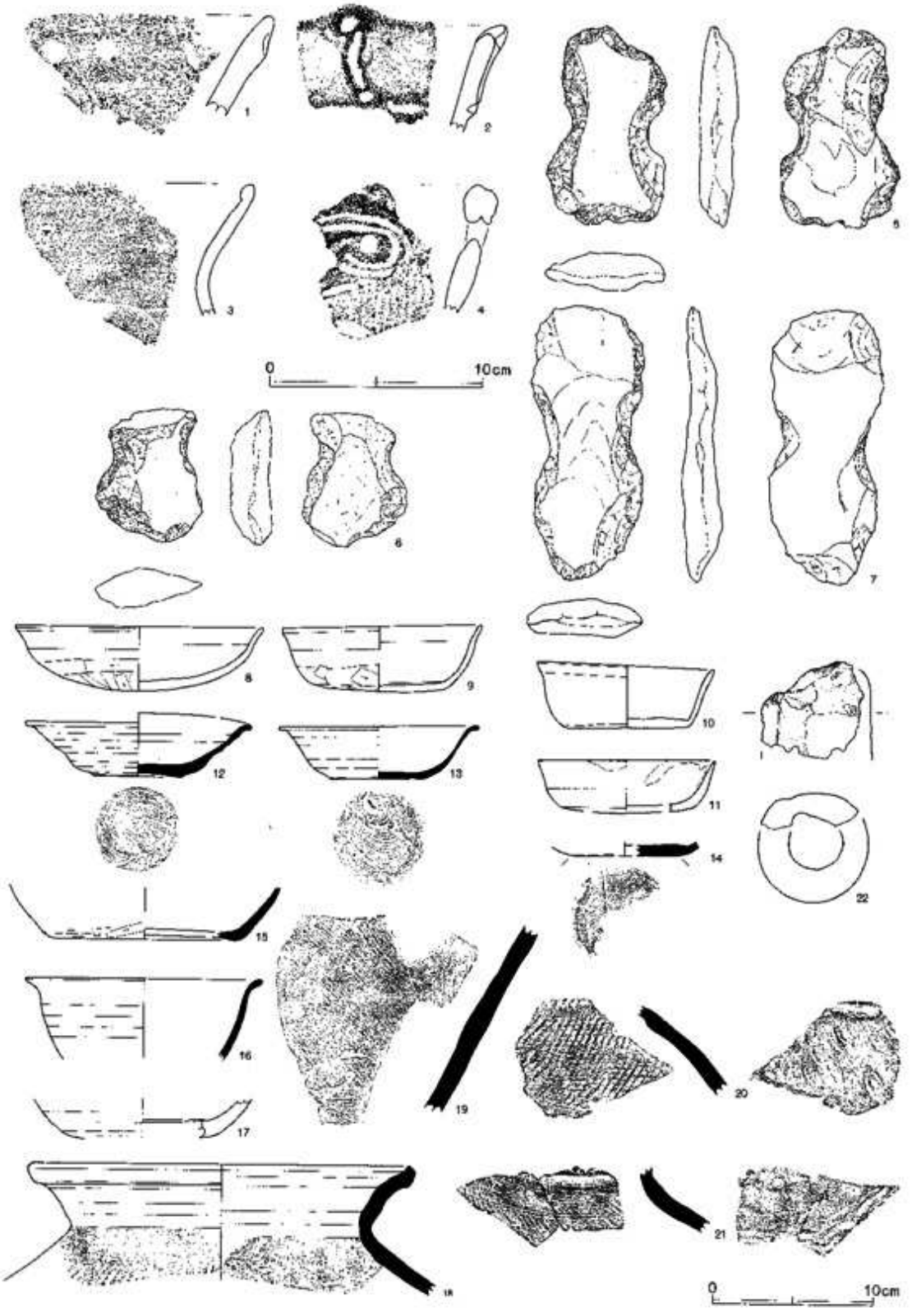
表採遺物は縄文時代後期、古墳時代、平安時代、近世と多期の資料がある。主なものに大型甑の把手（11）、土錘（16・28）、香炉（20）、磨製石斧（26）、打製石斧（27）古銭（29）などがある。第107図は1区調査区、第108図は3区調査区である。



第103図　2区包含層縄文時代遺物出土分布



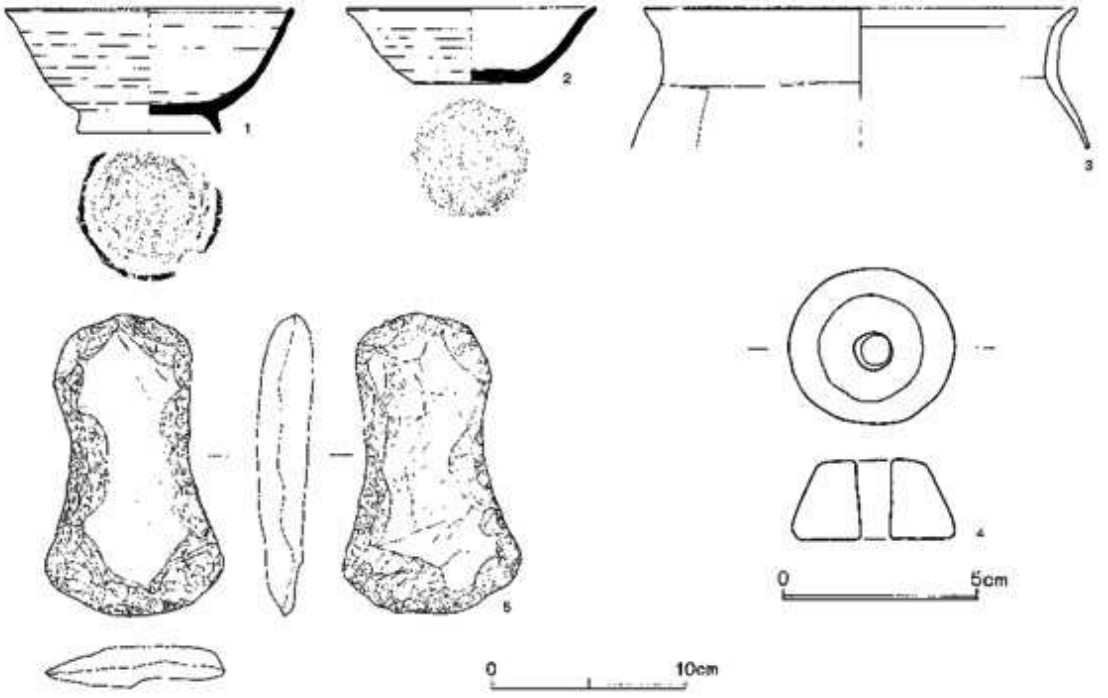
第104図　2区包含層奈良・平安時代遺物出土分布



第105図　2区包含層出土遺物

2区包含層出土遺物（第105図）

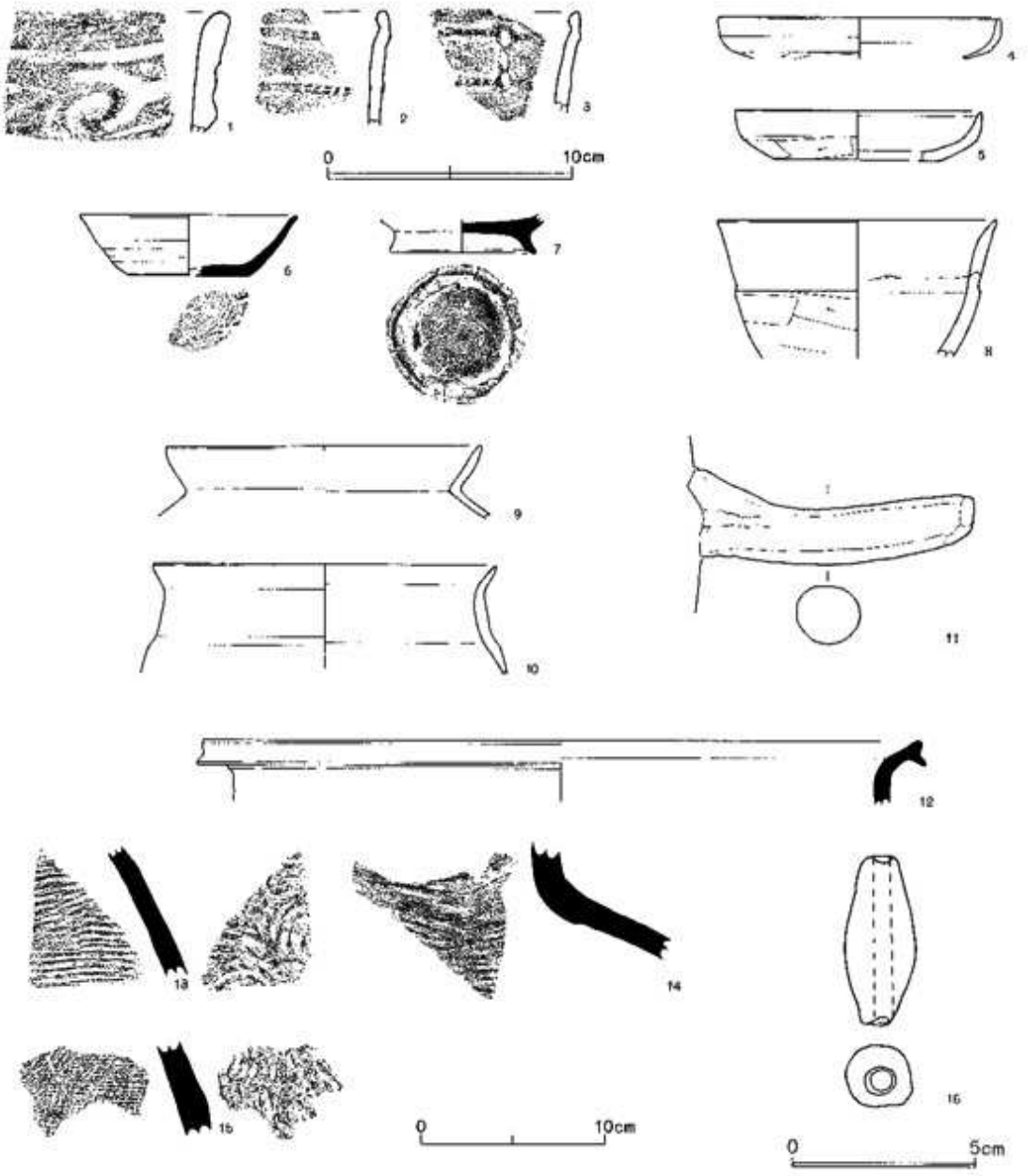
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	深鉢				AA'B	C	にぶい赤褐	10%	№98 縄文後期
2	深鉢				AA'BB'C	B	にぶい赤褐	10%	№582 縄文後期
3	深鉢				AA'	C	暗赤灰		№670 縄文後期
4	深鉢				AA'BCD	B	明赤褐		№324 縄文後期
5	石斧					A		100%	長径12.5 幅7.4
6	石斧					A			長径（8.5） 幅6.7
7	石斧					A			長径17.1 幅7.0
8	坏	(15.6)	4.0		AA'BC	A	橙	80%	№643・645・646・676
9	坏	12.5	4.1	8.2	AA'B	A	橙	90%	№657 底部ヘラケズリ
10	坏	11.2	4.1	7.6	AA'B	C	橙	80%	№658 底部ヘラケズリ
11	坏	(11.0)	3.3	(8.3)	AA'B	A	橙	25%	№690 口唇部内外煤付着
12	坏	(14.3)	3.5	5.6	AA'B	B	青灰	50%	№831・536 底部糸きり 歪み大きい
13	坏	12.6	3.3	6.0	AA'BD	A	灰	80%	№540・541 底部糸きり A・A'粒子大
14	坏			6.8	AA'B	A	灰	60%	№410・423 底部ヘラケズリ
15	椀			(11.3)	AA'B	C	黄灰	20%	№501・502・504・777 底部外縁ヘラケズリ
16	椀	(14.9)			AA'	A	暗灰	20%	№491・774・778
17	椀					A	暗オリーブ	10%	№11 青磁
18	甕	(23.4)			AA'BD	C	灰赤	20%	№542・832
19	甕				AA'B	B	灰	10%	№460・746・740
20	甕				AA'BD	C	灰赤	10%	№550
21	甕				AA'BC	B	オリーブ灰		№221・268
22	羽口				AB	A		25%	№141・283 先端部発泡ガラス化



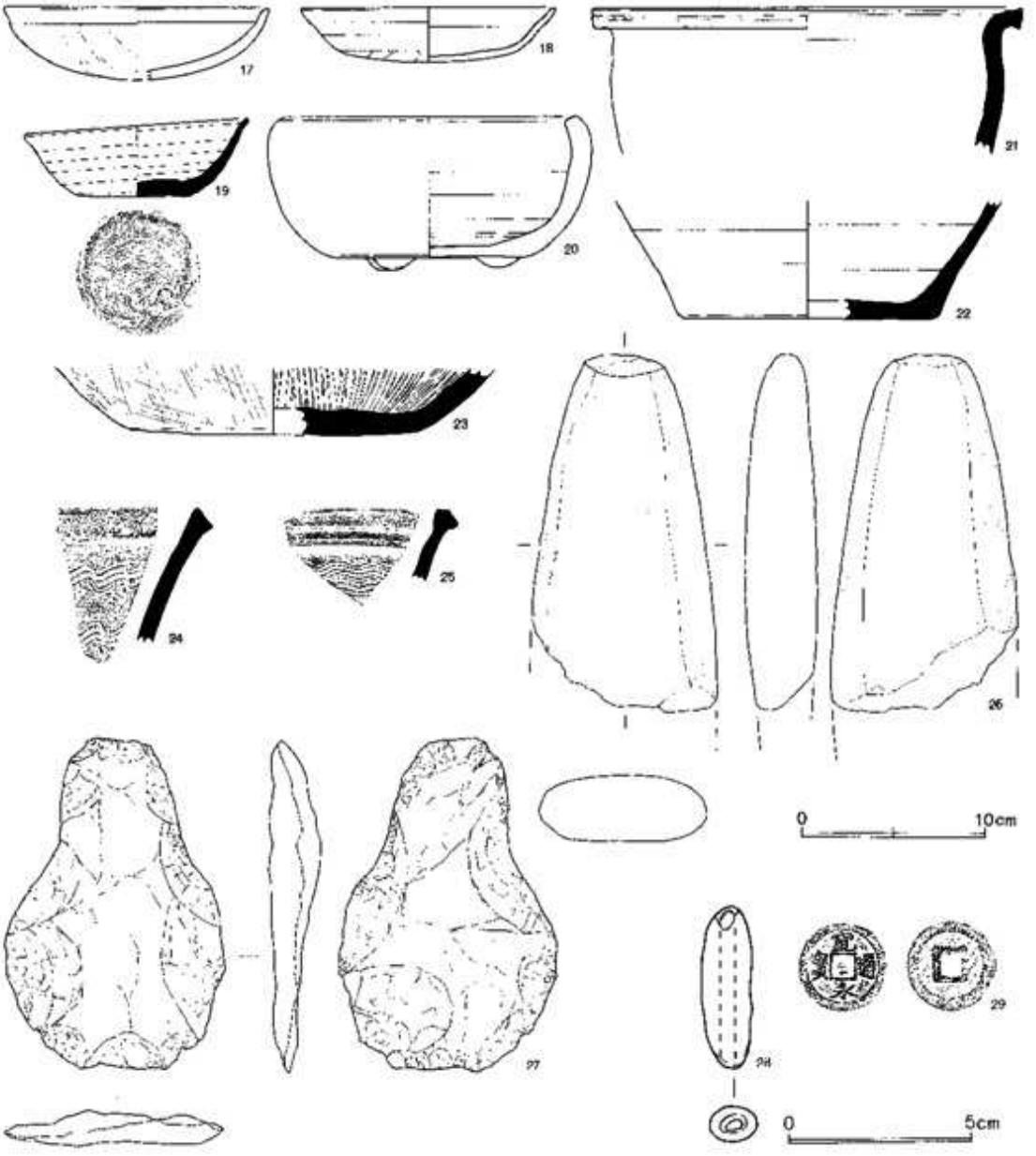
第106図 グリッド出土遺物

グリッド出土遺物（第106図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	高台坏	14.8	6.4	7.4	AA'B	A	暗灰	70%	の－102
2	坏	13.0	3.9	6.0	AA'B	C	灰	80%	の－102－7
3	甕	(22.2)			AA'BC	A	橙	20%	の－102－7
4	紡錘車					A		100%	の－102－7　直径4.3　円孔1.0　重さ34.4
5	石　斧					A		100%	の－100　長径15.4　幅9.2



第107図　表採遺物（1）



第108図　表採遺物(2)

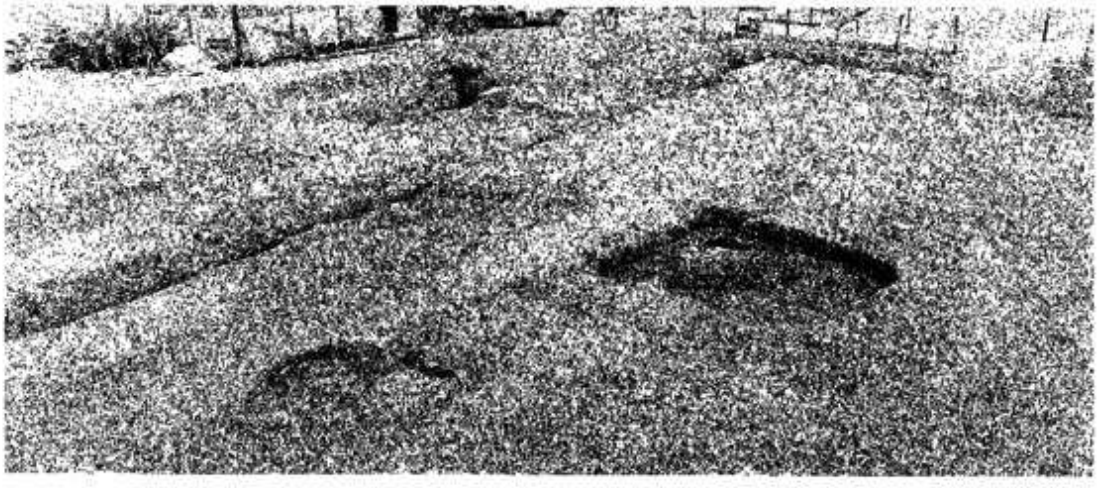
表採遺物（第107・108図）

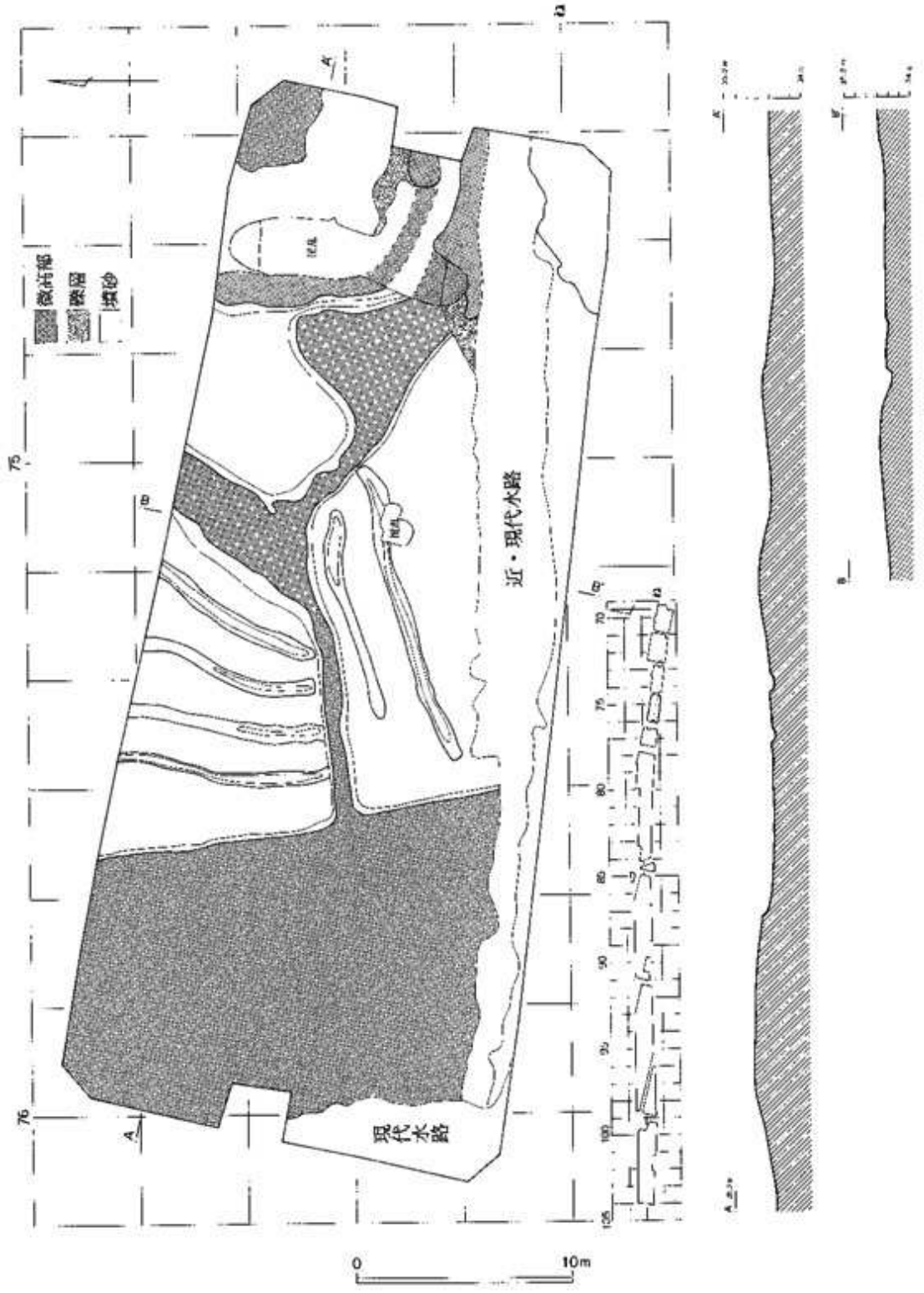
番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
1	深　鉢				AA'B	B	にぶい赤褐	10%	1区
2	深　鉢				AA'B	B	にぶい黄橙	10%	
3	深　鉢				AA·B	B	にぶい黄橙	10%	1区
4	坏	(15.5)		(14.0)	AA·B	B	にぶい橙	25%	III区
5	坏	(13.5)	2.7	(9.2)	AA'BC	B	明赤褐	20%	III区　底部ヘラケズリ
6	坏	(12.0)	3.3	(6.6)	AA'BC	C	暗赤褐	30%	II区　底部糸きりA'粒子大
7	高台坏			8.0	AA'B	A	灰	70%	II区

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・その他
8	鉢	(15.3)			AA'BB'C	B	赤橙	30%	Ⅲ区
9	甕	(17.3)			AA'BC	A	暗赤褐	10%	口縁部外面スス付着　A'粒子大
10	甕	(18.8)			AA'BC	B	赤褐	20%	Ⅰ区
11	把　手				AA'BC	B	にぶい橙	90%	Ⅰ区
12	鉢	(39.8)			AA'B	B	灰	10%	Ⅱ区
13	甕				AA'B	A	青灰		Ⅱ区
14	甕				AA'	A	赤灰		Ⅱ区
15	甕				AA'	A	灰		Ⅱ区
16	土　錘				AA'BC	B	明赤褐	100%	Ⅰ区　長径4.7　直径0.9　重さ11.84
17	坏	(14.6)	4.0		AA'BC	A	赤	25%	3区
18	坏	(14.0)	3.0	(10.0)	ABC	B	にぶい赤褐	25%	3区
19	坏	12.4	4.3	7.0	AA'B	A	灰	90%	3区　底部一部切り損じ　A'粒子多い
20	香　炉	(16.1)	7.6	10.6	AA'BC	B	黒褐	40%	3区
21	鉢	(23.7)			AA'	A	灰	20%	3区
22	壺			(14.3)	AA'B	B	灰白	20%	3区
23	擂り鉢			(15.8)	AA'BC	C	にぶい赤褐	30%	3区
24	甕				AA'B	A	暗灰		3区
25	甕				AA'BC	B	褐灰		3区
26	石　斧					A		70%	3区　長径(19.4)　短径(10.3)
27	石　斧					A		100%	3区　長径18.0　短径12.2.
28	土　錘				AA'B'	C	黒褐	100%	長径4.5　直径1.3　重さ5.53
29	古　銭					A		100%	直径3.5　寛永通寶

8　1区—Ⅳ区（第109図）

1調査区Ⅳ区では、調査区全面が浅間B軽石で覆われていた。この面では遺構の確認はできなかったので、浅間B軽石の除去を行った。その結果西側に幅10mの高まりと、それに続く1m前後の畔状の高まり、また畔状の高まりを境に1段低い空間があり、そこに東西南北に畝状の浅い溝が6条検出された。それぞれの性格を決定するには至らなかったが、畑と畔の可能性が考えられる。出土遺物はなかった。





第109図　1区-IV区B軽石除去後の地形

V　調査のまとめ

古墳時代前期の土器

古墳時代前期の住居跡は、第2～4・7～9号住居跡の6軒が検出された。器種には壺、甕、高坏、器台、手捏、などが見られるが全体の出土量は少なく、詳細な分類検討は行えないので、甕型土器について口縁部の形態と調整手法を中心にした分類をとおして時期の推定を行いたい。

口縁部形態による分類

甕型土器は口縁部の形態で4類に分類できる。

A類は口唇部にキザミを持つタイプで、第3号住居跡（3・6）がこれにあたる。3は頸部が「く」の字に屈曲し内面に稜を持ち、口唇部外面から頂上にかけて刷毛状の工具を押捺して付けられる。一方、6は頸部が緩やかに外彎し口縁部は短く開く、内面肩部上端に輪積痕があることから、体部から連続して成形されたものである、キザミは口唇部外面に細く浅いものが不揃いに付けられる。

B類は単純口縁である、第3号住居跡の5以外いずれも頸部は「く」の字に屈曲するが、直線的に開く第2号住居跡1、第3号住居跡1・4、第4号住居跡1、第7号住居跡1・2、第8号住居跡1をB1類とし。外反して開く第3号住居跡3、第7号住居跡3、第8号住居跡2をB2類とした。また、外彎して開く第3号住居跡5をB3類とした。

C類は口唇部外面に稜をもつもので、第4号住居跡2がそれにあたる。口唇部先端で直立し極く僅かに内彎する。

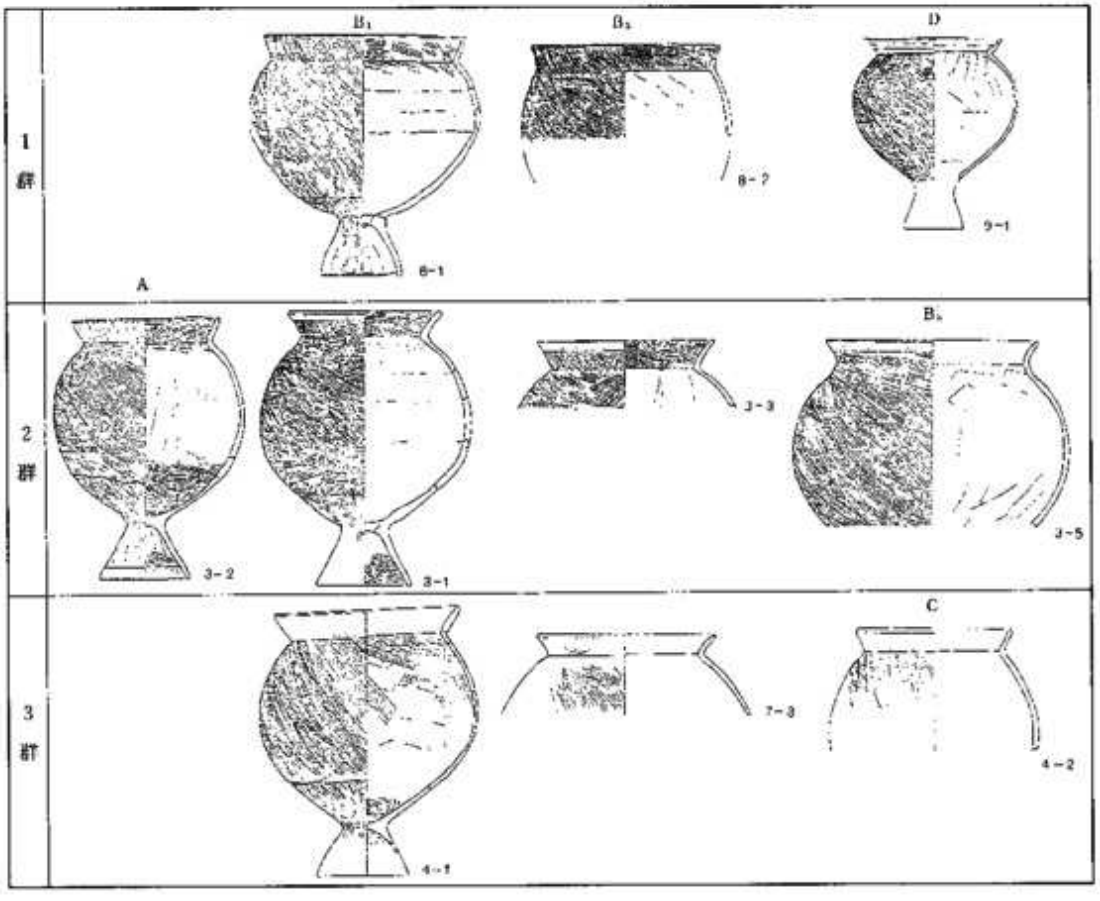
D類は第8号住居跡3、第9号住居跡1のS字状口縁甕である。第8号住居跡3は頸部が一旦短く直立し、口縁部は強く強く屈曲して開く、上半はほぼ垂直に立ち上がり、口唇部は尖って上面が平坦で短く外に開く。第9号住居跡1は、口縁部は体部から「く」の字に開きS字の屈曲は弱い口縁部の上半は外反する、肩部下半に頸部屈曲部からやや離れてヨコハケが加えられる。二者を比較した場合、第8号住居跡3には頸部と口縁部上半が直立すること、口唇部の面取りがあることなどから、第9号住居跡1に比べ古い要素が見られる。内面の調整についても、第8号住居跡3が肩部内面に縦方向に指ナデをおこなうのに対して、第9号住居跡1では木口状工具、あるいはヘラナデをおこなう点にも見ることができる。

調整手法による分類

次に器面の調整手法についてみれば、ハケメ、ヨコナデ、ナデ（指、木口工具）が観察できる。これらの手法の施工方法を口縁部について見れば3類に分けることができる。1類は口縁部内・外面に刷毛目を残すもので第8号住居跡1・2があたる。2類は口縁部刷毛調整の後外面中位または内面全体にヨコナデが加えられハケメの一部が消されるものである。3類は口縁部刷毛調整の後、内・外面の全面をヨコナデされるものである。

以上のように手法による分類は3類にまとめることができ、さらに住居跡ごとの出土遺物に手法的特徴がまとまる傾向がある。1類は第8号住居跡にみられる。B1類の甕は胴部の最大径が上位にあり肩部に張りがある。2類は第3号住居跡に集中的に見られる。そして第3号住居跡2は最大径

が中位に移り、長胴化の傾向が伺える。3類は第4・7号住居跡で見られ、胴部中位に最大径を持つとともに器高に対する胴部の占める割合も1類が63%、2類が67%に対して3類は70%と増し、長胴化が進行する。また、内面の調整も指ナデから木口工具によるナデに移行する。



第110図　甕型土器の分類

編年的位置付け

五領式土器の編年については、弥生時代終末期の土器との関連でその区分は明確とは言えない。大村氏は2分類を基本に古・新に4細分したなかで、甕型土器については1式段階が口唇部キザミが基本的に除去される、2式段階を胴部の長胴化傾向が明確になり、脚台部が小型化するとした。また、2式新段階では刷毛調整を省略する傾向があること、篦ナデ、篦削りの頻度が増すことを細分の基準としている(大村　1982)。なお横川氏も、刷毛目からヘラケズリの手法が多用されるようになるとする考え方のもと、4期に細分した(横川　1983)。また大宮台地西縁部に立地する稲荷台地遺跡をまとめた書上氏は、土器の組成に注目し東海地方西部系土器の影響から畿内系土器の影響が強くなる流れの中で、三段階に分類し積極的に赤塚氏の編年（赤塚1990）との対応を探った（書上1994)。

今回検証したハケメ調整の状態からその後をヨコナデ調整で消す行為と胴部が長胴化する傾向

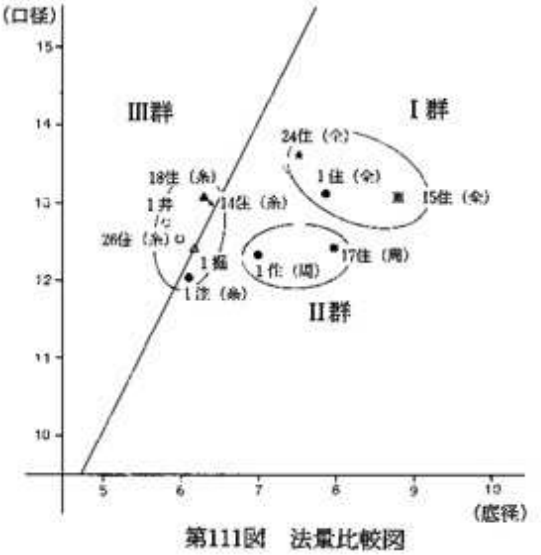
は、大村・横川氏が編年の基準とされたことでもあり、調整分類の１類から３類への変化はそのまま時間の経過と考えることができる。数軒の住居跡の少ない資料で集落全体を語ることはできないが編年的位置付けは、概ね横川編年の五領II式、書上編年の第２段階に相当するもので、当集落では３手法の変遷をたどることができる。

奈良・平安時代の土器

奈良・平安時代の住居跡は、１区で７軒と３区で13軒合計20軒が検出された。このうちまとまって遺物が検出された住居跡の須恵器坏を中心に検討を行い、集落の存続期間の推定をおこないたい。時期設定にあたっては、比較資料として鳩山窯跡群の編年（渡辺1990）を援用して集落の変遷を想定したい。

法量と手法による分類

須恵器坏を編年するさいに、口径の変化と底径との比で概ね変遷をたどることができる。矢島南遺跡においてもその数値をグラフ化したところ、分布の集中を以下の通り３群に分けることができた（第111図）。



第111図　法量比較図

Ⅰ群　口径が13cm台で、底部調整は全面ヘラ削り

II群　口径が12cm台で、底部調整は周辺ヘラ削り

III群　口径が12cmから13cm前半台で底部調整は回転糸切り後未調整、底径が口径の２分の１かそれを下回る。

Ⅰ群須恵器坏を出土する住居跡は、第１Ｂ・15・24号住居跡である。いずれも底部全面ヘラケズリで口径は13cm台が中心だが、第１号住居跡には12cm台も見られ、第15号住居跡とともに平均で13cm前半である。第15号住居跡の５は底部中央と体部の器肉が厚く、直線的に開く。第24号住居跡出土須恵器坏の口径の平均は13.6cm、底径が6.8cmで本遺跡では口径の平均値が最も大きい。なかでも21と25は口径14cm台と大きく体部も直線的に開き、器肉は口縁部に向かって薄くなるなどの点で古い要素を持つものである。また20は胎土に白色針状物質を含む南比企窯跡群産の製品と思はれるもので、口径はやや小さいが器壁が厚く、体部が直線的に開くなど鳩山窯跡群HIII期前半の特徴を見ることができる。

II群とした土器群は、底部調整に周辺ヘラケズリを持つもので、これらが出土する住居跡は、第１Ｂ・17号住居跡である。いずれも口径の平均が12cm台である。第１Ｂ号住居跡では口径が12cmを主体とするものの11cm台13cm台を含み口径に幅が見られる。このうち体部が直線的に開く18・19は口径が13cm台で本群の中でも古い要素と見ることができる。また第17号住居跡の５については口径

が12.7cmで体部が直線的に開き器肉も厚く、第１Ｂ号住居跡18・19と共通した特徴を持つ。一方で第１Ｂ号住居跡20・22・24～26、第17号住居跡２などは、器肉が薄く体部に僅かな丸味を帯びさらに口縁部が外反する傾向が見え、本群の中でも後半に位置ずくものであろう。

Ⅲ群とした底部調整がない糸切り底を出土する住居跡は、第１Ａ・13・14・18・26号住居跡、第１号井戸、第１号掘立柱建物跡である。口径12cm台から13cm台前半で、底部は口縁部径のほぼ２分の１となるかそれを下回る。第１号住居跡22は口径12cm、底径6.2cmで底径は口径の２分の１を上回り、体部は直線的に開き逆台形となる。口唇部は肥厚せず外反もしないことからⅢ群中では古相に属する。第１号掘立柱建物跡１は底部が口縁部の２分の１に縮小し口縁部に外反の兆しが見られる。第14・18・26号住居跡、第１号井戸出土坏は体部が丸味を持ち、肥厚した口縁部の外反が顕著である。第26号住居跡３は体部が直線的に開き、口縁部の肥厚と外反が見られないなどやや古い要素を持つ。

編年的位置付け

以上、底部の調整手法と口径・底径の変化をもとに３群に分類をおこなった、先にも述べたとおりこれらの変化を時間の経過として編年することが可能であり、当集落が営まれた時期を３期に分けることができる。

まずⅠ群の時期は概ね鳩山窯跡群ＨⅢ期に相当するものとおもわれ、８世紀第２四半期後半から第３四半期前半となる。この中で第24号住居跡21・25は口径が14cm台であることなどからＨⅢ期前半としたい。また、第24号住居跡の鍔状凸帯を持つ蓋31は灰白色の胎土で群馬県安中市秋間窯跡との関係で注目され勢多郡大胡町八ヶ峰生産遺構（山下　1986）などに類例をみることができる。Ⅱ群は鳩山窯跡群ＨⅣ期、８世紀第３四半期後半から８世紀第４四半期前半に比定される。Ⅲ群は、鳩山窯跡群ＨⅧ期、９世紀第３四半期後半から第４四半期前半ということになるが、第１号住居跡22については鳩山窯跡群Ⅵ期（９世紀第１四半期後半から第２四半期前半）の特徴をもつ。

以上須恵器坏の年代から集落を見ると、８世紀中葉から後半にかけて、第１・15・17・24号住居跡などが存在し、９世紀中葉に相当するものに第14・18・26号住居跡、第１号掘立柱建物跡、第１号井戸がある。なお、８世紀末から９世紀初頭にかけて須恵器坏の口径が最も小さくなる時期の土器は出土数が少なく不明瞭であることがわかる。このことから一時期集落の規模が縮小したか中断された可能性も考えられる。また第25号住居跡からは、返りのある蓋（６）が出土するなど鳩山窯跡群ＨⅠ期に先行する時期の存在も考えられることを付け加えてまとめとしたい。

引用・参考文献

赤塚次郎　1990　「考察」『廻間遺跡』　(財)愛知県埋蔵文化財センター

大村　直　1982　「前野町式・五領式の再評価」　『神谷原Ⅲ』　八王子市椚田遺跡調査会

青上元博　1994　「古墳時代初頭の土器群の分類」　『稲荷台遺跡』　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

山下歳信　1986　「八ヶ峰生産遺構」『上大屋・横越地区遺跡群』群馬県勢多郡大胡町教育委員会

横川好富　1983　「埼玉県の古式土師器」　『埼玉県史研究』第10号

渡辺　一　1990　『鳩山窯跡群Ⅱ』　鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会

渡辺　一　1990　「南比企窯跡群の須恵器の年代―鳩山窯跡の年代を中心に―」　『埼玉考古』第27号　埼玉考古学会

Ⅵ 附 編

1 埼玉県矢島南遺跡出土木材の樹種

鈴木三男（金沢大・教養・生物）・能城修一（農水省森林総合研究所）

埼玉県の深谷市にある矢島南遺跡の平安時代（9世紀後半）の井戸2基から出土した木製品13点の樹種を調査した。試料から剃刀刃を用いて横断、接線、放射の3断面の切片を切取り、これをガムクロラールで封入してプレパラートとし、光学顕微鏡で観察同定した。その結果、ヒノキ、スギ、クリ、クヌギ節の4樹種が同定された(表)。以下にこれらの同定の根拠となった材形質について略記し、その顕微鏡写真を示した。

1．ヒノキ Chamaecyparis obtusa Sieb. et Zucc. ヒノキ科 写真1 a-c

年輪の目立たない淡色の針葉樹材で、早材部仮道管は薄壁で断面が放射方向にやや長い長方形、晩材部はやや厚壁で接線方向に偏平である。年輪は一般に狭く、早材部がその大部分を占め、晩材部はたいへん狭く数細胞層しかない。早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞の水平壁は厚く単壁孔がある。分野壁孔はヒノキ型で1分野当たり2個ある。これらの形質からヒノキの材と同定した。当遺跡出土材は曲げ物4点と板材1点の合計5点である。いずれも比較的大きなもので、ヒノキ材の原産地は深谷市近辺には想定されないことから、流通の結果と考えられる。

1．スギ Cryptomeria Japonica D. Don スギ科 写真2 a-C

年輪のきわめて明瞭な針葉樹材で、早材部仮道管は薄壁で径が大きく、放射方向に長い長方形、晩材部仮道管は厚壁でほとんど内腔がないほど放射径が小さく、接線方向に偏平である。早材部はたいへん広く、晩材部はやや狭い。早材から晩材への移行はかなり急である。樹脂細胞は晩材部に比較的多く、散在している。樹脂細胞には黒褐色の物質が沈着し、その水平壁は平滑である。放射組織は単列で柔細胞のみからなり、分野の壁孔は大きく、開孔部が大型の楕円形でスギ型で、1分野当たり2個ある。これらの形質からスギの材と同定した。当遺跡出土材は大きな楕円形曲げ物の底板1点のみである。

3．クリ Castanea crenata Sieb. et Zucc. ブナ科 3 a-c

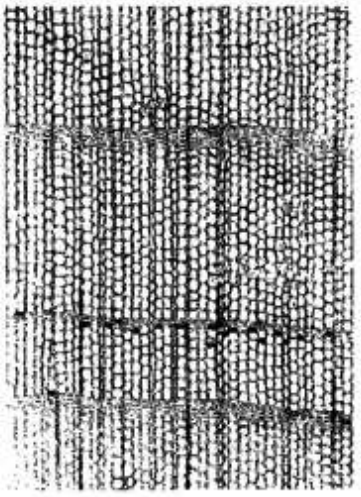
放射方向に長い楕円形の大きな単独管孔が年輪のはじめに1～数列に並び、晩材ではごく小型で薄壁多方形の管孔が火炎状に配列する環孔材。早材から晩材への移行はふつう緩やか。木部柔組織は、晩材でいびつな接線状を呈し、著しい。道管の穿孔は単一。放射組織は単列同性。これらの形質からクリの材と同定した。当遺跡出土材は丸木及び割材の杭5点と板材1点で、クリ材の土木用材への多用の傾向が窺われる。

6．コナラ属クヌギ節　Quercus sect. Aegilops　ブナ科　4a-c

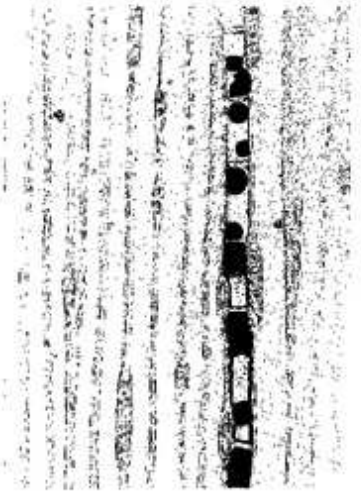
大型で丸い単独管孔が年輪のはじめに数層集合し、晩材では中～小型で厚壁の丸い管孔が放射方向に配列する環孔材。早材から晩材への移行はなだらか。木部柔組織はいびつな接線状あるいは2細胞幅ほどの帯状。道管の穿孔は単一。放射組織は同性で、単列の小型のものと大型の複合状のものとからなり、後者にはしばしば結晶細胞がある。これらの形質からクヌギ節の材と同定した。当遺跡出土材は丸木の杭材1点である。クヌギ材は特に若い丸木材においては土木用材としてはクリ材より材質が遥かに劣るので、クリ材の応急的代用と考えられる。

表　埼玉県矢島南遺跡出土木製品の樹種

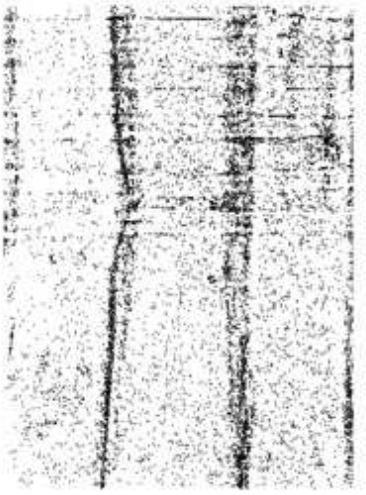
標本番号	樹種名	製品の種類	出土遺構
SAT－1	クヌギ節	丸木杭材	第1号井戸跡
SAT－2	クリ	丸木杭材	第1号井戸跡
SAT－3	クリ	丸木杭材	第1号井戸跡
SAT－4	ヒノキ	曲物側板	第1号井戸跡
SAT－5	ヒノキ	楕円形曲物底板	第2号井戸跡
SAT－6	ヒノキ	曲物底板	第1号井戸跡
SAT－7	ヒノキ	曲物側板	第2号井戸跡
SAT－8	スギ	楕円形曲物底板	第2号井戸跡
SAT－9	クリ	割杭材	第2号井戸跡
SAT－10	クリ	杭材	第2号井戸跡
SAT－11	クリ	丸木板材	第2号井戸跡
SAT－12	クリ	丸木板材	第2号井戸跡
SAT－13	ヒノキ	柾目板材	第2号井戸跡



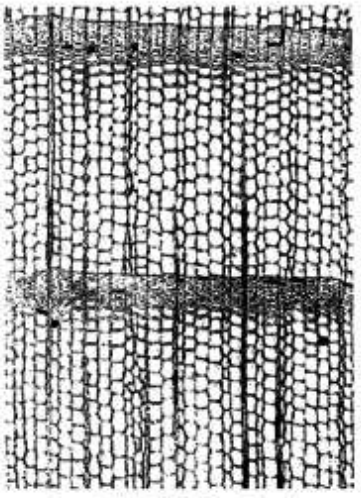
1a. ヒノキ SAT 13 C×40.



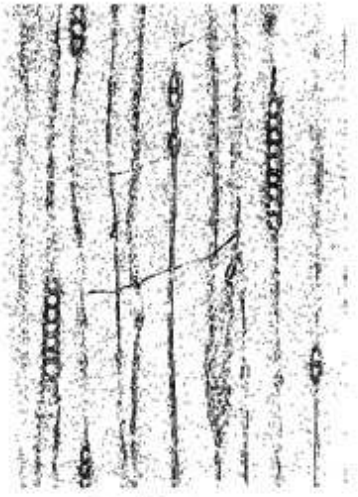
1b. 同 T×100.



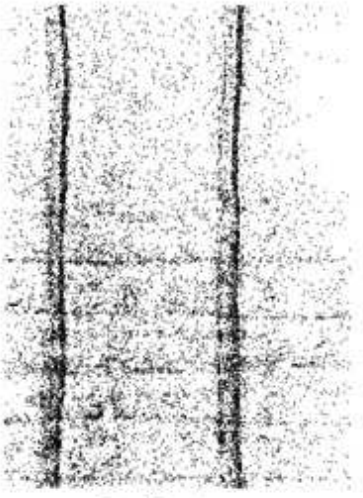
1c. 同 R×400.



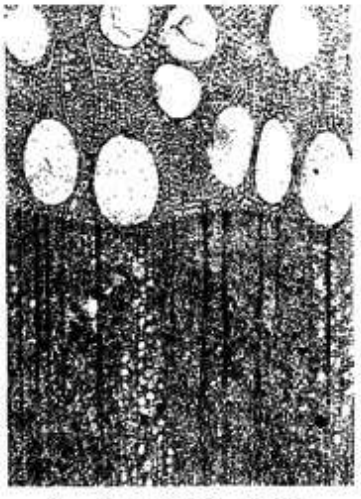
2a. スギ SAT 8 C×40.



2b. 同 T×100.



2c. 同 R×400.



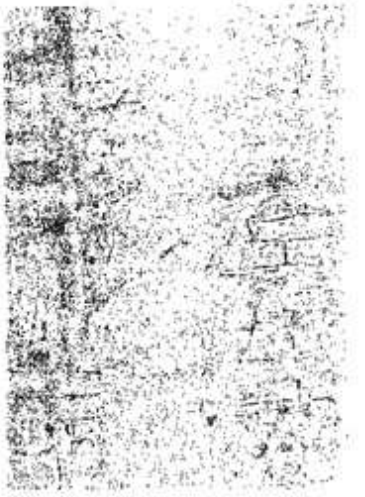
3a. クリ SAT-3 C×40.

3b. 同 T×100.

3c. 同 R×200.

4a. クヌギ節 SAT-1 C×40.

4b. 同 T×100.



4c. 同 R×200.

2　矢島南遺跡出土土器胎土分析

(株)第四紀　地質研究所井上　巌

X線回析試験及び電子顕微鏡観察

1　実験条件

1－1　試　　料

分析に供した試料は第2表胎土性状表に示すとうりである。

X線回析試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちにメノウ乳鉢にて粉砕し、粉末試料として実験に供した。

電子顕微鏡観察に供する遺物試料は断面を観察できるように整形し、φ10m/mの試料台にシルバーペーストで固定し、イオンスパッタリング装置で定着した。

第1表　矢島南遺跡胎土分析試料対照表

試料No.	器　種	図版・番号
1	坏	第62－1
2	坏	第62－6
3	坏	第62－18
4	坏(須恵器)	第62－21
5	坏(須恵器)	第62－30
6	壺(須恵器)	第63－41
7	蓋(須恵器)	第62－31
8	高盤(須恵器)	第63－45
9	蓋(須恵器)	第62－33
10	甕	第62－38

1－2　X線回析試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回析試験によった。測定には日本電子製JDX－8020X線回析装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40kv, Current: 30mA,ステップ角度：0.02, 計数時間：0.5ESC。

1－3　電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物及びガラス生成の度合についての観察は電子顕微鏡によって行った。

観察には日本電子製T－20を用い、倍率は35、350、750、1500、5000の5段階で行ない、写真を撮影した。

35～350倍は胎土の組織、750～5000倍は粘土鉱物及びガラスの生成状態を観察した。

2　実験結果の取扱い

実験結果は第2表胎土性状表に示すとうりである。

第2表右側にはX線回析試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回析論験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの強度を記載したものである。

電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回析試験で得られたムライト（Mullite)、クリストバーライト（Cristobalite）等の組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

第2表　胎土性状表

試料No	タイプ分類	焼成ランク	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物														備考
			%Mo/Mi-Hb	%Ch,Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Cristo	Mullite	K-feld	Roller	Paol	Pyric	Au	ガラス	
矢島南－1	C	II	6	29		63	121			1594	357	203	44				104			土師器坏、8CM
矢島南　2	D	III	7	9		207	143	410	97	1456	1031									土師器坏、8CM
矢島南－3	A	III	1	1	207	149	117	243		1896	462	128								土師器坏、8CM
矢島南－4	B	I～II	5	20			56			2408	470	115	50	167			101			須恵器坏、8CM
矢島南　5	G	II～III	14	20						3421	109	135	51	310						須恵器坏、8CM
矢島南－6	G	I～II	14	20						2027	161	252	55				80			須恵器壺、8CM
矢島南－7	G	II～III	14	20						3909	66			118						須恵器甕、8CM
矢島南　8	F	III	8	20		205				2509	526									須恵器高坏、8CM
矢島南－9	E	III	7	20		189	88			1886	739	101	43							須恵器甕、8CM
矢島南－10	C	III	6	20		77	117			1788	548	118								土師器甕、8CM

2－1　組成分類

1）Mo-Mi-Hb 三角ダイアグラム

第1図に示すように三角ダイアグラムを1～13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

MO、Mi、Hb の三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。三角ダイアグラムはモンモリロナイト(Mont)、雲母類(Mica)、角閃石(Hb)のX線回折試験におけるチャートピーク強度をパーセント（%）で表示する。

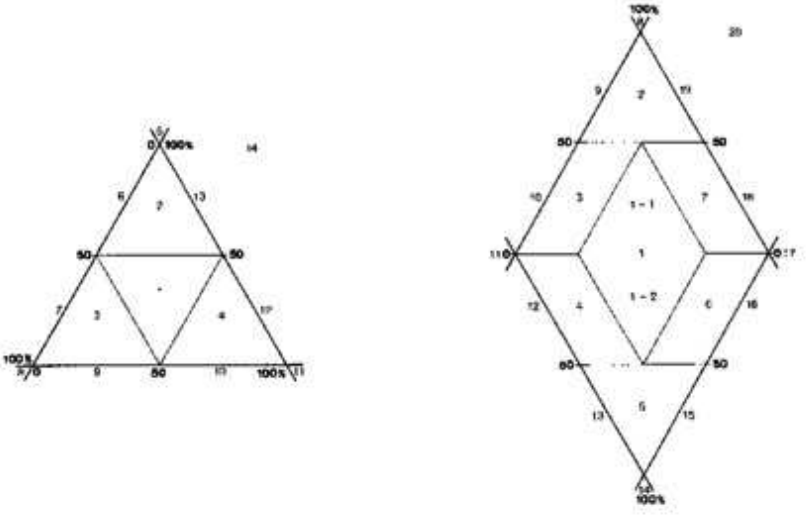
モンモリロナイトは Mo/Mo＋Mi＋Hb＊100でパーセントとして求め、同様に Mi, Hb も計算し、三角ダイヤグラムに記載する。

三角ダイアグラム内の1～4は Mo, Mi, Hb の3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

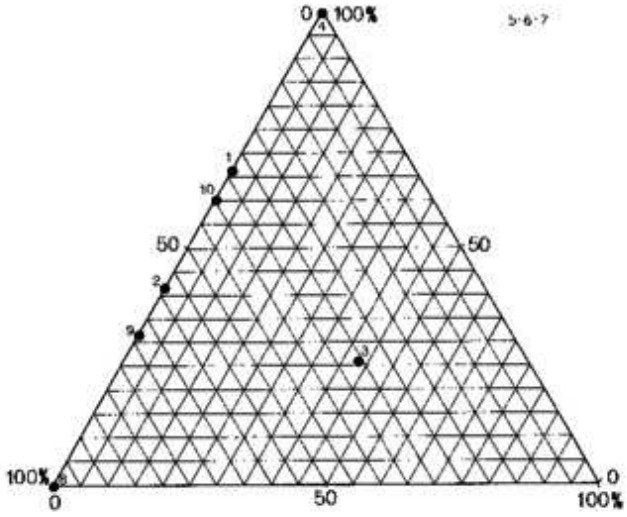
位置分類についての基本原則は第1図に示すとうりである。

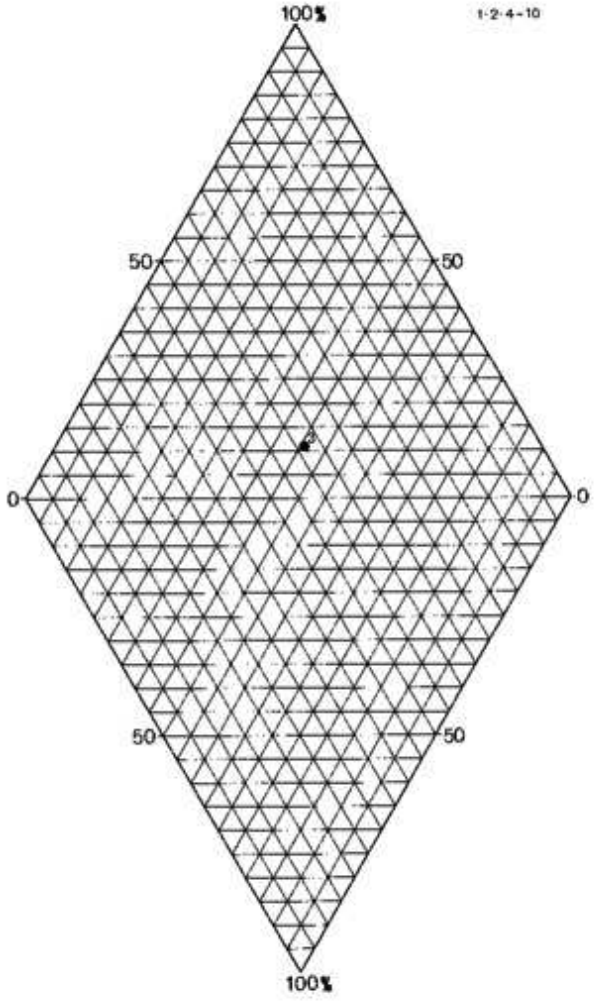
2）Mo-Ch, Mi-Hb 菱形ダイアグラム

第2図に示すように菱形ダイアグラムを1～9に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能



第1図　三角ダイヤグラム・菱形ダイヤグラム位置分類図





第2図　Mo-Mi-Hb 三角ダイヤグラム・Mo-Ch, Mi-Ch 菱形ダイヤグラム

は20として別に検討した。

モンモリロナイト（Mont)、雲母類（Mica)、角閃石（Hb)、緑泥石（Ch）の内、a）3成分以上含まれない。b）Mont, ch の2成分が含まれない、c）Mi, Hb の2成分が含まれない、の3例がある。

菱形ダイアグラムは Mont-Ch, Mica-Hb の組合せを表示するものである。Mont-Ch, Mica-Hb のそれぞれのX線回析試験のチャートの強度を各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、Mo/Mo+Ch＊100と計算し、Mi, Hb, Ch も各々同様に計算し、記載する。

菱形ダイアグラム内にある1～7はMo, Mi, Hb, Ch の4成分を含み、各辺はMo, Mi, Hb, Ch のうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。

位置分類についての基本原則は第2図に示すとおりである。

2－2　焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回析試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。

ムライト（Mullite）は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバーライト（Cristobalite）はムライトより低い温度、ガラスはクリストバーライトより更に低い温度で生成する。

これらの事実に基づき、X線回析試験結果と電子顕微鏡観察表結果から、土器胎土の焼成ランクをⅠ～Ⅴの5段階に区分した。

a）焼成ランクⅠ：ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは発砲している。
b）焼成ランクⅡ：ムライトとクリストバーライトが共存し、ガラスは短冊状により、面積は狭くなる。
c）焼成ランクⅢ：ガラスのなかにクリストバーライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。
d）焼成ランクⅣ：ガラスのみが生存し、原土（素地土）の組織をかなり残している。ガラスは微小な葉状を呈する。
e）焼成ランクⅤ：原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

以上のⅠ～Ⅴの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち、粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クラストバーライトなどの組合せといくぶん異なる焼成ランクを出現することになるが、この点については第1表の右端の備考に理由を記した。

3　分類結果

3－1　タイプ分類

第2表胎土性状表に示すように、土器はA～Gの7タイプに分類された。10個の土器の分析で7

タイプに分類されるというのは多種にわたることを意味する。

土器は土師器と須恵器の2種類があり、各々の中に器種の異なるものやタイプの異なるものが含まれるために生じた結果と推察される。

Aタイプ：Mont, Mica, Hb, Ch の4成分を含む。

Bタイプ：Hb1成分を含み、Mont, Mica, Ch の3成分に欠ける。

Cタイプ：Mica, Hb の2成分を含み、Mont, Ch の2成分に欠ける。固体数は2個。

Dタイプ：Mica, Hb, Ch の3成分を含み、Mont1成分に欠ける。

Eタイプ：Mica, Hb の2成分を含み、Mont, Ch の2成分に欠ける。組成的にはCタイプと同じであるが強度が異なるために、位置分類が異なる。

Fタイプ：Mica 1成分を含み、Mont, Hb, Ch の3成分に欠ける。

Gタイプ：Mont, Mica, Hb, Ch の4成分に欠ける。これらは高温で焼成された須恵器で、高温焼成の際に含まれていた鉱物が分解されてガラスに変質したために生じた結果である。

以上の結果から明らかな様に、土師器は本来の組成を示し、胎土が異なることが明らかで、須恵器でも組成が異なるものが検出され、何種類かに分れることは明らかである。

3－2石英（Qt）－斜長石（P1）の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を制作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器制作上の固有の技術であると考えられる。

自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地における砂はおのおの固有の石英と斜長石比を有していると言える。

この固有の比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは各々の集団の有する固有の技術の一端と考えられる。

第3図Qt－P1図は土師器だけを記載したもので、砂田前、上敷免、城北遺跡の土師器と共に記載した。第4図は稲荷前、鳩山窯址、桜沢窯址の須恵器と共に記載したものである。

「土師器について」

第3図に示すように土師器は砂田前、上敷免、城北遺跡の土師器と共に記載してある。土器はI～Vの5グループに分類された。

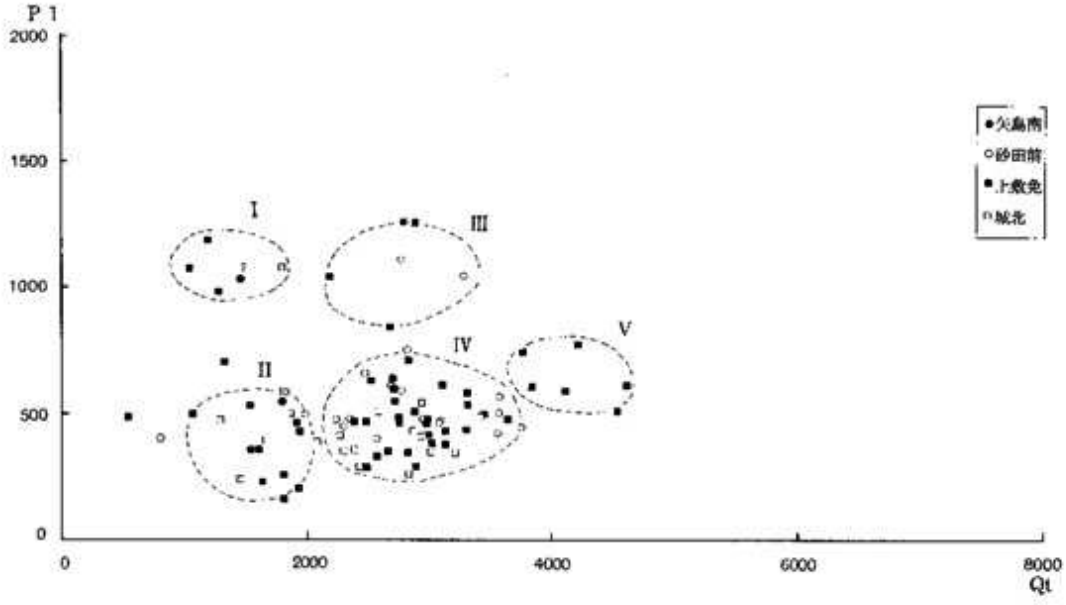
Iグループ：上敷免の土器が主体で、斜長石の強度が高いのが特長である。矢島南－2と城北の土器が共存する。

IIグループ：上敷免の土器が集中するグループで、矢島南－1、3、10の3個の土器が集中する。砂田前と城北の土器が共存する。

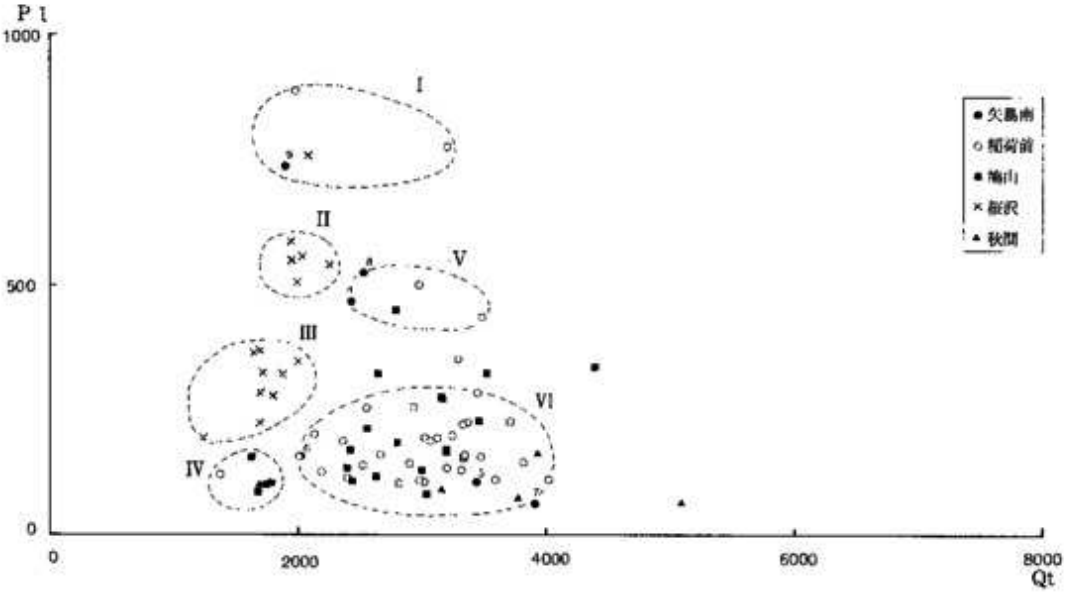
IIIグループ：上敷免と砂田前の土器で構成される。

IVグループ：上敷免、砂田前、城北の土器が集中し、共存する。

Vグループ：上敷免の土器が集中する。



第3図　Qt-P 1相関図（土師器）



第4図　Pt-Q 1相関図（須恵器）

以上の結果から明らかな様に、ⅠとⅡの2グループにだけ矢島南の土器が分布し、他の3グループには分布しない。ⅠとⅡの2グループは共に上敷免と城北の土器で構成されるもので、これらの遺跡との関連性が伺われる。

「須恵器について」

須恵器は稲荷前、鳩山窯址、桜沢窯址の土器と共に記載した。図から明らかな様にⅠ～Ⅵの6グループに分類された。

Ⅰグループ：斜長石の強度が高く、異質なグループ。稲荷前、桜沢の土器と共存して矢島南－9の土器が分布する。

Ⅱグループ：桜沢の土器が集中する。

Ⅲグループ：桜沢の土器が集中する。

Ⅳグループ：鳩山の土器が集中する。

Ⅴグループ：稲荷前と鳩山の土器と共に、矢島南－4と8が共存する。

Ⅵグループ：稲荷前と鳩山の土器が集中するグループで、矢島南－5、6、7の3個もこのグループに含まれるようであるが矢島南－6と7はグループの端にあり、はっきりしない。

以上の結果から明らかな様に須恵器はⅠ、Ⅴ、Ⅵの3グループに分布し、分散傾向にある。矢島南－5、7は分析値が近く類似性が伺われるが矢島南－6は明らかに Qt の強度が低く、異質である。

矢島南遺跡の須恵器の中で矢島南－5と7は群馬県の秋間窯址の土器との関連性が伺われたので、松井田市教育委員会で行った秋間窯址の土器の分析結果と対比した。第4図Qt－P1図（矢島南と秋間の須恵器の相関図）は分析結果に基づいて作成したものである。矢島南－5と7は秋間の土器と接近し、一つのグループを形成している。このように見てくると、矢島南－5と7の土器の断面が白色で、凝灰岩質に見える断面の状況は秋間窯址の土器と類似性があり、Qt－P1の相関においても同じグループを形成することから推察して、関連性が伺われる。

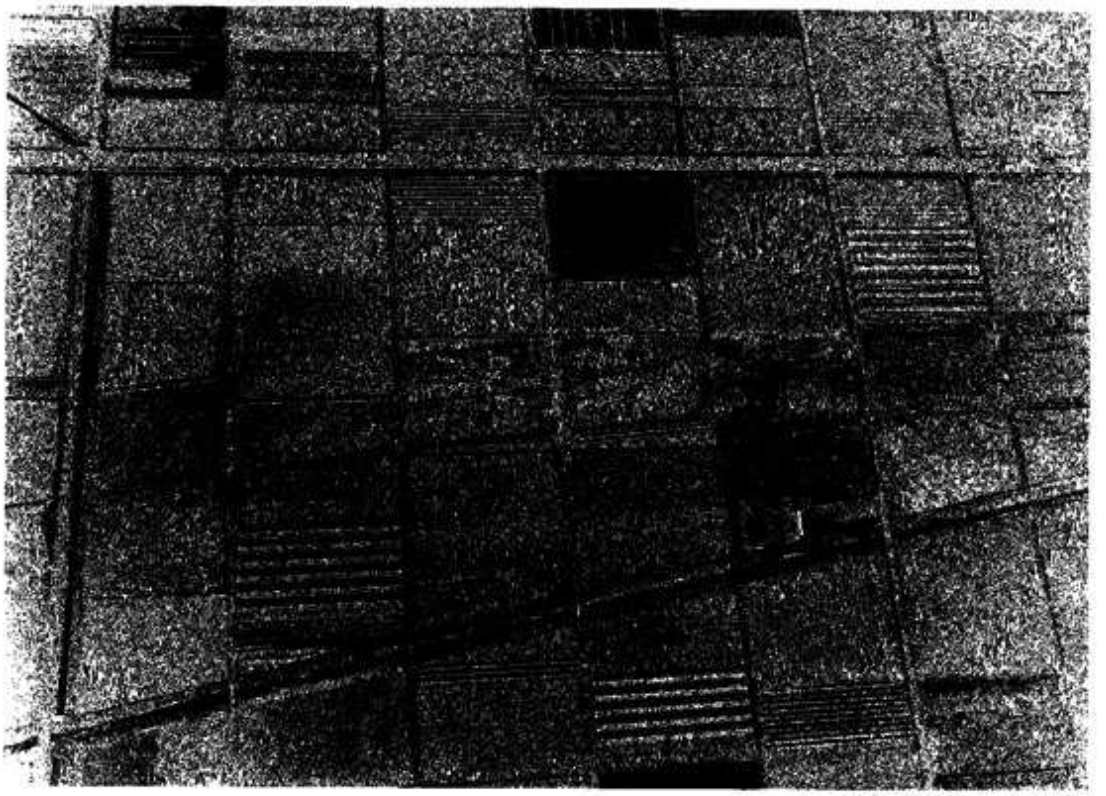
4　ま　と　め

1）土器は土師器と須恵器10個の分析で7タイプに分類され、多種にわたることが推察された。

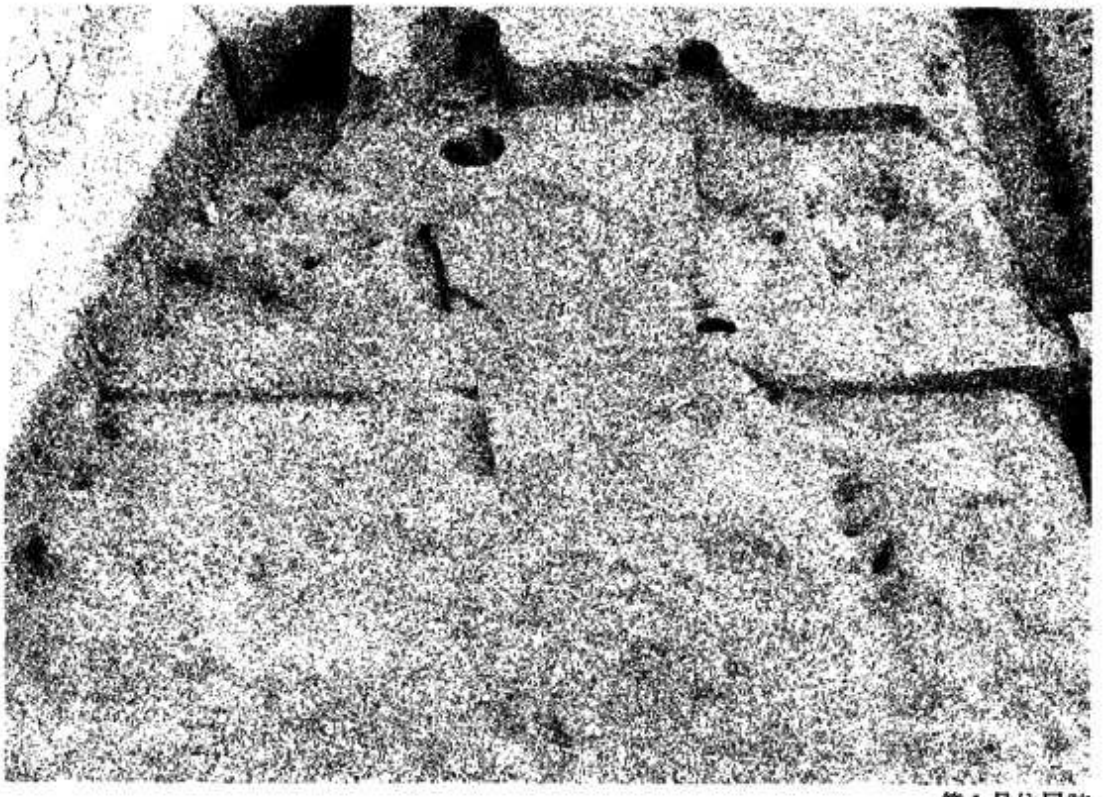
2）石英と斜長石の相関は土師器と須恵器に分けて行った。土師器はⅠとⅡグループに分布し、上敷免と城北の土器と共存し、関連性が伺われる。須恵器はⅠ、Ⅴ、Ⅵの3グループに分布する。Ⅵグループの土器は矢島南－5、6、7の3個で、鳩山窯跡と稲荷前遺跡の土器が集中するグループに共存するが、矢島南－6と7はグループの両端に位置し、両者が同じグループに属するというのは不自然であり、異質なものと判断するほうがよいであろう。

3）矢島南－5と7は秋間窯址の土器と断面が似ており、Qt－P1の相関においても同じグループを形成する傾向が認められ、類似性が伺われる。

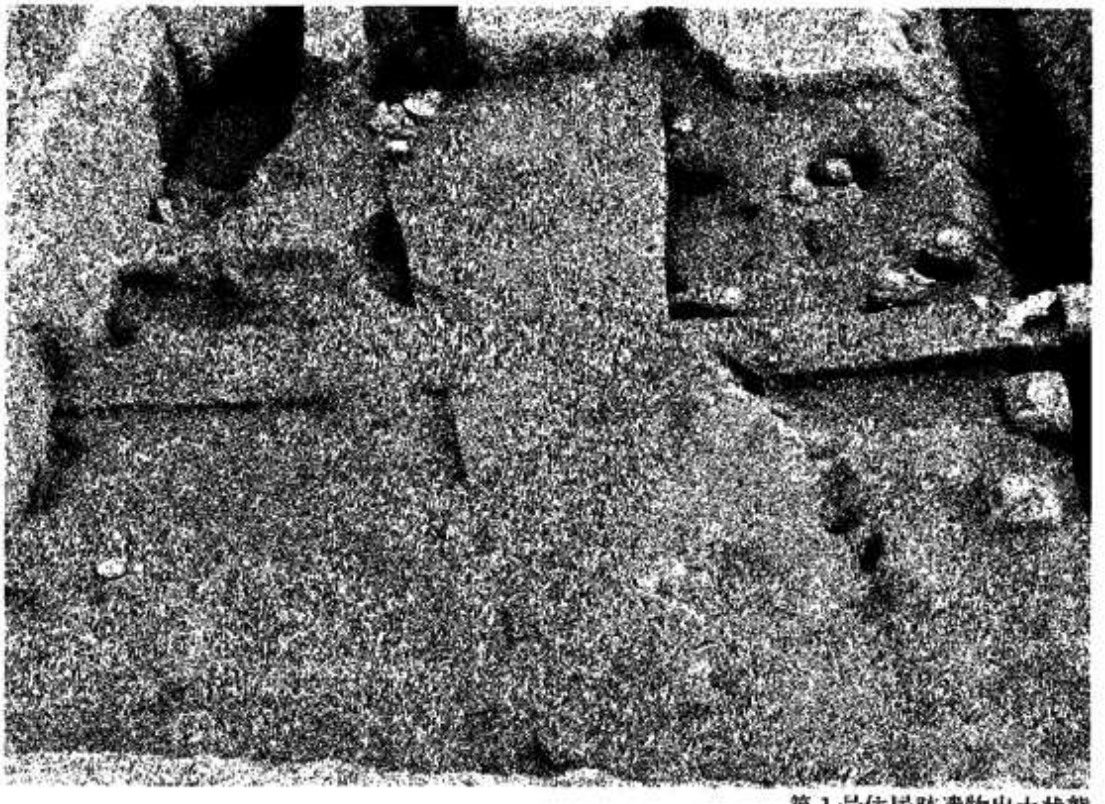
写真図版



矢島南遺跡—1　全景

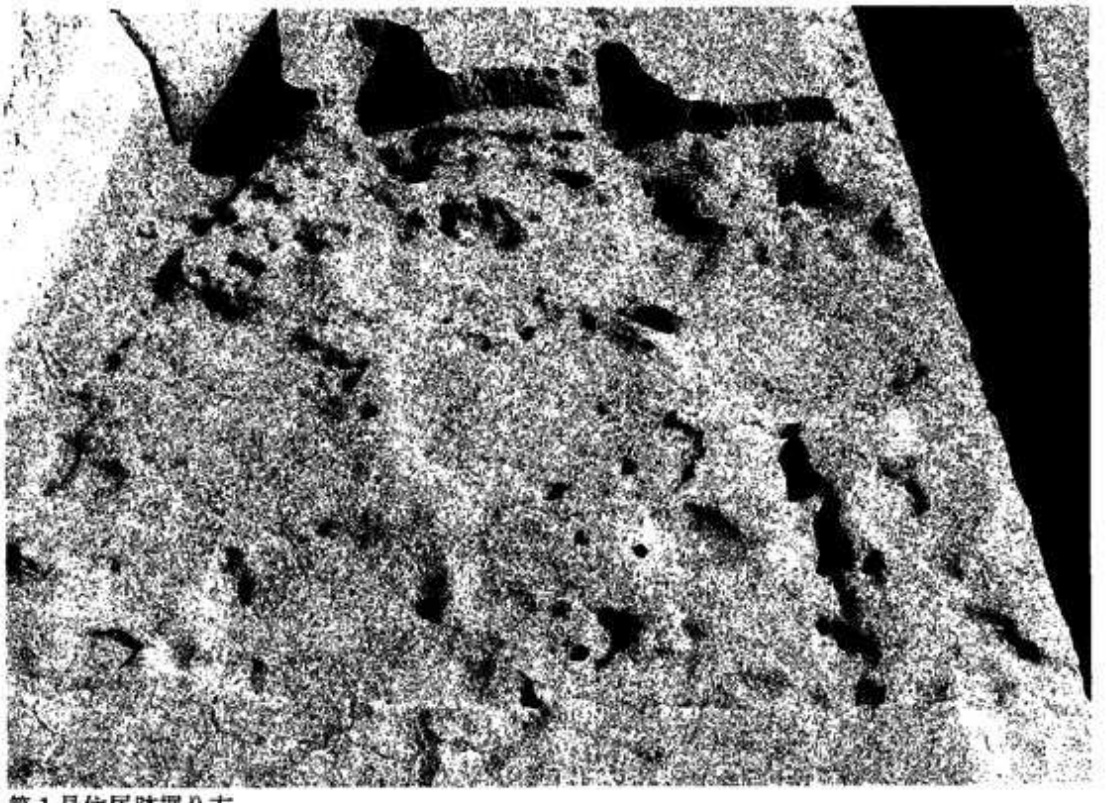


第 1 号住居跡



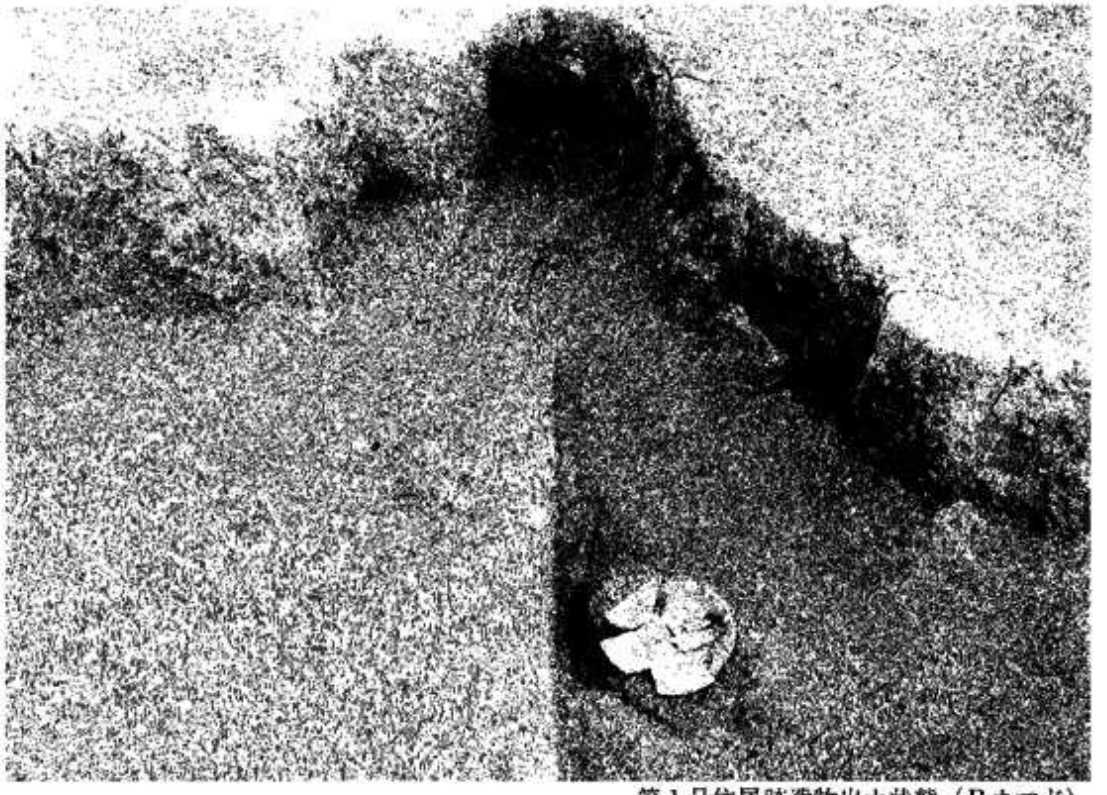
第 1 号住居跡遺物出土状態

図版 2

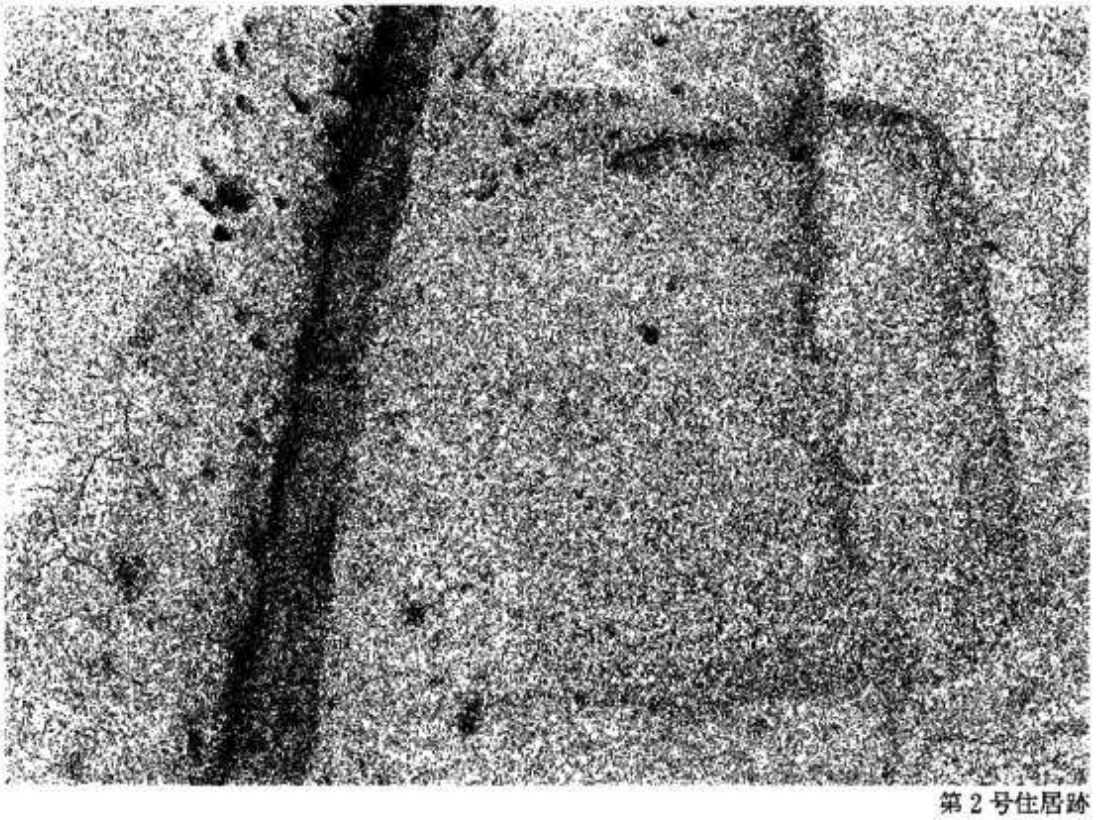


第 1 号住居跡掘り方

第 1 号住居跡遺物出土状態（A カマド）

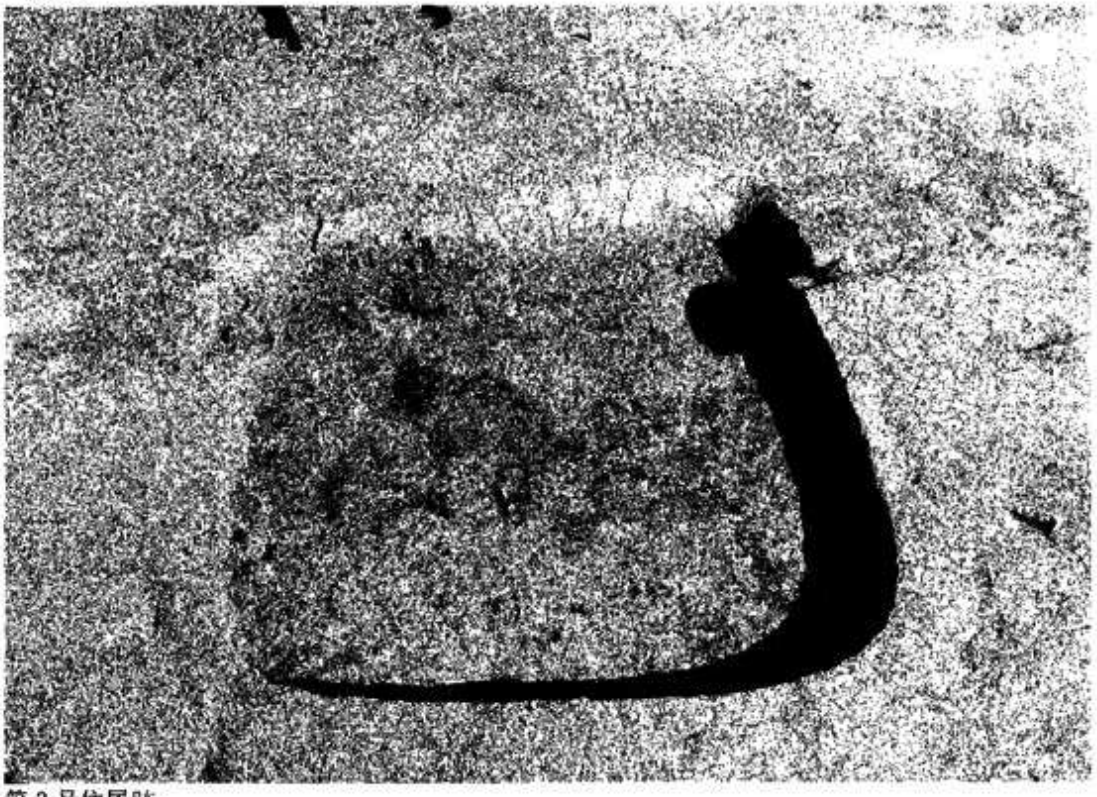


第 1 号住居跡遺物出土状態（Bカマド）

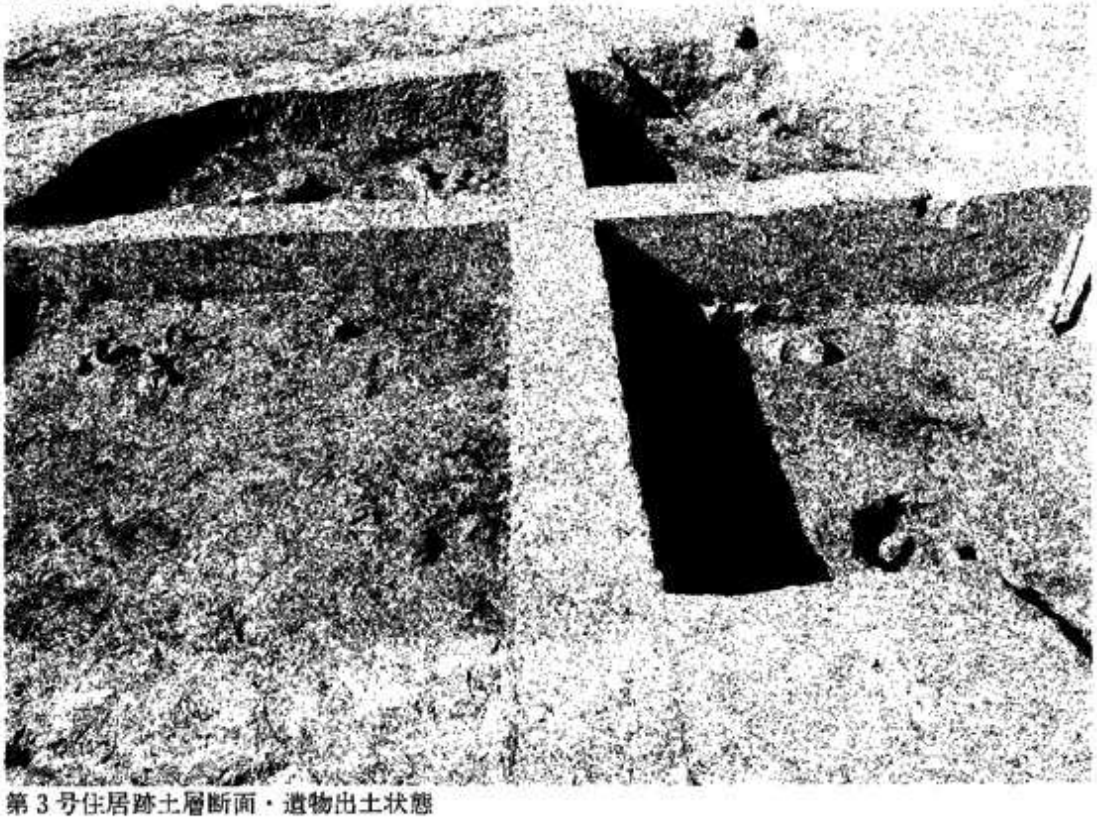


第 2 号住居跡

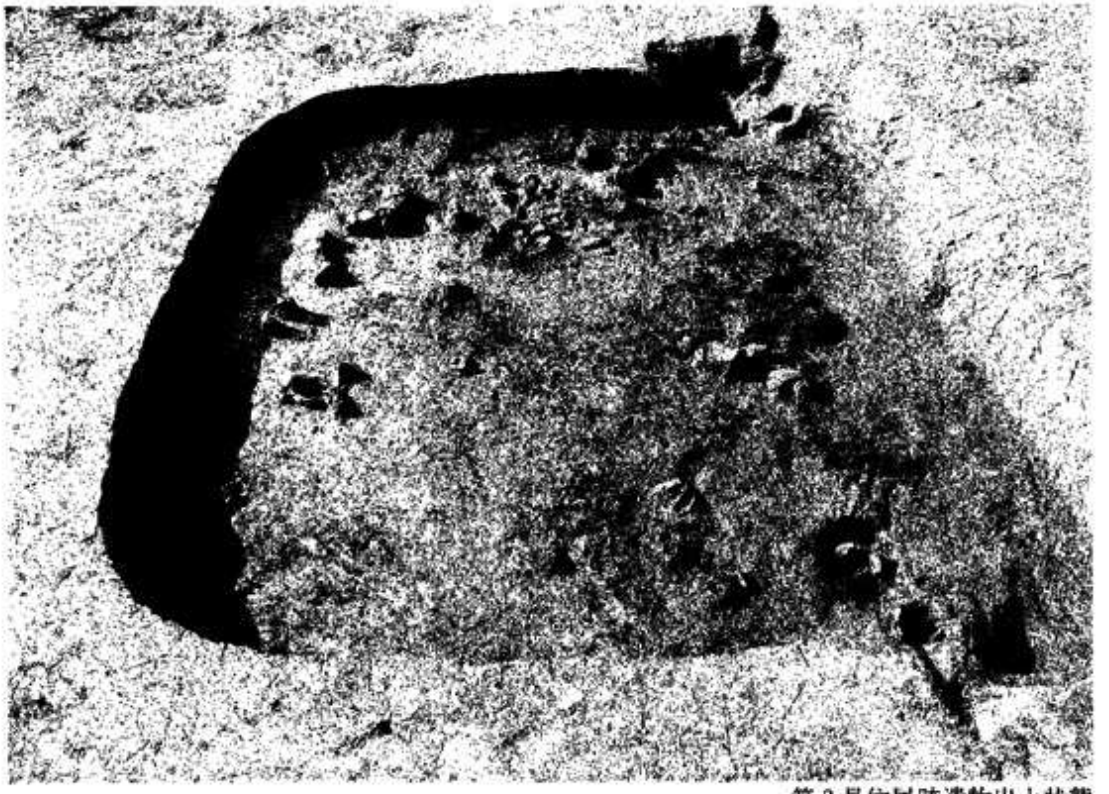
図版 4



第 3 号住居跡



第 3 号住居跡土層断面・遺物出土状態



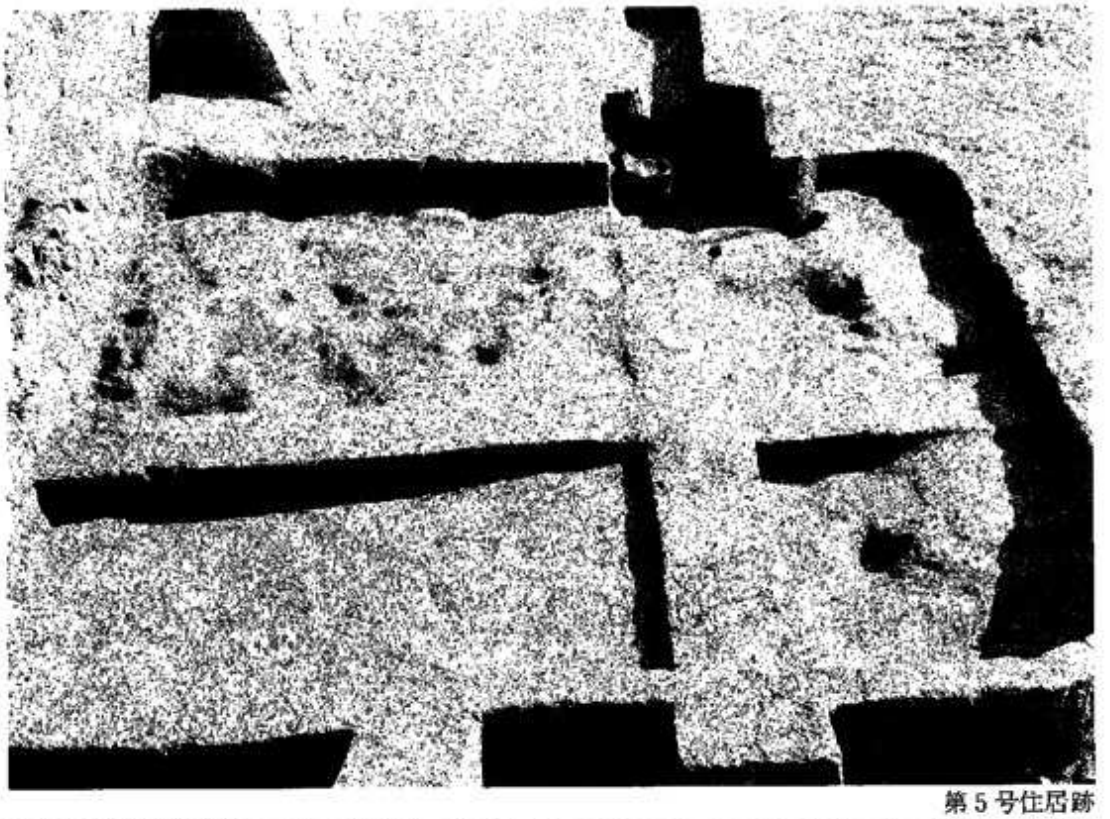
第 3 号住居跡遺物出土状態

第 3 号住居跡カヤ材出土状態

図版 6

第 4 号住居跡

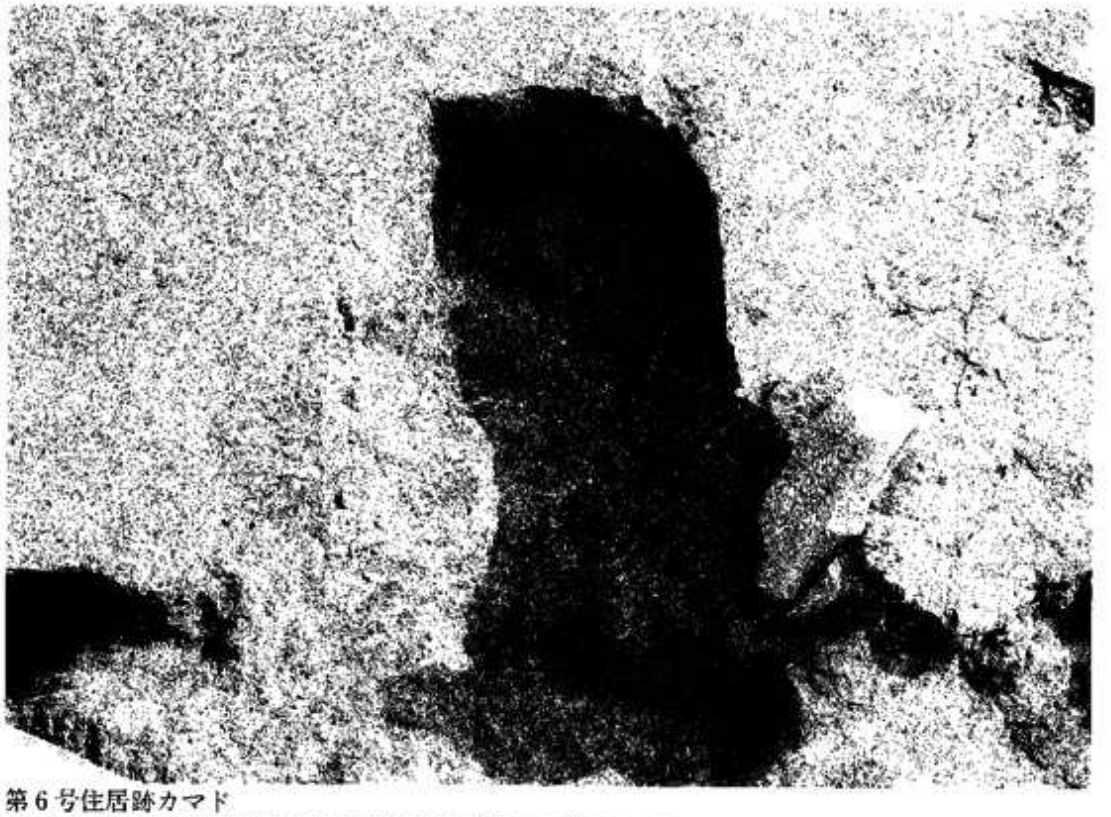
第 4 号住居跡遺物出土状態



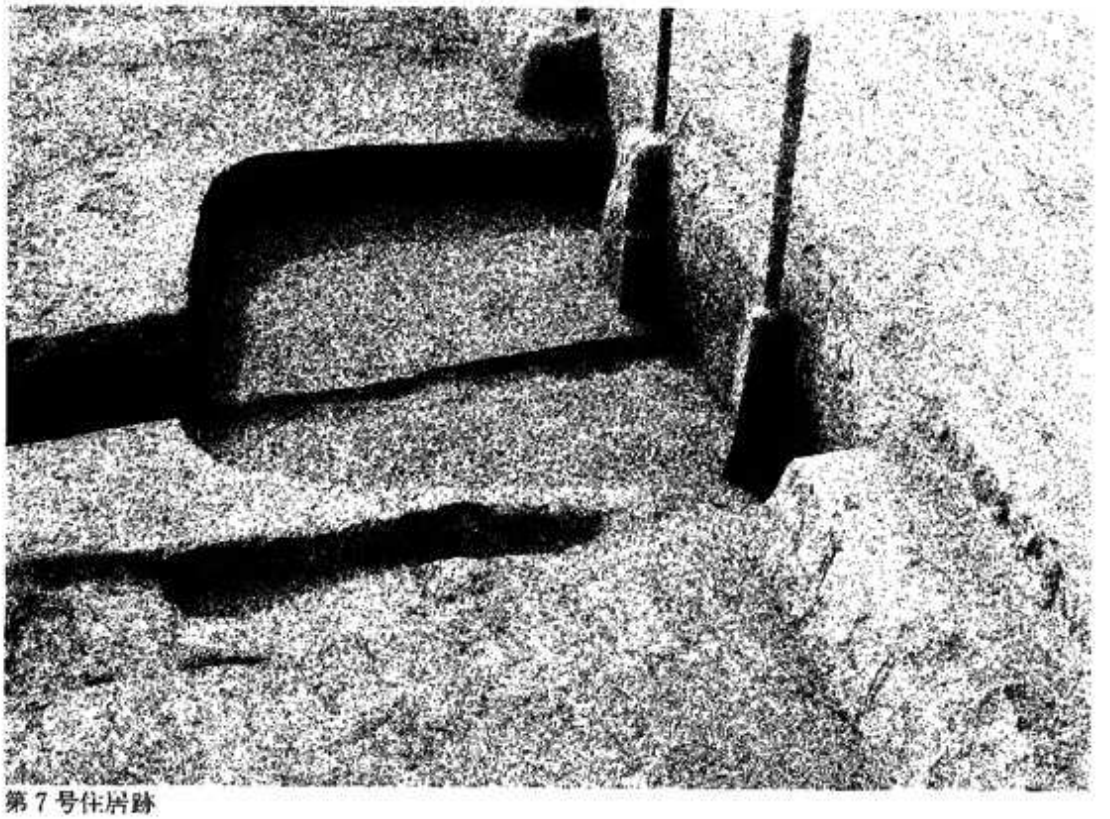
第 5 号住居跡

第 6 号住居跡

図版 8



第 6 号住居跡カマド

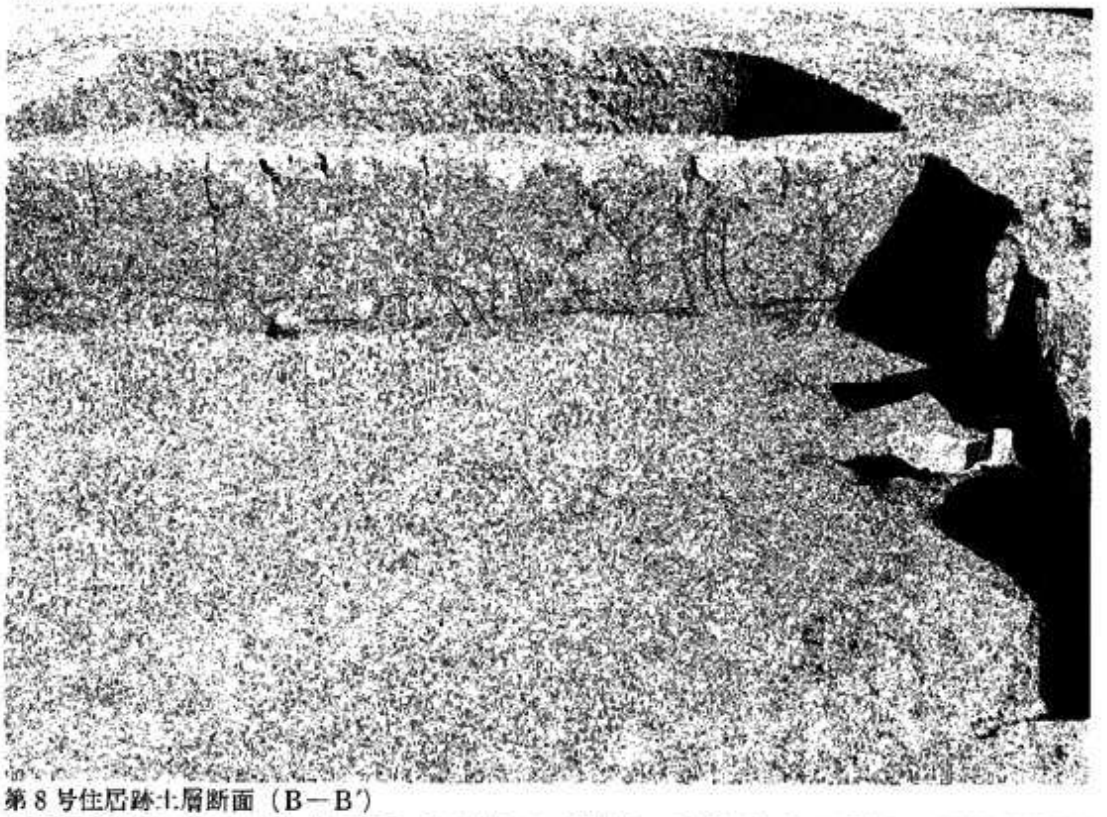


第 7 号住居跡

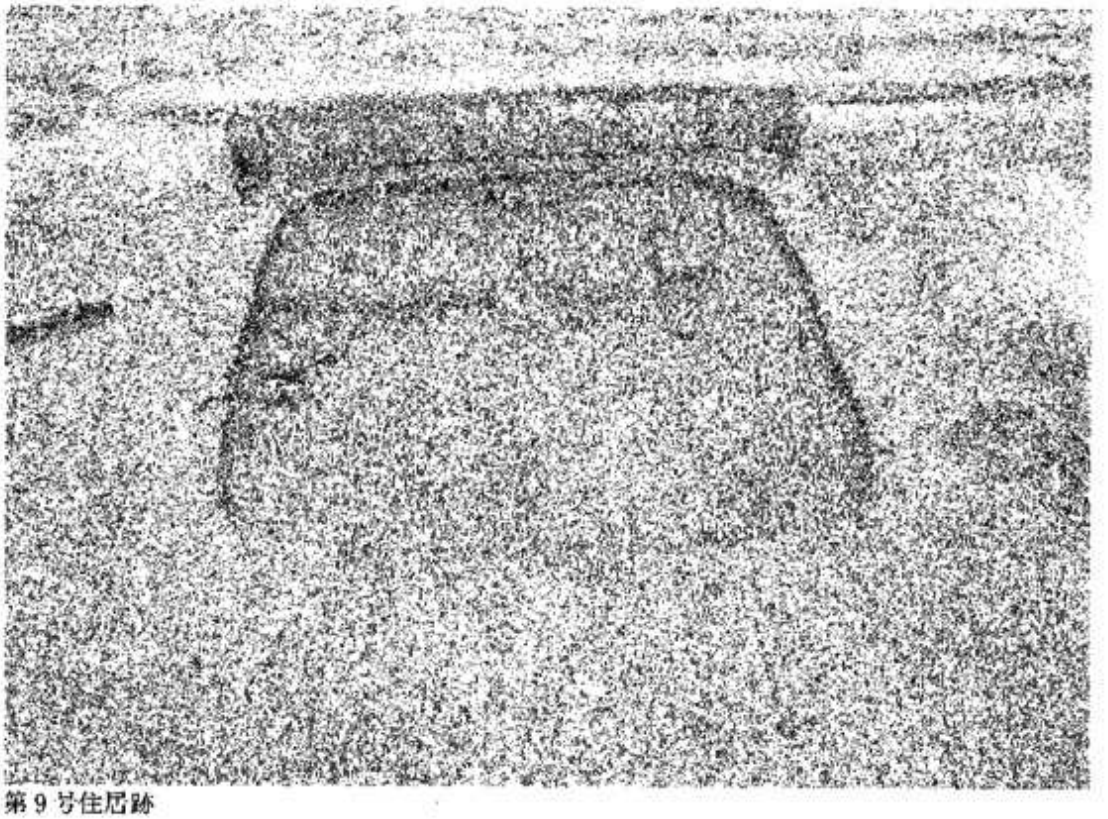
第 8 号住居跡

第 8 号住居跡土層断面（A－A′）

図版10



第8号住居跡土層断面（B－B′）



第9号住居跡

第9号住居跡遺物出土状態

第9号住居跡遺物出土状態